明治三十七年一月一日發行
毎月一回一日發行
明治三十三年十一月四日 第三種郵便物認可

女學世界

第四巻第一號

新年附録

女學雙六（三色刷四六版十六頁大）

書画手本

水彩画

毛筆画

習字

口繪

世界各國の美人廿七頁

記事要目

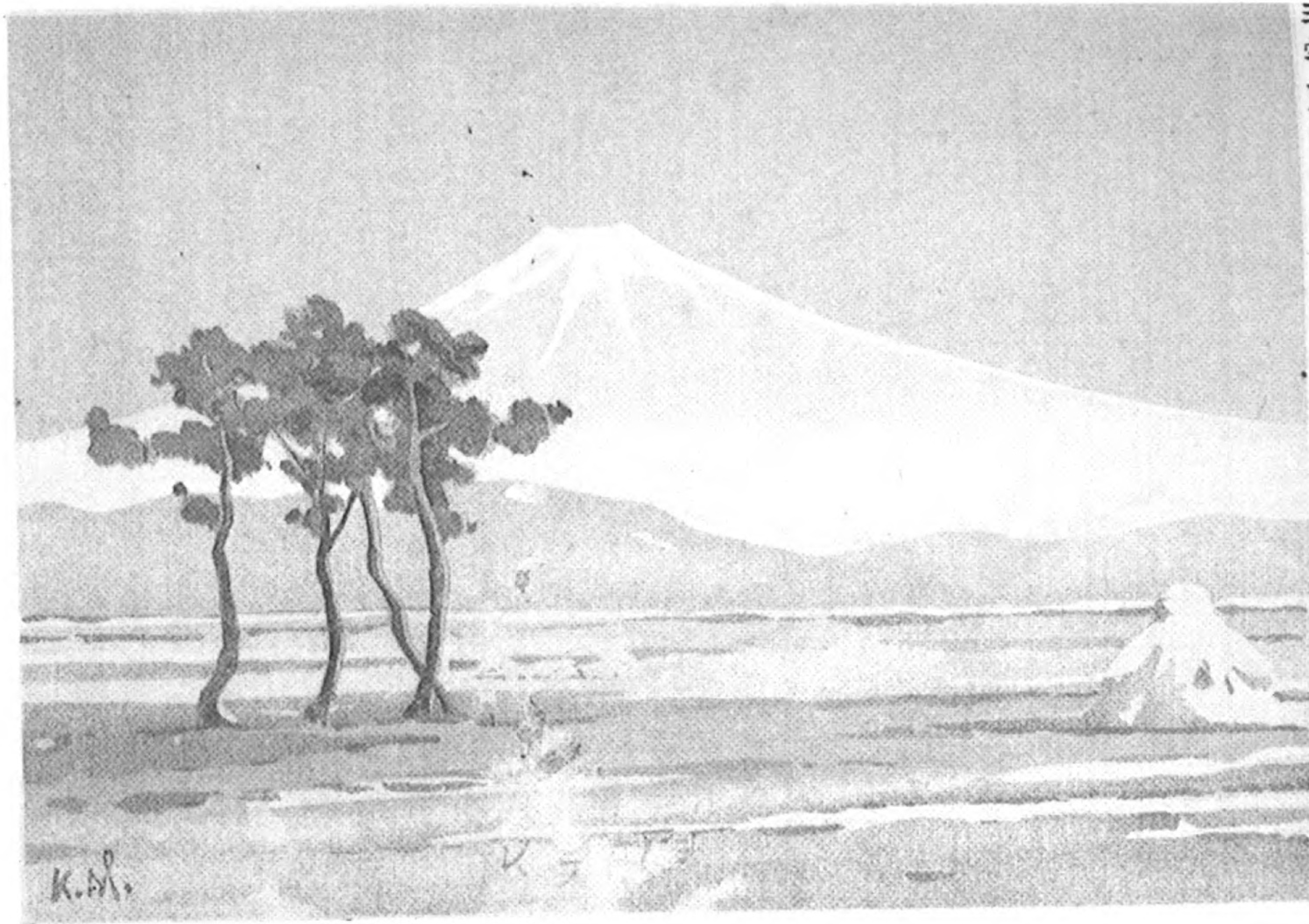



新年之御慶
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋二丁目
芽出度申納候

女學世界 第四巻第壹號 目次

新年附録
女學双六
菊判八頁大 彩色刷

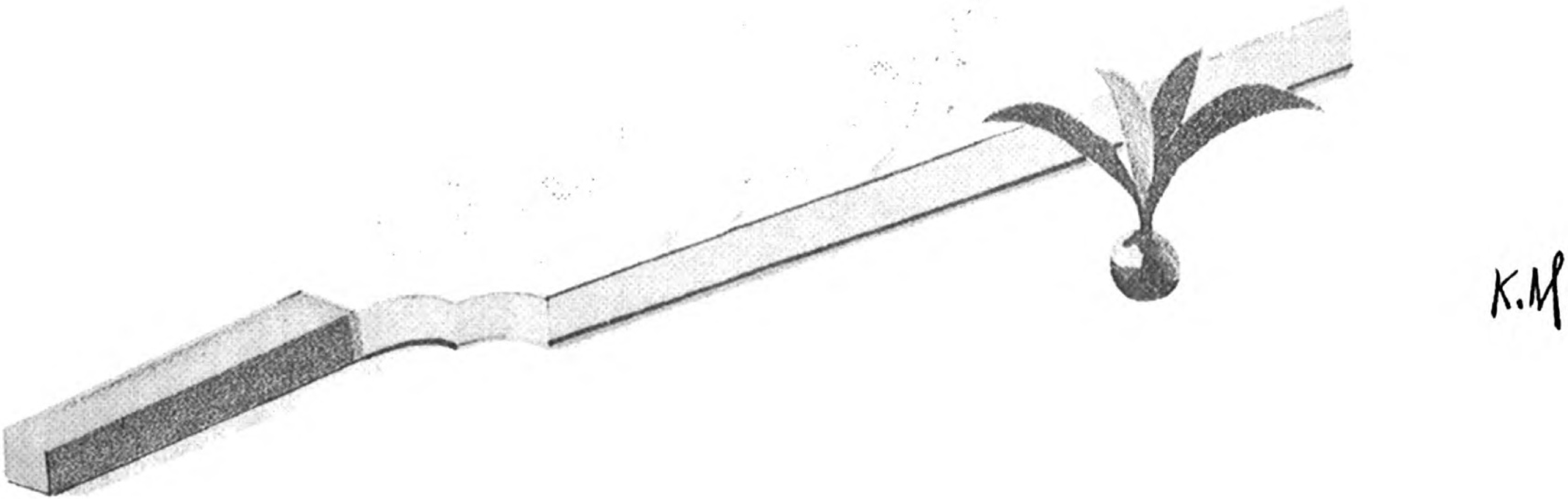
富士山



三宅克己氏筆

春遊び

三宅克己氏筆



増補註釋 食道樂



口繪 天長節夜會食卓眞景

秋の卷出版

正價 一冊 金八拾錢

郵稅 市内五錢▲地方拾錢▲臺灣三十錢 米國開封廿六錢▲清韓國三十錢也

十二月十五日發行 忽ち十版を重ぬ

●鮎の味●鮎料理●犢のチヤプ全シチウ●昆布スープ●カピヤカナペール●鳥スープ●米と鳥のスープ●鮎と犢●鮎のフエタス●ジブレグレーオーコロトン●魚のケズレー●雛の雛●人工孵卵器●鳥料理●臓物料理●雁臓料理●アスペラガスの料理●羊のロース●梅料理●デブロマーテ●梅の煮方●シロップ●ジヤム●梅素麵●藥物の効●コーヒアイスクリーム●食物研究會●料理見物●玉子鍋の應用●カステラ●玉子の泡立法●玉子の雪●玉子菓子●ビスケツト●薔參の菓子●蒸し料理●玉子ブデン●南瓜ブデン●オムレツ●合ひ物●食物野ベ合せ●南瓜料理●南瓜の三杯酢●同葛掛●同丸蒸し●同ブデン●野菜の煮物●白ソース煮●茄子料理色々●冬瓜の鹽漬●同胡麻酢●魚のグレー●鯵のシチユー●鰡のフライ●鮎の酢煮●同三杯醬油●同甘露煮●旅の辨當●鮎の鮨●サンドウ井ツチ色々●印度風のライスカレー●海老のサラダ●フレンチソース●ソーダ松魚●ヘット製法●ソーダ松魚の鹽別●同擂身●同食煮●同蝦鍋燒●鯵料理●鯵の酢煮●全酢の物●同蓼蒸し●白ソース●同味噌燒●同醬油干し●泡雪ソース●ロールキヤベツ●ドーナフ●ロールパン●食物の成分●家鴨料理色々●胃と腸●西洋ノ葛餅●ブランマンチ色々●米のブランマンヂ●桃と梨との煮方●牛肉崩シ料理●赤茄子●牛肉崩し料理●コロツケ赤茄子スープ●同シタフエー●チース料理●チースのフエタス●マカロニチース●牛肉ノ煮加減●老人ノ食物●米のブデン●ソフレー●チーストース●同ストロン●同ソフレー●米ノソフレー●赤茄子の味●冷シコーヒー●レモナード●暑中ノ飲食●ライムシユス●カツプスター●ソドル●赤茄子シチユー●同シタフヌー●赤茄子ジヤム●赤茄子ソース取方●莓のジヤム●下等肉●ブリスケノ料理●殘肉料理●ムツの子料●誕二十錢辨當●三種サンドイツチ●安直主義●カツプケーキ●冷肉料理●コールボーク●テンヒの炭●寄せ物●牛の舌●食物の食べ頃●手輕な菓子●レモンのゼリー●手輕なビスケツト●チヨコレート菓子●アイスクリーム●クリームの燒疾●〃リーム●二十錢料理●手輕なスープ●鮨のフエタス●ランのコロツケ●ベラオ飯●煮たブリスケ●パンのブデン●三十錢料理●臓ノスープ●鮨ノグレー●赤茄子の詰物●牛の尾●臓物料理●犢の頭料理●琺瑯鍋●玉子廻し●コ・ヒークーキ●珈琲ケーキ●テレヒ取扱●お茶菓子●バタケーキ●ヂヤミロール●カステラ菓子●ジヤムケーキ●カビ子ツトブデン●ホンザー●鮨料理●鮨酢煮●全糟漬食樂會●料理の粹●食事法●料理の原則●看病料理●腐つた菓子●料理の原則●玉子の成分●魚ノ區別●白肉に赤肉●料理の教授法●麴の作用●鳥の汁●鶏の吸立汁●ズイキ和へ●[illegible]の浪花煮●茶碗鮨●鮪の料理●茄子ノ鶏田樂●茄子辛子漬●茄子の性質●百一漬●茄子の化學的作用

附錄 米料理百種 五十種日本料理 五十種西洋料理 パン料理五十種あり

東京市三十間堀 報知社出版部

★ 輕便 瓦斯の煮燒 德用 ★

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尚各種瓦斯器具は當社構内陳列所又は銀座陳列所等へ陳列縱覽に供居候御立寄御一覽被下度候



神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

電話本局 一三番 五四八番 二三〇三番

(甲の三)

（甲ノ四）

總裁小松宮頼子殿下

副總裁鍋島侯爵夫人

大日本女學會

新學期を開き會員を募る
最も入會の好時機なり淑
女たちとく入會あれかし

◎本會は女子教育の普及發達を圖らん爲に女子必須の諸學科を掲げたる女學の講義録を發行し種々の事情に支へられ女學校に入學する事能はざる女子をして父母の許を離れず居ながらに 通信教授に依て 修業を積ましめ一般女子の地位を高めん事を目的とす

◎本會發行の女學講義は畏くも　皇后宮の御覽を辱うし殊に御歌下賜の光榮を擔ふ

◎本會は第一流の名家をすぐりて諸學科の擔任を囑托せり去れば其講義の有益多趣たる事已に世の定評ある所にて明治二十八年創立以來二萬五千人の講習修了者を出せり

◎本會講義録は女子素養の程度に應ぜん爲め高等と簡易との兩科に分つ月謝は 高等科金四拾錢簡易科 は金貳拾錢として入會の節束脩（高等四拾錢簡易貳拾錢）を要す

◎簡易科女學講義は毎月五日に高等科女學講義は同二十五日に發行す 詳細なる會則は郵便はがきにて 請求あれ直に進呈すべし

◎女學講義初卷よりそろひあり束脩月謝送付あらば假入會を許し直に送本すべし

第貳卷迄既刊

東京市麹町區下二番町三七

大日本女學會

（電話番町千三百三拾番）

巖上松

跡見花蹊女史筆



春の遊

跡見花蹊女史筆



新の年のはしめとおもふにも
杉那るしきはなのはくれ乃
よろしくはるの春まちはるゝ
此後よりはのちのことなりと
紫しのゝめの一葉のまゆかし

見人ゆるやうなる法體となれは
さうらへとうけたまはりやうに思ひつゝも
あるらんとさるゝ何るらんの義也
ほとゝおよひ給ひ――にこのよにほはれ
先人は後はるゝてのみゆめ之かはり
いのりこ

多田親愛先生筆

定家卿十二ヶ月花鳥歌

柳

うちなひき春くる風の
色なれや日をへて染むる
あをやきの
糸

多田親愛先生筆

鶯

まづきゝつる
いくたびもあかず朝戸出に
うぐひすのなきてすぎける
窓のむら竹

少年世界

初號に限　一月元日發行

第拾年之大革

每月五日一回發行

少年世界が初めて生れたるのは今から十年前即ち明治二十八年の一月であります、爾來日に月に長足の進歩をなして、この十年間に少年雜誌界の大王となりましたも、これ偏に少年諸君の御愛顧に基くので、記者はこの位嬉しいことはありまん、今年はこの少年世界も云はゞ拾歳になつたのですが未だ肩上げをとるも早く、また兄さんに中學世界と云ふものもありますから、もう一度若返つていよ〳〵益々少年諸君の侶伴となろうといふのであります、さア〳〵いらッしやい〳〵!!!

口繪

第拾卷第壹號目次概要

正價 ●一册十錢●四册(三ヶ月分)前金卅五錢●八册(六ヶ月分)前金七十五錢●十六册(一ヶ年分)前金壹圓四十錢●郵税一册一錢五厘

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

(乙の一)

池邊義象氏
增田于信氏 合著

(新刊)

美姬遺蹟

●總クロース
●金模樣入 紙數四百七十八頁

全一冊 定價 金壹圓卅五錢

青山紅葉の裏殘烟荒草の間に一片の古碑を搜りてその香魂貞魄を弔ひ以て一代の歷史を說き起したる本書の內容いかに趣味ある讀物ならむ本書は小松狩(宇多帝皇后藤原温子)常磐杜(常盤御前)繼塚(袈裟御前)嵯峨野(小督局)往生院(祇王祇女)法輪寺(橫笛)福原(建禮門院)寂光院(同上)鶴岡(靜御前)裾野蹊(虎御前)浦の烟(尊良親王妃)吉野花(勾當內侍)の十二篇に分ち何れも現在の遺蹟よりして過去の歷史を說き凡て裏面に涉りてその詳細を悉したれば啻に十二美姬の詳傳たるのみならず平家の盛衰源氏の興亡南北の爭亂等一貫して書き盡されたれば中古歷史の精しき物として讀まるべくまた地理歷史の參考としても見らるべし況や兩先生の筆まことに艶麗雅鍊たる今更喋々を要せざれば閨秀諸媛の讀物としては恐くは天下またこの書に超ゆるものなからむ實に趣味ある家庭の讀本なり殊に裝釘の雅致ありて美麗なるは優に坐右を飾るに足るべし乞ふ陸續御購求あらんことを

(新刊) 田川大吉郎氏著

◎婦人の修養

全一冊 定價 金五拾五錢

發兌 東京本町 金港堂書籍株式會社

(乙の三)

元和二年創業

醤油

花紋賞牌　第一回内國勸業博覧會

有功二等賞牌　第三回内國勸業博覧會

優等賞牌　米國市加古世界博覧會

有功一等賞牌　第四回内國勸業博覧會

有功金牌　創設廿五年紀念博覧會

金牌　佛國巴里萬國博覧會

金牌　佛領ハノイ亞細亞博覧會

一等銀牌　第五回内國勸業博覧會

宮内省御用達

ヒゲタ印醤油醸造元

田中玄蕃

千葉縣銚子港

(その四)

世界第一の美人



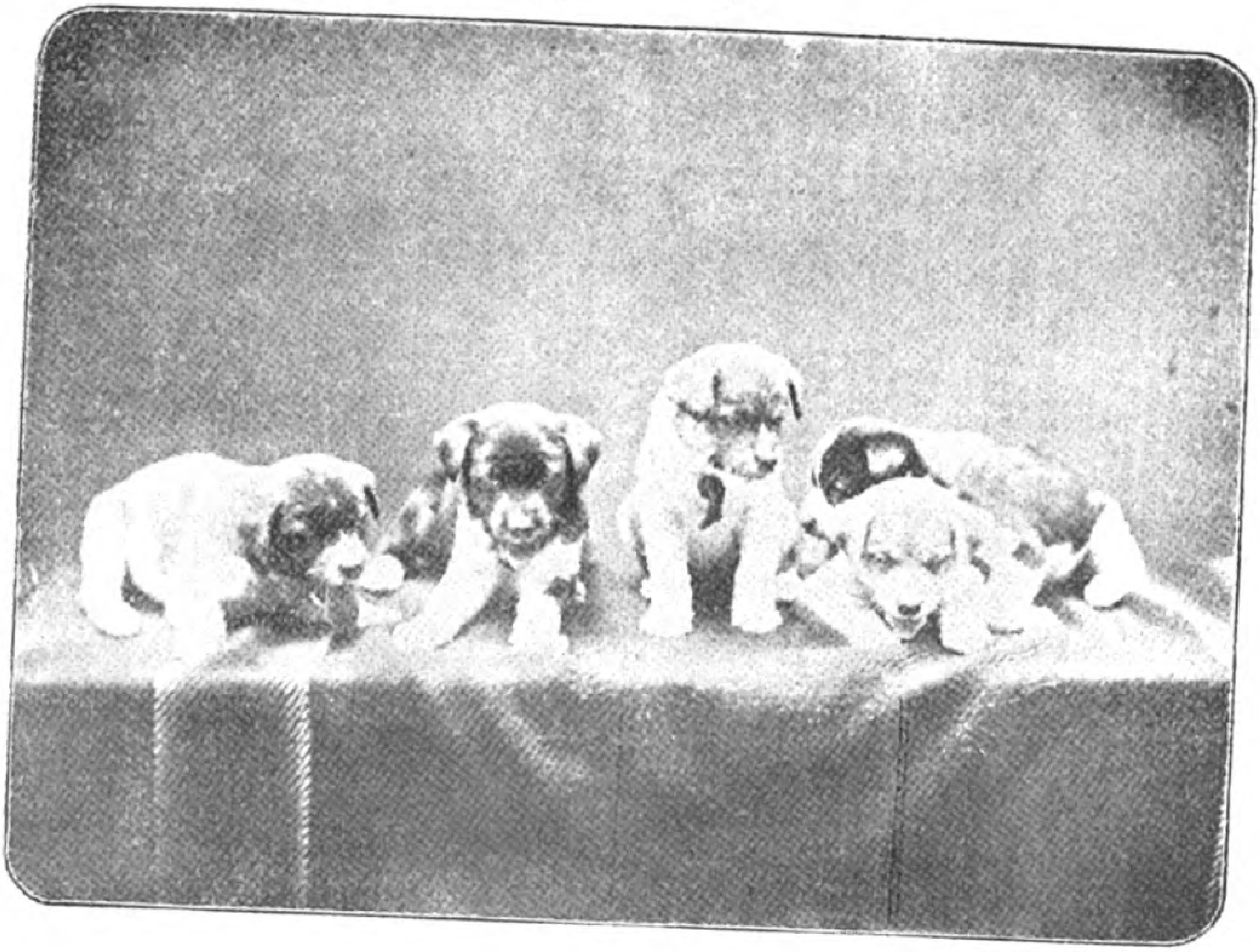
モード、ヒーアーレー嬢

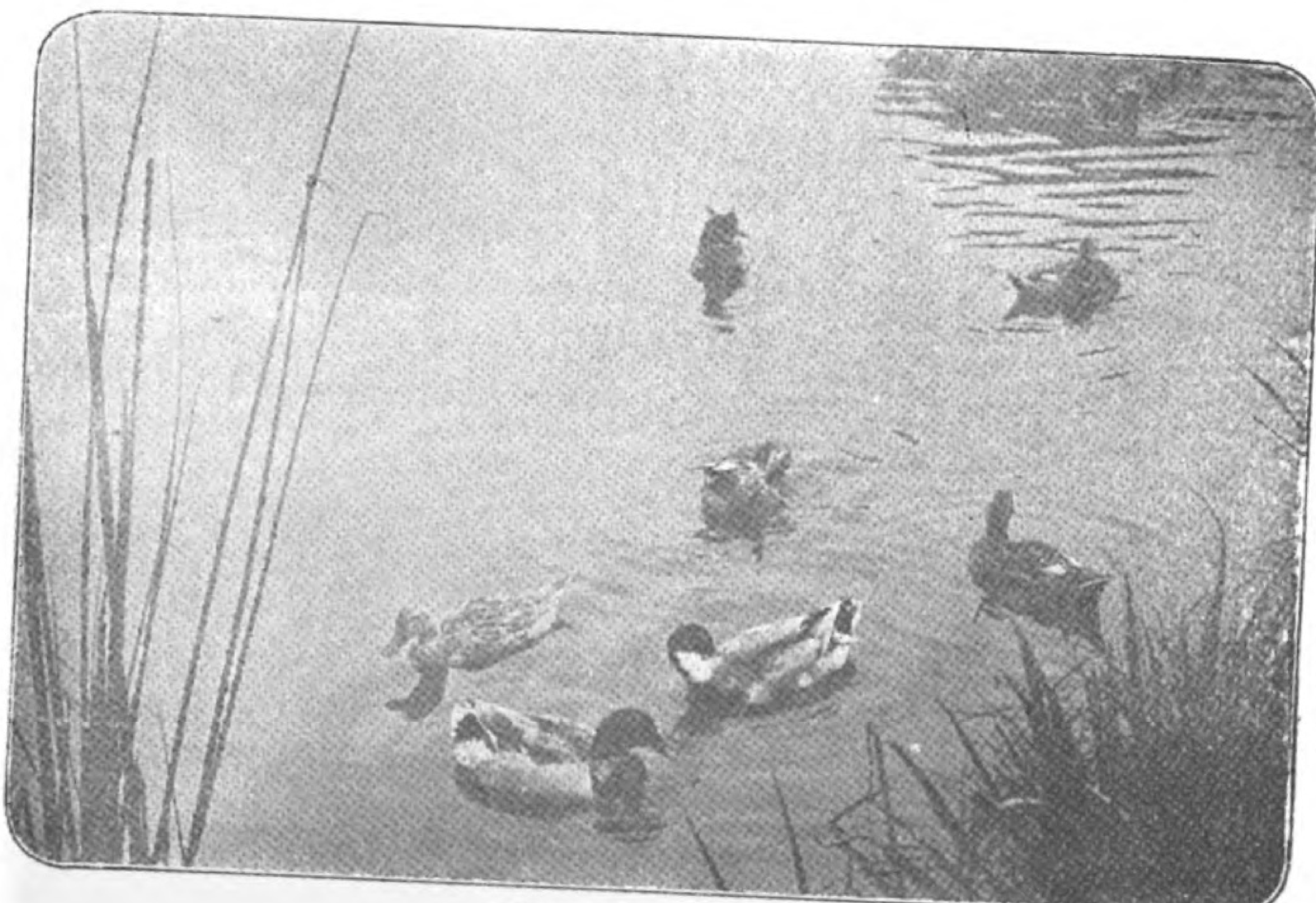


ビクルチン、フアーラー嬢

（記事參照）

狗兒





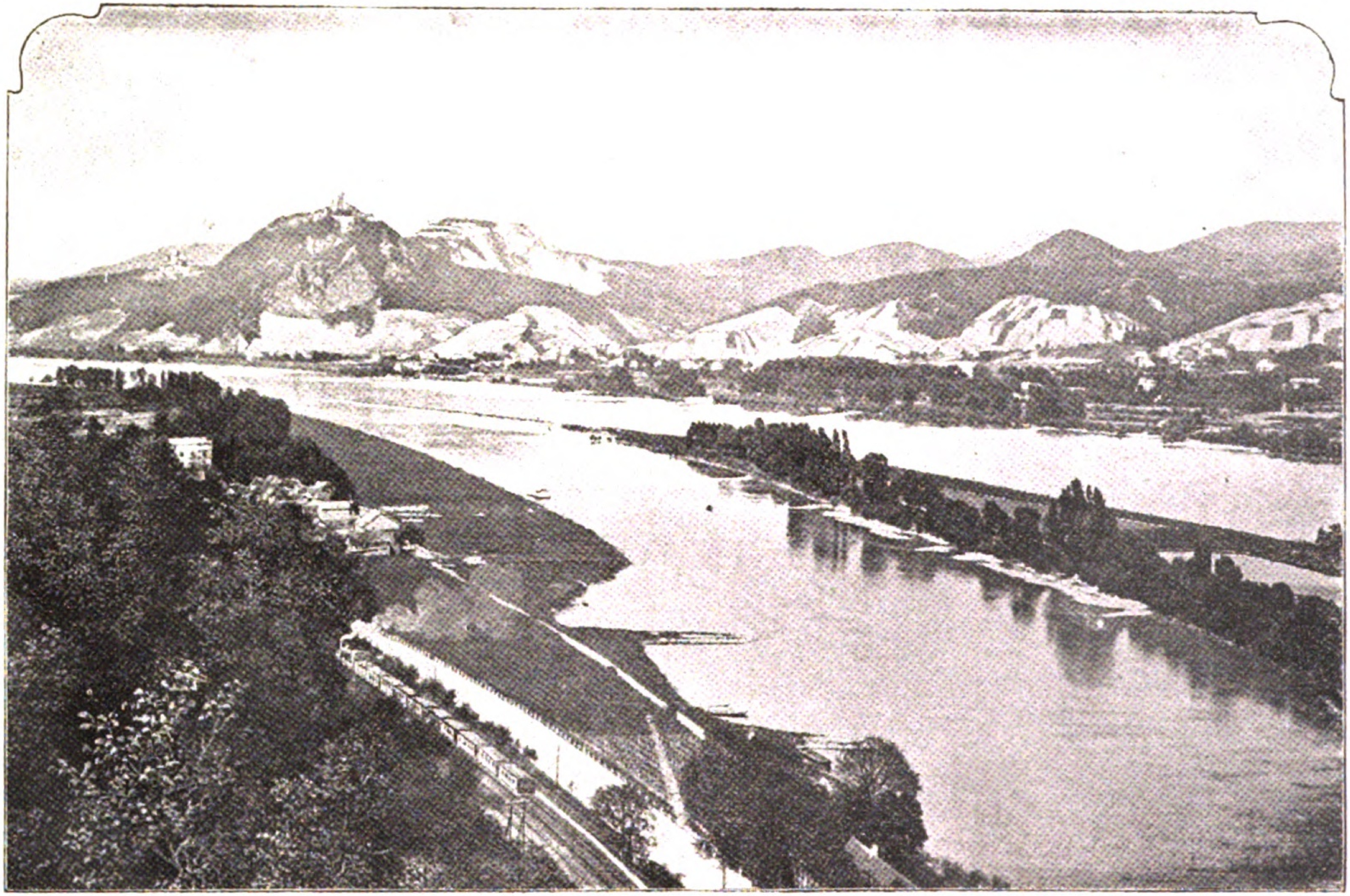
久保昌雄氏撮影

（博進社工場印行）

家鴨

聽樂





獨乙萊因河畔シイバンルグの七ツ嶽

(丙の一)

大坂高等醫學校長
兼同病院長醫學博士 佐多愛彦序

大坂高等醫學校病院
小兒科在勤兒科專門 長濱宗佶著

小兒養育之心得

全壹冊
總クロース
製本頗美麗

正價金五拾錢　郵稅金六錢　郵劵代用壹割增

本書ハ著者ガ多年之經驗ニヨリ育兒者ノ心得ヲ通俗的ニ解シ易キ樣記述シタルモノニシテ小兒ヲ養育セラル、父母之座友ニハ缺クベカラザル良書ナリ

本書ハ年始ノ贈リ物トシテ尤モ適當ナルモノナリ

本書ハ結婚ノ祝物トシテ尤モ適當ナルモノナリ

本書ハ出産ノ祝物トシテ尤モ適當ナルモノナリ

本書ハ進物トシテ尤モ適當ナルモノナリ

發賣所

東京市日本橋區通三丁目
丸善株式會社

大坂市東區博勞町四丁目
丸善株式會社支社

其他全國有名ノ書肆ニテ販賣ス

傳染病研究所長醫學博士 北里柴三郎先生
同　部長醫學士 柴山五郎作先生 著

通俗 結核豫防書

本書は東西兩洋に鏘々の聲譽ある而かも深奧雄大の學識と經驗とを以て其特長なる黴菌學に依り所說平易流暢自己の抱負を餘すなく詳述せられたる最近無比の良書なり

菊判綴金字入全一冊
正價金一圓八十錢
遞送料十錢

（丙の二）

在獨乙醫學士 丸山秀雄
東京板橋病院長 守川南洋
日本藥學協會講師 鴨田修治 先生著

通俗衛生顧問

（一名 諸藥獨劑術）（增補改訂）全一冊●紙數三百頁

上製金文字入
正價金一圓三十錢
郵稅八錢

本書の價値如何は左の目次に徵せよ

書中目次大要

●食傷●食滯●胃弱●溜飲●癪のさしこみ●腸加答兒●霍亂●腸痛●便秘●痔瘡●蛔虫●蟯虫●黄虫●腹膜炎●脹滿●疝痛●腎臟炎●膀胱加答兒●遺尿●糖尿●遺精●淋毒●横痃●梅毒●感冒●鼻血●馬痺風●喘息●咯血●肺炎●肺勞●肋膜炎●心臟病●痛風●僂麻質斯●腦病●中風●癲癇●舞踏病●依卜昆垤兒●脊髓勞●頭痛●麻疹●風疹●疱瘡●癆疾●ペスト●インフルエンザ●コレラ●赤痢●脚氣●實布的里●打創●止血法●銃創●丹毒●破傷風●狂犬病●鼠咬病●疔●癰●瘭疽●疣●疥癬●田虫●なまつ●汗疹●夏月斑●飛火●水虫●にきび●癩病●そばかす●ほくろ●わきが●脱臼●眼瞼炎●ものもらい●はやり目●トラホーム●近視眼●耳鳴●耳漏●子宮內膜炎●子宮實質炎●月經不順及び閉止●歇私的里等此外三百十余病に付悉く詳記せり

婦人科專門ドクトル 宮田守治先生
中央看護婦會長 松本安子先生 著

男女生殖健全法

（增補改訂）

四六判密畫數個入
正價金壹圓十錢
郵稅六錢

本書は日新醫學の原理に依り詳說せる生殖器の解剖生理且つ其疾病を述べ夫婦とは如何なるか情交とは如何なるかを解釋し情交に關する諸障害を論じ次に小兒教育の事を記載せるものなれば世の夫婦たり父母たる者は必ず一本を座右に備ふべきの寶典なり

●發賣所 東京市神田區表神保町電話本局一七五三 修學堂

●修學堂發行總目錄入用の向は郵劵四錢送れ

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤巖著

肺病の福音

肺病は適當の療養法と善良の藥物を以て全治し得るは最近學術上の公論なり本書は著者が自ら肺病全治の實驗と最新の學説に基き丁寧親切に肺病全治の法を詳述せし物

●郵劵封入申込の方へ無代施本す●

東京下谷區上根岸町　衛生書院

音樂の秘書發刊

箏曲大意抄

銅版　小本美本　全六册

正價　金壹圓三十錢小包料十五錢

本書は我國第一の樂器として世に愛玩せらるゝ所の箏曲の組たる表、裏、中、ゆるし、三曲等を併せて一部の曲を委しく書しるし故山田黒松大人が箏曲の秘事免許の門葉後年に忘失せざらん事を思ひて一部の譜となしをかれたる舊來よりの秘本にして同好の人にのみわけ與へられしが何分數十年以前の刻版にて磨滅せる所多く遺憾なりしと今般明瞭なる銅版に刻して普く世に頒たんと欲す閨秀の淑女乞ふ一本を繙き給はゞ撫處の曲節詳らかにして益々琴曲の妙を得給ひ日夕の雅興一入に深く濃かなるべし

附言　歳旦相互の贈り物又は令孃方への進物となし玉はゞ至極の雅趣ならんか

發行元　本店　小谷書店　大阪市東區備後町四丁目

發行元　支店　小谷書店　仝東區今橋四丁目

東京神田今川小路金剌書店○京都二條高倉林書店○圖書目錄入用の方は貳錢郵劵御送附あれ進呈す

（丙の三）

肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確証す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確評新劑價は並製金壹圓特別分壹圓五拾錢



わきが

(腋臭症)

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにて**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずるも憂なき廿世紀的改良根本新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢若金即刻送藥す郵券代用必ず二割増の事

以上貳藥

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四六番)

毛はへ藥

はつぼう等のはげ●まゆげ●口ひげはげ其他男女有べき所に毛なきに可驚効驗あり且拔毛を止め毛足を速む●近頃流行の禿頭やけど●できもの●はへ際うすき●婦人こまあたりの

原名(ヘクチス)乙價貳圓甲價特別製參圓五拾錢二種共送料拾四錢●本劑を塗擦すれば皮膚は速に新陳代謝をなし**皮膚を改造し毛根を發生**せしむるを以て如何なる禿も甲價壹瓶で必毛髮發生す

(丙ノ四)

根治確證 わきが 新治療藥

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の細織に吸收せられ其組織にある**毒素**を深溝驅逐し惡臭を**根底**より**全滅**せしむる作用を有する最新發見の特種の新劑にて大家の醫療も効なき者も必根治す輕症は丙價如何程頑固劇烈の難重症も甲價壹瓶にて**必ず全治**し決て再發せず丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾貳錢

化學的白色名藥 色白くなる藥 バンドコロン溶液

本劑は貴女紳士淑女粋客間に大に高評を博し最新流行の秘方の奇劑にして本劑を塗擦すれば主成分は皮膚のグランド氣孔より**藥力**に依り吸收せられ皮膚は次第に新陳代謝を盛ならしめ**色素**を漂白すると共に**皮膚**を改造するが故に如何程色黑きも壹瓶で**白色**に**變化**し●にきび●吹出物を去り秀美艶麗の容貌となす乙價貳圓甲價特製參圓五拾錢送料拾四錢

新治療藥 らい病 ダービン

ダービンは多年の研究と經驗の結果レプラ菌に就て遂に一大成効をなし本劑の發見に依り不治の癩病も必全治すべき者と斷定せらる依て弊館率先し初て患者諸君に照會す試に一劑を用いよ必ず**大効**あり三劑用ゆれば**誓て全治**確證す價壹劑廿日分參圓貳劑四十日分五圓參劑六十日分七圓也

專賣東京本郷湯 **オリエンタル藥館**

(丙ノ五)

(丙ノ六)

大和田建樹君著



能のしをり



既刊

壹卷 ●總説●翁●高砂●八島●東北●盧州●船辨慶●三輪●兼平●羽衣●安宅●安達原●蟻通●田町●江口●百万●猩々

貳卷 ●竹生島●清經●熊野●隅田川●融●邯鄲●鉢木●卷絹●俊寛●海人●小鍛冶●夜討曾我●杜若●花筐●鞍馬天狗●

參卷 ●養老●七騎落●春榮●土蜘●紅葉狩●忠度●山姥●道成寺●西王母●籠●松風●橋辨慶●富士太鼓●草子洗小町●唐船

六の卷

目次

龍田●朝長●砧●阿漕●善界●國栖●弱法師●大原
御幸●蟬丸●鵜飼●大佛供養●斑女●藤戸●大江山

四卷 ●加茂●放下僧●氷室●葵上●烏帽子折●景清●野守●三井寺●巴●實盛●小袖曾我●右近●櫻川

五卷 ●嵐山●井筒●小督●賴政●盛久●望月●善知鳥●雲雀山●敦盛●歌占●二人靜●項羽●熊坂●柏崎●遊行柳●大瓶●猩々

全六冊

正價一冊四十錢三冊壹圓拾五錢六冊貳圓貳拾錢郵稅一冊四錢

—(和裝美本能舞精巧密圖入)—

發兌元博文館

全部完成

下卷

幸田露伴先生校訂



校訂 狂言集 下卷

狂言記拾遺五十番

第壹 三本柱、文相撲 盜 連歌 梟山伏、通圓 雁か 第貳 松の精、祐若
かね、樋のさけ、横座、枕物ぐるひ、手負山賊 唐人相撲 と
ものゝり、祇園、老武者石神、松 第參 棒しばり、水論聟、水汲新發意、若市、
ゆづり葉・なきわま、閻盜人 比近貞、塗師平六、煎物賣、合柿 三人
百姓、彌 第四 餅酒、鼻取相撲、樂阿彌、犬山伏、料理聟、茶盃 第五 對馬
宜山伏 拜人馬、止動方角 しゆでう、ゑさし十王 祭
たこ、鐘の音、腰いのり、佐渡狐、八尾地藏、布施ない、米市、鎧、双六僧

◎既刊 上卷……狂言記五拾番 中卷……續狂言記五拾番

和裝上綴頗高雅
紙數三百八拾頁
正價五拾錢
郵稅八錢

發兌元博文館

(丙の七)

寶石入指環



一號（ダイヤモンド一個入五十圓七十五圓一百圓百五十圓二百圓寶石の大成もの五百圓以上）
二號（ダイヤモンドと眞珠入六十圓八十圓一百圓）（ルビーと眞珠入十五圓二十圓三十五圓以上）
三號（ダイヤモンドとルビー二個入四十圓六十圓八十圓）（ルビーとサフハヤ入八圓十五圓）
四號（チパールと眞珠入り十二圓十五圓二十五圓）（或はチパール一個入八圓十圓十五圓二十圓）（サフハヤと眞珠或はトパーズと眞珠三圓入）
五號（八圓十二圓十五圓廿五圓三十五圓で各種）（ルビー或はサフハヤ一個入六圓八圓十二圓）
六號（寶石の良質にして大なるもの五十圓一百圓）

東京市京橋區尾張町

白牡丹本店

松田幸治郎

電話特新橋百五十一番

女子高等師範學校教授 黑田定治先生校閲

學習院教授 英和女學校講師 長谷川乙彦先生著

新編 女子用教育學

全壹冊洋裝上製正價五拾五錢郵稅六錢

●本書は文部省所定の教授要目に遵ひ編纂したるものにして高等女學校、女子師範學校其他女子の教科用講習所として最も適切なる良書なり。

●本書の特色は重きを家庭及び幼稚園教育の理論方法に置きたるにあり

●本書は又家庭教育の天職を帶ぶる母たる人の必ず一讀すべき良書なり。

（出版 發賣）

（丙ノ八）

重野文學博士 小松文學博士 序文

華族女學校學監下田歌子女史序

帝國大學卒業 須藤求馬君著

日本女史

正價壹圓貳拾錢 郵稅拾四錢

發兌元 東京京橋區弓町 松邑三松堂

巖上の松
（尾張篠島）





土堤の松
（豐前行橋）

雉



今尾景年氏筆

宮嬪



土佐光一氏筆

小杉天外著述

はつ姿　寫眞版挿入　實價五拾錢　郵税八錢

女夫星　寫眞版挿入　實價五拾錢　郵税八錢

蛇いちご　富岡永洗畫　實價卅五錢　郵税六錢

新學士　水野年方畫　實價五拾錢　郵税八錢

はやり唄　コロタイプ挿入　實價五拾錢　郵税八錢

肱まくら　和裝美本　實價貳拾錢　郵税四錢

戀と戀　三色版挿入　實價五拾錢　郵税八錢

新夫人　近刊

小杉天外著
魔風戀風

菊判總クロース洋裝美本

前編　梶田半古畫　實價六拾錢　郵税八錢

中編　鏑木清方畫　實價六拾錢　郵税八錢

▲魔風戀風は寫實小説なり戀愛小説なり明治文壇未曾有の大作なり

▲魔風戀風は女學生界の寫生畫なり活きたる明治の風俗志なり

▲魔風戀風の文章は一句一辭悉く良金美玉なり言文一致の文章軌範なり

▲魔風戀風の會話は現代新言語の蓄音機なり言語に意を用る者の參考書也

▲魔風戀風は無限の詩趣に富んで內に深奥の理想を寓す甚だ庭の讀書家に適す

東京日本橋　春陽堂發行

(丁の二)

家庭衛生講話

（質問券附）

糸左近先生著

全一冊 菊判總クロース美本 正價七拾五錢 小包料十錢

其說書も嶄新確實で、彼の理想者の說いた衛生生理書や十八世紀頃の原書を譯した樣な我國に適せぬ本などとは天地の差がある。言文一致總振假名で、しかも流麗な筆、讀者興味を感じつ、了解し易きは、彼の乾燥無味なる有りふれの書とは大いに違ふ。まづ衣食住から、運動法、腦の使用法、疾病治療法、生殖篇等と分け、就中食物篇の日用に適切なること、治療法の懇篤なること、醫者が讀めば大いに參考となり、素人が讀めば長壽を保つ術を知り、醫學後期生が讀めば、受驗の友となる早く本書を讀め、早く本書を開け病氣ある人、子無き人、英雄にならうといふ人、溫泉にゆかうといふ人、貧しき人、富んだる人、學者も不學者も……

尙書中に在る病名などの目錄を知りたき人は郵券二錢を送らるれば本書目錄を送附す、

英和婦人會話

マリー イーストレーキ孃新著

全一冊

和珍本 正價金拾五錢 郵稅貳錢

會話書類頗る多しと雖も女子に關するもの極めて稀なり本書はイーストレーキ孃の新著にして貴婦人令孃間に最も必要なる通俗の對話を網羅せるものなり意匠嶄新にして材料豐富而して其記事の巧妙正確なるは固より論なし貴婦人令孃諸氏無二の良師友と謂ふべし。

作文の教へ

糸左近先生著

全一冊 菊判美本 正價五拾錢 郵稅八錢

開版の理由 ‖

昔から作文に關したる書物程澤山あるものはあるまい、されど或は文を作る規則に止まり、或は名人大家の作例を擧るを事とし、或は熟語を集るを專とするなど一つも上手に作れる方法を說いたものが無い、偶名文評釋など有つても、唯賞賛の詞を載せたのみで、其理由を示したものが無い故に、文を學ぶ者は、徒らに數十年を費やして以心傳心的に解するのである。著者こゝに考ふる所あつて、此の本を作られたのである。

本書の特色 ‖

(一)上手に文を作る方法を理論的に說いてある。(二)其の例に擧げた名家の作でも一々其の善い理由を詳かに示してある。(三)例文は實用文、裝飾文、詩歌、發句俳諧、小說何んでも述べてある。(四)鼇頭には新らしい熟語を載せてある。(五)文體は古文、近世文、言文一致體、何れにも通せらるゝこと等

何白現代の文壇に於ける一名家の著作なれば學者一たび繙かば數ヶ月を費さずして自由自在に名文を書かるゝであらう。前には『雅俗對照和漢文典』の名著今又此の名作學者之より名文の作れぬことを憂へ玉ふなよ

糸左近先生著 ● 雅俗對照 **和漢之文典** 全一冊 正價八拾錢 小包料十錢

島文次郎先生著 ● **演劇十講** 全一冊 正價四拾五錢 郵稅八錢

賣捌 市內岡崎屋●東京堂●勉强堂●中西屋 大阪小谷●吉岡●名古屋川瀨●京都若林

發行所 東京市神田區今川小路一丁目五番地（電話本局七五六番） **金刺芳流堂**

（丁の三）

英學新報社編纂

明治三十七年 英文懐中日記

（初版再版賣切れ第三版發賣）

口繪（富士越雙龍之圖 帝室技藝委員橋本雅邦翁筆 十二支之圖 十二畫伯執筆）寫眞版色刷挿入

製本優美携帯至便

正價金廿五錢 郵稅四錢

紙質良好印刷鮮明

押川春浪君新著 口繪山中古洞君書

新刊 海國冒險奇譚 新造軍艦 袖珍全壹册 美本

正價金參拾錢 郵稅四錢

押川春浪氏の海底軍艦は大好評を以て既に數版を重ぬ本書は海底軍艦に似て更に結構の雄大なる海國冒險小說なり新造軍艦『うねび』の行衛不明は世界の最大疑問支那海の浪荒き所何者か潛む南洋貿易船の出沒露國軍事探偵の隱見冒險奇譚の快擧等眞に破天荒の珍事にして今や東亞の風雲急なる時わが日本國民の一團體は天外萬里の異境にて大飛躍を試みんとしつゝあり强大なる義勇艦隊は如何なる有樣にて世に現はるゝや諸君お待兼の續々武俠の日本の出づる前是非本書を讀め!!!

東久世伯爵題字 樺山伯爵夫人題詠 佐々木信綱先生 渥美雅子女史著

新刊 新撰女子用文 洋裝菊判全壹册

正價金三拾錢 郵稅六錢

婦女諸君の生涯を通じて最も必要なるものは書翰文なりしかも最も易きに似て最も難きは書翰をかくことなりその一見易きか故に顧らるゝこと少くして爲によくかくの人の多からぬはいと〳〵恨むべき限りなり思ふにこの恨をもちつゝ學ぶべき師なく書なきにくるしめる人世に少なからざるべしこの女子用文はさる人々の爲につくられたるものなりその文雅に偏せず俗に流れずよく當今の女子が以て則とすべき体をなしたるは或は世の需むる所にかなふべきか殊に附錄としてそへたる作文心得婦人百人一首修身百人一首近世名家歌集抄は相まつて初學の人々を益すること尠少ならざるべし

（丁の五）

發兌元 東京本町 博文館 東京神田 東京堂

豫約出版廣告

紅葉全集

全部六巻

(丁の六)

天下無双美本

◎菊判總クロース、表紙畵金刷金文字入(桂舟氏筆)
◎毎巻紙数八百五十頁内外○全六册紙数約五千頁
四十三篇

▲定價一册金壹圓八拾錢(全部六册拾圓八十錢)郵送小包料金拾五錢

▲豫約期限……二月十日限(期限後は斷然正價に復す)

▲甲種豫約、一時前金拂込 全部六册金七圓 郵税一册十五錢ニテ全部金九十錢

▲乙種豫約、毎發行期拂込 全部六册金八圓 郵税金九十錢

(乙種豫約は御申込の節約束金として金貳圓御送金の事
殘金六圓九拾錢は毎巻發行の節金壹圓拾五錢宛御拂込可被下候)

豫約募集方法

◉第壹巻……一月元日出版
◉第貳巻……一月下旬出版……以下毎月發行

麗、春日の如く、清、秋月の如きもの吾紅葉山人の文章也。山人一生を文章に托し、奇思縦横字々靈快を極めさるなし。嘗て文壇革新の急先鋒となりて硯友社た創め、陵群英を養ふて斯社の名一生を壓す。山人が明治文學に寄與するの勞天下の齊しく知ろ所にして、仰いで以て秦斗と爲すは之が爲め也。今や山人逝て、文壇頓に寂々たり。山人の逝くや命也。而も山人の精神は萬古常に新也。蓋し山人の文章の如きは傳へて以て後代に貽し、長く河嶽に藏すべし、則ち親朋同人相謀りて十千萬堂を譽み、凡そ山人が述作に係るものは其長と短とを問はず、悉く之を網羅して完壁と爲し、名けて紅葉全集といふ。思ふに七寳の散りて點數せるは聯れて一環と爲すの美に若かず、全集分ちて六、順を追ふて之を收め、謹みて江湖文を愛し才を憐むの淑女紳士諸君に薦む。

十千萬堂出版部
敬白

紅葉全集總目次——全部六冊——四十三編

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(丁の七)

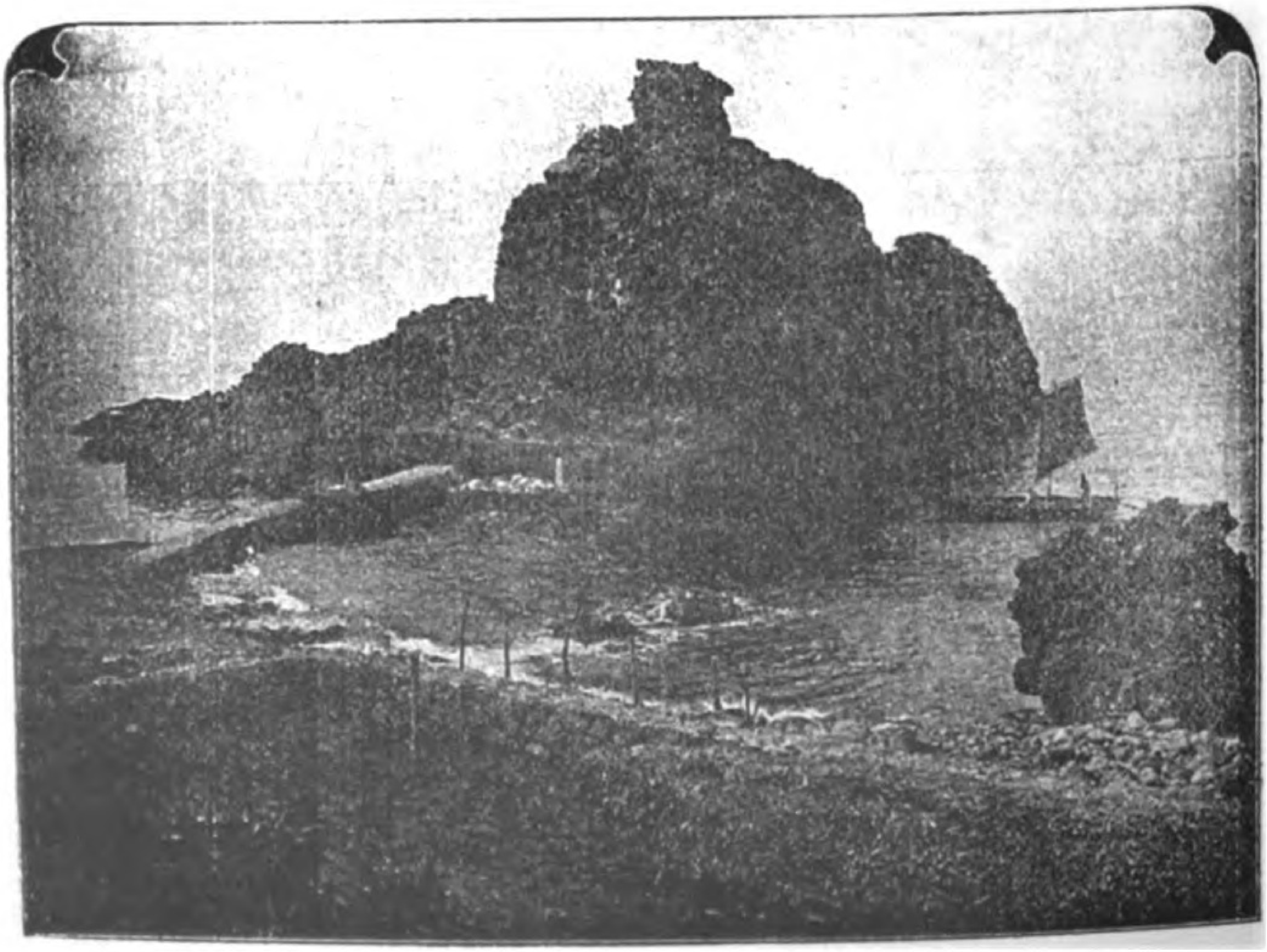
二

(丁の八)

春の海

（後志國原歌海岸）

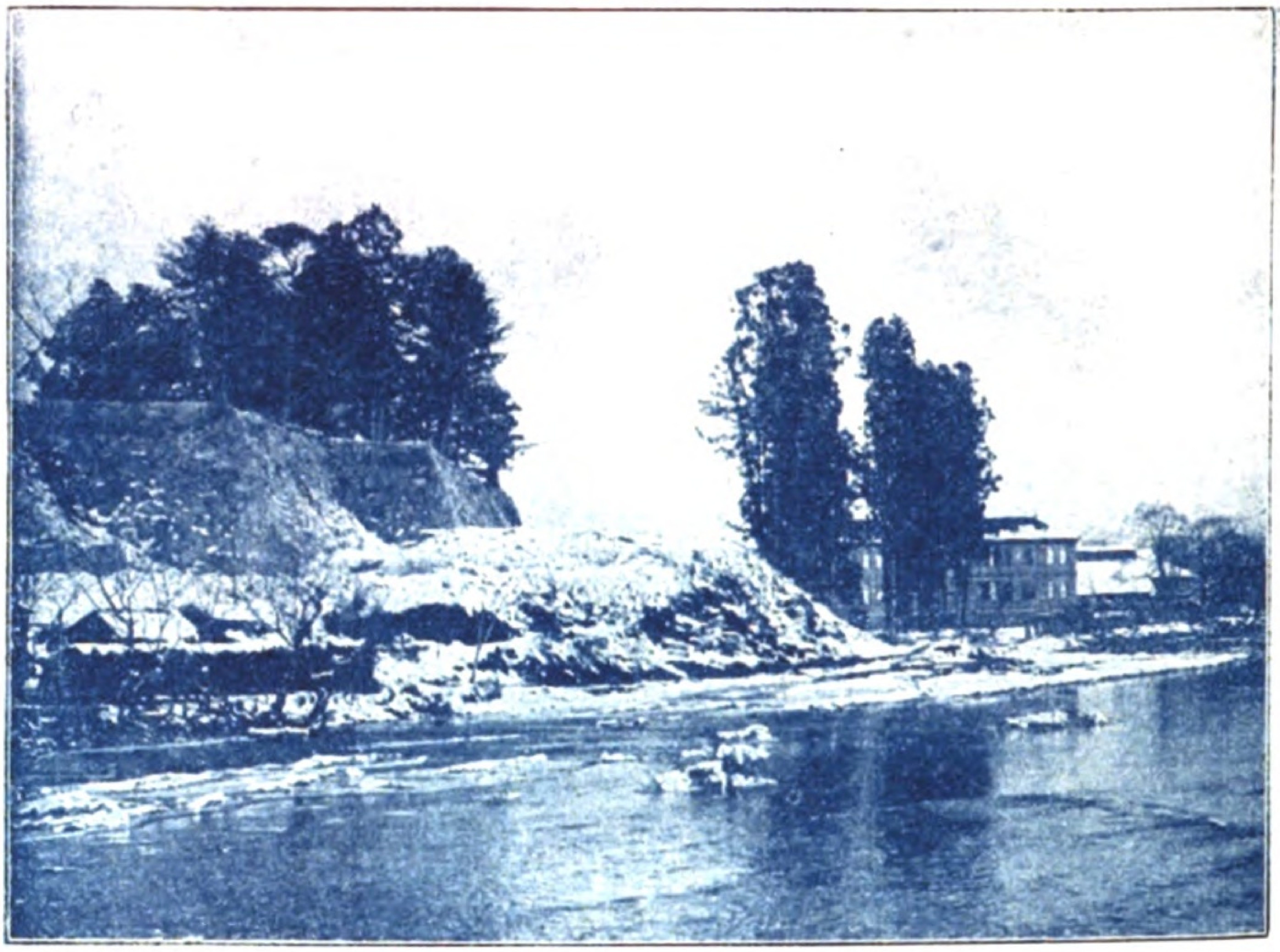




冬の海

（伊豆國田子港）

朝の雪
（陸中盛岡城趾）





暮の雪
（岩代逢隈川）

（戊の一）

謹賀新年

●業務擴張之稟告

弊堂儀今般業務擴張の爲め合資會社の組織に改め内外藥品賣藥及化粧品等總て各製造元と特約を結び大勉强を以て最新精良の品々のみを販賣仕候間江湖の諸彥何卒多少を論せず倍舊の御愛顧を賜はらんことを切望の至に奉存候敬白

●營業項目

●内外藥品　●内外化粧品
●諸賣藥　●内外滋養品
●藥用酒類　●繪具染料類
●醫療器械　●防腐用諸品
●内外香料　●薰物線香類
●諸大醫處方調劑

東京市日本橋區本石町三丁目大通角
藥品賣藥 化粧品類 問屋　合資會社 博愛堂藥店
電話本局貳八六番　電信略號〇ハク

業務擔當社員 大野孫平　事務員 今井儀等
支配人 長島義正　同 大島善五郎
藥劑師 大藤定次郎　外 店員一同

●特約發賣藥廣告

●風邪新藥 太陽散　●引風一切早なほし新藥
●一日分 金五錢　●二日分 金拾錢
●五日分 金貳拾錢　●四十包入 金五拾錢

●懷中新藥 太陽丹　●酒席旅行懷中必携新藥
●五十粒入金五錢　●百五粒入 金拾錢
●貳百拾五粒入金廿錢　●五百五十粒入 金五拾錢
●千貳百粒入金壹圓

●下毒新藥 太陽丸　●毒氣一切根切最良新藥
●一日分金七錢　●三日分 金廿錢
●一周分 金四拾五錢　●二周分 金八拾五錢
●三周分 金壹圓廿五錢　●五周分 金貳圓

●痳病新藥 太陽劑　●痳病消渇の根治最良藥
●内用 金四拾五錢　●外用 金三拾錢

●防腐新藥 太陽膏　●腫物傷痛皮膚病の新藥
●金三錢　●金五拾錢　●金拾錢

●發汗鎮痛 解熱新藥　●醫療的改良ねつさまし
●二包入 金五錢　●十一包入 金廿錢
●五包入金拾錢　●廿八包入金五拾錢
右は●かぜ●ねつ●たんせき●れうまちす等に卓効を奏す

●痙攣吐瀉 救急丹　●痢病下りはらの最良藥
●二十粒入 金五錢　●百十粒入 金廿錢
●五拾粒入金拾錢　●仝上

●今井 健胃錠　●胃弱諸症の最新良藥
●七回分 金拾錢　●十五回分金廿錢
●四拾二回分金五拾錢　●九十回分金壹圓

●强壯規那鐵葡萄酒　一瓶 金八拾五錢
右は血を增し身体を補ふ滋養强壯の大王なり

●象印ミルク
●本品は其質の純良なること衛生局の試驗に據りて明なり

(戊の二)

養の栞

茶の湯大全　江刺家協一君著
全壹册實價六十錢——郵稅八錢

本書は斯道の大家たる空齋宗匠の新論にして凡そ茶道に關する一切百般の事網羅せざるなし眞に之れ茶の湯に於ける空前の良書なり

茶の湯と生花　博文館編輯局編
全壹册正價二十五錢——郵稅六錢

本書は斯道堪能の士が其技の初步より奧秘に至る迄を明瞭平易に述べ且つ鮮明なる圖繪を以て一々丁寧に說明を加へしもの蓋し近來の珍書也

實用料理法　下田歌子女史著
全壹册正價二十五錢——郵稅六錢

同じ肉菜でも鹽梅調理の巧拙によつて味ひ天地の相違あり此書最も簡便にして實用に適する日本西洋支那等百般の料理法を懇切に說明せり

西洋料理法　佐々木孝君著
全壹册正價二十五錢——郵稅六錢

社會の進むに從ふて近時西洋料理の盛んなる驚くべきものあり此書一ト度繙かばいかに素人の方々と雖容易に風味美き肉羹を調進するを得べし

料理手引草　下田歌子女史著
全壹册正價二十五錢——郵稅八錢

夫れ料理と献立とは新たに家を持ちたる婦人は勿論婦人として必ず習得し置くべきもの本書は專ら實踐的に衛生と經濟との注意を主とせるもの也

八百善料理通　八百善主人著
全壹册正價三十五錢——郵稅六錢

八百善といへば少しく食物の味を知るものは合點の行く料理の名人で其虎の卷ともいふべき料理通は即ち此書で割烹の思召ある方は必ず見るべし

歌まなび　大和田建樹君著
全壹册正價壹圓五十錢——郵稅十六錢

歌まなびは和歌初學者の暗夜を導く電氣燈ともいふべき書にして部類は四季雜に分ち題每に說明を附し古今名家の作例を與へて模範を示す

詠歌自在　佐々木信綱君著
全壹册正價壹圓——郵稅十二錢

歌擅新派の巨擘たる竹柏園主人が懇切周到の著述に係り初學者の指南車たるは勿論其堂に上るものと雖も一讀せば得る處必ず大なるべし

本町三丁目　博文館

(氏の五)

(戊の六)

(戊の七)

博文館七大雜誌前金表

太陽
●毎月一回、一日發行 ●外に定期増刊年四回
▲正價一冊卅錢郵税一冊三錢 ○四冊金壹圓十五錢○八冊金二圓貳拾錢○十六冊一ヶ年分金四圓二十錢●外に郵税を要す

實業世界太平洋
●毎月二回、一日十五日發行 ●外に臨時増刊
▲正價一冊十二錢郵税一冊一錢五厘 ○六冊金六十八錢○十二冊金壹圓三十五錢○廿四冊金二圓六十錢●外に郵税を要す

文藝倶樂部
●毎月一回、一日發行 ●外に定期増刊年四回
▲正價一冊廿五錢郵税一冊二錢五厘 ○四冊金九十五錢○八冊金壹圓八十錢○十六冊一ヶ年分金三圓五十錢●外に郵税を要す

少年世界
●毎月一回、五日發行 ●外に定期増刊年四回
▲正價一冊十錢郵税一冊一錢五厘 ○四冊金三十八錢○八冊金七十五錢○十六冊一ヶ年分金壹圓四十錢●外に郵税を要す

女學世界
●毎月一回、五日發行 ●外に定期増刊年四回
▲正價一冊廿錢郵税一冊二錢 ○四冊金七十五錢○八冊金壹圓四十五錢○十六冊一ヶ年分金貳圓八十錢●外に郵税を要す

中學世界
●毎月一回、十日發行 ●外に定期増刊年四回
▲正價一冊廿錢郵税一冊二錢 ○四冊金七十五錢○八冊金壹圓四十五錢○十六冊一ヶ年分金貳圓八十錢●外に郵税を要す

地方行政公民の友
●毎月一回十五日發行 ●外に臨時増刊
▲正價一冊十錢郵税一冊壹錢 ○三冊金貳拾八錢○六冊金五十五錢○十二冊一ヶ年分金壹圓○五錢●外に郵税を要す

(甲種)
博文館發行
圖書特別割引券

●圖書御注文は此券を切取り御添付の事
●有効期限は明治三十七年二月十日限り
●期限中は定價の一割引を以て特賣仕候
●豫約募集中の圖書は豫約價の三分引とす
●館友は館友規定引の外尚圖書五分引豫約品二分引の事
●總て前金の外無効とす

特別割引券
添呈

迎春の祝意を表し例年の如く圖書雜誌特別割引券を呈上し愛讀者諸君平素の御眷顧に酬ひんとす
●圖書御注文の方は甲種●雜誌御注文の方は乙種を添へ期限中御申込被下度希上候

(乙種)
博文館發行
雜誌特別割引券

●雜誌御注文は此券を切取り御添付の事
●有効期限は明治三十七年二月十日限り
●期限中一冊賣は定價の五分引●冊數割引ある前金拂込は其金額の三分引とす
●館友は館友規定引の外割引せず
●前金御注文の外は本券の効用あらず
●御申込の節は博文館小賣係宛のこと

(戊の八)



女学世界

第四巻　第壹號



家庭月令（一月）

〔一日〕四方拜……一家團欒して屠蘇雜煮を祝ひ、禮服を着けて親戚知己の家庭を年始廻りす。〔二日〕初荷……初商……初買……新年始筆。〔三日〕元始祭。〔四日〕政事始め……消防出初め……會社銀行取引營業初め。〔五日〕新年宴會。〔七日〕門松を撤す……七種雜煮……御講書初め。〔八日〕學校授業始……陸軍始。〔十日〕初卯、東京にては未明より龜井戸に詣づ。〔十一日〕大工職人の釿始め。〔十五日〕小豆粥……〔十六日〕閻魔賽日……藪入、男女の雇人主人の暇を得て家に歸り、父母を省み、さて思ひ〳〵に遊び廻る。〔二十日〕惠比須講。〔二十一日〕大師賽日。〔二十五日〕天神祭。〔三十日〕孝明天皇祭。

（氣　節）未だ立春に至らず、上旬「小寒」、下旬「大寒」。

（農　事）麥の穗は萠え出でんとす、農人暫く播種に閑なり、

（食　品）蔬菜類――小松菜、陸芹。◎菓物類――蜜柑。◎魚介類――白魚、鯉、鮒、はぜ大口魚、鯛、芝海老、伊勢蝦、烏賊、章魚、牡蠣、蜆。◎鳥獸類――鴨、家鴨、雁、其他總ての肉類皆好味なり。

（遊　樂）室内に在ては歌加留多、諺語錄……戶外に在つては紙鳶、羽根遊び、ロン、テニス……子女を連れての遠足には探梅、雪見、

（景　勝）初日出の名所は、東京湯島天神、愛宕山……相撲繪の島……伊勢二見浦……駿河富士山。雪見に面白きは、東京待乳山、向島……京都圓山、嵐山……大阪高津、中の島。

（祝祭日）一日――四方拜。三日――元始祭。三十日――孝明天皇祭。

（日曜日）三日、十日、十七日、二十四日、三十一日。

家庭教育の二大傾向

家庭教育

- 干涉教育
  - 禮義、作法
  - 倫常、克己、修養
  - 尋常人物
    - 小松内府重盛
    - 楠正成
    - 德川十五代將軍慶喜
  - 是非、正邪、差別
  - 節操、恪勤
- 自然教育
  - 精力、自任
  - 大志、活動、天稟
  - 非凡人物
    - 平相國清盛
    - 足利尊氏
    - 後藤象次郎
  - 善惡、利害、無頓着
  - 獨造、獨斷

國母陛下の令德

男爵　渡邊千秋謹述

新春初刊の女學世界は、掛卷も畏き、我が、國母陛下の御高德を掲記し奉り、之れを內外に發揚して、世の婦女子が教學の本旨を誤らず、その德性を涵養するの鑑となさんとし、千秋に一言を需められたり、千秋其心を諒とし、身常に宮廷に出入して、拜承する令旨令德の節々を謹述し以て女學世界記者に授く。

國母陛下は、故左大臣從一位藤原忠香卿第三の御女にましまし、嘉永三年庚戌四月十七日一條邸に御誕生、御名を美子と申し奉る、慶應三年丁卯六月廿八日、御歲十八にして女御宣下あり、明治元年戊辰十二月廿八日に御入內あらせられ、即日立后宣下仰出され、今年賀算五十五回の春を迎へさせ給ふ。

國母陛下の御淑德は、夙に內外國民の欽仰し奉る處にして、今更ら千秋の喋々を須たざるも茲に其一端を述べ奉らん。

陛下は御幼時より、誠に御仁德の御心篤くましまして、曾て千秋が京都府知事たりし時、一條家の舊臣等に會して、事

國母陛下に及びし時は、いづれも涙を垂れて、其御慈愛の厚きを欽慕し深く肝銘せざるはなし、御幼時に於て既に斯くの如し、御入内皇后宣下の後は益々御仁惠を旨とせられ、常に國民を憐み給ひ、赤十字社を初めとして、慈惠病院等の事には、殊に御心を傾けさせられ、只管に此の大御國の國安かれ、民豊けかれとの外御餘念もましまさず。

陛下には、日々の御用務御多端に渉らせ給へば、平素の御慰みとてはましまさねど、御隙あれば、御歌の御嗜あり、世に、國母陛下の御歌として、聞えたるも少からねど、いづれも春花秋月の御風流は少うして、風教を維持し給ふ御歌多かり、假令風月の御歌といへども、間接には御國のために御心を用ひさせ給へる大御心の存せざるものなきは、いとかしこし、思ふに之れ國民の徳性を涵養せさせたまへること、實に多大なるべし。

陛下が皇太子殿下及び妃殿下其他内親王方に對せられて、御慈愛の深き、御敎養の厚き、御倫情の御睦じき、誠に臣子たるもの丶感仰し奉るべきところなり、されば華族女學校を初め各學校等へ行啓の節は、多く内親王殿下を御同伴あらせられ、共に親しく女子敎育の事など、御覧はせ給ひ、御心を注がせ給ふなど難有き事共なり。

且又奉仕の近臣に對させ給ひて、いと御仁愛の情深くましまし、謁見の折の如きは、極めて御懇篤にあらせらる、現に客歳大坂博覧會へ行啓の折柄、京都に御駐輦ありし砌、千秋偶々、公務を帶びて、京都に出張せしに親しく拜謁を賜ひ、御留守の事何くれとなく御尋ねあり、御慰勞の御言葉をさへ賜りぬ。されば臣下に於て若し疾病抔に罹りたる時の如き、深く御心を惱ませ給ひ、畏くも御使者を其邸に遣はされ、御肴、御菓子等を賜り、厚く御慰問あらせ給ふ、御仁愛の徳深くましますこと恐れ多き限りといふべし。

陛下には又常に質素を旨とし給ひ、苟も浮華に流るゝが如き事は、堅く禁じ給へば、折ふしの御慰みに就ても

苟りにも御浪費の御事あらせられず、時折紅葉山等へ御散歩の折柄は、或は菜畑を設けさせられ、野菜等を植付け給ふ、是れ農民の粒々辛苦を思召せばなり、又養蠶の如きも親しく御手を下し給ひ、茶園等をも拓かせられて女官をして事を執らしめ給ふ、是れ皆女子一般の務めを欠かじとての大御心なり、音樂の事等にも、充分の御嗜あらせらるれども、近來は外國使臣幷びに臣下の謁見、其他の御用務御多端に渉らせ給ふを以て其慰みの時とてあらせられず、されど元來御聰明にましますことて、音樂の如きは、夫れ〳〵御堪能にて、時々御評判など承ることもあり、御學問は、御幼時より勤勉み給ひし事とて、萬づ御通曉あらせらる、殊に内外の歴史に御造詣深くましますは恐れ入る程なり。

かゝれば、兎角に百弊蟠り易き内廷も、聖德の感化到らざる隈なく、御隨從の女官は勿論、常に宮中に出入する各皇族妃殿下を初め、貴婦人方に於ても、東洋女性の弱點たる驕奢逸樂に耽ることなきのみならず、不知不識の際に、御淑德に涵養せられ、いづれも慈善を心掛け質素を體し貞淑を旨として、陛下の御盛德に倣ひ奉らんとせざるはなし、これ眞に國母として萬人の儀表と仰ぎ奉るべきことにぞあらめ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

御幼時

掛卷も畏けれども、秋の宮居の廣き御蔭は、大八洲の外に餘り、深き御惠の露は、八十民草の下葉をも濕し給ふ、實にや久方の天が下治しめす我が大君の日の蔭に並び給へる御德の輝き、大空の圓かなる月にやあらん、明鏡の曇りなきにも似たまふ御性質は、お生れながらの璞の光にもあれ、さすが庭訓の偶然ならざるけり。御歌に

みがゝずば玉もかゞみも何かせん
　　まなびの道もかくこそありけれ

抑も　陛下の御父君を一條左大臣忠香公と申しまゐらす、學びの道にいそしみたまひしお概しを承るにの御心こそ尊くもおぼえしが、實に〳〵御幼時に於かせられて、當時鹽梅の臣として聖明を翼け奉り、近代の良弼と稱せられ給ひしことは我が國の史家の夙く知る所なり、此大臣或る時、京都烏丸の御館に、物見の臺を造らせんと家司に任することとありき、一條家は五攝の一家なれども、萬に事足はせぬ家なり、家司承はりて、其費用云々にもや候らはむ、只今の御身上にてさる無用の造作然るべからずと拒み止め申せしに、いやとよ、麿は此れをもて身の慰みとせむぞとは思はぬなり、家には多くの公達、姫君おはします、これら幼稚が下情に通せで成育たば、何條好きことの有るべきや、凡そ貴賤の生活上の有樣など目のあたり見るは稀れなり、恁くて成人りて、家人など多く召使はんに、兎角は己れのみ驕り高ぶり、人の苦みを知らずして、過ぎ行くは幼少きより、物の情を知らせぬが罪なりかし、かゝれば麿は彼等に夙くより下々の態を目に見させ、人情の大概をも知らせんとてなり、ゆめ〳〵奢侈の沙汰にはあらずとありしかば家司も畏まりて軈て其御物見を調へてけり、恁くて成れる後大臣には御子達を召して其處に出でさせ、人さま〴〵の交通を其れよ、此れよと示し給ひて、更に其對ひに染物屋のありけるを指さゝせ、見よ、此處なる彼の家には、父子揃ひて那の汚穢なる業を厭はず勤勉むぞ、和子達もあの如く學問に勉め給はゞ何とか賢き人にならでやおはすべき、力め給へ、など仰する事も屢々なりきとぞ……此の御心の一班は、即て庭訓の全豹をも窺ひ奉つるべきものなるべくして、璞の御光は善き玉工を得て彌其光りの照り添はるにも異ならず、生ひ立ち給へる儘に御智慧いと賢こうまし〳〵て、和學は御父の大臣、漢學は貫名海屋の息正邦と申すが御師範に侍らはれ、後に若井の某と申す老女の御導を申さ

せ給へるが、御才の微妙じきは一を聞て十を知ると申すにも似させて、御進みの速かに際立てること匹儔なしと、此等の人々も恐懼み申されき。

御伉儷

申すも惶こし、明治九年の夏、主上東北へ行幸の折、陛下には都離るゝ千住の驛まで、送り出でさせ給ひし御氣色を、故近藤芳樹翁が「十府の菅菰」といへる書に、詳しうも記されたり、今日（六月二日）しも夏の空とも見えず、いと長閑に、天つ日も光をそへて導かせ給ふにやと思ふばかり、御輦を照し給へれば、道も去りあへず立騷ぎし賤の男、賤の女もさすがに傍に伏して、主上と皇后と別れさせ給ふさまを拜み奉る、古くより、好からぬ習はしありて、夫婦の間、疎々しくするを禮の如く、皆人思ひなしゐたりけるに、皇后の、かく都離るゝ所まで送り出でさせ給ひて、御袂をわかち難きまで懇ろに御別れの情盡し給へるを、はるかに見奉れる男女、皆面を見合せて、げに高きも卑きもかくてこそ、誠の情は其中に籠りたり、と感け思はぬものはなかりけり、あはれ民の父母とおはしまして、世を導き給ふ事は、言の葉の上のみにはあらで、かゝる御態の樣にても著明きわざにて此の行幸につけても知らるれば、今日は自ら天と地との間に、和める氣を含みたる心地すとあり、又四月廿四日、宮城の躑躅が岡なる行宮に着せ給へる御時の事を記して、今宵都よりの便につけて、皇后の過にし十三日の月次の御會に、年々郭公といふ題にて、

みちのくに鳴やゆきけむ郭公
ことしは聲のしげしともなき

と詠せ給へり、と渡忠秋より言ひをこせたりしよしを、高崎正風（歌所長）より聞けり、慕はせ給へる御心

の眞、詞の上にあらはれていとめでたし、又た明治十一年北越巡幸の御時に詠ませ給へる

大宮のうちにありても暑き日を
　いかなる山か君は越ゆらむ

初雁を待つともなしに此秋は
　越路の空のながめられける

これらの御歌を拜誦し、彼の記を讀みたらん程のもの、誰か御心の渡津海の底と深う、御慕ひの鑛金の土と厚くましますことを感せて候ふべき、又去ぬる三十四年の秋、主上親しく御統監ましまさんとて、東北の大演習に行幸ありし折の御事なり、此地の民より宮城野の鶉を奉りしが、殊の外御意に召させられ、皇后陛下へ御土產にとて持たせられ、都の秋に宮城の秋を、御語草の料となし給はん思召しと漏れ承りて、うるはしき、御伉儷、今更におぼえ出でられぬ。

御儉德

陛下が自ら奉させ給ふ事の薄くましまし、よろづ質素を好ませ、浮華に流るゝを嫌はせらるゝ大御心の尊さを窺ふ一例あり、怪しき雲東洋の天に漲りて、日淸の平和動もすれば危からんとする明治廿七年の夏九重の大宮內は、御手狹の事にしあれば、皇后陛下の御散步地とては、別に御設けもあらねば、御不都合にましまさんとて、內匠寮にては、御遊步場として、紅葉山へ庭園を新設し奉らんと、已に木石等の運搬に着手せし折から陛下には之れを聞召し給ひ、今日の如き國事穩ならざる時に、遊步場など新に設くるとは心なき業なり、思ひ止まるべしとの難有き御詞に依り遂に中止するに至りしとぞ、御儉德のいみじきいと畏き御事なり。

陛下には又天下の婦女子に蠶桑の業を勸められ、親しく蠶兒を養ひ給ひ、群馬縣に命を下され蠶桑に事なれし婦女四人を召寄せられ四人のものは出京して、日々御苑內に伺候し、其業を敎へ奉れりとか爾來例年その季節ともなりぬれば畏くも御手づから養蠶のことに從はせられ、其結果は頗る良好にて年々其量凡そ五斗內外もあらせ給ふとぞ、又常宮 周宮 內親王殿下にも 皇后陛下より蠶種を賜らせられ、佐々木伯令孃主となり、兒女を督して養蠶遊ばされたる結果、時々六斗餘も御收穫ありたりとか、又 皇太子妃殿下にも同じく皇后陛下の御勸めに依り、女官をして從事せしめられ同じく好結果を得給ひしとぞ。妃殿下が養蠶てふ題にて咏ませられたる御歌

かぎりなき御國の富やこもるらん
しづがかう蠶のまゆのうちにも

かく御大心の深きものから、一とせ各地とも時ならぬ降霜の爲め、桑樹の被害少からぬ事を聞召され、畏くも香川太夫に仰せあり、被害の模樣內奏に及ぶべき旨各地方官に御沙汰ありたり。

又一とせ 陛下には、京都へ行啓の砌、女官どもを召して、御所の御庭を御逍遙遊ばされし御事あり、遠近の景色などみそなはし、京都の繪圖をも取り出させ給ひて此處は何、彼處は何など御下問あらせられ心長閑に御遊覽の折から、御庭の東南の方より、黑烟立ちのぼりて御眺めの眼遮りたれば、女官達何れもむさき心地して、眉打ひそめけるを、陛下には畏くもほゝゑませ給ひて、あれこそ西陣織物會社の煙突より出づる煙なれ、十年の昔そが工業開業の折、親ら行きて見たる事あり、今かく賑しう烟の立つは、工場の繁昌するしるしにて御國の爲めにも嬉しき限りならずやと、御物語あらせられしとぞ、かく產業の上にまで大御心をかけ給へること、難有き次第にこそ。

御平生

香川皇后宮太夫の談に、皇后陛下の御性行を恐れながら一言に評し奉つれば、婦人の王とも申すべき御方にましまし、内廷の何くれは申すに及ばず、慈善事業を初め、皇族方々との御交際、外國宮廷との御交際等に至るまで、萬事御心を附けさせられ、内廷のもの共には殊に仁慈の御心を垂れさせ給ふものから、口善惡なき下賤のものに至るまで、一言だも怨嗟の聲を洩し〻事なく、余も三十餘年來奉侍すれども、曾つて兎角の事を耳にしたる事のなきは、聖上陛下の御高德の然らしむる處とは申せ、國母陛下の御婦德の完璧なるが爲めと拜せらる、されば伊藤侯の如きは、皇后陛下と下つて故岩倉公とは京都出身中の二大偉人なり、と申せし事もある程なり、さればとて御日常の事にて取立て〻稱へ奉る事もおはさねど、總べて凡人の企て及ばざる御高德を供へさせられ、供御の食膳に就ても、自分は内膳の太夫をも兼ね居れるが、何一つ御氣に召さぬと仰出されたる事なく、内膳職より供へ奉る何なりとも食召し給ふ、尤も御朝餐は牛乳紅茶鷄卵麵麭の外は何物も召さる〻事なく、御晝餐と御晩餐は大抵日本食を召され、洋食は、御陪食を賜はる時にしもなければ召さる〻と稀に渡らせらる、御朝餐は御居間に召され御晝餐と御晩餐は、聖上陛下と御對座にてきこしめさる又御日課と申しては別に之れぞと定めさせられざれど、當節なれば朝七時御離床、八時頃御朝餐を食召され、内庭の何にくれにつき臣下の奏聞を聞召され、皇族方の御訪問杯を受けさせらる〻内には御晝餐とならせらる、午後は多く、聖上と御對座にて御詠歌に夕刻迄を費さる〻と珍しからず、御歌は一日數首或は十數首の多きに上る事あらせ給ふとぞ、夜は聖上と御對話あらせらる〻が御例にてましませば十一時頃ならでは御寢遊ばされずとなん。

御仁惠

故楓の内侍、税所敦子は、陛下に近侍し參らせて御寵遇を蒙りし一人なりしが、敦子大患に陷りし時、陛下には、特に高崎正風翁を差遣はされ、宮中には氣を置かず靜養せよ、且つ老體にも及びたれば、全快の上は宿に下り、氣の向き次第宮中に出仕すべし、最早宮中に留るにも及ばぬ旨御沙汰あり、此時敦子餘りの難有さに、感涙襟を潤し

露ならぬ玉のこゑを傳へ來て
身にしみわたる秋の月かな

と詠じたりとなん。猶其御例と申すを擧んに、御左右に候ふ人の、時として過ちありし折其が故意にせる罪ならざる、不意き過失ならん限りは、以後を愼むべき由の御沙汰のみにて、別なる御叱責等ありつる事なし、況て如何なる折にも、御聲高に物仰せられしなんど伺ひまゐらせたる事なし殊に疾病をば太と痛う氣遣はせて、出仕の男女の聊かにても平常に變りたる面色など有る時は、何某は今日如何にせし心地損ねたる事なきや、身を厭ひ候へ、など其の程々につきて御詞を下させ給ふとぞ、其が御有樣の書に見えたるは御歌所寄人小出粲氏のみくるまのあとて廿三年の夏、名古屋より京奈良吉野等へ行啓ありし時の御供の日記に詳しう記されたり。

（以下次號）

新家庭

▲元日の心

巖谷小波

『元日や神代の事も思はるゝ』とは、古人も已に云つて居る事で、兎に角元日と云ふ日ほど、一年中に不思議な日は無い、その朝に昇る旭は、大晦日の旭と同じ旭、その夕に出る星は、大晦日の星と差異は無いのだが、それでも昨日は寒く、今朝は温に、昨夜はいぶせく、今宵は樂しく見えるのは、偏へに見る人の心持次第である。

一日の事は朝にあり、一年の事は元日にありとやら何は兎もあれ、この元日の心ほど人に取つて長閑に、樂しく、また安らかなものは無いので。如何に佛頂面の阿爺も、此日許りは白い歯を見せ、口やかましい姑殿も、此朝ばかりは笑顔を現はし、乃至小言好きの旦那さまも、元日ばかりは御機嫌で、些細な麁想はお目こぼしに成る。成る程元日ほど、世にお芽出度い日はあるまい。

更に立入つた事を申せば、常にあまり睦くない夫婦間も、元日ばかりは互ひににこやかな顔を見せて、金モールの大禮服に、さても頼もしい殿ぶりと、妻は夫の參內を見送れば、白襟に紋付、これは見上げた容貌よと、夫は妻の出迎へを喜ぶ、於是乎正に知る、人間いつも元日の心ならば、家内は安全、天下は泰平、是に増したためで度さがあらうか。

▲巖上の松

今年の御題の『巖上の松』ほど、家庭の鑑に成る物はあるまい。

之を一家に譬へれば、巖は即ち夫、松は即ち妻である。風にも揺がず、水にも流れず、萬代不朽の意氣は之を男子も求むべく、霜にもうつろはず、雪にも凋まず、千代も變らぬ貞操は、之を女子に要すべきで、而もその松が根を、堅く岩に留めたとあつては、是ほど確かな事は無いのである。

所で巖と松斗りでは、何と無く物足り無い。されば松には雀を巣はせ、巖には龜を宿らせる。これが娘とも、子息とも譬へられるので。子女の無い家庭の、如何にも淋しく、冷かげに見ゆる如く、鶴龜の無い松、巖は、や丶殺風景な觀がある。世の松たり巖たる方々、疾く雀を舞はせたまへ！とく龜を躍らせ玉へ！かくてこそその家は、まことに千秋萬歳であらう。

▲兒童綿服論

子供の正月を喜ぶ事は、昔も今も變らぬ事で。毬に羽子に、紙鳶に獨樂に、乃至「かるた」に、「双六」に、童男童女の樂しげに遊び狂ふ態は、見る目にもまことに嬉しいものである。

が、その嬉しく見る目に、また疎ましく映じるのはその童男童女等の、矢張りその父その母の如く、絹布の晴衣を纏うて居る事。是が甚だ目障りである。

元來子供と云ふものは、男女に限らず、成るべく快活に立ち働かせねば成らぬ。その快活に立ち働く場合に、絹布の晴衣を纏ふて居るのと、木綿の衣服を着けて居るのと、何方が働きよいであらうか。

中にも女の子の如きは、なまじその着けて居る物が絹布の晴衣である爲めに、汚しては大變だ、破つては成らないと、半分は氣をそれにのみ取られて、平生の元氣を出す事が出來ない。

それを無頓着にやつてのければ、多少晴衣を損じてしまふ。すると阿母さんに叱られる、自分はふくれる折角樂しかるべき初春の家庭に、はや面白からぬ風の吹き初めるには、決してめで度い事ではあるまい。

また女と云ふものは、その特性として、子供の中から兎角嫉妬心がある。否、嫉妬と明かに命名すべきでも無いが、所謂るそねみ、ひがみ、うらやみ、いやみの念に富んで居る。されば同じ友として、一人は美々しい絹布を纏ひ、一人は質素な綿服を着けた場合、絹布のその美に誇り、綿服のその素に恥ぢ、彼の侮り、是の羨み、遂に氣まづい中に成るのは、決して喜ぶべき事ではあるまい。

まして男の子の、ゾベラ〳〵と絹布を着たほど惰弱にいやらしく見えるのは無いので。よしや年始の禮の爲めに、長者の前に出づるにしても、さつぱりとした木綿地の紋付か、或は小倉の洋服位の方が、遙かに見好く、また可愛らしいものである。

▲不心得な親

例の所謂島國根性。日本人の早く熟して、また早く老ひ込むのは、その原因何所にあるかと云ふに、一つは日本の人間の、子供の中からはやく大人びて、子供の本質を失ふ故であらう。

前にも云ふ通り、子供の中から父母と同じく、身に美服を纏ふと云ふのは、取りも直さす子供として、已に大人ぶつた振舞ではないか。

尤も小供それ自身には、決して何の罪も無い。却つて之に美服をあてがふ、その親達が不心得である。

更に不心得な親達に至つては、その召使の婢僕共の我が家の子供達を扱ふのに、自分等に對すると同樣の敬意を以てせしむるのである。東西も解へぬ子供を、『坊ちやま』『若樣』『お孃樣』とあがめさせて、御無理御道理、只命是從はせやうとする。それでほんとの敎育が出來やうか。

封建制度の昔なら知らぬ事、今日四民平等の世界に元來主の家來のと、階級のあるべき筈は無いのだ。然し多年の習慣上、雇主と雇人との間に、主從的關係の成り立つのは、先づ止むを得ない事としても、それは雇主と雇人との間ばかり、その雇主の片割なる、年端も行かない子供等までが、雇人を譜代の家來の樣に心得、横に車の無理を通さんとし、偶々之を遮ぎる者があれば、忽ち主人風を濫用して、之を叩いたり、引搔いたり、果は涙と云ふ武器を振りまはして、父母に告口をするに至つては、甚で以て怪しからぬ次第だ。但し、それは頑是無い子供として、強ちに責めるには及ばぬが、その先口を取り上げて、小言を婢僕の頭上に降らさうと云ふ、主人夫婦の不心得に至ては、大いに攻め度いと思ふのである。

之を西洋の家庭に見るに、由來子供と云ふものは、人間一人前の權利を持して居ない。されば一般の子供と云ふものは、誰からも單數の二人稱、即ち「おまへ」なる語を以て呼ばれる。是は必しも輕視の意では無い、即ち親愛の意を表する爲めでもあるが、たとひその子供が、高位高官、貴族、富豪の子であらうとも、素町人、新平民の子であらうとも、皆一樣に「お前」なる語を以て呼ばれ、之に相當する言葉遣ひをされる。而もその對手が、只に父母兄弟に止まらず、家に居る婢僕、道に會ふ車夫馬丁の類からも、皆同樣に扱はれ、それで本人も平氣なら、他からも決して怪まない。

それは蓋し西洋の例。風俗人情の異る我邦で、強ち之を學ぶ事は出來ない。また學ぶにも及ばぬであらう少くとも日本の子女等の、父が華族ならば、自分も華族面を爲し、父が富豪ならば、自分も金持ぶるの惡習丈は、速かに、之を矯めねばならぬ。而して之を矯めるの責は、學校に於ける教師より、家庭に於ける父母にあるのだ。

華族の子弟の馬鹿に成り易く、富豪の子供にやくざ者の多いのは、蓋し是が親たる者の、心得一つにあると思へば、豈に鑑みざる可けんやである。

▲かるた會

男女交際の不便な日本に、之が唯一の機關とも云ふべきは、日本古來の遊戲として、全國至る所に行はれる、初春の「かるた」遊びであらう。

初對面の男女の者が、互ひに入り亂れて戰ふ程に、遠慮の中垣も何時か取り拂はれて、隨分思ひ切つた振舞をする。

これを西洋の舞踏會に比するに、立つと坐ると、動くと、動かぬとの差こそあれ、その面白さと、その夜を更かす事と、その男女兩性を必要元素とする事、將たその目的とする事に於ても、大いに似た所がある。

イヤ、更に似た事と云へば、先づ約婚の媒介に利用され、見合の方便に用ひられる事であらう、然し舞踏

會の全く純潔には出來無い如く、かゝる會に如何はしい風聞の立つのも、何れ人間の世の是非に及ばぬ次第。それを彼是氣にかけて、舞踏會の禁ぜられた例も聞かなければ、かゝる會の中止に成つた事もあるまい。

所詮かゝる會の如きは、增々盛大にしたいものであるが、我邦に於ける男女交際の機會が、只是のみとは甚だ物足らぬでは無いか、殊にかゝる會なるものは、如何にそれを擴張した所で男女百名を集める事は出來ず、畢竟島國的小規模を免かれない。

さりとて現今の日本では、直ちに西洋風の舞踏會も行はれまいから、此所は一番工夫をして、高尙に、優美に、而も快活に、簡便に、そしてかゝる會の樣に不健康でない、圓滿な交際機關の出來る事を、余は切に希望するのである。

否、此儀は本誌の硏究問題として、遍ねく愛顧の諸姉と共に、大いに智慧を絞らうと思ふ。

次號の論壇

次號の論壇には女子問題の爲めに船載の新書三十餘種を讀破して新たに稿を起したる本田增次郎氏の

女性壓服論

警拔嶄新なる批評界の勇將靑柳有美氏の

女子敎育私議

右二篇の外更に敎育界の新智識下田次郎氏の

女子と美術

と題する雄文を揭載し以て新春の女學界に一段の光彩を發揮す



貴婦人の嗜好

中村鈴子

田中宮相夫人

夫人貞與子は土佐國佐川の領主深尾鼎氏の三女にして嘉永四年を以て生れ明治九年を以て今の宮内大臣子爵田中光顯氏に嫁す人と爲り濃厚多情慈惠を好む淡薄少信の徒と趣向を異にする所以なり夫人が各種の女性事業に盡力すれども衒耀を厭ひて表さゞるが如きは其性格の一斑を窺ふべし

夏尚寒き關口の瀧のほとり、駒留橋を渡つた處が、有名なる芭蕉庵即ち田中宮相の私邸であります。御主人は日曜毎に公務の勞を休める爲に、夫人諸共此邸へ歸らるゝのですが、欝蒼とした竹籔を後にした藁家に瀟洒な門あり、芭蕉翁手植の松は、左右の枝を張つて、前面の神田上水に翠影を映して居るのです。記者は豫て夫人に御庭拜見を願つて置きましたが、丁度十一月の下旬、紅葉霜を帶びたる朝、庵の御玄關へ伺ひました。奥深い網代の廂と鼠壁の欄間に這ひ延びた蔦蘿の中に小さな釣鐘を懸けて、其傍に撞木を挿んでありましたが、呼鈴に代ふるに目白に緣ある鐘を以てせられたのは、先づ訪問者を美化せしめらるゝ御趣向ならんかと面白く拜見する內、御女中出で來りて案內ありしゆゑ、記者は蔦に埋もれた靴脱石へ履物を脫ぎ、次の八疊の座敷へ通つたのですが、白緣の疊に一間の平床あり、掛幅は雪舟筆の人物で其下にはつるのある京燒花瓶に白薔薇外一種の花を挿され、東側は小壁に青貝柄の槍一筋を、南側は芭蕉略傳の古い額一面を掛けられてあるのみで、目立つた裝飾の無い清淡な御座敷、あたりは自から寂として小春日和を悅ぶ山禽の聲、琴瑟を彈ずる如き筧水の響に塵俗の境涯を忘れて、恍惚として居る處へ、白茶無地の襖を靜かに開けて出で來

られし夫人は、小豆色萬筋の京御召に、黒縮緬の三つ紋羽織、茶色の無地縮緬の襦袢の襟を正しく合せ、無地御納戸の縮緬服紗帯を僅かに現はされ、鬢のふくらんだ落付いた束髪は、色白な組面に好く似合はれて、總體に繊柔な御風姿、如何しても御年より七八つ御若く見受られました。先づ叮嚀に御挨拶ありて——、

今朝は特に霜も深う御坐いますのに、遠方ようこそ御出、斯様な田舎家で何の興もなけれど、昔の儘其儘の庭の景色を御緩りと御覽遊ばせ。併し御承知の通りの昔者ですから、御話だけは御免しを……と再三再四辭退されましたが、記者の切なる請を憫然と思召され唯だ平素の御話だけ爲されました。

▲服　裝

着物は唯今の處、何でも二通りづゝ要ります。洋服は如何致しても廢されませんが、彼れも流行、衰頽が御坐いまして、袖が濶くなりましたり又キユーッと斯様なに(袖口を緬付けて見せられ)なりましたり、此節は袖の先たけ濶いのが流行ますネ。私共はサツパリ搆はぬ方ですが、餘り衰廢つた服裝で外國人の前へ出ましては、日本の外聞が悪いと思ひまして……本當に繁縟な事で御坐いますネ。それから日本流の儀式交際には裾模様も紋付も要る、夏冬の禮服も要ると云ふ風で、却々費用のかゝる事です。今は移り變りの時代ですから、歩き方其他の禮儀も皆二通りで、躾けられる小さい嬢は本當に御可哀相なくらゐですよ。

昔の御武家の帯は、五月頃から丸ぐけの兩端を長く突出して締めましたから、三尺口は躰を横に致して歩いたのです。彼の錦繪の千代田城大奥といふ中には、實地に近いのがあります、全く本當の風俗を寫したのも御坐いますネ。私なぞ昔者ですから、何となう舊幕の風が慕はしくてなりません。

▲髪

私は丸髷好きで御坐いますけれども、三日と結んで居られません。御交際向には是非束髪に致さなければなりませんから……。以前張差を入れたので、中央が禿げて居りますゆゑ、獨りで斯う云ふ風に結ふのです

彼の椎茸髱で御坐いますか。彼れは上方の風と武家の風とは異つて居りました、上方のは葵の葉のやうに結つてたけながで留め簪を挿します、武家のは二の環を入れて笄を挿します、先ア錦繪にあるやうな風なので御坐います。

▲小說

唯今は小說なぞ讀む暇は御坐いませんが、以前は能く馬琴のを見ました。如何しても忠孝の道が勵ましてある小說は讀んでも、力が入ります子。此節の物は何ですか結末が煙の樣で詰りません。

▲音樂



田中子爵夫人

琴は生田の方で御坐いまして、五歳から稽古させられましたが、本當の御孃樣藝で何も出來ません」召使に山田の出來る者が居りまして、少しばかり慰みに稽古した事が御坐います。ヘエー彼の貝盡しも改良になりましたか、アア成程チョット下品な所がありましたネ生田はズット上品で三味線に合しても、尺八に合しても宜う御坐いますこと……新月だの梶枕などは誠に品の宜い物で……。一躰生田の曲は詠歌から取つた物です、尺八は古童が一番名人で、先達ても或園遊會で合せ物に出席し

ました。生田の瓜は平ですから音が強く聞えます、尤も私の母の時分は細長い爪を用ゐたさうです、坐り方も斜に琴に向ひますから極上品なのです。

▲和歌

和歌も大好で幼少から習ひましたが、何分田舍風で唯今はお耻かしうて迚も……。興風會で御坐いますか、誘はれて能く出ますが、年を取りましては進まぬもので御坐います。

▲慈悲

畜類は何でも好で、中にも汚いのを餘計に飼ひます、ホヽヽ、妙なので御坐います、ですから其處らへ棄てた犬や猫を皆拾つて遣つて澤山飼つて居ります、人に嫌はれて憫然だと思ひまして……。一躰以前は癇性とか申す質で、汚い事を致すのが何より嫌ひでしたが、辛抱は嫌ひの事を致すのに限ると存じて、汚い事を何でも致しましたから、此頃は何でも無くなりました。畢竟忍耐で好嫌ひが無くなつたのです。

と夫人は忍耐を以て慈悲の名を掩はれました。

私の好きな事を申したら澤山御坐いますが、天保時代の人間の下らない御話ですから、何卒御書き下さいますな、本當にモーちよいと劇場へ出掛けましても、宮寺へ參詣致しましても、直に書立てられて厭で御坐いますこと……。奏任一等位の時が一番氣樂で御坐いました。種々惡口を申されるのも、御維新前ぼんやり育てられた罰で、天命だと思つて諦めて居ります……主人も私も名聞は好みませんので、つく〴〵忠孝の道ばかり慕はしう存じて居ります、迚も死ぬなら大君の御爲にと、此樣な事ばかり思ひ暮して居ります。

此時毛並の奇麗な三毛猫が、襖の陰から徐に來て夫人の御膝へ上りました。

此猫も捨てられて居るのを拾つて遣りましたので、此頃漸く肥りました。

▲御庭散歩

夫人は猫の背を撫でながら東の障子を開かれ、詰らぬ御話ばかり致しまして御退屈でしたらう、大分暖かに成りましたから、少し庭を御歩き遊ばせ、私が御

案内致しましやう。夫人は斯く言はれて手を鳴らされ女中に命じて庭下駄二足と蝙蝠傘二本とを取り寄せられ、先に立つて飛石を越え、熊笹の繁つた土橋を渡り、芭蕉堂の方へと案内されました。此祠は樹木生ひ茂つた高丘の頂に鎮坐され、赤土坂の細道勾配急にして滑り易けれど、夫人は最容易げに、御歩い成されゝ、度々躓きさうになる記者を助けられつゝ、様々の質問に御答へ下さいました半腹の小暗き處に高麗燒の白衣觀世音あり・朝鮮での分捕品を御主人が去る方より求められたとの事です。



子爵夫人十六歲の時

少し隔つて苔蒸した羅漢石像二軀列べるは、太古の掘出物であると話されましたそれより二三の植物に就て伺ひましたが、夫人は一々說明せらるゝやう、これは錦糸梅と申して、眞黄色な花が咲きます、此方は雪柳で、花は眞白で御座いますこれが紅葉したのもチヨツト活けられますよ。此方のですか、これは座敷に活けてあつた初元結で、嫁菜の種類ですが、誠に可愛らしい花ですこと。其處の樹は檜の種類で羅漢松です、彼の軒の蔦ですか、あれは姫額です。ハイ主人が植物道樂で種々な物を植ゑましたが、大概は元の儘です、鄙

閾の垣根も、仕居の座敷なぞも少しも變えません。

尙だら〳〵と木下道を登つて、高い公孫樹を廻り古色蒼然たる芭蕉堂に導かれ、記者が手帳を開いて寫生を始めました時、老婢は火鉢を持つて登つて參りました。夫人は堂の柱に倚られ、

私は慣れて居りますが、高い處で嘸御寒いでせう。御承知の通り此堂は始終芭蕉翁が居つた處で、其後代代の宗匠が此に住つたのだ相です。彼の塚は『五月雨に隱れぬものよ瀨田の橋』とか云ふ翁の短冊を埋めたと申す事で、此松も其樣な緣起で五月雨松と申すのでせう、詳しい事は江戸名所圖繪の十二巻に出て居りますね。ハイ明治十九年に前庵主から讓り受けましたので……。

面白き御話未だ半ばにもならない折、眞下に見ゆる關口上水で、壁車に乘つた乞食が何か釣り上げたのを認められた夫人は、忙しく坂を降りて行かれました堂内の寫生終つて塚をも一見し、早稻田田甫の彼方大隈邸より折々響く鬨の聲を聽きつゝ、南手の坂を降る時、夫人は向手の土橋の上に佇んで、召使をして池へ鯉を放たしめられ、いと樂しげに眺めて居られました。此時肥料の笊を持つて記者の側に立つて居た老爺は記者に話すやう、彼の鯉は最前ヨイ長と綽名さるゝヨイヨイの乞食が上水で釣つた鯉です、奥方がそれを買ひ上げて御遣りなされたのです。日曜には屹度彼處へ來て釣りますのを、何時も奥方が憫んで買ひ上げられ、其鯉は御池へ御放しなさいます。彼樣な事が何よりの御樂みなので……。

始めて先刻の御容子が判りました。復び元の室へ戻り、名所圖繪を拜借して御暇致しましたが、目白臺へ廻る爲に御門脇の胸突坂を上る時、空車ながらに車夫の艱めるを見兼て、書生さんが後から押上げたのも、平生の仰付行屆ける故であると感じました。

跡見花蹊女史

女史は天保十一年四月九日攝州西成郡木津村に生る其先跡見弥輔より出で世々郷士なり父を重敬と云ひ女史は其次女にして名は瀧野幼にして父に學び長じて後藤松陰宮原節庵に學ぶ其繪畫の師は石垣東山と槇野對山なり明治八年跡見女學校を神田仲猿樂町に設立し同二十年小石川柳町に遷す縉紳の女流此に學ぶ者多く私立の華族女學校と謂ふも可なり

小石川白山の森遙かに、小川の流れを帶びた一構、石垣高き土手の上に疎な茨垣根あり、後に檜、樫、交譲木の高く秀で深く茂つた外廓あり。白い西洋門を入ると、右手なる杉木立の間から淡紅色の壁が隱見して、高穗の袖垣、柴の枝折戸、閑雅な茶室より漏るゝ琴曲の稽古を聽きながら、御玄關に伺ひ應接室へ導かれました。此室には石山寺の油繪と同窓會の寫眞とを揭げてあり、前庭には杉、楓、八ッ手など植ゑられて、八ッ手は丁度花盛りでした。大きな櫻樹を前にした女史の客室の屋根僅かに見え、瓢形の池は庭の中央に橫はつて、散紅葉の流るゝ狀面白く、池を隔てた奥山に二三の壯丁大弓を引いて居り、妙齡の女學生草履を穿いて此處彼處歩いて居るのを見ました。靜かな秋風は琴の音を傳へて、越後獅子の相の手、玉を轉ばす如くなるに徐ろ興に入つて時の經つのも忘れて居ましたが、お約束の午後二時になると、書生さん出で來り記者を導いて長い廻り緣を通り十四疊敷の客室へ案内しました。床の間には朱彫の香臺に唐製の香爐を据ゑ、傍の水盤に巴蘭と水仙を活け、床に隣れる違棚に錦地表裝の繪本繪卷を積み、次に鏡臺、次に銅彫番ひ鶴の置物を配列して、鴨居には小松宮彰仁親王殿下の御眞筆『和神養素』四字の扁額を恭しく揭げられてあり。此室の隅と次なる八疊の間に立てられた金屛風は、近古武裝の人物を畫いてあつて、總体の裝飾閑雅の中に莊嚴を加味し、略女史の平素を窺ひ知るに足るものでした。銀杏返しに結んで二子の綿入を着た小間使が、桐の丸火鉢と茶菓を運び去つた後、直に出で來られし女史は紬飛白の綿入れに薄鼠縮緬襦袢の襟を僅かに現はし、白裏の紫袴を穿ちて、紺色鹽瀨三つ紋付の被布を召さ

れ、濃い生際だけに白髪の僅か見ゆる御髪を堅く引詰めて茶筌に結び、黒護謨の小櫛を挿され、茫々とした眉毛、間の近からぬ眼元、豊かな兩頰に限り無き愛嬌を湛へ、締つた唇に凛烈の氣象を表はし、猪頸で幅廣な御躰格は、意志強く度胸据れる爲人を想見せしめられた、女史は絹緞の座蒲團を記者に勸め一應御挨拶の後、圓い掌を火鉢に翳されて――、

▲服裝

衣服改良案も皆樣種々御考へで、私なぞが今更申し上げる價も御座いませんが、兎に角袴だけは何卒一般に用ゐたいものだと思ひます。袴は日本舊來の服裝ではありますし、歩くに脛の露はれる醜さもなく、帶といふ胸を縛る物も要らず至極宜いですネ。此頃漸く女學生だけは殘らず用ゐ出しましたが、上流社會の奥樣方の中には、何だか生徒らしいからと、御迷惑なさる方もあるでせう。それで私は袴の上へ袷の補襠を着たら立派で宜いかと思ひます、補襠と申しても、武家の樣な大層な扮裝では御座いません。彼の能の鬘着のやうな風に拵へて、扱帶で端折つて居たら立居にも輕便でせう。地質は縮緬なり、唐織なり、裾摸樣でも總摸樣でも、それは皆樣の御好み次第、何でもこれに仕



跡見先生

立て、配合が宜いではありませんか、袷のかけなら餘り重くはありますまい。帶の世話はなし、如何にも優美で奧樣らしう御座いませう。令孃方はこれで御振袖も結構ですが、先ア袖は成るだけ短くしたいので……一体小袖と申すのは、短い袖を着るから付けた稱ですから子。昔し上方の裲襠は御承知の通り、黑、鶸、紫、白、赤の地色だけで、武家では此他に淺黃も用ゐました、私も長らく着ましたが、格別窮屈とも存じませんでした、私は元から着物は撰好みは致さぬ質ですけれども、色の配合が嚴しいので……、イクラ年容でも一体に眞黑な物ばかりでは冴えませんね。無地を着れば帶は唐織のやうな摸樣で引立たせるとか云ふ風にチヨツト取合せを宜く致したい方です。美術家は何方も其樣なものだらうと思ひます、ハイ袴は家に居る時で、外出には取つて參ります。

▲髮

私は二十年ほど束髮で、切髮には三年ほど前から致しました。若い折ですか、十三頃までは、稚子髷、それから下げ上げに致して居りました、島田も大禮の折なぞは束髮より美しう見えますし、何方が宜いかと申しても、其場合に依つて何れとも言はれません。併し此頃の束髮は大層格好が好くなりましたね、周圍がふつくらとして顏に宜くうつります。

▲白粉

これも大分八釜しい問題になりましたが、如何も禮服を、着た時、黑い顏でも下品ですね。昔の御局なぞ偶に素顏の時は見られたものぢやありません。衣裳が立派だと餘計顏の汚いのが目立ちます。唯今でも盛裝する時は、矢張り傅けた方が上品と思ひます。此頃大分白粉の傅け方が上手になつて、餘り鏝塗に致しませんね、西洋でも白粉が却々盛んで、年寄は尙更やつす樣です。これも身だしなみの一つですから。

▲座敷

洋風も却々立派ですが、何だか日本風が宜いと思ひますのは、一つは見慣れた故でせう。彼の屛風の蔭で御座いますか、彼れは筆者が未だ判りませんが、先あ容

齋風ですね。圖は二十六將と申して畢竟有名の武者を二十六人集めたものです。イエ最早書齋は一ぱい取り散らして、何方樣にも御目に懸けませんので。

▲骨　董

骨董は大好きで、殊に支那風の物が好きですが、別に大金を擲つて買入れるとは致さず、又鑑定の眼が無いのです。

▲御茶活花

生徒の先生は千家の表流ですが、私は武者小路と申す流を習ひました。この武者小路は千家の裏表を折衷した流儀で、東京では餘り致さぬやうです、併し何流でも一人の利休から出たものですからね、活花は池の坊を少し……これも私は流儀に拘泥したのは嫌ひで、天然の儘が好さで御座います。床の花は生徒が活けたのですが、私の室のは最早亂暴に自分で挿して置くのです。

▲動植物

動物には別に趣味もありませんが、家に飼つて居る犬なぞは誠に可愛いと思ひます。植物の方は何でも極好きで、自ら庭へ種々の草花を植ゑ其生長を見るのが何より樂みなのです、今年は山茶花もよう咲きましたが最早散り初めました。

話して此に至り、女史は障子を開かれたが、紅白の落花は樹下に茂れる龍鬚に散點じて宛然ヌボー式絨緞の如く、琴の音は尚斷續して茶室より聽えました御話は音樂に轉じて、

▲音　樂

雅俗とも嫌ひはありません。生徒には山田の師匠を迎へて居りますが、私は一向琴を習ひませんので、一絃琴や二絃琴を少し致します。一絃琴は京都でよく流行つたもので却々好い音が出ますね、彼れは須磨琴と申して、行平が須磨へ流された時、舟板で臺を作り、絃には冠の纓を用ゐたと云ふ言傳へですが、四季の曲、松風の曲などは上品なものです。二絃琴は八雲琴とも申しますが、京都の大岸元琴が名人で御坐います。私は猿樂町に居りました頃、笙を少しばかり歌局の伶人

に習ひましたが、六ヶかしうて、よう吹きません。聴くことなら、長唄でも義太夫でも何でも好きで、随分感じの深い方です。

▲演劇

歌舞伎も團十郎と菊五郎が亡くなつて惜しい事ですね私もよい時に勸進帳が觀て置きました。勸進帳は丁度四回ほども觀たのですが幾度でも飽きません。ハイ富樫は左團次でした、最早彼様な揃つた所作は見られませんネ。新演劇も面白いゐので、却々眞に迫る技がありますから、舊劇のやうにチョボで涙を搾り出させる事を致さず、自分達の腕前だけで充分に感じを與へるのですから却々骨が折れませう、先あ兩方を較べて譬へて見れば、狩野の畫と油畫との相違ぐらゐでせうかハヽヽヽ

女史は談話の段落々々に善く笑はれ、如何にも豁達な世馴れた御方と見受けられました。

▲能楽謡曲

京都に居りました頃は、お能ばかり見物しましたので芝居見物は東京へ參つてからです。能は芝居より一層好きで、觀世へは度々參ります。跡見が衣服改良案に鬘着を考へ出したのは能を好いて觀る故だなどゝ定めて皆様が御笑ひになるでせうハヽヽヽ。俊寛ですか、彼れは免許物でよい曲です。「砧」と云ふのが一番高尚ですね、御承知でせうが、蘇武が匈奴に捕虜となつた時、妻が哀んで砧を打つ音を夫に聴かせると云ふ情の深い謡で、謡曲を聴いても能を觀ても自然寂と致すやうに感じます。一體謡曲には總て佛教の意味を含んで居ります、無關係なのは唯一つ「高砂」ばかりですね。

▲信仰

私は毎朝運動から歸ると、兩陛下を拜し先祖を淸め、それから生徒達一同の爲に健康を祈ります。これだけ多勢の生徒が何卒怪我のないやうにと熱心に願ふので唯今まで一日も缺したとは御坐いません。ハイ私のは別に何宗と申すのでもなく佛法の大本なる彌陀、釋迦に向つて禮拜祈願致すのです、眞宗とか淨土とか、宗

旨の名目は種々でも、基く所は彌陀釋迦ですからね。信仰の爲に何時も活々として、日々光明の中に浴して居るので御坐います。殺生は大嫌ひで、昔から蚤でも蚊でもチヨツト拂つて逃して居ります。

▲旅行

暇がないので、當節は餘り致しませんが、旅行は極好きで御坐います。寫生しながら風景を愛するのも限りなく樂しいのですが、これと同時に功德をも感じますね日光山や高尾山の紅葉した處など觀ると、實に妙力の限りの無いのに感心致します。

▲運動

斯樣に肥つて居ますから極健脚と云ふではありませんがそれでも、毎朝缺かさず近邊へ運動に出掛けます。大抵五時に起きて、白山田甫の方から御茶の水など方々歩いて參りますが、凡そ一時間位ですから先ァ一里程でせうか、六時には造兵廠へ出る人達が澤山通りますから、雜鬧しない中に歸るので……、氷川田甫の日の出など實に愉快です。寫生を致すとも御坐います。

イエ雨が降つても缺かしません、朝の雨に模糊とした景も却々趣味がありますね。此運動は身躰に餘程よいと見えて、病患はトント致しません。

▲花見

花の頃は毎日々々諸方へ見に參りますが、四時から出掛けて七時に戻るので少しも授業の障りになりません向島などへ舟で參ると、丁度八百松の邊で夜が白む位ですが、早天の花の色は又何とも言はれませんナ。生徒を連れる時もあり、家族と參る事もあります。向島の他上野、飛鳥山、何處の花も殘らず見に參るので……、ハイ紅葉見にも行きますが、王子など餘り平凡ですね。

女史の行樂は老て益々壯なるもので、一方繪畵の材料を富まし、他方身体の健康を保つこと、實に効益多大なるを認め得られます。此時まで奥庭なる杉木立の陰で大弓の矢聲がして居ました。

▲武術

若い折に長刀と長脇を稽古致しましたが、唯今では餘

り長脇を致す人がない樣ですネ。彼れは畢竟刀の欛の長い槍の鉾の長い物で、總体の丈は槍より少し短う御坐います、ハイ拂ふのでなく切り落すのです彼處の大弓ですか、私の弟や甥が致して居るのです。

▲新聞小說

新聞は日本、讀賣これだけで、生徒達には少しも見せません、雜誌は生徒にも讀ませるので、種々參ります、婦人界、女學世界、家庭之友など……。小說類は一切入れぬ事に致してあります、私は昔から小說嫌ひと云ふでは無く、隨分當今のも見ますが、小說と云ふものは、讀み始めると半分では置けません、一時に殘らず讀みたくなつて時間を費すと非常ですから、成るべく讀まぬのです、



談話中の跡見先生

▲愛讀の書

經書類は何でも好きですが、中にも詩經など最も愛讀します、儒道も其極に達すれば、佛道と同じやうに感じます。それから傳記言行錄などが好きで、……苦心談と云ふやうな文には一層力が入ります。夜分は必ず佛書を讀むので、種々ですけれど、主に撰擇集など……

▲詩　歌

詩は大阪で後藤松陰、京都で宮原潛叟（節庵）に學びました。御承知の通り二人とも山陽の門人です。詩も和歌も極好きですが、和

歌はホンの我流で一向お耻かしいのです。古歌を見るのは面白いもので、戀歌にも却々佳いのがありますネ戀歌と申すと何だか只男女の戀愛のやうに聞えますが萬物に對する愛をも含んで居るので高尙なものですよ俳句は致しませんが、他人の作は始終見て樂んで居ります。

▲生徒は我子

私の一番の樂みと申せば、生徒達の進歩發達を見るとです。丁度蘭の芽が出るやうに日々に膨んで行く樣を樂んで居るので……生徒は皆眞實の我子と思ふて育てて居ります。却々如何して我子と思はなければ、愛情は貫徹致しません。

最も力を入れて話されし女史は、熱誠面に溢れ、兩手に火箸を強く握りつめて居られました。

▲話を聽くこと

何樣な事でも人の話を聽くのが好きです。くだらぬ女の繰言など聽くのは大嫌ひだと言ふ方がありますが、私はくだらぬ繰言でも何でも一向搆ひません、熟々聽いて居るうちに何か彼か益を得ることがありますよ。又たとひ役者でも義太夫語でも落語家でも、一藝に達した者の經歷には屹度感心な事實があるもので、我身の鑑になる價値があるものです。それですから家へ出入する大工や左官の頭領でも、捉へて各々の立志經歷談を聽きます。又一藝に達しない平凡の人でも、實際の身の上話を聽くと大層心の修養になりますネ、中にも苦心談は喜んで耳を傾けるので御坐います。

▲女史生涯の悲痛

私は從來餘り富貴にも過しませぬが、又酷い艱苦にも遭ひませず、誠に平坦に經過して參つたのです。左樣ですネ、非常に悲んだ事は唯一度御坐いました……、イエ親は長命で世を去りましたから、一通りの落膽だけでしたが、先ア姉小路の遭難の際ほど悲んだ事は御坐いません、御承知でも御坐いませうが、姉小路が京都の御所へ參る時猿ヶ辻で切害されました。其時は實に如何も……

女史は悲愴の感に堪へず、聲を顫はされた、

今迄の生涯中あれほど痛く歎いた事はないのです。

▲食物

何でも嫌ひはありません。皆様と御一緒なら洋食も頂きます。御酒も飲まぬ癖に、海鼠や雲丹なども好きです、平生は極粗食で、生徒や召使と同じ物を食て居ります、粗食でも身体は至つて壯健で、滅多に患らつた事は御坐いません、唯一度リヨウマチスを患つたばかりで……。イエ若くはありません、白髪染も致さず、搆はずに置きますから……、良人を御持になつた方でも、棚橋さんや三輪田さんの御若いこと……彼の三輪田さんは御靜かな方ですネ、私など今でも生徒と一緒に騷ぐ方ですよハヽヽヽヽ

▲針仕事

私の母は八釜しい人でしたが、女子は裁縫が肝心だと申して嚴しく仕込みました。好きでもあり、以前は隨分致しましたが、漸々他の事が忙しくなつて、針仕事の暇が無くなりました。

▲書畫の依頼物

毎日二時に授業を終つてから、夕刻まで依頼物を認めるのです、夜分は一切出來ません、短日の此頃はホンの僅かの間なのです。日曜には大槪出掛ける用事がありますし、他の日も筆を持たぬ日がありますから、後から〳〵溜つて年中絹地の保存方に苦勞して居ります一体書畫を認めて居る間は何事も忘れて愉快なものですが、日限を急かれる物は厭ですネ、ハヽヽヽヽ。

女史が少しも否まるゝ容子なく、後から〳〵興味湧くが如き雅談を續けられたので、ツイ浮か〳〵と長坐を致しました。お暇乞して御椽側に立ち出で、斜陽に映つて一層赤味を増した南天を眺めつゝ御玄關へ退りましたが、茶室には尙琴の音が續けられて居りました。

次號には

岩倉公爵夫人

近衛公爵夫人

新年御慶 (意匠競進會出品)



帝國百科全書

全部二百卷

一百卷既刊
續刊一百卷

續刊發行の趣旨

帝國百科全書壹百卷、豫期の如く完成せり。是れ我が帝國出版界に於ては實に空前の大事業なりき。嘗に卷帙の浩瀚なるが爲めにあらず其の內容に於ても然りとす。全編の著者は盡く當代第一流の博士、述作する所皆專門の科目、政治、經濟、法律、文學、理學、工學、農學、林學に亘り、方今世界に於ける思想界と物質界とに於ける總ての最も進步發達せる理論と事實とを網羅す。大英國百科全書が世界に於て萬種の事物を最も完全に網羅せる圖書とせば、帝國百科全書は少くも日本帝國の「エンサイクロペヂャ」なりと斷言するも誣へざるなり。而かも彼れは全部の價貳百圓許にして此れは全部壹百卷の價僅に貳拾八圓のみ。蓋し卷帙の浩瀚と內容の精選と、各學科の具備とに加へて其代價の比較的低廉なることに於て、古今無比なるべし。宜なり本書が嘖々たる世上の好評を博し每卷皆數版乃至十數版を重ぬることや。今や豫定の壹百卷を完成せりと雖、社會の進步は更に各學科の微細に入り、分類に加ふるに分類を以てし豫定の科目を以て社會の全事物を盡せりと言ふ能はさるに至りぬ。況や前に諸名流に囑托せる學科にして、其稿未だ成らず、既刊百卷の中に收むる能はざりしもの又少なきにあらず。此に於てか更に進んで新に壹百卷を增刊し、尨大全部貳百卷以て能く二十世紀に於ける、宇宙間の森羅萬象は盡く網羅して遺憾なからんことを期す。是れ恰も大英國百科大全書が最近に第十版を追加したると同しきなり。幸に既刊本書を愛讀せられたる方諸彥は更に今後增刊の本書をも併せ藏して、完全なる眞價を賞鑑し給はんこと切に祈る所なり

第百

水產講習所技師兼教授 農學士塚本道遠君
農學士井上正賀君合著

水產學

全壹冊 洋裝

●上製 正價五拾五錢 郵稅拾五錢

●並製 正價四拾八錢 郵稅八錢

目

總論

第一章●海の獸類
第二章●龜類
第三章●魚類
第四章●諸種海產動物類
第五章●海產植物總說
第六章●海藻の種類
第七章●漁撈法
第八章●水產養殖法

發兌元 東京日本橋

(巳の二)

科全書

全部定價改正廣告

貳編

次 第九章●水産食品製造 第十章●水産肥料製造 第十一章●水産工用品製造 第十二章●水産藥用品製造 第十三章●製塩法 以上

自然は我邦人に海の利用を自在ならしめ海は吾等に食料肥料其他有用なる物品を供給し來りしかば水産業は既に以前より吾邦識者の着眼する所となりて其發達を促すの方法も亦講せられざるにあらざりしも之が學理を究め其應用を全からしめんと勉むるに至りしは近頃の事に屬す近來我邦人口の繁殖と共に海産物の需用頻りに増加し加ふるに海産物は重要なる海外輸出品の一となりて時勢は大に斯業の發達を促して止まざらんとするなり而して何れの業にても之を改良發達せしむるには學理を巧みに實地に應用せざるべからざるは言はずして明かなるか如く水産業の發達も亦之れが學理普及と其を實地に應用するとに由るや勿論なれども我邦未だ斯種に關するの著書多からず隨て之れが研究に思ひを潜むるの士が造詣の道途を辿に苦しむは一般識者の夙に慨嘆する所なり然るに塚本井上兩農學士今回振て其蘊蓄を傾けて本書を編まる其斯學研究者に多大の便益資料を供せらるゝのみならず當業者亦此書に就て講究せば其稗益や蓋し鮮少ならざるなり

定價改正の事由

帝國百科全書は卅一年一月第一編を刊行せし以來茲に六星霜を經所期の壹百卷を完成致し候得共前陳の理由に依り更に進んで尚壹百卷を續刊し全部貳百卷となし宇宙百般の事物を網羅して前古未曾有の大成を期し申候

本書の發行は廣く世の稗益に供するの目的に相起り候へば從來無比の低廉なる價格（並製參拾五錢特製五拾錢）を以て需用に應し候得共物價騰貴の一方に傾き之を六年前の創刊當時に比すれば紙價其他の工費非常に相嵩み一兩年來不尠缺損を生し尚依然現價維持致し候事到底堪へ難き狀態と相成り候につき不得止卅七年一月一日より左記の如く定價改正致候此段謹告仕候也

追て既刊百籍迄は三十七年一月中を猶豫期間とし同期間の御註文に限り從來の價格を以て○特に御註文に應し可申候

改正定價

並製 一冊金四拾錢●十冊金參圓七拾錢●廿五冊八圓八拾錢●五十冊拾七圓●百冊參拾參圓●全部二百冊六拾五圓●郵稅一冊八錢……

特製 一冊金五拾五錢●十冊五圓●二十五冊拾貳圓●五十冊貳拾參圓●百冊四拾五圓●全部二百冊八拾八圓●郵稅一冊金拾錢……

續刊

●進化論……十時文學士

●議院法論……工藤法學士

●日本教育制度……玉木文學士

●地震學……大森理學博士

●害虫論……佐々木理學博士

●人類學……坪井理學博士

（巳の三）

本町三丁目 博文館

中學世界

毎月一回　明治卅七年の新計畫　十日發行

文學士大町桂月君主筆

本誌は從來と體裁を全く一變するものあり卷頭に於ける桂月氏の評論愈警拔痛切を極め修養欄は大に擴張して各方面に於ける名流訪問記を収めて大に志氣を鼓舞し又時に名流を招きて講話會を開き其筆記を収め從來の史傳地理、國語漢文、理化、軍事、數學、運動遊戲、文藝雜爼の諸項は凡べて一欄の下に混載し從來登載し來りたる種目以外にも猶万般の事に關する資料を収めて、愈々趣味を多種ならしめ、英獨語學の一欄は別に卷末より起して文字を橫組とし從來の如く卷を横にして讀むの不便なからしめ、對譯解義文法等専ら中學程度必須の材を選ぶ、青年文壇は大に擴張し選評は凡て桂月氏擔任し懇切なる删正を加ふる事とす

(第壹號目次概要)

新年の本誌は上記の方針に據りて殊に材料の豐富と趣味の清新を期する上に別に約六十頁の新年大附錄を附し之には現時我國の軍人界七傑の傳記を諸名流に依囑して寄稿を請ふ、されば新年初刊は多趣多益の記事充滿せる約三百頁の大冊なり

正價一冊金廿錢●四冊(三ヶ月分)七十五錢●八冊(六ヶ月分)壹圓四十五錢●十六冊(一ヶ年分)二圓八十錢●郵税一冊二錢ツヽ

東京日本橋區本町三丁目　發兌元　博文館

(三の七)

（七の八）



新所帶

武田閑子

題して新所帶と云ふ名からして既に俗である平民的であります。決して王侯貴人の若樣と姫樣との結合體を名づけたものではありません。王侯貴人には此の新所帶と云ふ樣な。趣味ある。景氣ある。希望ある活問題は起り來りますまい。成程理窟ぽく言へば。王侯貴人も。裏店小屋も。大小貴賤の區別こそあれ。所帶は即ち所帶である。其も一應尤もなれども。未だ嘗て公爵某が所帶を持つたの。華族某が所帶を疊んだのと云ふことを。新聞にも話にも聞たことがない。我々下賤より見る時は僻眼かは知らぬが。幾十萬の世襲財産を所有なさる華族方の御暮し向きは。如何にも無趣味であると思はれます。一寸考へると。平生高層なる御殿に住はせられ。多くの下女下男に侍かれ。錦衣玉食意の儘。サアお出ましとなると。廣い道を狹そうに馬車を軋らせ。言はゞ此世の榮耀榮華を極め盡し。毛ほどの不平不滿も無さそうであるから。下層に在つて夏は炎天に背を曝らし。冬は寒空に霜を踏んで稼ぐ者と較べると如何にも天地間の幸福を獨占したるかの如く思はれますが。決して然らずです。足るか足らぬの所帶を辛苦經營する所に。言はれぬ一種の樂みがあるのです貧くして樂むは富で驕るよりも高尚であります。

孔夫子も疏食を食ひ水を飲み肱を曲げて之を枕とす樂亦其の中に在りとも仰せられたし、西洋の賢人も辛苦に遇はざるは人の不幸だとも言はれました。其證據には古今の英雄豪傑賢人君子は微賤より起る者が多い。而して大名華族等の御家には餘り發明なお方が現はれません。有つて知れぬのか。無くて見へぬのか。兎に角甚だ少ないには違ゐない。其の點から見ると恐れ多いことではあるが。爵を賜はりて貴い身分となるも後世子孫の爲めには幸か不幸か何れとも判別が出來ません。去りとて下さる者は辭退申す譯にも行くまいが。之を戴かんとして。種々工夫を運らすといふに至つては實に笑止の極み。抱腹の至りではありませんか。御覽なさい。維新の時の功勞によりて華族に列せられた方々の子孫は如何でありませうか。其父親には似ざる柔弱なる人物が多いではありませんか。たまさか氣骨のある御人物があれば却て己の位地を厄介にして居る樣子であります。

マア斯んな理窟は扨置て。抑々新所帶の始りはといへば。若い男女が或る場合に於て知己となり。意氣相投じて朋友となり。相愛し相信じて終に夫婦となり。そこで新所帶が組立てられるのであります。戀ぞ積りて淵となつたのであります。之が誠の順序である。本筋であります。併し之は西洋風の遣り口所が日本風となると。花嫁候補者が恥かしそうに一杯の茶を酌出す。其の瞬間に相互の一瞥見。之で生涯の安危を決するのですから。實に冒險極まる次第と思ひますのが。其の割合には釣合の良い伉儷の出來るのが不思議です。中には思ひ切つた人は。妻の撰擇を他人に委ぬるのがありますが。如何に見ずして信ずる者は幸なりとはいへ其では餘り亂暴過ぎます。私は所帶はドウモ夫婦掛向いに限ると思ふ。全體日本の家族制では。兎角舅姑が威權を弄して壓制を極め。嫁となりたる者は夫に從ひ舅姑に事へるといふのでありますから。一人で二重の奉公を爲る樣な者。誠に割の惡るい話であります。先づ何れも樣の御家庭を拜見しましても。嫁を貰ふて凡そ三日位は近所合壁へ稱め廻りますが。段々日數を經

ると。習慣の相違。互の疑惑。新舊自然の衝突で。浪風の起ぬ所は十中の二三とは無さそうに思はれます。其所になると西洋では旨い趣向に出來て居ます。嫁いびり姑いじめなど申すいまわしきことが無い樣です我邦にも澤山の西洋人が參つて居りますが。舅姑が威權を振舞はして居る所などは頓と無いかと存じます。新所帶は經驗の無き青年男女が。社會の戰場へ飛出したる初陣であります。成敗利鈍は分らぬのである。一寸先きは闇の夜の如くである。何んな亂暴人に鼻を摘まれるかも知れぬのである。故に婚禮するのは目出度いやら恐ろしいやらである。此の出立點に立たる男女は立派な覺悟が無ければなりますまい。勿論取換したるリングは完き愛を互に捧ぐる證據である。既に夫婦と云ふ。即ち一體である。夫は妻の半身である。妻は夫の半身である。此の一致の力と意氣とを以て。千難萬苦をも忍ぶべし。榮枯得喪も意とせざるべし。是に於てか初めて面白き生涯となるのであります偖斯の如き大決心大覺悟を以て二人揃ふて社會へ出たならば。

何事を爲しても成功すべき筈なれども。時に或は失敗に歸することのあるのは。取りも直さず經驗に乏しいからのことであります。何んな利發な娘でも。所帶持ちの經驗が無ければ。家政上失敗又は失策のあるのは當然のこと決して不思議なことではない。尙ほ考へて見ると此の失策は將來大なる家政を取扱ふ所の良き練習を重ねるのでありますし。又所帶持初めの失策失敗は餘程愛嬌のある滑稽伎であります。今三十乃至四十恰好の妻君方に新所帶の經驗話を聞て御覽なされば。隨分面白い腹を抱へる樣な失策談が澤山ムいます。誰も一度は通る道でムいます。大工の吉五郎が左官の娘と夫婦になり。九尺二間の棟割長屋に巢を作る。之も新所帶であります。久しく判事試補であつた某法學士は此度判事に昇進し。某局長の娘を貰ふて番町邊に門構五室賃十五圓といふ邸宅を構へるのも矢張り新所帶である。中には暮の三十一日と云ふ最も急がしい日に女房を迎へ。家を借りる。世帶道具を買ひ集める。餅を搗く。〆を飾る。丸で一年中の用事を一邊に濟す

が如くであるか。其でも一夜明ければお目出度いのである。之を名けて引越し女房と云ふ。何れも皆な其々思ひ〳〵の理想ある小天地を作つて居るのである。其でこそ面白いのである。だが。一番面白味もある苦味もある苦樂相半すといふのは。此の中等民族の家庭であります。之等の家の妻女たる者は。收支の計算。衣服飲食の調度。夫の友人出入の者の取扱ひ。偖ては親類緣者の交誼等に至るまで。能く〳〵チヤンと整へて行かねばなりません。所が慣れぬ中はつまらぬ人を叮寧に待らひて。大切な客を粗末にしたり。無闇に不必要な物を買込んで。サア入用の品を求めんと云ふ時はモー金が無いとか。又三度の食事等に付ても往々遣り害ひのあるもので。粥の樣な飯を炊いたかと思ふと。今度は骨のある飯を作



り出す。菜の如きも。非常に甘い時あり矢鱈に鹹き時あり。吸物之は結構なりと賞められると。四日も五日も之を續けて遂に夫をして鼻を着けるも厭やと思はしむ。殊に來客あり。花嫁の手料理の馳走と云ふ段になつては。其こそ一大事件であります。何せよ。嘗て某學校にて習得せし割烹法を骨子となし近頃出版となりたる和洋料理案内を參考としての和



洋折衷手重料理でありますから。其の並べ出されたる品々はトチモ俗眼には見分けが附かず。凡舌には味ひ難いのであります。有體に言へば骨折つた程に。金の掛つた割合に旨く喰べられぬのであります。其はまだしものことゝして。一番困る事は。來客の時、其の饗應に付て。何か夫婦の間に衝突を起こすのでありますが。初めは密々、後には囂々、終には客

の耳に入る。客も迷惑。我れ來ればこそ此の悶着。行くに行かれず。居るに居られず。進退維谷つて。アヽモー此の家の馳走は眞平御免といふ事になる。結局友人との交際を疎くする基となる。能く〳〵氣を附けべき儀でムいます。マア何をしても初めから失敗の無いものはありませんから。何でも構はず臆せず遣るべしです。只新家庭。將來スウヰートホームを作らんとする此の新家庭を騒がすのは。年寄の跋扈であります老人が主權を握り翼を家内に伸して居る所に靜謐と云ふことは見られなかつたのであります。ツマリ老若一居が間違ひです。之では樂んで婚禮した甲斐が無い。たとへ姑は鬼でも蛇でもと云つて來てもイザ實物に當つて見るとそうは行きません。又年寄の側から考ても。若い時分に働くのは老後を安楽に送らんがためである其を厭やがる家に好かぬ嫁と一所に居て。餘命を喧嘩で送るのも。何と馬鹿々々しい事ではムいませんか。之は日本でも追々西洋に倣いまして。倅が嫁を貰つたら。自分等は別居する。こうすれば家内揉めも無くなるに相違ありません。之は餘り女の口から出たとしては。チト過激で。お氣に障る方もありませうが。何千年の昔から今日に至るまで。猫も喰べまじき此の極り切つたる嫁姑の爭を今倘ほ續けて。何れの家庭も持餘して居るではありませんか。私は之が誠に齒痒く思はれます。私共は頼まれても御免を蒙るのでムいます私は勢力の續く丈け働いて。年老つて後は心廣く躰胖かに月日を送りたい。トテモ聟や嫁を相手に喧嘩口論をして居ることは出來ません。近來公私多忙筆を執るの暇なし。故に考へも纏まらず。行文澁滯して自分さへも讀むに苦しむ位のこと。所詮新年の仲間入りは六ケ敷き事と觀念致して居ります。(完)

警戒

▲男子の噂をなすれば輙ち其人の貧富を聯想し、婦人の噂をなすれば直ちに其の美醜を聯想するは、今の世の人の常なり、殊に今の所謂る紳士なる者の常態なり

▲彼等は人と交はらず富と交はらんとするなり、美貌に近づかんとするなり。故に一歩を進めて云はゞ、彼等の男子と親しむは、富を奪はんが爲めなり、金を偸まんが爲なり、彼等の婦人に近づくは、其美を弄んが爲めなり、其操を汚さんが爲めなり。

家庭科學

理科應用 家政二十四時

河　西　璞

▲朝飯

奇麗に御掃除の出來た御座敷に、山茶花でも活け、梅に松福壽草の盆栽でも飾つて、見るから心地よい前で御茶が濟み、御膳が出て、家內睦しう朝の御飯になる。人生の幸福はこれでせう。

▲食事の目的

食事の目的など〻、三つや四つの子供ではあるまいし、馬鹿々々しい題目と御笑ひになりませうが、世間にはこんな分り切つた題目さへ正しく解釋して實行し得ない者が少くないから、猶馬鹿々々しいではありませぬか。食事の目的は一言で言へば生活を樂む爲で、これを分けて言へば、第一、生きて居る爲、第二、樂みの爲、かう二つになります。ですから上等の食事と言へば、第一に身體の養ひになるもので、第二に口に美味く、眼鼻に樂しく、成るたけ氣の痛まぬものでなければなりませぬ。然るに御覽なさい世間の食事はよく此法則に合つて居ますか。人間一日の營養としては、生長した大人の婦人なら、先づ肉のやうな蛋白質が十六匁、脂肪が十四匁、澱粉や砂糖類のやうな炭水化物が百二十匁、それに水といふ割合で、生長盛りの若者なら、蛋白質三十六匁、脂肪三十一匁、炭水化物百六十匁といふ割合で適當であるのに、これに合ふやうに献立せやうと心懸ける者は極僅かで、甚しきは、米と香の物だけから此丈の滋養を取らうとするが爲、一日に御飯の七八合も食べて、無益に胃腸を苦め、澱粉の大部分を素通りさせてしまふものもあり、三度々々肉づくめの贅澤な食事を澤山やつて、それで何もせずにのらりくらり遊んで居る者共も隨分見受けます。目的の第二と第一の間違つて居る結果は、食べられもせぬ程の御飾り料理を山の樣に客に供へ、牛肉なら三四斤も

も買へる程の、しかも身を切られるやうな錢を百目の初松蕈に代へて隣人に誇り、甚しきは刺身の添への海草を美しく丹礬で染めて、食べる者の銅中毒などは顧みない、顧みないではない、毒になるかならぬかさへ調べやうともせない。米は必かう養て食ふべきもの、飯は必三度食ふべきものと、一々舊習を墨守して居れば、炊事法の改良も、小兒に適當の體育も望まれず、饑えさせては勿體ないとて、殘つた御飯を無理に食べ、淋しくなつてから、客が見えたからとて、日に幾度となく茶を呑み、茶受を摘んで、自分も食ひ、子供にもやれば、いかな胃腸でも疲れて病ますには終らない。と



いふやうな譯ですから、此分り切つた食事の目的といふ題目の解釋と、正しい實行とは餘程重く考ふべき問題で、御馳走が無ければ祭日も祝日も無いと考へて居る大間違の恥づべき我風俗は、御互出來る限り改良して行きたいものでございます。今日お正月の御餅と間食の機會が至る所私共の胃腸をねらつて居る後ろには、胃活の看板が善哉々々とニコ〳〵して居るではありませぬか。

▲食品の種類

飲食物を大別して、動物質植物質の二つにすることが出來ます。動物質の成分は重に蛋白質と脂肪で、植物質の成分は夫等と澱粉糖類のやうな炭水化物でございます。さ

て人間の身體には、前申した通り、以上三種の成分の適當の分量が入用ですから、食物にも夫相當の動物質と植物質とを混せて取るべきで、動物質の乳、卵、獸鳥魚貝の肉、植物質の米、麥、野菜、菓物の取合せこれが、至つて大切な主婦の任務でございます。肉類の内一番滋養の多いのは牛肉で、特に消化のよいのは犢の肉です。魚の肉は一番輕くて熱の出方が少く、鳥の肉は一般に消化のよいものです。同じ魚の肉でも鯔、鰻、鮭、鱒、鰤、鮎は滋養の多い方で、卵は一個の滋養分が牛肉十匁、牛乳八九勺に相當します。

朝飯の料として日本人の取る蛋白質は重に豆類、即味噌、豆腐、煮豆のやうな豆類の植物蛋白質と、動物質蛋白と脂肪に富んで居る卵で、近頃は牛乳が大分行はれて參りました。植物蛋白は胃腸の弱い人には少々消化が惡うございますが、牛乳は極消化のよい飲料で、蛋白質と脂肪に富み、此脂肪が又消化れよいものでございます。いかさま屋の牛乳ですと、事によると其中から脂肪を取つてバタの料に賣つて、其殘滓の脫脂乳といふのを賣り付けます。そういふ牛乳は色が青味がゝつて、あの美しい白色がありませぬし、放置しても脂肪の皮が浮きませぬから直ぐに分ります。御注意になるが宜しい。

穀類の中、先づ白米について言へば、百目の中に蛋白質七匁、脂肪三分目、纖維及灰分一匁、水二十匁、澱粉などが七十三匁といふ割に入つて居ます。パンの原料の小麥は、玄麥なら百目の中に十匁から十六匁の蛋白質があつて、白米より滋養に富んで居ますが、此蛋白質は皮に近い部分に多くありますから　十分に舂けば大部分落ちてしまひます。麩は即ち麥粉から取る此蛋白質を燒いて膨ませたものでございます。パンは消化のよい食物ですが、燒きたては比較的不消化ですから、成るべくは少し古いのが宜しい。

野菜類は、特に夏時や、肥えて血の多い人には必要の食物です。然し硬いものは酸敗を來す恐れがありますから、加減が大事です。野菜の中、馬鈴薯は多數西洋人の主食と言つても宜しい程の結構な澱粉質食物です

のに、我國未だ之を以て米に代用して居るといふ者を聞かぬのは、例の馬鹿正直の守舊心からでございませう。何故苦しい思ひをしながらも、一升十何錢、時に二十錢からの米といふ草の實を三度々々食べねばならないのでせうか。

菓物もよく熟した物は、野菜同樣體熱を鎭め、水分を補ひますから、肥えた人、血の多い人には、無くて叶はぬ大切の食物でございます。特に消化を助け、血を淸め、心を淸々しくし、病氣を去る効能は意想外で、病氣が流行るから菓物を禁ずるなどといふのは、意味の無い馬鹿の話でございます。分量と時を誤れば何でも身體に障ります。蛋白質、脂肪、炭水化物、此三つの外、分量は僅少ながら、人の身體に必要な成分が今一種ございます。卽ち一般に鹽類と



(イ)

いふ無機物で、これの重な成分には、石灰、鐵、カリ、ソーダ、マグチシユーム、などの炭酸化合物、燐酸化合物、鹽化物など色々あつて、骨は勿論、血、肉、内臟、一切の組織はこれがあつて始めて出來上ることになつて居ます。けれど自然の經濟は甘く仕組んである、燒けば灰となつて殘る所の無機成分は、故らに取らずとも、自然日々の飮食物の中に入つて居ますが、場合によつては、其あるものを特別に取る必要がありませう。例へば貧血と見れば血の成分に必要な鐵劑を飮ませねばなりますまいし、腦を使ふ人、多く腦を使ふ時には、燐質に富んで居る肉類を多く取らねばならぬ。

一般に植物質を多く取る動物は食鹽を欲しがります。食鹽は胃液の成分の鹽酸を造る原料になる外、身體組

織の必要成分として働くから、大切の物であるが、普通の水や食物の中に、少量の食塩分は含まれて居るから、私共が日々料理に使ふあれ程の食塩量は、習慣から來た嗜好品と見る外、適當の解釋は出來ないやうに思へます。が、或はこれがある學者の言つて居る通り、食物、特に蛋白質の消化と組織の新陳代謝とを助け、血を若くするといふやうな特効があるのかも知れませぬ。

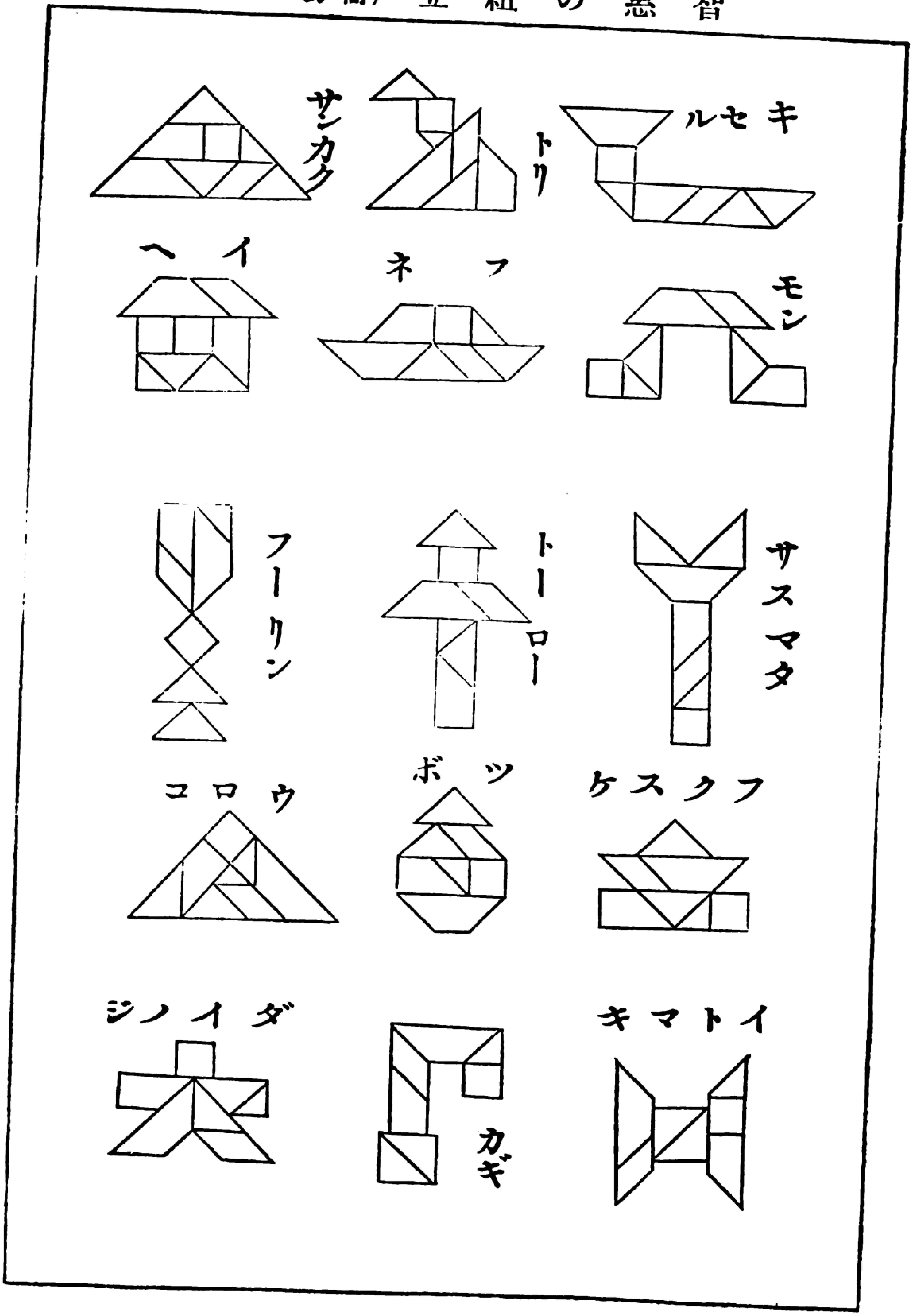
▲藥味香料

昔も今も、文明人も野蠻人も、種類こそ異なれ、必ず何か藥味香料を飲食物に加味して居ります。私共の日常用ひて居る種類を擧げて見ますならば、胡椒、山椒、芥子、蕃椒、生姜、山葵、芹、獨活、葱、蒜、韮、大根、柚、陳皮、蓼の薹、薄荷。西洋料理に普通のものは、胡椒、蕃椒、レモン、芥子、肉豆蔻、タイム、サルヒア、マルジヨラム、丁子、肉豆蔻花、オールスピーヒス、セヴオリー、巴旦杏、ヴアニラ、肉桂、薄荷、アンコペー、薑、葱、蒜、ケーパなどでございます。總じて此藥味といふものは、匂に味に刺激興奮の性質を備へて居ますから、よき程に用ふるならば、貧血の人、粘液質の人などには頗る効目があつて、食物の消化を助け、血の循環をよくしますが、勿論分量によることで、過分の嗜食は過分の熱を起して、其あとは疲れ、神經は一時興奮つて鈍くなり、元氣が衰へ、早老し、病氣に負けるやうな身體になる虞れがありますから、家婦に取つては、之に對する心得は極て大切で、用ふるとしても成るべく少量、子供衆や、産褥婦、姙婦、月經中、其他異狀にある者には、酒煙草同様、絶對的に無用といふ方針になさらねばなりませぬ。此說に反對する者に對しては、私は只一言、「無垢にして氣銳なる小兒は此種の興奮刺激劑を嗜好するか」の問を以て全勝を期して居るのでございます。

▲次號には

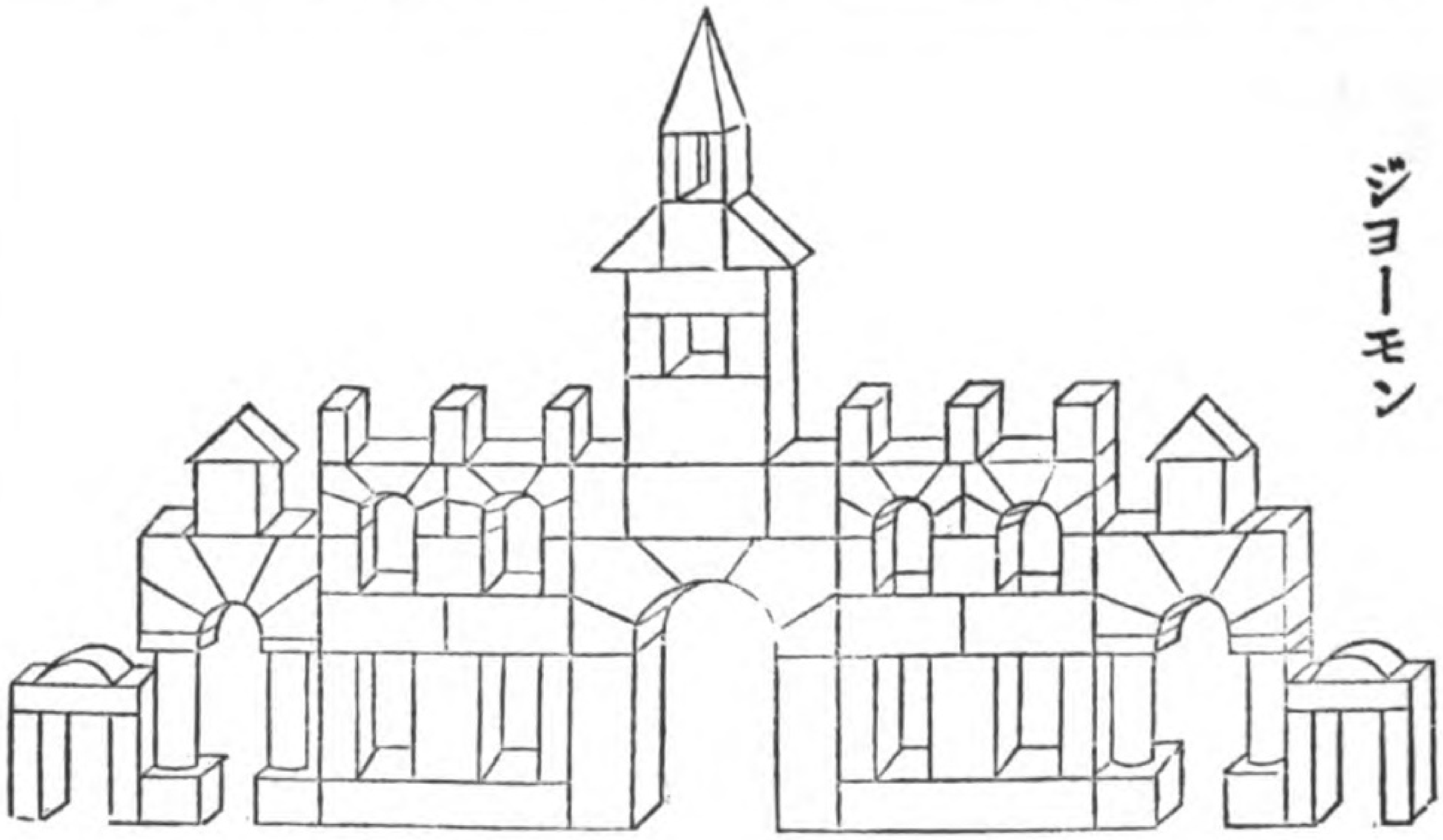
男女の配偶　　水原翠香

智恵の組立（簡易の工）



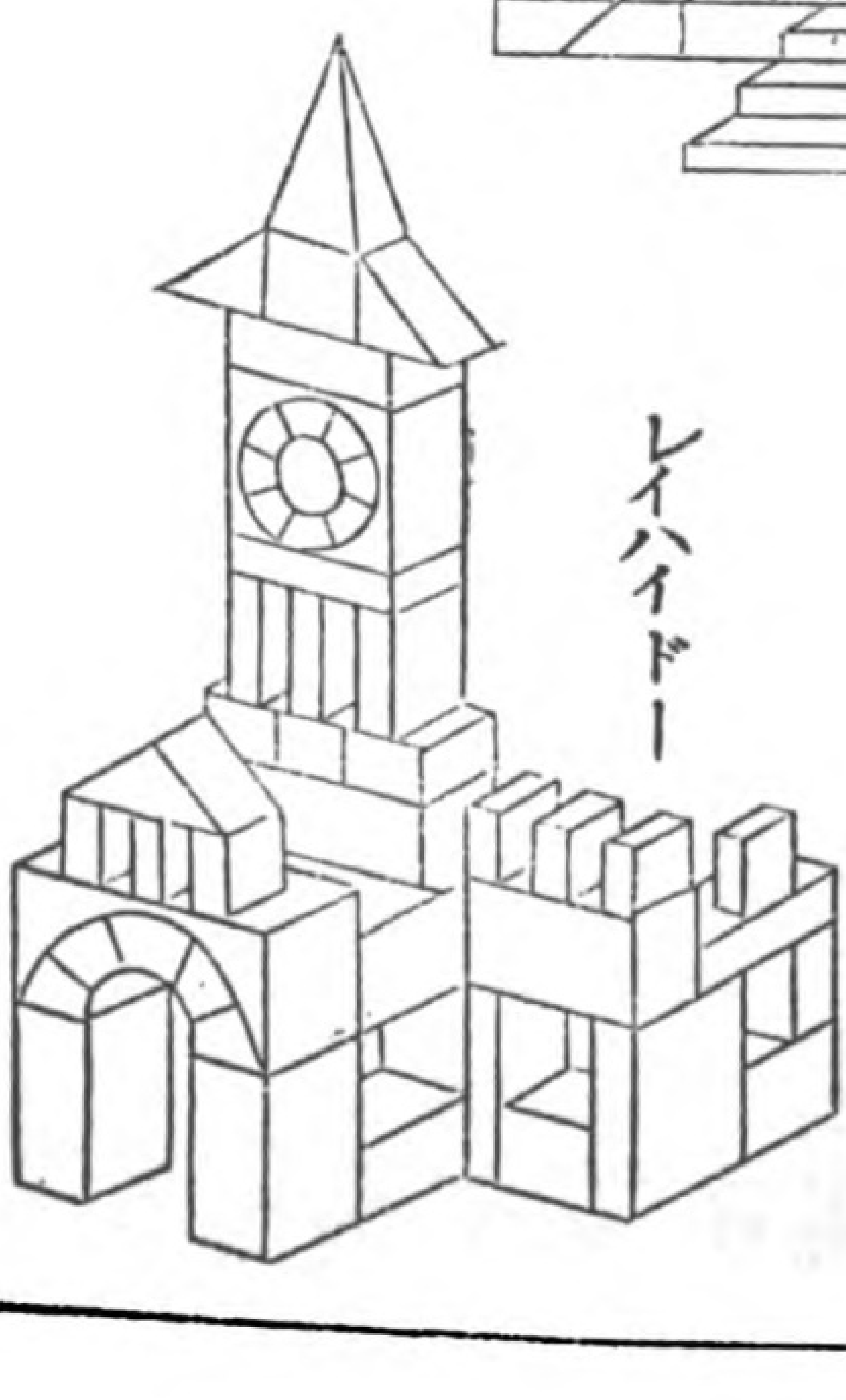
智恵の組立（複雑の工）

ジョーモン

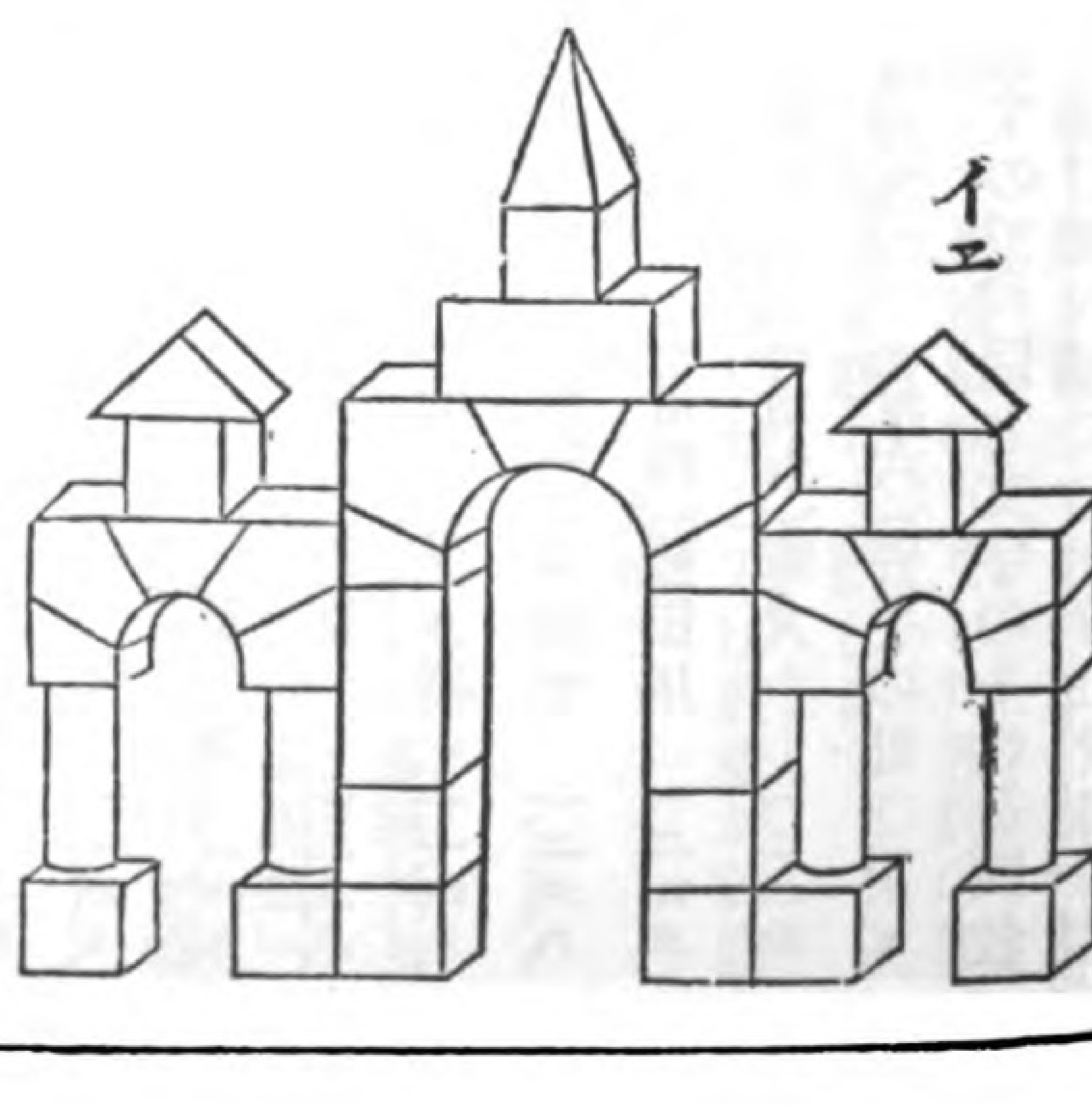




レイハイドー



イエ



新案 春遊び 文字合せ

女子大學講師 白井準縄子

「花合せ」といふ遊びは昔からあるもので、誰れでも知らんものはない位、元とは至極上品な遊びの樣でしたが、當時では頗る下卑たもの、樣に取扱はれまして、迚も令孃方の玩具にはならない樣になりました、又た「トランプ」に致しても僅か五十二枚ですゆゑ少し多人數お集りの時、一處に遊ぶのには興味が足らぬ樣で御座ります、其故多數少數に拘らず愉快に遊べる「字合せ」といふものを工夫致して、我が女子大學の學生に與へました處が、大層面白いと申して毎晩致して居りますゆゑ、一寸皆さんに御披露致します、春の日永に變つた遊びも亦た一興で御座りませう。

是は厚紙か何にかで「トランプ」を横に二つ切に致した位の大さのもの百四十四枚を用意致して、其れに、

(一)初雪 一、三、六、八
(二)小松引 二、三、七、九、
(三)高砂 六、七、八、十、
(四)老松 六、六、八、十、
(五)富士の霞 一、二、三、四
(六)春雨 二、三、四、九、
(七)雛祭 一、三、四、九、
(八)花の盛 一、三、四、七、
(九)花の帝 一、二、四、六、
(十)右近 一、三、四、七、
(十一)滿月 二、四、五、七、
(十二)神樂 一、三、六、七、
(十三)松風 一、三、四、八
(十四)晴嵐 一、二、三、九、
(十五)舞鶴 二、三、四、十
(十六)龜 四、六、七、十、
(十七)催馬樂 六、六、六、九、
(十八)朝妻 五、五、六、八
(十九)羽衣 一、三、五、九、
(二十)翁 二、四、七、十、
(廿一)花橘 一、三、四、九、
(廿二)遲々 二、四、五、九、
(廿三)菊の露 一、二、四、六、
(廿四)小田卷 一、二、四、六、
(廿五)二見ヶ浦 一、三、六、八、
(廿六)常磐 一、二、五、七、
(廿七)春駒 一、二、三、四
(廿八)網代木 一、二、三、四、
(廿九)福の神 一、二、四、七、
(三十)二葉の葵 一、三、四、七、
(卅一)青簾 一、三、六、八
(卅二)戻り橋 一、二、四、六、
(卅三)貝合せ 一、三、六、八
(卅四)龍田川 一、三、四、五、
(卅五)蟬丸 一、二、三、四
(卅六)井手の蛙 一、三、六、九、

の三十六種を認めますので、同じ文字のものを四枚づつ記します、其れで此文字の上にあります數字は唯だ

使ひ方を御話し致すとき入りますから番號を付けて置きましたので御座ります、又た下に御座ります數字は、假令ば

初雪　一、二、六、八、

と申すのは、一枚は［初雪 一］次のものへは［初雪 二］と申す樣な工合で、ツマリ四枚同じ名で下の數字だけが違ふ樣になります又た「花帝一、一、四、六、」などは同じ(一)のものが二枚入用なので御座ります。

遊び法

其れで百四十四枚の牌が出來ましたら、一寸此牌の使ひ方を申しませう、幾人でも同し事で先づ並んで居ります人たちへ適宜に牌を配りまして、殘りの分は裏返しにして下の眞中へ積んで置きます、其中から又た二三枚執りまして散らして置きます其れで順番を豫め定めて置き一の人から順に、先づ自分の牌を一枚出して、下に散つて居るものに同じものがあれば其れを合せまして二枚とも自分のものと致し、其れから眞中に積んであります牌を一枚繰り返して其處へ散らします、此時又た其れと同し牌が散つてあれば、其れも取りまして宜しい斯樣して最後に執りました各牌の下にある數字を總計して其最多を勝ちと致します。

併し配り方や數へ方を無暗に致しては興味が御座りませんから、モー少し詳しく申しませう。

(一)四人で遊ぶとき

此遊びを四人で致すときは、餘り牌數が多過ぎまして取扱ひ惡う御座りますから、「初雪」から「催馬樂」までの十七種六十八枚で致しまして、「朝妻」以下を省きますと丁度宜しう御座ります。

此時には各自八枚づゝ手に持ちまして、四枚を散らして置き、三十六枚を裏返しにして積で置きまして順に一枚づゝ自分の手の牌を出しては、置いてあります裏返へしのものを一枚づゝ明けて參ります、其れで點數の算へ法は凡て八十を定點と致します、則ち一回終りまして總計八十五ありませば $+5$ で又た七十二ですと -8 と申す樣に數へます、ツマリ斯樣にして數回の勝敗を合算してもよろしいのであります。

(二)五人で遊ぶとき

五人で遊びますのには、前のものへ、「朝妻」と「羽衣」と「花橘」と「翁」とを加へまして、總計二十一種八十四枚で致すと工合よろしう御座ります、此時も前と同じ配り方で定點も矢張り八十で致します。

(三)六人で遊ぶとき

六人のときには五人で致すものへ猶ほ「猩々」を加へ總計二十二種八十八枚で致します、此時は各自へ七枚づゝ配りまして散らすのは矢張四枚といたします、定點は七十と致して數へます。

(四)九人で遊ぶとき

九人のときは此牌殘らず則ち百四十四枚で致します、此時は各自七枚づゝ手に持ちまして、十八枚を散らします、其れで定點は六十七と致します。

斯樣な工合に致せば幾人でも皆な同樣に愉快に遊ばれます、ソコデ少し御分りになりましたら、役牌を致すのです。

(五)役　牌

役牌と申すのは、或る特別に指定いたしたものを二枚とか三枚とか、一回の勝敗中に揃へますので、之れが出來ますと、他の人たちから幾點かづゝ定めた點だけ貰へますから、大層面白う御座ります。

(一)鶴龜　と申す役は、鶴の(十)の牌と龜の(十)の牌を揃へますので、之れが出來ますと、他の人達から二十點づゝ貰へます、又た之れへ高砂の(十)を加へて三枚揃へますと、三十點づゝ貰へます。

(二)三松　の役は　老松の(十)小松引の(九)松風の(八)　襃美卅點づゝ

(三)二樂　同　神樂の(七)催馬樂の(九)　同　廿點づゝ

(四)花霞　同　富士の霞の(四)花の盛りの(九)　同　廿點づゝ

此時の花は花の帝の(六)とか花橘の(九)とか代用してもよし。

(五)花に嵐　晴嵐の(九)花は前の如し　之れは十點づゝ過料として出す

(六)雨月　雨は春雨月は滿月　同前過料十點づゝ

(七)三々　晴嵐の(三)右近の(三)御祭の(三)　襃美卅點

(八)雪月花　雪は初雪の(八)花は花の帝の(六)月は滿月の(十)　襃美卅點

役の數は餘り多過ぎますゆゑ、此中で二つなり三つなりにして後とは省いてもよろしう御座ります、又た若し畵の御上手な方があれば、此文字に因んだ畵で牌を造りますと上品なものが出來ます。

歌加留多遊び

苅穗の舍

今茲に歌加留多遊に關して少し御話をして見ませう此遊戯は古來正月に限つたもの、特に婦女間に重に弄ばれたものとしてあるが、女子の遊戯としては、正月に限らず弄ぶのも面白からう。

歌加留多の種類にもいろ〳〵あつて古今だとか、明倫歌集だとか、武者百人一首だとか、烈女百人一首だとか、三十六歌撰だヤレ伊勢物語だ源氏物語だ草庵集だとか中には唐詩選などゝいふ詩加留多もある、然し太閤が秀吉に專有されたと同格で、歌加留多といへば小倉百人一首と誰も思ふ丈け、最も之れが面白味の多いのでせう。

小倉百人一首の中には少からぬ戀歌が混つて居るので、敎育上有害であるとか、男女間の風俗を亂す媒介をするとかいふ議論もあるやうですが、之れは實際としての話では無く、さういふ事もあらうかといふ老婆心に過ぎ無いのである、時に小說家などが想像を逞ふして、男女の戀愛談に加留多を結び付けるやうな事があるのと、一方には男女交際といふ事が、頗る八釜敷くなつて居て、若い男女が同席して遊ぶといふ機會が無い、特に良家の婦女となると、男子に顏を合せる事も稀であるのに、正月の加留多會……此時ばかりは席を同ふし、言葉を交はし、手は手と相觸れ、柔かき衣を隔てゝ肉の温氣を感じ、梅香の薫る高島田、ホワイトローズの人をしも醉はしむる如き手巾、根底既に道義心の少い、自制の念の乏しい男女は、此機會を利用して不法を行ふといふやうなのがある爲めに、小倉百人一首が飛んだ濡衣を着せられるやうな事になるので、假令ば加留多が武張つた武者加留多でも、窮屈ら

しい事ばかり詠んである明倫歌集のやうなものでも、由來道念の乏しい人間に對しては、何の効力も無いのである、去るは男女交際の發達して居らぬ我國に於ては、男女同席の加留多會は必ず危險なものであらうかといふに、之れは規律の立て方、席の監督に注意すれば少しも其憂は無い、それは別問題として此遊びの仕方に移らう、原來此歌加留多遊びといふのが何時頃から始まつたかといふに、貞丈雜記にも近代のものとしてある通り古いものでは無い。



其如何なる遊から轉化して來たかといふに、貝合せ則ち歌貝から來たといふ說は尤も確である、歌貝といふのは先づ甲乙二組の貝がある、甲の貝には其中へ或歌の上の句を記し、乙の貝には其下の句を記す、上の句が百首ならば下の句も百首、之れを上の句と下の句と合せるといふ遊び、今のは牌昔のは貝と言つた相違

があるばかり、他に少しも變つた處がない、加留多といふ語は洋語でCarta Cardの語音から取つたのだといふ、之はさうありさうな事である。

愈よ其處で其遊び方であるが處に依つて多少其方法が違つて居るから種々參酌して一番面白い方法を擧げて見やう。

◎散らし◎組分け◎源平◎坊主おこし◎伏せ起し◎逆さ牌（上の句取り）。◎月雪花◎お枕◎送り◎お初◎お手附◎お鼻毛◎五人大名◎散りつ花◎隠れ月◎馬鹿月◎乙女牌◎讀み方。其他種々の名目がある。



▲散らし　之れは組を分たず、役牌も定めず、一寸共和政體といつたやうな遣り方、勝敗は取りたる牌の多少に依つて定まる。此際には先づ牌を並べる折、自分の前なる牌を充分に熟知したる上、眼をば他の牌に注ぎ讀方の讀むを待ちて速に取るをよしとす。

▲組分け●●● 之れは封建制度ともいふべきもので、人數の多少に依り、四組五組にも分けるのであるが、五組以上となると、牌を倍にする事がある則ち一度に同一の牌が二枚出るので先づ組を分けるには、上句の牌にてする時は坊主、姫、立烏帽子、冠、青人、黑人、天子等の牌を以てし、下句にてする時は、戀人、雪、月、花等の牌を用ゐて組を分つを常とす。組分け定れば、先づ枕牌を撰び之れを陣頭に他と紛れぬやうに伏せ置く、五枚、三枚、時には七枚を用ゐる事あるも、大抵の場合は五枚を以て適當とす。枕一枚出づる時は左側なる次の組へ三枚、五枚、時には七枚の場牌を送るなれど、定めに依りては此際枕の補欠を爲す事あり、組三人なれば、最も上手なる人兩端に席を占めて　兩側よりする敵の侵撃を防ぎ、却つて攻勢を取るやうにすべし、敵に一枚取らるれば忽ち二三枚の牌を送り込まるゝの災あり、役牌としては、月雪花を普通とするも、時にはやくや若しくはむべ山を役牌中の重なる役牌と定めて手に持ち居り、役牌出づれば三枚又は五枚次の組へ送る。

▲役牌●● 役牌は以上說く如く月雪花と相場定り居れど『しづ心なく花の散るらん』『雲かくれにし夜半の月かな』『あかつきばかりうきものは無し』の如きは、散りッ花、隱れ月、馬鹿月と稱して役牌に入るを許さず。

▲源平●● 人數を甲乙二組に分つをいふ、此際には重に枕牌を用ゐず、役牌のみとし、時には之れをすら廢する事あり、一番に競爭を劇しくするは此組分けなり。男子勝の席にては往々腕力沙汰にも及ぶ事あり。

▲逆さ牌●●● 之れは上手の揃ひし席ならでは出來難し、下の句を讀みて上句を取るなり。

▲伏せ起し●●●● 之れは牌を悉く伏せ置き、一々之れを起して、讀方の讀みたる牌を尋ぬるといふ方法なり。此方法は上手の少き場合、則ち下の句を讀みて下の句を取りても、下手の人多くして、一二上手の人に

全勝を占められ、興味の乘らぬ場合に應用するを得べし、此方法は運不運にして、上手下手に關係する事極めて少ければ、却つて下手が上手を容易に閉口せしむる場合多し、如斯遊び方も亦無くてはならぬなり。

▲坊主起し　之れは伏せ起しよりも更に容易なる方法にして、遊方の容易丈け興味は少き方なれど、席に未だ百人一首の歌を知らぬ子供の多き場合などには一寸妙なる遊び方なり。先づ此遊に要するは繪の入りたる牌にして、之れを適宜に切りて伏せ置き、順番を定めて、一枚々々上より起すなり、起たる牌は素より起し主の所得たるは論なき事なれども、若し坊主を起せし時には今まで得たる牌全數を場に投せざるべからず、次ぎの人々の内にて天子を起したる人、場に出たる牌をば悉く其所得とするなり。去れど坊主牌のみにては數少くして興味多からざるを以て、姫牌をも坊主牌と同樣に使用するが常なり、此場合には姫牌の内に女帝をば加へず、女帝を起したる場合には、先づ普通の天子牌の權利を得る筈となり居れど、席の定めに依りては、普通の天子牌の半分の權利、即ち場牌の半數を所得とするなども面白かるべし。

▲お初お手附お鼻毛　等の名目に關しては別に說明の要無き如くなれど、序なれば一言し置くべし、お初とは第一着に自分の組より牌の出たる時、お初と稱して次席へ一枚二枚の牌を送るをいひ、敵の組にて初牌を取り得たる場合には通例の罰牌を倍加して送るなり。お手附とは「人知れずこそ」の牌の出たる場合「人に知られて」の牌を他組の場より誤つて掴み取りたる場合、罰金を課せらるゝをいふ、時々上手もする失敗なり。お鼻毛とは最も上手の鼻の先なる牌を取るをいふ、下手の前より上手の取るは功名にも手柄にもあらず。「乙女の姿」又は「外山の霞」「やくやもしほ」「むべ山風」などいへるは特に此點に於て注意を要す。

▲五人大名、乙女牌　これも一種の興味を加ふる方法

なり。五人大名とは枕も役も別に設けず、各自組々にて五枚の牌を大名なりと指定し置き、互に取らん取らせじと注意するなり、取られたる場合には十枚敵より爵牌を送られ、首尾よく我組の大名牌を我手に取りたる場合には、次席の組へ十枚送るなり。又乙女牌は彼の「乙女の姿」といへる僧正遍照の歌を得たる組にては之れを陣頭に他の二三の牌と共に伏せ置く、敵は之れを奪はんとするも紛はしきを以て、お手附の爵牌を恐れ躊躇するなり。

終に一言すべきは歌歌留多の取方なり。上手は先づ組組へ分けられたる牌を受取り、之れをズッと目を通しつゝ、順席正しく配置し敵の目に就き易き牌をば成丈け中央に置くべし、膝の下などへ押込み置くは卑怯なり。自家の牌の内にても、敵の目につき易き牌、假令ば「有明の月」「曉」「外山」「燒屋」「衣ほす」「人の字を書きたる牌」「戀の字ある牌」「名こそ流れて」「紅葉のにしき」などいへる最も好く其位置を熟知し居るを要す。人字戀字ある牌をば、他と紛るゝやう配置し置くも一策なり、假令ば「戀にくちなん」「戀ぞつもりて」「人にはつげよ」「人つでならで」などいへる牌の戀字以下人字以下を他の牌にて掩ふ如くするなり、去れど正々堂〱堂の陣を張るには願はしからず、卑怯の性を養ふに至る、又場馴れぬ人は組員に警告する積りにて「なんでも此方に在つた筈です」などゝ騒げど、大なる不利益にして、敵の視線悉く其組に集るの恐あり。敵の陣地にて牌を發見したる場合には、速に狙ひを定めて之れを取り去るべし、掌を以て掩ふは甚だ拙なり奪ひ返さるゝか、爪の痕を付けらるゝか危險なり。視力を絶えず牌に注ぐ時は、疲勞を感ずるもの故休戰の間に於て、視力を養ふの方法を取るべし。讀方は此遊びに於て尤も大切なる役なり、百人一首の本などを出して讀む人あれど、上手は天智天皇の後に持統天皇あるを熟知し居るが如く、順序までも知り居る人あるのみならず、中央より讀起して、讀上ぐるとも讀下るとも、此順で行けば「富士の高根」よりは「我衣手の雪」が先番になると見拔かれ、枕などの加減をされる恐あり。音聲

明亮にして、さらでも上氣したる人々に、二度繰返して尋ねらるゝが如き事無き樣注意すべく、「人こそ見えね」「人こそ知らね」「身をつくしてや戀渡るべき」「身をつくしても逢はんとぞ思ふ」等紛らはしき歌は一層明白に讀上ぐるを第一とすべし。此外言ふべき事は澤山あれど、先づ神秘を洩すの恐れもあれば……。

手輕西洋料理

割烹月曜講習會

主婦の任務は極めて多種なる中にも厨房の一事は殊にその主要條項で一日も忽にすることは出來ません。それはその注意の行き届くと否とが經濟の上衛生の上にも至大の影響を及ぼすもので、茶の湯活花などの遊技と同樣に思て居るのは大なる心得違ひでせう。
が我國の婦人達には、動もすれば厨房の事を賤しむ傾があつて、炊事とか割烹とか云へば下婢任せにさるゝのが多い、少し富豪の家に生れたる婦人などで甚いのは、これを自らするを耻かしく思ふお方もある、これ等は言語同斷で、主婦の任務を盡されぬ婦人と申しても可からう、然りとて華族の奥方や姫君に向て下婢や召使の食物迄も調理されよと强ゆるのではない、尊親や良人の食膳に上る食饌位の調理は是非に奥方や令孃のお手を煩したいものです。

扨一通りの洋食品を調理するには、さほど澤山の道具立には及びませぬ、一二種の鍋類と天火、それに三四種の食料品さへあれば充分です。

一、シチウパン　一個　四パイン　三パイン位のもの（パンとは鍋の事也）
一、フライパン　大小二個
一、スープ鍋　一個　凡そ一升五合入のもの
一、ソースパン　小の形一個
一、天火　一個
一、肉切庖丁　一挺

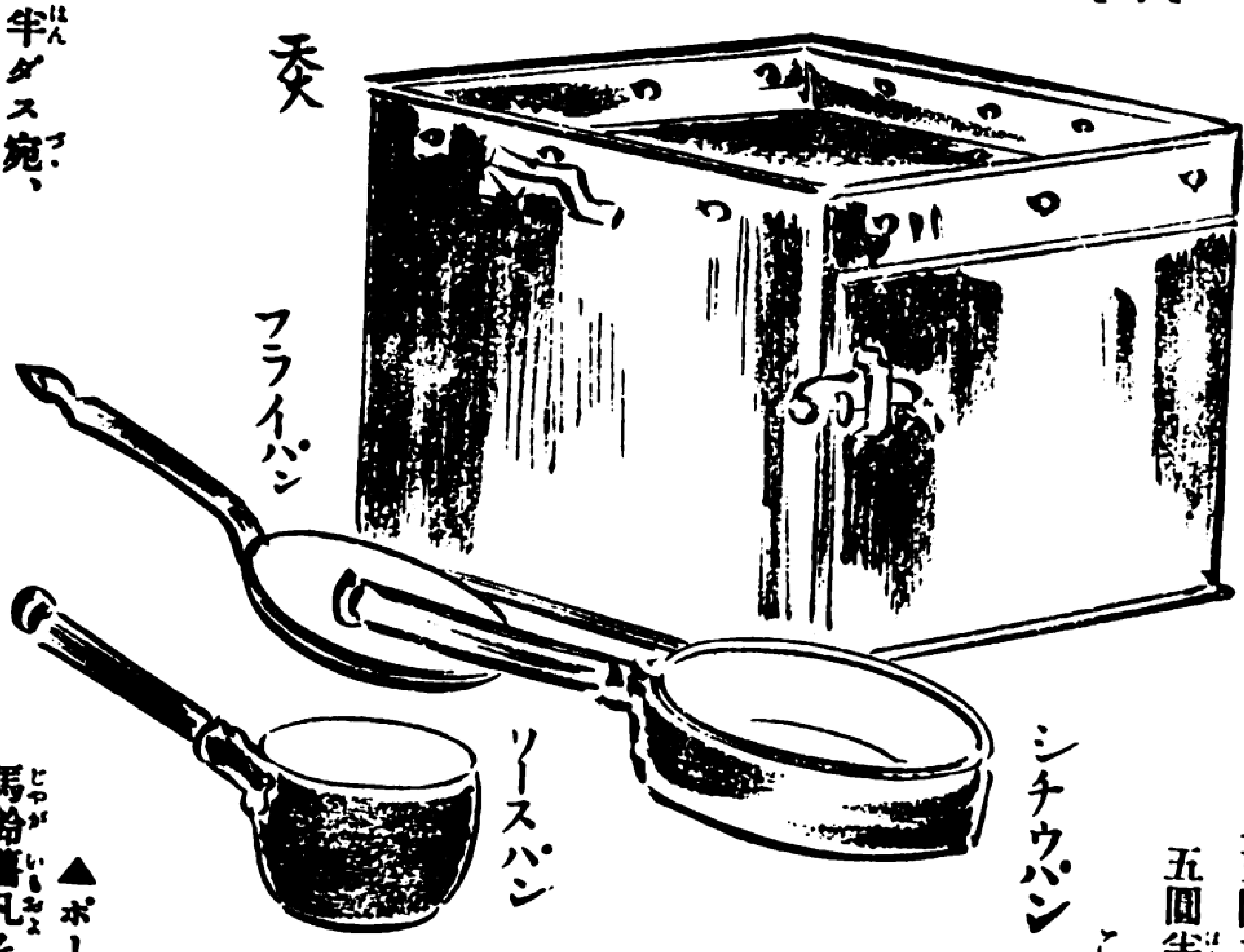
道具類はこれ丈で間に合ひます、此外に食料品としてウスタソース、バタ、塩、胡椒、芥子、メリケン粉、

パン粉、サラダ油、酢、この外ベーキンパーダ、レモン油、ロセットか何かの香草に、煮物用としてセリ酒の一瓶もあれば大抵の料理は出來まする。

右の費用はフライパン大小二個九十錢、ソースパン壹圓五十錢、シチウパンが壹圓五十錢、天火壹圓五十錢、肉切庖丁五十錢から六十錢、總計六圓内外、若し此外に充分と云ふ事なれば

スープ皿　半ダス
出し皿（肉類を盛る）　半ダス
菓子皿　半ダス
パン皿　半ダス

それにナイフ、フオク（肉叉）が半ダス宛、



古物で買へば二三圓で求めらるゝ、新調しても五圓か五圓半で買ふ事が出來る、然し殊更に、これらの器物を求めずとても日常日本食の時に使用する中皿に肉を盛つたり、吸物種にスープを注けても差支はありません。

さてその調理の爲方は皆樣御存でせうから、今は少し變つた晩餐用の一皿二皿の調理法を述べませう。先つその献立は

ポームポテトー
鴨シチウ
菓子
スポンヂケーキ

▲ポームポテトー

馬鈴薯凡そ四百目、これは六人前位の料

理とす、最初にその皮を剝き、能く洗ふて煮る。煮上がつて柔く成つた所で、ウラ漉にかけて大皿の内へ落す、その内へバタ、塩、牛乳を適宜に入れて味を付け充分に攪き交せて、重箱の蓋か何かの内へバタを塗つて、其内へ詰め込みさてその面を平にするなり。斯樣に爲たものをパテの形で菓子形種々に切る、切る時には形に粘り付くもの故メリケン粉を時々形に塗つて切らねばならぬ、切り拔きたるものを卵子を溶したる中へ入れて、(玉子は白味も黄味も一つに混せで攪はぬ)裡表に充分玉子のつきたる時取り出してパン粉の内へ入れて、その兩面へ又パン粉をつけ、丁度天麩羅の衣をつける樣にして、そのパン粉のついたものは又以前の玉子の溶したる中へ入れてその兩面を浸して再びパン粉の内へ入れて包む。

斯樣にしたものをラードかヘッドの沸立たる中へ入て揚る、揚鍋には、フライパンを使ふのですが、若し油が非常に煮立て居る樣なれば、一寸鍋を火から取り外して入れる、然樣しなければ、油の飛び散る爲に怪我を爲る事があります、意はボーム、パテト計りで無く何を揚る時でも同樣です。

斯樣にして揚げたものは、その眞中の所を庖丁で繰り拔いて、……圓くでも、四角…隨意そして一寸ストブの内へ入れる、こゝに肉……ロースなれば尙更好し、普通の肉でも攪ひません、フライパンの内へ入れてバタで丁度……ビフテキ位に燒いて細かく切つて又フライパンの内へ入れてバタで煎り上げ、鹽、胡椒、せり酒、……それにメリケン粉を少し計り入れて、スープを適度に注ぎ入れてトロ〳〵に攪き廻して、これをストーブに入れてある例の揚げ物の内へ詰める、これで、スッカリ出來上つたのであるが、肉皿にパセリ(野菜)を一葉か二葉添へて盛るのです

▲鴨のシチウ

最初に鴨を背割して二つにし(無論毛燒をして皮を剝く)それを赤葡萄酒の内へ凡そ二時間位浸けて置いて充分酒氣の染み込んだ所でシチウパンの内へ入れて、バタでその兩面をこがし、メリケン粉を少し計り入れ

る、それから其内へ先に浸けて置いた、例の葡萄酒も一つに注ぎ込んで充分に交せて、スープを入れる、その分量は、若し浸した葡萄酒二合なれば、スープも二合、と云ふ割合、そして其内へハムかベーキンを少計り入て、トロ〳〵火で凡そ一時間程煮るのである、又その内へ栗や、松茸などを入れて一所に煮て付合せにする、葱なども入れて煮れば甘味が出て味が好くなります。

▲スポンヂケーキ

これは先づ初に卵子を七つ、その黄味計りを摺り鉢に入て、それへ、バタを大匙に一杯、白砂糖を普通の水呑コップに二杯程、入れて充分に摺り交せる、摺て居る内に段々白く成つて來る白く爲つた所で牛乳を交せる、分量は前に破つた卵子の殼に凡そ四杯程、入れてから又それを摺木で充分に摺り交せる、扨それは其儘に爲て置て別の器へ玉子の白味を入れて泡立て掻き立つる、もし泡立器がなくば、サヽラでも茶筌でも搆ひませぬ、充分に泡を立てゝ前の摺鉢の内へ入れて掻き交せる、此時は摺木を用ひすして杓子か何かで交せるが良い、この交せた内へメリケン粉、大コップで二杯とベーキンパーダを小匙に山盛一杯入るのであるが、メリケン粉もベーキンパーダも裏漉で以て落して入れる、それを又充分に杓子でコ子交せて、バタを塗つた天板の上へ紙を敷いてその內へ前のいろ〳〵交せたる原料を流し込む、そして天火へ入れて凡そ十五分間程燒きます、若し火が強くて菓子の上つらがこげる樣であれば新聞紙を一枚載せて火氣を和ぐる、火加減は、隨分六ケしい、全く熟練です。

簡易 菓子の製法

都會の地にお住居なさる方々は如何なる料理でも菓子でもそれ〳〵名高い店が有りまして好む儘に得られますが扨一朝都會を離れて邊鄙な田舍にまゐりますとお菓子がほしいの入用だのと仰られて買にやりましても所詮都で得られる樣なものは有りません、黒あんの壽

毒しいのや饅頭位が關の山だと云ふ處も多くありますこんな時に平生から心得て原料さへ有り升れば一寸家でこしらへますと唯々子供や家人の悦ぶ計りでなく客人などに出しましても誠に格好よく其家の主婦の心掛の程も知られて奥床しう見らるものであります。

あはれ世の奥樣方や媛達の正月のたのしみとして御手づくりなさるのも又一興でせう。先第一に手輕に出來得る蒸菓子より始めます。

▲ねりようかん

巾一尺、丈一尺五寸、厚さ一寸位の物を造りますには寒天三本。水五合。小豆一升五合。砂糖六百目

先小豆をよく洗ひ微温湯に入れソーダ汁を少し加へて二三度沸騰させ未



だ小豆の中の身はかたくて皮のみ柔かになりました時に笊にあげてそのまゝ水の入りたる桶に入れ手にてよくもみて皮をむき洗ひ流し。清水を入れて今度はごく柔になる迄煮ます之を裏ごしにかけ、袋に入れて固く搾る、之に一度篩にてこしたる砂糖を入れて火にかけ、よく練り置き、寒天を水に漬け置きてしぼり（寒天は水につけたるものを手にてしぼり握つてもはなせば直に元の形にもどる樣な彈力のあるものを良とす、之に反するものはかたまる力弱きもの故其時は適宜に分量を多くすべし）五合の水にてよく煮たゝせ、すいのにてこしたる中に前のあんを入れよく攪きまはして流箱に流す。

▲むしようかん

一升五合の小豆を前の如くにして餡となし其四分の一を取りわけ。其代りに夫と同量位のメリケン粉を入れ。其中に前のわけたる餡も入れよくかきまはし。新しき布巾の上に平たく四角にのばし。蒸籠に入れて蒸す。

▲磯燒

二十人前に對しメリケン粉五合。玉子三個。水かな杓子に四杯。の割合

メリケン粉を一度ふるい。（かたまりなければふるうに及ばず）玉子三個をとき置きて其中に入れ。よくかきまはし、水を靜にかき廻し乍入れ三ッ共よくとけたる時に玉子燒鍋に胡麻油を引きて火にかけ、紙にて拭きとりたる上に今一度油を引きあぶりて杓子にて平たき丸形に流し大抵に燒けたる頃裏返して一寸燒く。之は磯燒の衣にてあんを適宜にまるめ此衣にて卷きて出す。

▲六の花

寒晒し粉百目。砂糖百四十目。とを鉢にあけ、手にてよくかきまはす斯すると手の温度にて砂糖が程よく溶けて多少粘氣ある樣になる、之を二分し一方に食用紅を好に應じて薄くも濃くもませてかきまはし。兩方共別々に裏ごしにてこし形に入れて押す。製して少時置けば固くなる之を適宜の形に切りて出す。

▲そばまんじう

しん粉百目、砂糖五十目とをませてよくかきまはし。其中に自然薯とか長芋の擦たるものを適宜にませてこねまはしうき粉（元は何處の乾物屋にもあり、若しなき時はメリケン粉にてもうどん粉にてもよし）を手に付けて適宜の大さにまるめ置く、小豆五合を餡として前の衣より倍位の大さにまるめ衣を手にて平たくのばして餡をつゝみ蒸籠に美濃紙を濕めらして敷き其上に並べて蒸す。

衣のこね樣ゆるき時は皆下にだれて恰シャッポの如き形となりて見にくきもの故自然薯は出來るだけ僅にするをよしとす。

▲うちもの餡入

みじん粉百目砂糖七十目を手にてよくもみ、手をぬら

す位に水を入れてよくこね、中に餡を入れて、形に入れて押す、凡てかゝる菓子はこしらへ立てより一日置きて後位が最よき頃なり。

▲らんざく

うづら豆を微温湯に入れ、曹達少許を入れて二三度沸騰せしめ、水につけて皮をむき取り、鍋に水を多く入れて煮。柔になるまで水が無くなりたらば注ぎ足す斯くて眞に柔になりたらば裏ごしにてこし袋に入れてしぼり、一升に付三百五十目の砂糖を入れて火にかけ、一寸ねり其中に又夫の十分の一程のつく芋のすりたるものを入れてこげ付かぬ様によく注意して練る、之を二分し一方を赤き餡となす。別に小豆あんを作り人數に應じてまるめ其上に赤餡をくるみ一番上を白餡にて包み丸き形となし小刀にて菊の花瓣の様に切る。

▲茶つう

小豆の餡を製し其中に胡麻を煎りて輕くすりたるものを適宜にまぜ、別にメリケン粉百目砂糖百目とを一所にして裏ごしにてこし玉子二個を入れてよくこね、之にて餡をくるみきんつば位の形になし玉子燒鍋に胡麻油を引きて兩面を狐色位に燒き後に側面も一寸やく

▲カステラ

玉子七十目、砂糖七十目。メリケン粉四十目。

玉子を黄味と白味とに分ち黄味と砂糖とを一所にして三十分間程かきまはし、メリケン粉をふるひて入れ（メリケン粉を入れたる後は餘りよくかきまはす可らず然らざれば重くなりて膨れなくなる）白味をよく泡立て其中に入れブリキの金盥様のものに美濃紙を敷きて其上にあけストーブがなければ上七分下二分の火かげんにて燒く。

凡てカステラ（此菓子のみならねど）其方法を口に云ふはいと容易なる事なれ共實際に行ふ時は往々失敗する事あり、火かげんとか、分量とか云ふものにて其不注意によりて失敗するは重なる源因なれども、其外に凡て物をかき廻す時例へば黄味と砂糖とか、白味を泡立てると云ふ時などに於て初め杓子を左より右に廻したらば終り迄假令三十分にても四十分にても同一方向

にまはし決して或は右に或は左に廻すなど云ふ事ある可らず。之等は往々人の氣付かざる菓子製法に就いての秘訣なり。

▲屠蘇と雜煮

正月の儀式として屠蘇と雜煮これは千里同風萬戸一樣にむかしから習ひ來ッた事であるが、この屠蘇と雜煮に就てはどういふ由來のものかと申すに元來屠蘇は藥として用ひたもので有ります三月に桃の酒を飲み、五月に菖蒲の酒を飲めば、壽を延ばすとか丈夫になるとか云ふ樣なことゝ同一の理由で飲むのでせう、藥方は固より支那から來たものですが、醫家に因て幾分か調劑の方にも違ふところがあるやうです是れも隨分古く延喜の時分から行はれたことで延喜式にも、屠蘇のことが載つて居ります雜煮は正月雜煮を食べると云ふことは、是れ隨分古くからの風俗で、天子樣では後水尾天皇の時に第一(朝餐)

やきがちんひし花びらむめぼしなど供して御さかづき參るふくさ午房かず〳〵あさあさ

など云ふことが記してあります。是れは後水尾天皇の頃より引續いて、元祿の後享保の頃までの天子樣の正月の朝の御祝であります、やきがちんとは、矢張餅を燒いて雜煮にすることで、ひしはなびらは、今日のはんぺんと菜で、即ち燒餅の御雜煮の中にはんぺんと菜とを入れたのでありませう、して見まするると、昔は天子樣の召上がるものも、我々の食べまするものも、少しも違はなかつたので、其他のふくさ午房だの、かず〳〵あさ〳〵など、何となくみやびやかな名が付けてありますから、一寸何か知らんと思ふ人もありませうが、ふくさ午房とは、午房にふくさ味噌を付けたもの、かず〳〵は鰊の子、あさ〳〵は、菜のあさ漬で、實に麁末至極なもので、今日から思へば誠に勿體ない位のことで有ります、それのみならず第二(晝餐)の御食事の御獻立のうちに、雉子燒雉子酒など〳〵あります、是れは雉子燒差上ぐべき處を朝廷のおまかないが少ないものですから、なか〳〵雉子燒など〳〵云ふ結構なものを差上ぐることは出來ませぬ「其實は塩燒のおかべ豆腐なり」と記してあります、豆腐の塩燒などは我々でさへも餘り感服の出來ないものを、古はうや〳〵しげに天子樣に差上げて居つたので御座います又雉子酒と云ふのも酒へ雉子を入れべき處を、豆腐に酒をかけて上げたのであるさうです

家事顧問

(問)着物に澁の付いたのを落す法はありますまいか、有つたら敎へて戴きたい。(ゆかり女)

(答)白砂糖を揉みつけて能く洗つて御覧なさい屹度きれいになります。

(問)蕪を糟漬に致しますには、何う致したら宜しう御在ませうか。(芝みづしめ)

(答)丸の儘で鹽押にして置き(水の來ぬ時には、呼び水を入れます)、一週間もして鹽の廻つた時には先づ味淋粕を敷いて其の上に蕪を一通り並べ、又た糟を蕪の隱れる位まで敷いて前の樣に蕪を並べ、かくて樽でも瓶でも目張をして一月も經てば好い鹽梅になります。

(問)木棉を晒す法を伺ひたう御座います。(家政女)

(答)木棉を晒しますには、先づ始めに大鍋の中に淨水二升五合毎に苛性剝篤亞斯三合七勺餘を入れ、其にて生木棉を煮ること三時間にして取り出だし、淸き水にて洗ひ、さらに別の器に熱湯二升五合毎に漂白粉三合七勺餘を入れ、かの木棉を浸すこと六時間にして取り出し、又別桶に水二升五合毎に硫酸五勺をそゝぎ入れ、又かの木棉をひたすこと一時間にして取りいだし、淨水を以て能く洗ふので御座ます。

(問)齒磨粉の製造法を伺ひます。(木鄕まとき)

(答)沈澱石灰二「ポンド」と澱粉香蓋根末各半ポンドを克く混ぜ合せて、之に硫酸「キニイネ」一四瓦を混和しますと、齒磨粉が出來ます、又た、規那皮末、桂皮「ミルラ」末、沈澱石灰等各半「ポンド」と炭酸「アンモニューム」香蓋根末等各一ポンドを混和し、尙ほ之に丁香油五瓦を加へれば、上等の齒磨粉が出來ます。

(問)鷄の飼養法を敎へて戴きたい。(角筈林きん子)

(答)鷄を飼ふには、凡そ一羽に付き二坪以上五坪位の飼舍を設け、成可く淸潔に注意して、餌は過度に與へないやうにするのが善い、卵を毎日連けて產ませやうと思はゞ、稗、蕎麥の類を煮て、與へるを宜しとす、牝鷄の瘠せて卵を產まなく成つた時は、牛肉に糠の小量を混ぜて與へると、忽ち肥ねて來て、卵を產むやうになります。

(問)油揚飯といふのがあるさうですが、何うして炊きますか、御導れ致します。(ままその)

(答)油揚飯は一名人參飯とも申しまして、米一升に醬油一合を入れて、水加減し、之に人參を千六本に切たのと、油揚を升册形に刻んだのとを、生のまゝにて入れ、洒鹽少しを落して、炊くのです、これは普通の甲千飯とは違つて一種の風味があります。

(問)私共は小人數でありますので、御鉢の底やシヤモジの裏表に粘着いた飯粒なぞも至つて少こし許で、干飯にもならぬ程ですが、何うにか仕樣はないものでせうか。(肥後松琴女)

(答)矢張干飯になさるが宜しい、干飯と申しても少し許の物を龜子笊や笊へ移して、庇の上へ乘せて置くにも及びませんから、さういふ時には御小皿へ飯の殘つたのを寄せ集めて置き飯櫃の蓋を取り、そのあとに此の皿を載せるのです、すると飯櫃の湯氣で旨い工合に乾上ります。此法は至極簡便でして、毎日少宛でも行つて置きますと、子供に遣て豆煎位は直きにたまつて了ひますから、一つ試みに實行して御覽なさい。

(問)東京で家を借りますには何ういふ手續きが要りますか。(借家生)

(答)東京にて借家せんとする時は、家主或は差配人方へ至り、家賃敷金(商家なれば雜作讓渡價格)等を問ひ合せ、双方約定整ひたる上にて、借受證文を差入るゝのです、敷金は大抵屋賃の二ヶ月分、三ヶ月分、六ヶ月分、家賃は一ヶ月分宛大方前拂であります、けれど敷金のある家では後拂ひが通例です、扨て愈々其の家へ引移つてからは、平生附合ひすべき家數を差配人に問合せ、最寄の蕎麥屋へ云ひ付け、差配人初め平生附合ふべき近所の家々へ配らせます、其の後で主人なり代理人なり、附合の家へ近付の爲に廻るのであります、それから移轉後十日以内に本籍寄留を問はず區役所へ屆け出づるのであります。

(問)家政學を研究するには、何んな本を讀んだら宜しう御在ませうか。(研究女生)

(答)後閑菊野氏の家事敎科書、塚本濱子氏の家事敎本、[illegible]常子氏の家事敎程、下田歌子氏の家政學、三島通良氏のはゝのつとめ等を讀み尙ほ裁縫、割烹、禮式等に通曉するは無論の事、理化學、動植物、園藝、栽培、等の諸書をも涉獵するが宜しい。

衛生顧問

(問)婦人の髮はどう致せば衛生上、美術上よろしく候哉(鶴巻富士子)

(答)一体婦人の髮毛は日本人としては房々して漆の如く黑さを賞美するのですが夫には髮の毛の養生をせなければなりません、養成さいすれば發育がよくなります、夫には油を着けるのが適當です然るに近來束髮が流行して油も着けずに束ねて置くそれゆゑ自然と髮が破れて赤くなります、然るにそれを西洋風などと喜んで居るのは心得違ひで自分の髮の毛の枯死するのも知らずに日本人の特質なる黑い艷々しい髮の毛を嘲けるのは西洋心醉の餘弊でせう。油はなるべく椛油を用ひ、油垢は清潔な油で梳き取るのがよろしい、又雲脂を落すには、鮮直しの金盥へ熱湯を注ぎ盃に一杯ほどの酒精を入れ鮮直しの布をそれへ浸して頭をヒタ〳〵打ち髮毛を採めば毛穴の掃除が清潔に出來て逆上せる事もなく雲脂も奇妙に落つるものであります

(問)白粉禁止問題で隨分喧うございましたが、私はこんな空想的でなく實地の白粉につきまして、有益物と無害物との差別を伺ひたいものです(八重子)

(答)御尤ですこの事に就きましては警視廳第三部栗本勝氏の意見が一番要領を得て居る樣ですから左に同氏の說を揭げませう

一、女學生の白粉問題は只外觀上の問題たるに過ぎず從て通學の時を除くの外は用ゆるも差支なし

二、衛生上より觀察するも婦女の白粉を用ゆるは敢て差支へなし

三、鉛毒は人の想像せる如く甚しきものにはあらず

四、成るべく無鉛毒のものを用ひて薄化粧するは精神上必要の事項なり

五、白粉を用ゆるは間接に身體淸潔保持の上に影響して所謂衛生に叶ふものなり

而して猶同氏の語る處に依れば府下にて製造販賣せる白粉を試驗せしに左記六十六種は多少の鉛分を含み他の二十種は全く鉛分を含まずと云ふ

▲有鉛白粉

吉野香　菊薰　玉の露　若さくら　雪競　ゆかり香　花月香　九重　牡丹白粉　花園　白露　花の雪　富士見形　雲井　キレー白粉　花のつや　東にしき外四十四種

▲無鉛白粉

無鉛製衛生白粉雪　衛生白粉白ゆり　パンジ白妙　水晶おしろい　メリー　名響白粉　御園の雪　やまと櫻　宇治紅葉　すぐれはだキメハプタイ　土屋白粉　雪の雫　夕顏　菊の露　はつれ白粉　園の花　新式無鉛やまと錦　菊の露

(問)本年二十六歲の婦人出產後身體がひどく瘠せて困ります、どう致したらば以前の如く壯健肥大になりませうか、(すま子)

(答)病後の衰弱は適當の運動と滋養物の攝取にあること勿論なれ共單に肥滿壯健を望まるゝならば左記の藥品適用して試みられたし「タカヂアスターゼ」と申す藥是は一兩年前米國に於て醫學博士高峰氏の發明品にて日常吾吾が一定量を每日健康者にても用ゆれば六七ケ月の後には三貫目以上の體量增加する者なり此の藥の理論は吾々が日常攝取する米食其他の澱粉質は半ば大便中に下降する故に少々にても胃病其他の病ある時は忽に衰弱するも此藥を絕はず使用せば一日三合食する米は三合丈全部胃中にて消化し盡し不用分丈便中に排泄せしむるの特効有り今是を目前に試驗證明せんとすれば「例せば今爰に一升入の硝子瓶に適度に煮沸せる澱粉質(米食の主成分)全部を充たし攝氏卅七度の溫に於て此の「タカヂアスターゼ」を一升の「千五百分の一を投入すれば二三十分の後には全部溶解し「アキストリン及マルトーセ、グリニーセ」に變化す此の三つのものを成生する機能を糖化作用と云ふ人身體に於て日常米食を消化するは唾液中に含める酵酵素プチアリンと名づくる者の作用に依り以上三品を成生せしめ胃中より吸收して身體を營養するものなれ共或病氣の爲に此機能を障害せられ途に衰弱するものなれば平素此の藥を用ゆれば疾病の有無に算せず滋養作用を催進するの効あり但此の藥は穀物の中に含有する主成分より製造するものなれば日本人が從來不知不識の習慣として味噌醬油を副食として用ゆるは實に天然の妙機と云ふべし東京は勿論地方何れの藥店にても「タカヂアスターゼ」錠と云へば三十錠入瓶四拾錢百錠入は壹圓廿錢にて有る此錠劑を每食時中亦は食後直に二個づゝ服用の事よろしく候



女訓今昔の感

三輪田眞佐子

富士の嶺の烟も絶えながらの橋も朽ちにけりと思ふにつけても、時勢の轉遷移動を悟るに足らん、從ひて社會萬般の制度より人々の思想に至るまで多少の變化なきを得ず、然るに若し時勢に後れ進歩するを知らざるものはおのづから世人より朽ち木の如く扱はれんこそ是非なけれ、孟子の學者須らく時を知るべし亦悉く書を信ぜんか書なきに若かずと警告せしは實に千歳の卓見ならんかし。

されど時勢の轉遷移動は所謂風潮にして或は良きものあり、或は惡きものあり、而かも其の良と惡とを撰ぶ能はずして徒に時流に阿ねり輕擧浮薄の言行あるものは、最も賤劣なるを免れず、甚しきは奇を弄し怪を演じて一時に倖僥せんとするものあり、これ有德者有識家の大に悦ばざる所なるべし、今日女子の敎育盛なるにつれて目下の風潮を是となし往昔の風潮を非となし敢て其の良惡を差別し以て採るべきを採り捨つべきを捨つる等眞に女界のため適切の方針を示すもの多しとのみ限らず、たまたま奇怪の説をなして乙女の心を驚かし以て暗に快なりと呼ぶものもある、亦は舊慣の反動にと故ら極端の論を吐き以て快なりと唱ふるものもあり、これと同時に時勢と共に進歩するを知らずして、新風潮を誹譏し罵詈し以て獨り我を聖なりと言ふものもあり、茲に

於て女界に一種の迷霧起り以て進路を妨ぐるに至るは全く止むを得ざるべし。

おのれ思へらく女子教育の主義方針は其の國の制度人情風俗習慣及び富の程度等と適應するは更なり、一方よりは將に時勢に適合しなほ至當の速度を以て其の國民を開發し以て文化に向はしむるやう指導せざるべからず、故に女子教育上主義を立つるは難いかな、如何となれば一朝主義を定めんか勢ひ偏僻極端等に陷るを免れず、例之ば世人の所謂至進主義とか保守主義とか日本主義とか西洋主義とか將た儒教主義とか宗教主義とかの名目を立てんか一見美なるが如しといへども其の實は各長所に伴ふ短所存じて得失の點より打算せば利の害たるを知らざればなり。

抑も女子教育上の主義を立てんと欲せば、女子の天眞を害せず而かも其の天職に適しこれを、自然の大道に照らして戻らず、これを進歩の本則に正して誤らざるものならざるべからず、然れども目下の風潮は理想のみを根底として主義を定め往々空想亦は忘念に馳せて實行し得ざるものあり、若し實行せば忽ち危險に陷ることあるを知らず何どて思はざるの甚しきや、即ち今日世人の要求する男女交際機關の如きは何人も其の必要なるを認め而かも其の實際は頗る危險なるが如しされど其の危險を恐れんか、いづれの日か淸潔なる男女の交際を見るを得ん、あはれ現今の如き過渡の時代に於ける女訓をものせんとするもの丶責任重且つ大ならざるかは。

なべて理想なきものは進歩せざるべし、由りて女訓を布くにも理想を含むは固より好みすべしとせんも、理想には必ず參酌せざるべからざるものあり、其は他なし日本の歷史上の經過なり思ふに今日の文物制度は一朝一夕に成立せしにあらず、由來するところあり、例之ば夜なくば晝なきが如く舊時代なくは新時代來らざるべし、況んや改良と言ひ進歩と言ひ或は發明と言ふも畢竟するに先輩の事業を基礎とし少くとも往時の經驗智識などを傳統してこれを完成するのみ、故に社會の事物を創造せしなど言ふものあらば僭越の罪を免れず、されば女

訓に於ても先覺者の意見を批難してさながら愍人視する如きは其罪更に深しと知るべし、今日は學術の進歩に伴ひかゝる非禮者甚だ多し。

女子教育上の主義即ち女訓を分ちて二となすを得るなり、曰く第一普く女界一般に渉りて殆ど千古不變の訓戒曰く第二一時一所にのみ適して廣く一般に通ぜざる訓戒これなり、例之女子は子孫を保育すべきもの婦人は良人に貞節なるべきもの、亦婦女は感情に富みて慈悲恩愛などの淵源となるべきものと言ふ如きは第一に屬して人類の開闢以來少しも異論なかりき、これに反して三從の道とか七去の説の如きは時勢と思想の進歩に由りて相變移するを要するものなり、如何となれば封建制度の盛なる武家時代に於ては男子の系統を尊び家長の權威を重んずるを以て女子たるものは老いては子に從ふ如き必要も起らん、故に其の當時にありては正しく必要の女訓ならん、否今日にても倘必要の場合なきにあらず、七去に於ても子なければ去ると言ふ如きは生理學上の智識まだ幼稚なるころに於て全く子の原因は女子にのみありと妄信せし罪にて、今日の如く智識の進歩につれては唯一笑に附せらるゝことなるも其の實は恐らくは止むを得ざるべし、況んや子なければ去るとの訓戒は今日は反りて不道德に屬す、されどこれ時代の結果にて怪むに足じ故に今後用ひざれば可なり。

古は婦言とて婦人の四德中に寡言を戒めたり、本朝女鑑第十一に曰く女は陰氣の性を受けたるものなれば靜なるべきに却つて聲高く言多く口にまかせて言ひ散らさんこと先づ其の天性に背くなり云々、然れども今日は社會の民人日一日と交際の頻繁なる必要を生ぜしかば婦人は餘り無言なるよりも雅にして害なき範圍に於て話柄を撰び食卓に列する來賓を欠伸せしめざる工夫を要求するに至れり、これ亦社會の發達と共に促されし結果なり、故に今日とて言葉多くして禍を釀し、例も少からざれば寡言の必要は依然として存せんも他の意味より談話の必要を認むるのみ、などかこれを單に古今の相違のみとせんや。

封建時代にありては家庭は嚴威嚴格を以て要素とする必要ありしも今日は夫婦を以て家庭の中心となし從ひて愛は家庭の要素となれり、これ國民が立憲政体風の生活に慣れしため自然に隨ふ餘響なり、故に時代の上より公平に許せば共に宜しきに適へり、決して獨り古を非とも今を是ともする理由とならず、若し古に於て父子を基とせずして夫婦の愛のみを主とせば水なき所に住む魚の如くおのづから自滅せしならん。

亞米利加の如き社會にありては個人主義を唱る必要あるも直ちにこれを敷島の大和の女子に移して敎へんか。不自然のため不幸の結果を見んことさながら火を見るが如し由りておのれは家族制度の全然廢滅せらるゝ曉まで父母は更なり舅姑に事ふる道をも若年の女子に敎ふる必要ありと信せり、されどこれ亦今を非として古を是とするにあらず、日本の民俗と女子敎育を一致せしめんためのみ。

蓋し古は上に向ひて事ふる訓戒のみを專一とせり、即ち子の親に對し妻の夫に對し臣の君に對する道のみを說くに偏せり、されど道德は民人相互の人情を主とすべきものなれば上より下に向ふ道をも敎へざるべからず。即ち親の子を養ふ道夫の妻に行ふ道等を訓へざれば恰も世道人心は隻輪の車片翼の鳥の如くならん故に今日はこの道德上の欠損を補ふこそ急務なれ。

彼の士農工商の差別明なりし古は種々の高名心を抑壓する必要あるを以て所謂由らしむべし知らしむべからずの方針を取りて、婦人にも單に服從のみを敎ふれば足れりとせり、從ひて其敎育なき結果より女子は無爲無能となり終るべし、玆に於て女子と小人は養ひ難しとの言に違はず、愈女子は劣等のものとなりしが今日は女子も敎育の光に導かれて事理に通達するもの多ければ小人と伍するものとなすべからず。されど敎育なき婦人はなほ養ひ難しと言はれ得べき實あるを免れず、故に婦人の位置を高むる道は敎育に由る外ぞなき、但しかゝる時代の婦人は各我が分に安んずるを以て放慢に流るゝ如きことなかりしも今日は分不相應の空想を懷きて煩

悶するもの日一日より多からんとす、これ女界のため研究すべき問題にこそ。

亦教育の充分なる發達なき時代に於ては人は專ら感情に由りて支配せられけんを以て其の女訓も感情上の刺戟となるもの多かりしが如し。例令ば良人の戰死を聞きて黑髮を切り以て身を寺院によする如き極端なるもの多し、されど今日は教育の進歩と共に理性の發達せしを以て常識を離れたる女訓は殆ど効力なければおのれは亂世の烈女よりも泰平の良婦を以て女子の理想とすべきものと信ぜり。

されど多く見且つ聞きて其の最も善きを撰ぶこそ必要なれば天下の婦人たちは今昔の女訓を比較して善を採り惡を捨てざるべからず、おのれ封建制度時代に生れ武士道風の女訓を受け遂に身の境遇上明治今日の時代に立つべきものとなれり、由りて萬事につけて今昔の感に堪へざるもの多し、わきて女訓の如きも意思の健全なる貞節の强固なる如きは今日に於て夢想だに及ばさるものあり、故に女子たるものは、輕擧浮薄の言行を事とせずして、今日呉竹の開け行く世も必竟日本幾千百年の歷史の由來を有するものと知りて徒らに今を以て古を笑ふなど淺き心を懷かざることそゆかしけれ、是を以て年頭に今昔の感を記すことゝかくなん。

婦人と耐忍

塚本はま子

耐忍の美德にして、何人も缺くべからざる事はいふまでもなけれども、ことに婦人が耐忍を德とすべき事は識者をまたずして明かならん。しかもわが國の婦人が、世界の文明國、先進國と稱ふる泰西諸國の婦人に立ちまさりて、耐忍の力强しときゝては、聊か心を强うすべく、まことに喜ばしき限りといふべし。かの外國にあ

りて、ながく醫術を究め、新たに歸朝せられし諸博士は必ず彼我の婦人を比較して、その病床苦悶の間にありて、病苦に堪ふるわが國の婦人を歎賞せざるは稀なり。ことに婦人生涯の最大苦痛たる、出産時の苦に堪ふの力の增されるは、まことに意外とする所にて、西洋の產科醫はわが國婦人は、生理上出產の苦痛彼の國婦人より少きにはあらずやと、疑へるもありと聞く。されど感情も強く、神經も鋭きわが國婦人が、いかでか野蠻未開の劣等人種に見る、苦痛を感せざる如き鈍き神經をもつべきか、たゞ修養によりて、かくまでに苦痛に堪へ、笑つて苦悶をも押ふるに至れるのみ、まことに賞むべき品性といふべし。されば歷史に表はれたる事實に徴するも、歷世の后妃何れも跳梁跋扈のあとを見ず。中古藤氏の盛なる時にあたりて父子兄弟姉妹をもて、朝家の重きをなし、思のまゝに威を張り、福を求むるを得べき時に當りても、后妃の驕れるを見ず、わがまゝの擧動ありしを聞かず。終始つゝましく遜りて、よくその分にとゞまり、その位置に安んじ、婦德を全うして後世の批難を免れ得たりしもの、豈耐忍の德によらずとせんや。まことに耐忍は、わが國婦人の頭を飾る、美しき冠といふべし。されど古の聖人も、なほ中庸を貴みて、

過ぎたるはなほ及ばざるが如し

といひ置かれたるが如く、かゝる美德の修養も、度を超えては、終に弊に陷り消極に沈みて、神功皇后の勇氣も、形名の妻が決心も今は昔の夢と消えゆき、嗤るまじとの用意はあれど、賞められたしとの望はなく、內端にひかへ目なるをのみ婦人の德とし、不自由不便をも忍び、不幸不遇なるにも耐へ、意を殺し情を押ふるが爲智の開くるを忌み、理を悟るをいやしめ、まことに異性の奴隷としてのみ、數百年間敎育し來たりたれば、衣服はもとより飲食にも、舊習を重んじ、新規を疑ひ、人の耳目を引かん事を恐れては、わが不自由を顧るの暇なく、窮屈を忍びて過ごしたる習、性となりて何事によらず、新規を望まず、改良を願はざる卑屈の習慣を

養ひ忍耐すべき事とすまじき事との區別を知らず忍耐して却て害毒を生ずべき事までも忍び遂に婦人として新しき事を望み、改良を思ひ立つなどはあるまじき事の如く、われ人ともに思ふにいたり、稚な遊ひにも女はかくはせぬもの、さはいはぬものとまでに、親も教へ身みづからも覺えて、疑をたにおこさぬに至れること、怪しとは見ゆれどまたさるべきいはれありぬべしとも思はる。

こゝをもて、婦人の身につけるもの、手に委ねられし事は、不自由不便を耐へ忍びたる結果進歩におくれ、改良に遠ざかりたるふし少からず、そが一例を擧ぐれば、元祿以後婦人の屋外にいづる事いよいよ稀になり、驕奢日に月に甚しくなり、行きしためか、帯廣く袖長く益々行歩の自由を害したりしもその、不自由に耐忍せる婦人は、明治の代に移りて、通學に交際に、貴きも卑しきも、あらゆる婦人の外出の道開け、朝に夕に雨に風に、男子と同じく曝らさるゝも、なほ重き裾、高き下駄の苦痛に堪へ、人手を借りて頭髪を理め、車によりて用便を遂すの不自由を忍びぬ、見よ夏如何に暑き時も、厚き織物に厚き心をいれたる巾一尺に近く、たけ一丈にあまれる帯を結ぶにあらずや、そを形よく結ばん爲には、大なる帯揚を胸高にかたく結ひ、長き裾の着物を一々に腰骨のあたりにてくゝりあぐる、その不便その不快とても男子の眞似し得べき事にあらず、耐忍強き婦人にして初めてこれを忍ぶを得べし。しかも昔の如く、裁縫と炊事とのみをもて一生を終るにはあらで、學校にも通ひて物を學び、旅行をもなし交際にも出づるとせば、その苦痛いふべからず、ことに冬の寒きにあたりても、普通の日本服にては股引を用ふれば裾にからみて歩み難く、用ひざれば椅子にかゝりて寒氣堪へがたく風吹く時は醜き處もあらはれて、辛く悲しき心もすべし。されば妙齢の婦人が、通學するに、片手には洋傘、片手には重き書物の包をかゝへつゝも、裾を押へて風と爭ふさま、いぢらしくもまた氣の毒なり。かく不便を忍び、不自由に耐ふるもまた過度の耐忍の結果といふべし。

猶そが掌裡に握りつゝある臺所の器具を見よ幾百年の昔より用ひ來たりけんさましたる、不器用なるもの少からずといへども、打ちいでゝ不平を述ぶる者なく、改良の案を立つる人なければ、今も上代より傳へ來し姿とも見ゆる、杓子、把杓の類をはじめ、竈しちりんの類に至るまで、近來に至るまではかばかしき改良の機運に達せず、たま〳〵改良せる臺所道具などあるも、これを使用するもの極めて少く、水道を敷き瓦斯を用ひて便利なる厨房を作り得べき土地にても、なほ朝は車井戸のきしりを聞かざれば心地よからず、竈の烟にふすぼらされば樂しからずなど、因習によれる感情のみにて、毫も理學的の進歩を喜ばず、萬事理性の判斷を主とせず、過去の不完全なる仕來たりのみを重んずる感情の制裁に捕へられ、改良進歩の志あるものをば、生意氣と嘲けり、出過ぎ者と譏り、手なれぬ器具の使用法になれんとする智識もなく、進んで新しき物をとらんより退きて古きものを守らんとする念のみなるは、まことに歎かはしき次第といふべし。さりながらこは衞生、便利、經濟等に關する物質的の事のみにして、眞に平和に家内を理め。

眞聖に家庭を保つ

ためには猶精神的に姑息なる忍耐と、卑屈なる服從とをさけざるべからず。人或はいはん「わが國の如き家族制を取れる土地に於ては、老舅姑も同棲し、叔姪姉妹も同居せるをもて、この間に立てる主婦が平和に家内を理めんには、萬事に耐忍を主とし、善惡邪正を撰ばず、舅姑叔姪の意に、もとらざるをよしとす。などか耐忍と服從とを避くべき」と言一應のことはり聞こゆといへども、未だ社會の進歩を悟らず國家の隆盛を望まざる人の言といふべし。まことにわが國の婦人は、一家の主婦としては、專ら舅姑に孝養を盡し、叔姪姉妹の保護監督に任ずべきは勿論なれども、家長の品性を高め、卑しき現代の嗜好より遠ざかり、紳士たるの品格を保たしむるやう内助すべき事は、家運の隆盛を期する婦人が第一の任務とすべきことならん。若しよく國民中の主

位にある紳士にして、品性高く品行正しからば、國家の威信は一世に重かるべく、社會の秩序はとゝのへずして整然たらん、家運を隆盛にし、國威を重からしめ、社會の秩序を整ふるも、皆これ紳士の品格にもとづくものとせば、紳士の夫人たる淑女は、奮て夫を内助しその品格を高尚ならしむるやう努めざるべからず。内助の功を全うせんには、たゞ舊習と仕來りとに甘んじ、進歩改良の念なき姑息の耐忍と卑屈なる服従とにのみ依るべからず、男子も亦一種の人間にして弱點に富めるはいふまでもなく、學者の前には心を直し、智者に對しては容を正し、賢者を見ては行を改むれども、事理に迂き愚人に向ひては、我意を振るひ、理非曲直の辨別なき白痴に遇ひては、我欲をも擅にするもの敢て珍しからぬ形勢なれば、事毎にうちは、ひかへめにして、おのが意を人前にあらはさず、無理を忍び壓抑に堪へ、愼しみ深くして耐忍と服従とをもて女德とせる、そが細君なる婦人に對しては、心を直し、容を正うし、行を改むるや否やまことに覺束なき事にして、我意をふるひ我欲を擅にするに至るべきは必然の勢なるべく、又弱き人類の免かれ難き缺點といふべくおのれは寧この壓制なる暴主を惡まんよりは、そのこゝに至らしめたる、弱く意氣地なき服従者を罪せんとするものなり。

抑々現代の紳士なるものは、舊日本より新日本に移れる時代の混亂なる世に成功せる、いはゆる英勇豪傑の大功は細瑾を顧みずと高唱して、大義親をも滅するの勢をもて勇奮猛進して、事局の難關を破り、今日あるを致せる人々を模範とし、古き武士道はすたれ、新しき紳士の標準いまだ立たざる世に立てるものなれば、外面の禮讓やゝ備はれりといへども、内部の覺悟いまだ定まらず、國家の秩序漸く定まりて、家庭の規律全く整はざる今日の社會に在りては、恐るべき人の前には謹愼なる紳士となり、恐るまじき人に對しては、英勇豪傑の仲間入りして家庭の紛亂妻子の困難を意とせず、收入の半以上を、交際の名のもとに遊蕩に消費して惜しまず、賤業婦を娶つて妻とせる大官あり、万金を積んで歌妓を購へる博士あり、海外より新たに歸朝して家門を

訪はず、料理屋に幾月を費して誇とせる紳士あり、青樓の不潔なる空氣中に轉地療養せる法官あり、婢妾に給する金員の半にも足らざる額をもて、一家の生計を立てよと正妻に嚴命せる軍人あり、しかも彼れ等は普通敎育あるはいふまでもなく、德義をわきまへ常識を備へ、社會の上流に位し國民の尊敬を受け、妻子を有し一家を搆ふものなりといふに、至りては、まことに珍らしくも怪しき振舞なりといはざるべからず。ことにその忍ぶまじきを忍ぶをもて耐忍の美德とせる妻はこの屈辱に堪へて閨中に泣くの外、何等の策あるなく家庭を亂だす妾と親密なるを粹とし、良人をたぶらかしその品性を下劣に導く賤業婦を家門にいるゝを、此上なき貞女とおもひ、子女の敎育に過りて第二の國民を賊し、恥を外邦に招きて國威を落とすを思はず、後進の靑年にあやまらしめて社會の秩序を亂すに至る、實に憐れむべき事どもといふべし。

若し不幸にして天災、病魔その他のがれ難き不慮の災害の爲、一家日々に零落し、良人また不治の難症に罹たるが如き場合に於ては、如何なる困苦艱難にも堪へ、假令共に屍を路上に曝らすまでも、忍耐してその家を去るべからずといへども、不幸にして良人が人道をなみし、家庭といふ觀念を失ひ、夫人と子女とを侮辱するに遇ひ、再三再四諫めて用ひられずんば、その家を去つて獨り靜かに世を送る覺悟あるべし。これ放蕩子の面を犯す最後の諫言なり、誰れが良妻の敏腕を振ひ整理せる家務を、人らしからぬ賤しき婦人に委ねて滿足するものあるべき。この最後の諫言には狼狽せざる紳士は少かるべく、早晩後悔の念を起さゞるものあらざるべしかくて前車の覆るを見ば、後車は誡めずして自ら愼しむに至るべく、萬一かくの如き成功を見ば、身は犧牲たりとも喜んで苦境に在るべく、甘んじて不幸に安んずべきなり。されば婦人は

獨立し得べき伎倆を養ひ

一定の見識をそなへ、社會に立ちて獨行し得べき素養なかるべからず。その素養ありて後、初めて所信を實行

し得べし、若し猶ほかゝる悲慘の場合に於ても耐忍を婦人唯一の美德とし、如何なる虐待にも耐忍して、一言の諫も女の差出として憚り、絶えて切諫をもなさず、改善の方法をも計らず、外面にのみ平和を裝ひ、貞女に扮し樂しからぬ家庭の破綻を繕ひてのみ、世をあり經ば、女子はかばかりぞと愈々あなどり、家庭を輕じむる事益々甚しく男子の品行漸々亂れ、一家の經濟は全く亂調子に陷り、高利貸に迫らるゝもの、賄賂を貪るもの頻々として珍しからざるに至る、豈寒心せざるべけんや。苟くも男子を內に助けて人道の正しきを步ましめ家庭を神聖にして國家の基礎となし、社會の秩序を整へんとする婦人は、學をつとめ業を勵み、一定の見識を立て、獨立の伎倆を養ひ、たゞ服從にのみ泣き、忍耐にのみ苦しむの愚をすて、不便なる服裝は廢し、不經濟なる厨房用具はあらため、內に男子を助けて品性を高うせしめ、國家の基礎たる家庭を淸うして國民の元氣を養ひ、社會の秩序を整へ、外に國威をあらはし信用を廣めんが爲に我國婦人に特有なる耐忍の美德を愈々發揮し、萬難に勝ち得て世界の鑑となるべき事、望ましき次第なるべし、聊か所見を述べて我國婦人の守るべき耐忍の程度を說き併せて忍ぶまじきに忍ぶ婦人の過ぎたる忍耐が、一家と社會とに及ぼす不幸を告ぐ。

女訓春夏秋冬

常宮周宮御用掛　小川直子

ひまゆく駒のたゆみなくはや明治三十六年も過行て三十年餘り七とせとは成りぬ、今日は天の戸の押明方より露斗りの曇りもなく空の氣色も晴渡りあらたまりぬる年と共に人の心もおのづから昨日には似ぬ心地して、長閑けきにつくづくおもふやう、一日の計は朝にあり一年の計は元旦に在といへりされば一とせのあらましごとも如何せましと考ふるに、先づひとゝせの序に順ひ、四時につけたるそれぞれの設けなかるべからずたとへば春の程より夏の設けをなし、夏は既に來む秋の用意を調へ秋になりなば　夜寒の頃に至らぬ程に冬の衣服を調じなど時おくれぬやうにいそしまむこそ女たる者の勤めなるべけれ、其勤めをなすにも先づ淸き心を基として何事も道に叶ふやうに計らふべしされば其基となるべき心

を磨き身を修めむ事こそ肝要なれ、さるからに四時の序に順ひて德を修むる考を述べむ、今日しもあらたまりぬる年の始なれば、先づ引はへたるみしめ縄のすが〳〵しきを見て、心の曇り拭ひ、塵を拂はむかゞみとし、軒端には朝日待ねてほゝゑみ初る梅が枝のをゝしき姿にて萬の花にさきがけする風情をみて、おのれも開けゆく世に遲れじと鋭心を振り起して才智を開き、夫よりやう〳〵垣根の雪のむら消ねてわづかに萠ゆる若草の青みゆくが朝な〳〵に伸びたつさまの弛みなきに心を止め日に月に進みゆく世になずらへて我なす業のすゝまざるを省みつゝいそしまむには怠る心もいで來ぬ理りなめり。はた春日うらゝかに成り行まゝに柳の糸の染かけてゆるやかなる風に順ひ、靡く姿のやすらかなるは實に今川大人が敎へ置かれたる面は、楊柳の風に靡くが如くにとあるを思ひ出て、なづかしからん工夫を試みそれよりはやゝ春深く成りゆきて垣根に咲く山吹の清げなるにもいはぬ色なる誡を思ひ、言を愼む道を悟り、又いつしか春も暮果て待れと來る夏の日も其始つ方はまだ涼しくてみづ枝さす木末どものうるはしきなど見出せば窓の若竹すぐ〳〵しう生ひたちたるをながむるにもくれ〳〵しきれぢけ心はもたじと己も愼み人をも誡めなどして心を矯むる鏡ともせまほしきわざなりけり。いかにとなれば女の性質はともすれば曲り易くまして齡もやゝ加はりて、老の山口入初ては愛嬌おくれて邪心の萠す頃ほひなれば、爰に心をそゝがずば才智のたけたる人とてもいつしか心の曇りはてわれ知らず邪道をはたらき世の正道を妨ぐるに至るものぞかし。又氣の和らかなる人は僻みを生じ、かれこれと物うたがひなどしつゝ遂には老の僻みにおちいりて、果は年頃恩愛をかけ來つるうからやからの者にすら疎まるゝ例も少なからず、されば若き程より明暮爰に心を傾けてまことの道に至らんと工夫をこらすべし、はた夏も半と成り行けば日影はたゞ〳〵日盛に土さへさくる堪へがたさをいかにして暮さむと思ふ折しも見出せば庭の木草も打しなひよられたるが中より晝顏のひとり暑さを餘所にして勇ましげに匂ひ出たるを見ては我身を省み堪へがたしと思ふも心からぞと我と我身を誡めつゝ忍耐の心を練る便りとし靜に心を澄しならばさのみ苦さもおぼねぬなめある人の句に

　　すゞしさや心ひとつの置どころ

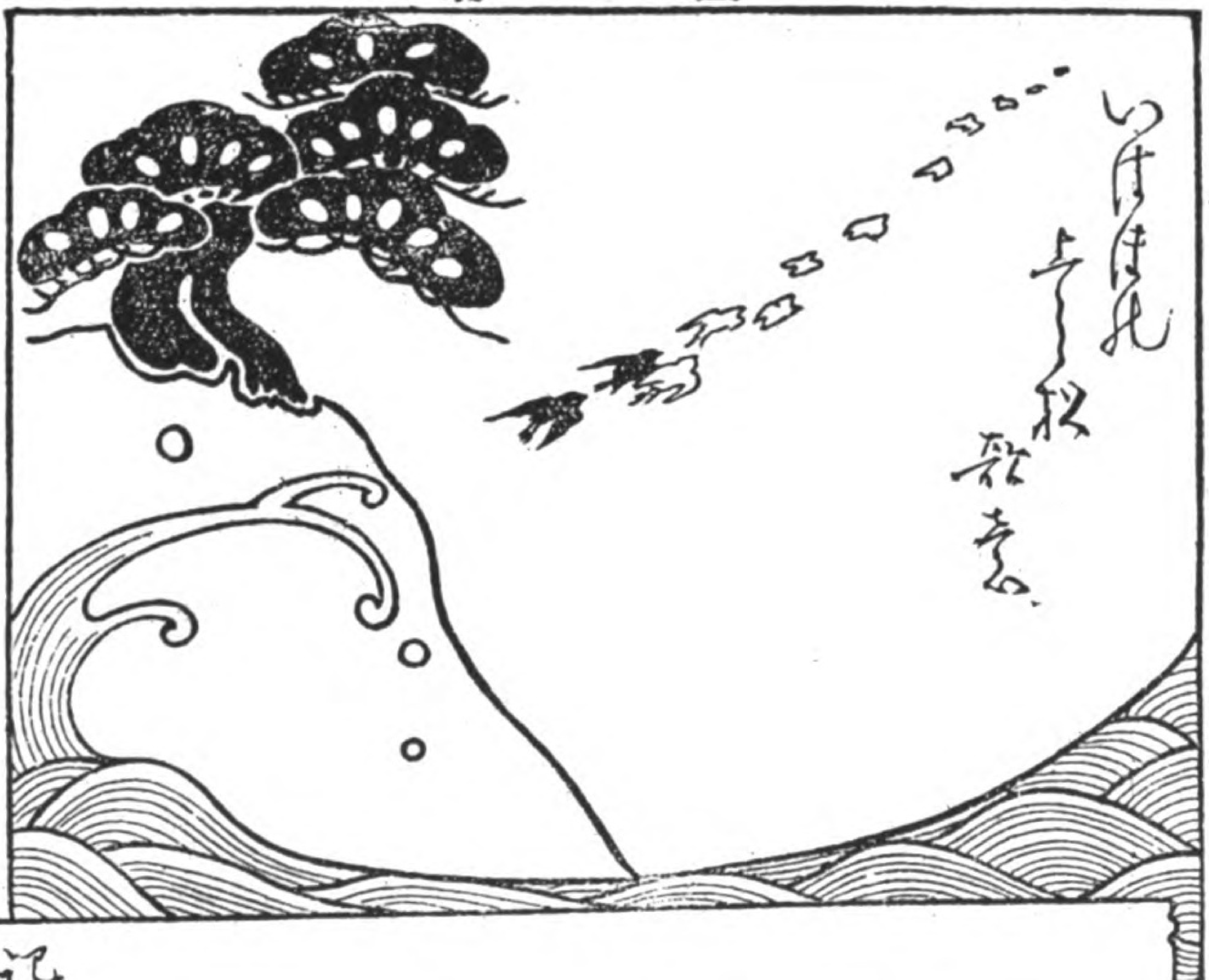
といへるあり實にとおぼゆるぞかしかくて待らわたりつる秋にもなれば園生の中に咲出る秋はぎの枝もたわゝに匂へるが白露の玉をかざして打ゆらぐがいひしらぬ風情したるは立居振舞なよびたる少女に似たるにあらずや、されば其趣を心にしめて我もまたこれに習はむと心を爰にそゝぐべし、女はすべてらうたきさまこそ願はまほしけれらうたきさまに遲れたらん人はとづきて夫につかふるにも愛を受る事うすかるべし、彼源氏物語の葵の上は源氏の君に親しみかれ紫の姫君はたぐひなきものにめでられ給ひし例もあるぞかし、昔物語とのみ思ふべからず猶今の世の中日に月に交り廣く成り行て何の會くれの集ひとさま〳〵に交はる道の開け行けば世にいふ人づきせぬといふおもゝちにては如何はせむはた夫たる人も今日は爰のあがたに勤め明日はかしこの國にと赴きて大なる事業を起さむなど所々方々を經めぐりつゝ、御國のために事を謀る折にしあれば其夫は隨ひて手ふりもしらぬ國に至らん時交りの道に疎き人は萬につけて便りあしく淋しさをも感じて心ゆかぬ事多かるべしかへす〳〵も愛々しうらうたきさまこそあらまほしけれ、あはれ又やゝ秋深く成り行けば村時雨のふり初めて樹々の木の葉を染めむとするに、一しほ二しほの程はいづれの木末の染まむとも見ねれども、昨日も今日も打しぐれ、ちしほそゝぎて日を經れば軒のしのぶも色にいで峯の紅葉も深くなりか

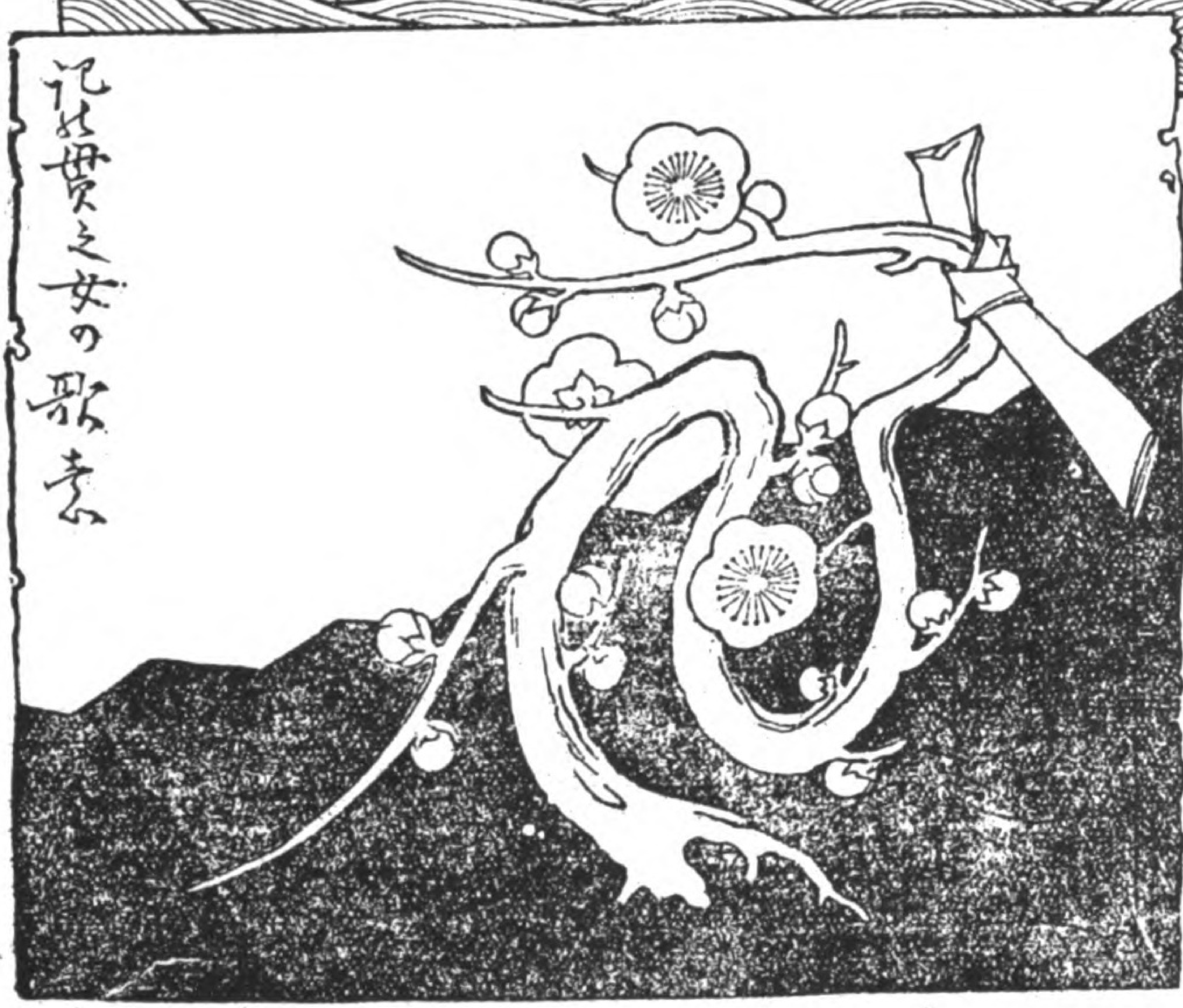
れこれ人の目にたつ中に常磐木のみは夕べ／＼の露にも堪へ降りしきりたる時雨をも知らず顔にて緑の色のうるはしう、つやゝかなる此こそ女のためにはこよなきかゞみならめ、いはゞ彼紫のおもとがほどよくいひのかれて末つひに清らかに過したるにもたとへつべし。近き頃は若き少女も志を高く持ち終身嫁がずして何にまれひとつ世の釜ともなるべき業を思ひたち獨立せむとひしめくもあり、または幸なくてやもめと成りける人などはひとり住にてすが／＼しう何くれの業をもとりつゝ人に倚らで世を過さむと思ふも多からむ此人に誰かは操をやぶらんと思ふ者あらん、皆我こそ鐵石の心をたもたむと思ひつゝ月日を送る程に、ゆくりなき事より守る心のゆるびいで、心にもあらぬ方にさそはれゆきつゝ迷ふらん。ひと度迷ひの心いで來れば省みる心もいつしかうせ果て遂に親はらからの面ぶせなる振舞をすら世の人にうたはるゝ輩なきにしもあらずかし。これなむいにしへに男女の隔おごそかなりしに今の世は何事にかゝづらふにも男女うち交らひて萬とり行ふ習ひなればあやまつ人もなどかなからん歟かはしき限りならずや、されどかく開けゆく世は女たりとも御國のために心を盡して、力のあらん限りいそしまむこそ勤めなるべけれ、よりて世に交らふ人はつかの間も正しき道を忘れじと心に強く誓ふべし。かゝる程に別を惜める秋も暮木枯の吹すさぶ音に冬來にけりと驚けば朔な／＼に肌寒く秋ひね／＼しう成りもてゆく頃より庭の小笹に霜さえてやう／＼冬ごもりの心しらびにくさ／＼いそしみ暮す程にはや年も暮れむとするを歎きつゝ打あふぎたる大空より降り來る雪を花かとも見るかまに／＼積りゆき庭も籬も野も山も埋れはつる雪氣色すが／＼しうて軒端にたてる老松の白雪にうづもれながらをゝしき姿を失はず露斗もたわまぬ色のをゝしさに例の松栢のしぼむにおくるゝ教を思ひながめ暮すにも精神のたわまず動かぬ工夫をこらす便りとせむ、かく工夫に心を盡さばますら武夫にもをさ／＼劣らぬ精神とも成りなまし、此たわまず動かぬ心を養はずば如何斗智識はすゝむとも人がらは高上となる事あたはざるべし、それのみならずゆくりなき災難などにあへる時めゝしき心のみいで來て徒然に氣を屈し窩にかこちて世を恨しう思ふ心もいで來るものなりかしされば兎にも角にも氣を治め精神を練る心こそつかの間もわするまじき事なりけれと思ふ世のため國のためよきが上にもよき女の澤にいでよと祈るにて先づ年の始に一とせのあらましごとをとていさゝかなん。（完）



圖案

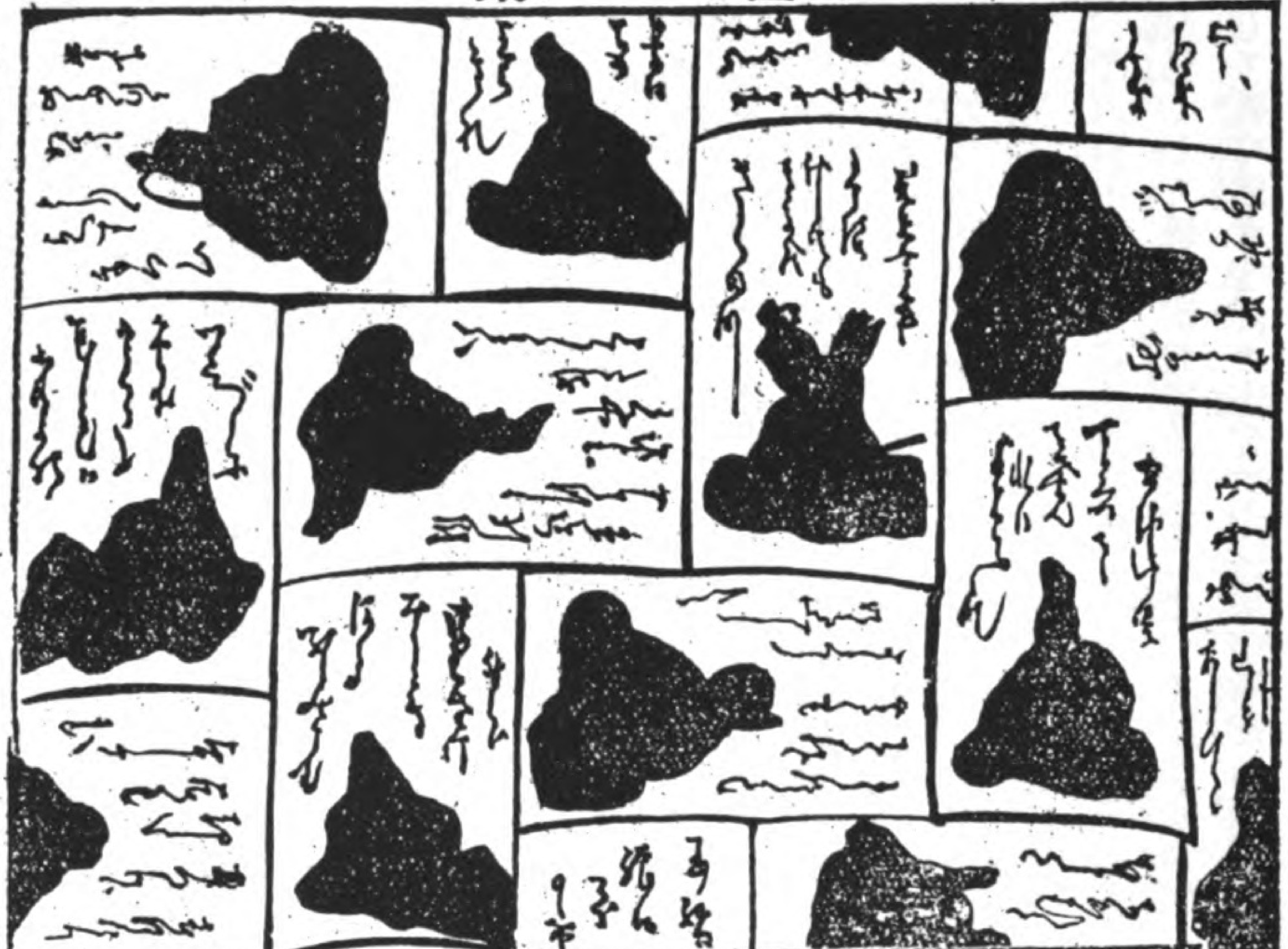
御題巖上松



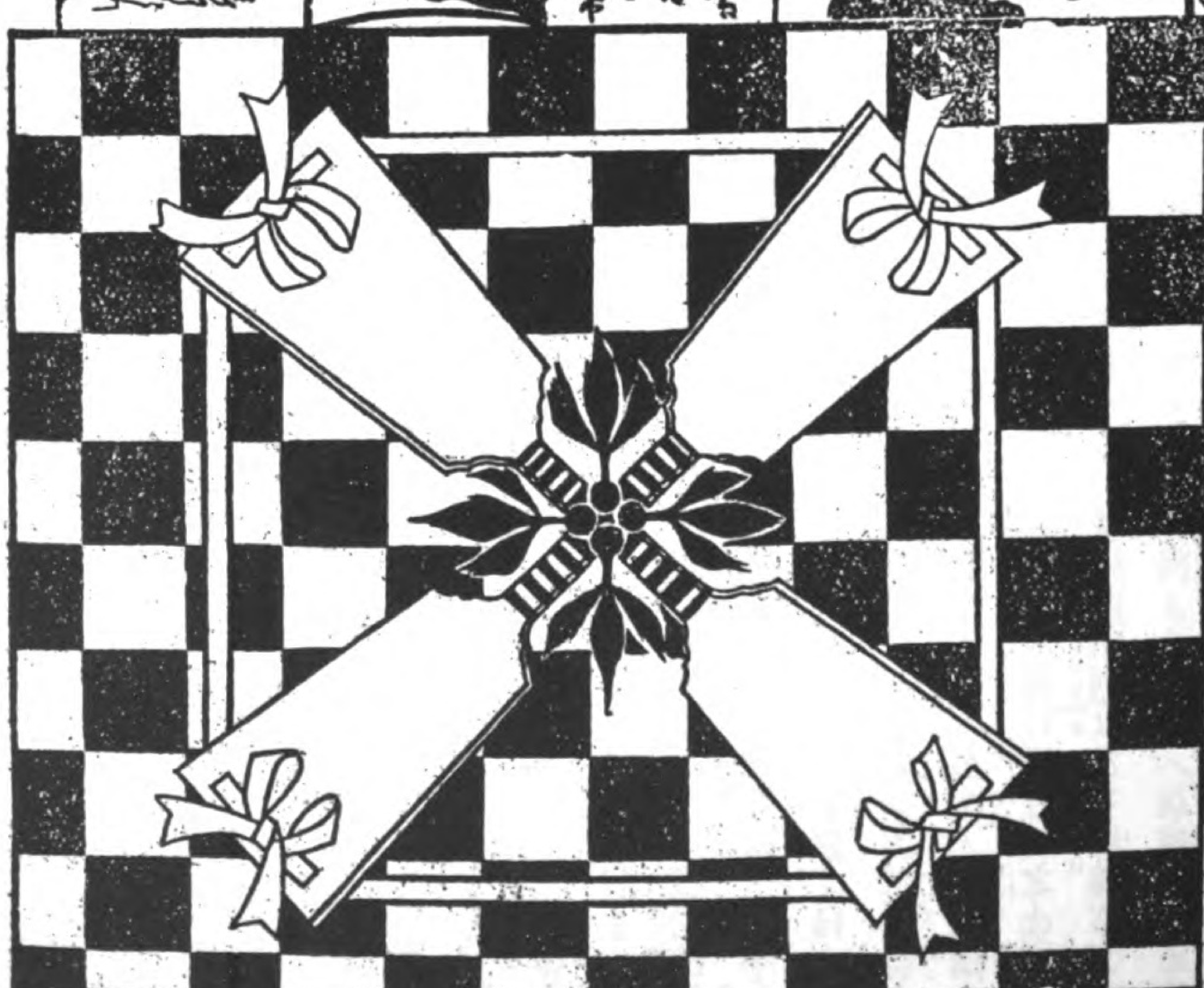


鶯宿梅

圖案



歌かるたの散點布圖もよう



同 羽子板に突羽根



黑龍江畔の勇婦

長谷川四迷

昨年の夏、われ事を以て露領浦潮斯德に之く、一日市中の書肆を蒐りて、新刊の雜著紛々として几上に堆積せる中に就きて、偶黑龍江畔勇婦傳一冊を得たり、旅宿に歸りて卒讀一過するに、頗る興味あるを覺えければ、鞄の底に藏めて持て歸りぬ、

勇婦、姓はユーヂナ、名はアナスターシヤ、イサーエウナ、里方の姓をヷリヤーロワと云ふ、兵士の女なり、千八百七十一年露西亞トムスカヤ縣の某村に生る、幼くして縣の素封家某の家に寄食す、主翁無情にして善く遇せず、ユーヂナ十三歲の時遂に其苦に耐へかねて竊に主家を忍出で、それより江湖に浪跡して備さに人生の苦楚を甞めたりしが、十六歲の時緣ありて農夫コンスタンチン・ダウイドウイチ・ユーヂンに嫁ぐ、初め村居せしを、後武府（ブラゴウエーシチェンスク）に移り住みてかづ〴〵世を送りぬ、ユーヂナ人と爲り極て勤勉、自ら鋤を荷ひて隴畝の間に耕耔し、終日營々として倦むことを知らず、暇あれば則ち銃を執りて山野を馳めぐりて飛禽走獸を狩くらす、又游泳を能し、棹を操りて舟を行るに妙を得たり、家に在りては炊爨の業より以て裁縫洗濯金錢の出納に至るまで、凡そ家政一切の事、皆手一つに之を引受けて、いと甲斐々々しく立働くほど、生來健康の身はいとゞ健康になりまさりて、いつも元氣好く、若し貧を以て荒牛に喩へんか、彼は怯めずにオッと立向ひて、諸手を双角に掛け、之と引組まんずる意氣ありて、眞に西伯利女たるに愧ぢざりき、

かくて嚴冬三伏聊かの怠もなく、能く家を治めて十

年ほどを過ぎつる時、圖らすも運忽ち開けて俄分限の數に入りぬ、抑も西伯利廣しと雖も、金鑛の探險を企てぬ農夫は一人もなし、彼の夫なるユーチンも亦其數に漏れで、永の歳月才槌片手に其處らの地面を敲廻りて、いと恍惚たる狀なりしが端なくも福の神齗然と笑みて、年來尋佗し金鑛脈にふと敲當てぬ、



去程に夢か現か昨日の襤褸を今は錦に脱替へて、武府に厳めしき大厦三棟を搆へ、坑山にも控邸をしつらへ、厩に良馬を繋並べて、いと華かなる世を送りつ、發跡者の常として、何もえ辨まへぬ愚かしき身にてありながら聊ばかりの出世に誇り、無精に懶惰に我儘勝手に振舞ふがなべての習なるを、ユーチナばかりは聊もさる氣色はなくて、昔に渝らず温良に身を持ち人を愍む心深くて、ユーチン一家のこれぞ大黑柱と人々賴もしく思ひけり、

折しも千九百年、北清に拳匪の亂あり、時に滿洲の

官民は平生露人の傍若無人なるに切齒しゐたるを以て、期せずして一時に蜂起し、黒龍江畔の薩哈嗹村に據り、壘を築き大礮を運び、對岸の武府を砲撃す此時武府の戍兵は大概出征して留守の兵は僅に五百に充たず、固より以て競立たる清兵に抵るべくも見えざりければ、全市の人民震駭し、貨財を載せ老幼を扶け、難を郊外數里の地に避くる者、紛々として踵を接せり、守將狼狽して謀の出でん所を知らず急に令を布きて義勇兵を募集し、留守の兵と力を戮せ、河を隔てゝ防戰せしむ、此時ユーヂナは齡方に三十なりしが、事の急なるを見て、婦人の身を以て慨然として國難に赴き、屢危險を冒して殊功を樹て鬚眉男兒をして顏色なからしめたる、事は後に載する其直話に審かなり、事固より甚だ奇なるにあらずと雖も、兎も角も輕佻と人の誹るをも顧みず、運命を神に任せて、敢然として死地を踏みたる、その勇氣の凜烈なるは、豈に懦夫をして起たしむるものなしとせんや、

亂平ぎし後、莫斯科新聞の通信員三たびユーヂナを訪ひ、切に其功名談を聽かんことを求めたれど、肯かれず、可惜望を空うして歸れりと聞きて、好事の者あり、偽りて當時の戰友なりと稱し、辛かりしはお互の懷舊談に托せ、謀りて聽取れる所を退いて竊と筆寫し、さて世に公にしたるが即ち此勇婦の直話なり、さるからにユーヂナの言葉遣ひ、稍粗野に流るゝ傾あるは教育なき身の無益しく辭を飾る遑なければなるべく、それを飾らぬが花と其儘に寫したる筆者の用心、こはさも有るべき事ならんか、

勇婦の直話

（一）

七月二日の晩六時ごろの事でございました。私は臺所で支度をして居りますと、俄にワッ／＼といふ人聲で、宅の近邊で鐵砲の音がポン／＼するのでございますよ。多分練兵場で操練が始まつたことゝ思ひまして

フト憶出せば、宅の舍弟が新兵に採られましたから、それを見送に參らなければなりません。で、二種三種お菓になりさうな物を包んで、それにパンを添へて、兵營へ持つて參らうと存じまして、門を出て少し參りますと、一中隊ばかりの兵隊が參るのに出逢ひましたが、其內に舍弟も居りまして、まア貴女何處へお出なさる、危い〳〵ッて皆が申すのでございますよ。舍弟に持つて行つた物を渡して引返して參りますと



往來はパラ〳〵人が駈けて行つて、泣くやら叫くやら大變な騷で、子供の手を引張つて駈出す者もあれば、顚倒ぶ者もあれば、包袱を落して狼狽してゐる者もあります。彈丸は雨のやうに飛で參りますけれど、未だ怪我を爲た者は無いやうでございました。

乘つて居りました馬車の御者が一生懸命に馬を急がせて、アメリカ町をアムール町の方へ駈脱けやうとして、ヒヨイと曲角を曲りますと、破裂彈がビユッと頭の上を通

越して破裂致しました。スルト其處いらが急に大層騷騷しくなりましてね、大勢此國の人が何だか支那人を捉まへて、一所へ寄せるンだつて、大騷を遣出しました。

見ると、貴君、牛が何處からか飛で來るやら、馬が驚いて町を駈けて行くやらする中で、大勢の人が、男も女も泣きながらお祈をしてゐるのでございますよ。お知己の方にも逢ひましたが、皆さんが

「何處へ、貴女？一所にお迯げなさい、早く〳〵」

ツて仰しやいましたけど、私は、

「何處で死んだつて、死ぬ味は一ッです。運が無きや其迄さ、」

ツてツて、宅へ歸つて參りました。

歸つて參りますと、宅はガランとしたもので、子供達ばかし一所に寄つて泣いてるのでございます。窓から庭を覗いて見ますと、誰だか人を擔込んて來ますから、能く覩ると、それが、貴君、親類の者で、四人の子の親なんですか、鰥夫になつて居りました。一體シヤドリンさん（金山の持主にて分限者なりとぞ）の所に雇はれて工場の方に居つたのでございますが、破裂彈に中つて材木が倒れて來るソノ下になつて怪我を爲たのださうで。

宅が丁度山へ參つて留守だもんですから、定めし無人で心細からうと思つて、謂はゞ私共の保護に參る積なんでしたらうが、反對に、貴君、自分が怪我をして足手纏の子供を連れて、擔込まれて來たぢや有りませんか。

私も狼狽して了つたのですよ。何だかうろ〳〵怪我を改めて見たり何かして、家へ連込まうか、如何しやうか、と迷つて見て、まア矢張物置が好からうと、それに決めて置きまして、

それから茫然して了つた母だの、子供達だの、下女だのを庭先へ集めて、

「あの、何もお國の爲だから、私達は死んでも此處を離れますまい。子供達も皆善くお聽き。これからお膝を突いて、神樣にお祈をお上げなさい。他の方は皆町

を逃出しなさるけど、私達は此處を死處と極めて辛抱してゐるンだからね。さうしたら神樣のお慈悲で偶然と助かることも有らうから、」

と申しましてね子供達とお祈に懸りますと、何處か近處で彈丸が破裂した恐ろしい音がしましたけど、それでも矢張膝を突いた儘で、一心にお祈をして居ました。

スルト子供の後の方でウン〳〵唸聲がするぢや有りませんか、怪我人のさ。それと聞くと、眞に這麼しちや居られないと思つて、急にお祈を止にして、



「さア〳〵皆お辭儀をお爲、而して阿爺さんを物置へ連れて行くんだから、お手傳なさい、」

ツて、子供に手傳はして怪我人を一先物置へ運込んで置いて

「お前達はお留守番をしてお居で、私は是から一寸お藥を買ひに往つて來るから、」

ツて云ひますと、子供達が周章て私に捉まつて、

「あら、叔母さん、行つちや不可。叔母さんが殺され

でもしたら、私達はマア如何しやう？阿爺さんは那麼なに怪我をなすつたし「耶孃さんは死ぢまつたし、叔母さん一人が便だから、行つちや厭。若し殺されでもしたら、泣くのは私達ばかしぢやないわ、皆が泣くわ。叔母さんのやうな好人は他に既う無いンだもの、」

ツて、わい／＼云ひますから、

「あゝ皆然うお泣きでない。それよりか私に怪我の無いやうに皆でお祈をして居ておくれ。阿爺さんが、あら、那麼に苦しがつて居なさるから、私は一寸往つてお藥を取つて來るンだからね、」

ツて、子供を賺して置いて、それからエウドーキヤに——え、これは宅の厄介人でございますが、丁度側に來て居ましたから、

「お前もお泣きでない。そんなに心配したつて、仕方がないよ。それよりか、是から如何成る事たか分らないンだから、襯衣や何かを包んで、パンも用意をして置ておくれ。それから目ぼしい道具を、少しでも好いから、掻集めといておくれ、何も用心のためだから、」

ツていひますと、エウドーキヤが、

「それよりか、奥さん、一所に逃げませう、子供さん達をお伴申して、怎麼して貴女お一人出して上げられるもんですか！　死ぬなら何でも御一所に、」

といふのでございますよ。

生優しくしてゐちや、埒が明きませんから、

「エウドーキヤ、お前もあんまり意久地が無いね！」

ツて叱りますと、

「だツて、奥樣に萬一の事が有つたら、私共は怎麼しませう？」

ツて云ふンですもの。

「神樣が附いてゝ下さるから、藥屋へ往つて來る位に怪我もしまいわね、」

ツていひますと、

「だツて彈丸が、あら、那麼に家の屋根に中るぢや有りませんか？」

「しつッこいね！　そんな餘計な心配をするよりか、それよりか大急で男の衣服を拵へておくれ。私が着る

んだからさ。なに、私が彈丸に中つて死ぬ迄は、乾度お前達を殺させやしない、乾度助けて上る。まだ其上、事に寄たら、お國の爲に働けるかも知れないんだから、」

ッて申しましてね、それから子供達に十字を切つて遣りまして、(指頭にて十字架を劃し無事を祈るなり)、

「お前達も善くお留守番をしてお居で、決して恂々するンぢやないよ、」

ッて、自分にも十字を切りましたが、然うは云ふもの丶、私も何だか胸が一杯になりましてねえ。で、急いで家を出ましたが、出懸にエウドーキヤに、

「門の締をしてね、私の歸つて來るまでは、誰も內へ入れるンぢやないよ。子供が幾ら出たいてツても、一足だつて門外へ出すンぢやないよ、」

ッて、吩咐けて置きました。

(二)

門を閉切つてから、家に殘つて居る者も出て行く私も何卒無事でます居やうにと、また十字を切りましたが、外は彈丸が烈しく飛で來るので、方々の犬が喧々吠え立つて、垣根を潜らうと云つて大騷をして居るのでございます。藥屋へ行く途中で、子供を連れた女の人に澤山出逢ひましたが、皆オイ／＼聲を立て丶泣いて居りました。

私も何だか心細く成つて參りましたけれど、氣を取直して町を駆拔けやうとしますと、彈丸が一個ピユツと飛で來て、先方へ駆けて行く誰家のか女の人がバツタリ倒れました。大方その彈丸に中つたんでせう。駆付けて見ますと、案の如怪我をして居ますから、手傳つて傷を結へて、それから辛との事で片側の垣根の蔭へ連込みましたが、自分にも怪我人を控へてゐるもんですから、ツと名所を聞いて家まで送付けるとまでは屆きませんでした。而して辛との事で藥種屋へ參りまして、亭主を無理に探出して、

「お氣の毒ですが、內に怪我人が死にかゝつてるンですから、何かお藥を、」

ッて云ひますと、
「此中で藥どこぢや有りません、」
ッて、拒るのを、何でも角でも藥を貰はなきやならないッて、動かないもんですから、先も終には機嫌を直して、見てゐる内に調合して呉れました。
「貴女、到底も行けませんせ、あら、あの鐵砲の音、あれですもの、」
ッていひますから、
「何處に居たつて、時節が來りや、死なゝきやなりませんわね、」
ッて、藥種屋を出て河岸通を參りました、光景を見にね。すると、貴女、支那人がどん〳〵駈けて來るのでせう。後で考へて見りや、それは土着の支那人でしたのさ。それを其時は然うとは氣が附かないもんですから、これは必然敵が川越をして込入つて來たんだと思ひましてね、卒然其處へ膝を突いて、
「天に在ます我父よ、何卒あなたの婢の祈をお聽きなすつて、我々正教信者をお助けなすつて下さいまし。」

ッて、夢中でお祈をしてゐました。一トしきり烈しい鐵砲の音で、偶然と氣が附きましたから、起上つて急足に大通を黑龍江町の方へ歸らうと、公園通へヒョイと出ると、ピユッ〳〵ッて烈しく彈丸が飛で參ります。其内に一ッ破裂彈がッと近所へ落ちましたが、それでも御方便と破裂は致しませんでした。全く聖母がお守り下すつたのでございますね。
その破裂彈を見て、
「何程騷いだつて駄目な事た！　此方には神樣が附いてるんだから、支那人なんぞが敵ふものか、」
ッて、惡口を云つてやりました。
家へ歸つて來て、呼鈴を鳴すと、エウードキヤが戰慄もので門を啓けて、
「あら、奧さんが！」
ッて、卒然飛付いて接吻なんぞしましてね、
「仰しやつた通り男の衣服を拵へときました、」
ッていひますから、それは御苦勞だつたが、まづ差當つては性我人の手當だつて、物置へ往つて藥を飲ま

せたり何かして出て來ると、婦人が一人戸外から這入つて參ります。宅で此人の娘を預かつてゐたんですがその婦人の云ひますには、

「奥さん、子供を頂戴に參りましたもう這麼なつちや到底も無事では濟みません。死ぬのなら、親子一所に死にたうございますから。もう到底も駄目ですよ！」

ッてね。貴君、何程何と云つても聴かないんですもの、而して娘を連れて行つて了ひました。跡に殘つたのは年寄と子供と私ぎりで。子供が悄然として坐つてゐるのを見ると、何だかもう情なくなりましてねえ、貴君。



「耶蘇さん、もう死ぬのですかね？私達が死んだら、耶蘇さんも、死ぬでせう？」

ッて皆口を揃へて歎きますから、

「皆助かるやうに、能くお祈をお爲、」

ッて、瞞す外仕樣が無いんですもの。

それから空腹は無いかッて聞きますと、小さいのは

何か喰べたいッて喰べましたけど、大きいのは、なかなか其所ぢや無いもんですから、皆何も喰べませんでした。

で、エウドーキヤに、

「お前男の服を拵へたッて、まア如何なのが出來たか、持つて來てお示せ。」

ッて、持つて來させて見ますと、小さな脊廣に、襯衣に、それに私の女衣を縫直したヅボンと、整然と揃つて居ります。

其時は夜の彼此十時頃でございましたらう。私は衣服を着替へたり、短劒やピストルを帶の間へ挿んだりして、鐵砲片手に寢室を出て子供達の聚つてゐる座舖へ參りまして、

「さア既う支度は出來た、」

ッていひますと、子供達は皆悄然として坐つてゐたんですが、末のが、

「あら、耶孃さん、兵隊が！……」

ッて騒出す。

「あら、兵隊ぢや無くつてよ、耶孃さんよ。」

ッて皆子供が悲しい中でも笑ひました。

エウドーキヤに、

「怎麼だい？　戰が出來さうに見えるかい？」

ッていひますと、

「好い兵隊さんにお成なさいましたよ。眞個にそれは男に酷肖、」

ッていふ事ですから、それなら好と思つて、そこで子供達に十字を切つてやりまして、

「ではお留守番をしてお居で、耶孃さんはこれから出掛けるから。」

（三）

で、家を出ました。町を參りますと、一體に閑としてゐて、もう鐵砲の音も致しません。河岸へ參つて見ますと、大勢人が居て何か爲てゐるやうですから、側へ寄つて熟く視ると、そら、掩堡とか云ひましたね？——身體を隱す竅、あれを掘つて居るのです、尤も六

時ごろから九時ごろまで息氣も吐かずに擊掛けたもんですから、此方は何の用意も爲る暇が無かつたんですからね。河岸通を知事さんのお邸の方へ來て見ますと、其處でも矢張思ひ〱に穴を掘つてゐましたが、見ると其處に鍬が一挺棄てゝありましたから、私もむざ〱殺されるでもないと思つて、その鍬を拾つて穴掘に懸りました。

彼邊は石地だものですから夜の十二時まで掛つて掘れたのが、漸と身體半分這入るか這入らないかの穴ですのさ。私は白の帽子を冠つてゐたもんですから、ゾロターレフ



とかいふ士官さんが傍へ入らしつて、

「おい〱、お前は白い帽子を冠つてゐるが、そりや不可ぞ。目立つから直ぐ狙擊れる。」

「はア、然やうでございますか。それぢや早速替へて參りませう。」

ッて直ぐと家へ駈戻つて帽子を替へて、子供達を覗いて視ますと、皆熟く眠入つてましたから、一寸十字を切つてやつて、ランプが出過ぎてるのを直したり何かして、急いで又河岸へ來て、朝の六時まで番をして居りました。

後で士官さんが、

「ほ、婦人か。眞暗だつたから、分らんだつた。道理で男にしちや聲が變だと思つた、」

ツと仰しやいましたつけ。

痛く草臥て穴から出て參りますと、その風が餘り無殘だつたもんですから、誰家かの方が、

「まア些とお休みなさい。私が代つて上るから、」

ツて云つて下さいましたから、ぢや何卒少しの間お願ひ申します、ツて、家へ歸つて參りました。

歸つて來て呼鈴を鳴らすと、子供達は既う起きて居て、戸を開けて呉れましたが、大層喜びましてね、

「あら、耶嬢さんが歸つて入らしつた。私達は耶嬢さんは既う支那人に殺されちやつたと思つて〻よ、」

ツていふのですよ。私は痛く草臥て了ひましたから、卒然其處の椅子に倒れ懸つて、エウドーキヤに、

「水でも牛乳でも何でも好いから、持つて來てお呉れ、」

ツて吩咐けまして、子供達の頭を撫でながら、

「神樣のお蔭で耶嬢さんは未だ達者でゐるよ、」

ツていひました。辛との事で衣物を着替へて、蹌踉くしながら寢臺の所まで來て、死んだやうになつて眠込んで了ひました。

二時間許も寢てをりましたらうか、眼が覺めましたから、病人の所へ行つて、十一時ごろまで看病して居りましたが、十二時ごろになりますと、また向川岸から鐵砲を擊出しました。子供達に御飯を戴かせたり、種々片附物など致しまして、五時ごろになつてエウドーキヤに、

「あの、是から二人で河岸へ行かうぢやないか？ 何の、お前、死ぬのが畏いものかね。同じ死ぬんなら、內で死ぬよりか、戰に出て死んだ方が餘程好い、」

ツていひますと、彼女も賛成しましたから、それから二人で出懸けました。尤も子供と怪我人とは母に預けて、甚麽な事が有つても子供を戸外へ出して下さいますな、門は暗號の三遍鳴らさなければ、決して開けては不可ませんと、固く云置いてね、出懸けましたの

ですよ。

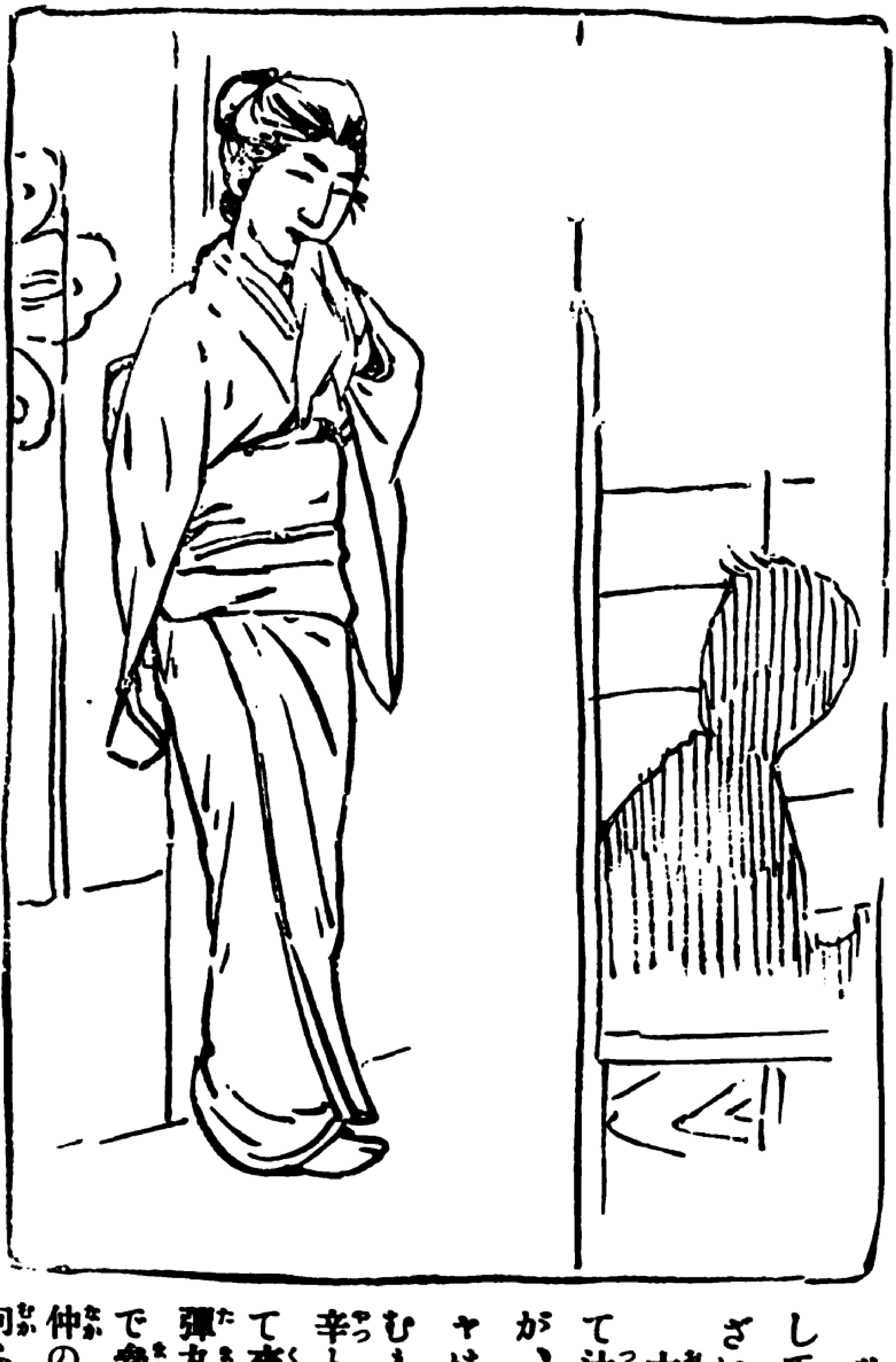
町を參りますと、其處此處で人に出逢ひましたが、五六人づゝ塊まつて物の蔭に隱れて皆、

「もう到底も駄目だ駄目だ！」

ッていつてゐますから、

「お斷を成さいまし、神樣はお慈悲深いから、我々の難儀を餘所に御覽なさりはしますまい。ブラゴウェーシチェンスクは乾度助かります、」

ッていひますと、皆が、



「まア貴女は何といふ大膽な方だらう。此中を町へ出てお歩きなさる！」

ッて、皆吃驚してゐるのでございますよ。

大通を通越して辻へ出ましたが、エウドーキヤは足が痛く疼むものですから辛と後から隨いて來るのです。彈丸は斷えず飛で參りました。仲の辻まで來て向ふを視ますと紀念門（千八百九十一年、今の露國皇帝が未だ皇太子たりし時、世界周游の歸途、浦潮斯德に上陸せられ、

それより陸路彼得堡へ還幸の途次、武府に御立寄あり、其折の紀念にとて建てたる門なり）を小楯に取つて、チウリンの店の側に、百人ばかりの人が居りました。一日引籠つてゐましたから、何か變つた事はないか、樣子を見てみやうと思ひまして、其方へ參りますと、

「おや、ユーヂナさんが出て來た。これは驚いた、」

ッていふ方が有りますから、

「かうなりやお國の爲ですもの、戰にだつて出て來なくつてさ、貴君、」

ッてッて、チウリンの店の前に立つて居ました。

然うすると、第二分署の警部さんのザレターエフさんが馬で馳付けてお出なすつて、其處に居合した人達に、

「誰か此內でお國の爲に一働しやうと云ふ者はないか？　河岸に在る船を殘らず兵站部の棧橋まで行るのだ、」

ッて仰しやるのですよ。けれども誰も何とも申しません。すると、義勇兵の司令官のジノーウィエフさんも入らしつてお勸めになりましたけれど、それぢや私がッて出る者は一人だつて有りません。私はジノーウィエフさんの側で始終聽いてゐたのですが、餘り皆が畏縮てゐますから、一體船が何にお入用なんです？　命掛の仕事ですから、それを伺がはなければ、ッていひますと、彼方が、まア、かう仰しやるぢや有りませんか、「女の出る幕ぢやない、退込んどれ〳〵」ッて。

私も怫然としましたから、

「女の出る幕ぢやないッて仰しやいますが、男の方が行かなければ、私が參ります。女だつてお國の爲なら死にます、」

ッて云つてやりました。此方の見幕が餘り何だつたもんですから、彼方も澁々理由を仰しやいましたが、その、兵隊を對岸へ渡す爲なんださうで、それには成るべく怪我の無いやうに、夜渡す手筈になつてゐるんだから、夕方までに船の用意をして置かなきやならないんだと申すことで。

それから孰と何の船がお入用だといふことを善く伺

つて置きまして、胸で十字を切つて人道を川へ降りました。後からはエウドーキヤが随いて來るばかりですから、振返つて皆に、

「皆さん御一所に參りませう。總掛で一どきに船を廻しませう。」

ッて云つてみましたが、大概の人は動かうともしません。でも二三人は參りましたらうか？ 其内に波蘭人が一人居ましたが、私に、

「奥さん一所に行きませう。貴女は大膽な方だ。貴女となら死でも愉快だ。」



ッて云つて呉れました。終まで一所に働いたのは此人ばかりで、殘の二三人は那時の間にか何處へか消えッちまつたぢや有りませんか。

彈丸はどんどん飛で來ます。益々烈しくなるばかりで。でも私は何だか怡怡して進で參りました。子供の事も、親兄弟の事も、何も角も忘れて了つて、たゞもう此町が助かる事なら、如何にかして船を棧橋まで送付けたいとばかし思ひまして。

後方では、貴君、惡口を云ふやら、嘲弄やら、中には口笛を吹く者も有るのですよ。

「あれ看ろ、女の癖に船を廻すなんて、餘程お轉婆ぢやないか。」

「なアに岸へ降りて見ろ、石の蔭へ蹲踞で了ふ質だ。」

「魚が悦ぶだらう、晩のお菜は人間だつて。」

「あの眼の玉が彈丸を食つて玉なしになりさうだ。やれやれ。」

「ヤア、家鴨が泳に行く。」

何ぞッて喧囂云ふのですよ。それでも私は搆はず敢然参りました、唯もう神様のお力で何卒此露西亞をお救ひ下さいますやうにッて、そればかしを祈りましてね。

(四)

岸へ降りて見ますと、丁度水浴場の處に船がございます、三十ばかりもございましたらう。エウドーキヤと二人して船二艘を繋合せて、今一艘のに乘りまして、指圖の場處まで曳いて参りました。

エウドーキヤは脚が痛んで仕様がないもんですから其處から家へ歸して了つて、私だけ殘りました、尤も波蘭人は居りましたが。

で、その波蘭人と二人で復た船を運びに舊の處へ戻りましたが、對岸からは、鐵砲をどん〲撃つので、彈丸が頭の上をピエッ〱ッて飛越しては石に中るのですよ。それでも那麼にか這麼にか三十艘殘らず指圖の場處まで廻して了ひました。なか〱骨が折れたのは、なにしろ、貴君、一ときに三艘づゝ廻すのでせう、それに河岸には一杯小蒸氣やら川船やらが着いてゐて生憎水嵩が減つてゐたもんですから、ズッと河心の方へ船を出して廻さなきやなりませんし、それまでに先づ船へ上下の板が何枚か陸へ渡して有るでせう、その下を潜らしては、小蒸氣の間を彼方へ脱け此方へ脱けして船を出さなきやならないんですもの。それに船は櫂なしで、たつた一本見付出したのは到底も私の手には乘らないやうな大きな櫂で、それで以て十八九町も

有る處へ船を廻して、それから復た石を飛び〳〵舊へ戻るのですから、そりや却々の骨折でしたわ。
　皆船を廻して了つてから、困憊して陸へ上らうと思ひますと、巡査が馳けて來ながら大聲で、
「おい〳〵、未だ肝腎なのが殘つてる、大形の荷船も廻さなきや不好。」
ツていふのですよ。それと聞きますと、さては這樣な者でも多少かお役に立つたかと思ひましたら、また元氣が出ましてね、復た舊へ戻つて、働きに懸りました。
　ところが、貴君、その荷船には弱らせぬかれましたよ。小蒸汽から陸へ渡した板の下を潜らしたり、小船の間から曳出したりして、辛と三艘集めてそれを繋合せて見ますと、一艘の船に曲拗つた切放しの棹が一本に櫂が二本有つたぎりで、他に何も無いのですもの。加之もそれが大層太いのばかしで、到底も手に合つたもんぢや無いんですの。今なら到底も那麼太いのを使ふことも出來ぬければ、また使ふ氣にもなれないんですけれど、其時は怎麼したもんですか、それがどうにか斯うにか自由になつたんですよ。どうも自分ながら不思議だと思ひましてねえ。
　彈丸は霰のやうに飛で參りました。でも、まアどうにかかうにか船を廻してゐましたが、もう徐々腕が利なく成つて來るんですよ。一所に働いて居た波蘭人が、
「奥さん、今度は鏖殺さうですせ、」
ツて、云ふか云はない内に、彈丸が一個ピユッと云つて飛で來て、乘てゐた船に中りましたから、私は、
「逸れろ〳〵、中ると承知しないよ！」
ツてツて、屈んで其彈丸を拾つて、ポーケットの中へ納れて了ひました。
　眞個に其時の事を憶出すと、今でも何だか心細くなりましてねえ。
　また耳の側をピユッと飛で行きましたが、然うすると風が急に吹出して來て、船が動ともすると跡戻をしたがるんですよ。それをどうにか斯うにか小蒸汽の間を脫出して、知事さんのお邸前を越しました。始終矢

張櫂で漕いでをりましたので。
すると復た風が強くなりましたから、此度は起つて棹で漕ぎしましたが、漕でゐると、彈丸がビユツと復た飛で來て、私の衣服を撃拔ました。
棧橋近くへ來て、また彈丸が中りました。
波蘭人が、
「あッ、中つた！」
ッて云ひますから、波蘭人に中つたのかと思つて、急いで側へ行つて視ると、怪我も何もしてゐません。
「いえ、貴女に中つたんですよ。」
ッて云ひますから、自分を視てみると、成程ペチコートを撃拔かれて居ました。婦人の姿で參つたもんですからね。
然うしてゐる内に、氣が付いて視ると、復た船が流されてゐますから、ハッと思つて棹を取直して、其處らの石に打付けまいと思ふから、棹を張り〳〵岸の方へ船を寄せやうとするのですが、小蒸汽は澤山居るし、鐵砲丸や大砲の彈丸はどん〳〵飛で來るし、するもんですから、どうしても思ふ樣にならないんですよ。
それを一刻も早く棧橋へ着けやうと思つて、急いでグッと棹を張らうとしましたら、深かつたと見えて底へは屆かないで、棹を持つたまゝ私はスル〳〵と水の中へ伏倒ましたの。でも御方便と、片一方はソレ棹を持つてゐますから、片一方の手で船へ捉まつて半分躍上つたところを、波蘭人が押へて、引張り揚げて與れました。
それから復た船を寄せに懸りましたが、手はわな〳〵震へるし、身體は全然萎盡て了つた上に、其日は畏ろしい温氣で、もう〳〵苦艱の何のッてお話にならん程でしたけど、それでも、神樣のお惠で、到頭棧橋へ漕付けました。
船から陸へ飛で上ると、もう那麼にも這麼にも起つてゐられなくなつて、卒然其處へ打倒れて、死だやうになつて寂然してゐました。波蘭人が心配しましてね水を掛けたり何かして與れまして、漸く正氣になりましたが、然うしたら波蘭人が私の手に接吻して、

「左樣なら、御機嫌よう。貴女の事は永く忘れません」ツていふのですよ。
　私も何だか悲しくなつて、其人の手を握つて思はす泣いて了ひました。それから別れて、掩堡の在る方へ行かうと思つて、坂を上つて來ましたが、其時は何だか氣が惘として居たもんですからね、私の爲にはまア命の親ですのさね、その大恩ある波蘭人の苗字を問いて置く方角も無く、其儘別れたぎりで二度と逢ひません。何といふ人で、あれから如何なりましたことやら一向存じませんのですよ。



坂を上り切らない内に、復た彈丸が飛で來て私の頭髮を擦過ましてね、側に居た何處のか、矢張義勇兵に出た人らしかつたんですが、其人に中つて怪我をなさいました。
　駈寄つて傷處を視ましたら、なに、大した事も有りませんでしたから、ハンケチで結へてあげて、それから委靡しながら掩堡へ歸つて參りました。
　歸つて參りますと、士官さんやら、胡索の兵隊さんやら、義勇兵の方達が聲を揃へて三度まで萬歲ッて下すつて、貴方だか、云ッて

「西伯利萬歲！　這麽強い女が有つて萬歲！」
ッて云つて下さいました。其處へ丁度ゾロターレフさん――あの、士官さんでございますよ、其方が入らしつて、私の手を握つて、
「能くお國の爲に功績を顯しました、」
ッて、復た皆さんが萬歲ッて仰しやいましたが、其聲が鎭まると、ゾロターレフさんが義勇兵の方達に向つて、
「これが好い龜鑑だ。女ですら國の爲に働いた。況んや吾々男子たる者が此町一ッ防ぎ切れんで怎麽するもんか！」
ッてね、貴君。

（五）

掩堡て少し休んでから、家へ歸らうとしてチウワンの店の側を通りますと、また、どら、例の一群に出逢ひました。石垣の陰に隱れて、爲る事は何も爲ないで私を嘲弄たり何かした那連中ですのさ。また嘲弄だしましてね、あれ看ろ、船に酒を振舞はれたと見えて、あの蹌踉つくことわ、何の彼のと云ふのですけれど、尤も然う云はれても仕樣が無いんですの、全く御酒にでも飮醉つた樣なんですよ。何しろ、貴君、身體中泥塗になつて、衣服はグッチョリ絞れば滴が垂りさうで、怕ろしく草臥てゐたもんですから歩くと足が搖曳するんですもの。一晝夜といふもの何も飮まず食ずに、あれだけの船を十八九町もある上流へ運んだのですから、そりやア些とは醉人のやうに成もしませうさ。

人がいろ〳〵惡口云ふのは耳に聞えてゐましたけれど私は却々其處どころぢや有りません。何だかもう子供の事が氣に成て〳〵、何事もなく無事で居てえて與れば好がと、唯其ばがしを案じましてね。

でも惡口が蒼蠅こざんすから、急いで人氣の無い町の方へ曲りました。其處は誠に靜で、たゞ彈丸の飛で來る音と、敵味方で擊合ふ大砲の音が聞えるばかしで。私は、其處の人道の所まで行つて蹲踞で、吻と一息

吐きましたが、胸は洶々脹裂さうなんですよ。
あんまり無理をしたから、心臓が破裂するんぢやないかと思つて、駭然としましたが。
考へて見りや、何の、これで死ねば本望だと思ひますと、復た元氣が出てスッと起れましたから、急いで家の方へ參りました。
早く家へ歸つて、子供の無事な顔を視て一休して、晩には男姿で復た河岸へ行かなきやならない。敵が偶然と川越をすると大變だから、」
なんぞと思ひながら、やう〳〵家の町まで來て見ますと、家の前に人聚がしてゐます。それを視ると、ハッと思つて脚が竦で了ひました。
「乾度何事か起つたのだよ。子供が殺されたんぢやないか？」
と息急切て駈付けて見ますと、何だか破家漢のやうな奴が四十人許、門を這入らうとして大聲で、
「開けろ〳〵、支那人を引込みやがつたに違へねえ！
ッて怒鳴てゐます。中には、

「窓を打毀せ、戸を引剝せ！」
なんぞッて云つてるのも有るんですよ。
それから側へ往つて、
「皆さん、何を爲るんです？　支那人なんぞは此處には居ません。私は此家の主人ですから、間違つた事は云ひません、」
ッて云ひますと、大勢の中で誰だか、
「空あ使つてやがる。殺んちまへ〳〵！
私も殺されちや大變だと思ひましたから、
「門を直ぐ開けさせますから、打だけは堪忍して下さい、子供だけは助けて、」
ッて云ひますと、誰だか又、
「開けると云ふなら、開けさせて見ろ。支那人が居るか、居ねえか、直ぐ分らア、」
と云つたので道を開いて通しましたから、門際へ寄つて暗號の呼鈴を三遍鳴らすと、エウドーキヤが眞蒼な顔して出て來て、
「まア、奥さん、此人達が殺すつて騷ぐんですよ。子

供さん達は畏怖がつて物置へ隠れて了ふし、御隠居さんは臺所の煖爐の中へ首を突込んで、」

といふも片息ですのさ。

「何を喃々饒舌つてやアがるんだ？　汝等のお饒舌を聽いてる暇は無え、」

とか何とか云つて、大勢が哄と一時に押込んで了つたぢや有りませんか。誰だか其中で、

「此醜婦ア嘘八を云つてやアがるんだ。屹度支那人を打殺して、錢を横奪やアがつたに違へねえ。其處ら探して見ねえ、死骸が埋めてあるだらう、」

ツて、まア、逼塞なんですよ。而して二階へ駈上る者も有れば、下座舗へ踏込む者も有つて、手當次第に種々な物を抛出すやら擔出すやらするぢや有りませんか。

「何を皆爲るんだ？　支那人なんぞ居やしないと云ふのに！」

ツて云ひますと、其奴等はかうです、

「ほ、ほ、怒鳴だしたな。やい、手前、鎗玉に擧つて



見る氣は無えか？」

　こりや到底も這麽樣畜生にも劣つた奴に物を云つたつて無益だ。慈悲も情も有つたもんぢやない。町が空虚になつたのを奇貨にして、支那人を探すのを口實に徒黨を組で盜賊をして徘徊てるんだ、」

　と思ひましたから、卒然家の中へ駈込んで、大形のピストルを持つて上口へ出て來て、

「さア、温順出て行けば好し、さもなきや打放すよ。私の眼の黑い内は、家は荒させないから、然うお思ひ

ッてッて、空へ一發放しました。

然うすると庭先でな、

「打殺ッちまへ〳〵！」

　ッて喧囂云ふのですよ。

それから私はエウドーキャを力任に家の中へ押込で置いて、態と大きな聲で、

「此閾を跨いで一寸でも這入つたら、徒置かないよ！

ッて云つたら、大勢の中で那奴だか、

「行かう〳〵、また後刻に來て能く探してやらう、」

　ッて云ふ者が有りましてね、而して皆惡口をいひいひ門の方へ出て行つて了ひました。私も吻と息をして、上口を降りて門の締をして家へ這入りましたが、もう婁脱して了つて、卒然其處へ倒れて、子供のやうにオイ〳〵泣出したのですよ。

子供達が駈付けて來て、泣きながら

「耶嬢さんは殺されながつたの？　あの叔父樣達に打たれて？」

　ッていひますけれど、もう返事も何も出來ません。ただ心の中で、あゝ情ない事だ、何の因果で這麽樣思をする事たらうと、歎きますばかりで。

　然うしてゐると頓てエフドーキャも來て、私を抱くやうにして起して寢室へ伴て行つて呉れまして、濡衣やら、石を傳つて廢弊になつた靴やら、脫せて呉れましたが、其時不意と、妙なものでしてねえ、今迄忘れてゐた宿の事を不意と懷出しましてね、何故歸つて來ないのだらうと思ふと、さア、貴君、氣掛でねえ。坑山の方へ參つて居つたのでございますが、彼邊にも支

那人は澤山居ますし、偶爾としたら彼方でも騒動が始まつて、もう殺されて人間一人灰に成つて了つてゐるんぢやないかと思ふと、もうどうも、貴君、心配で堪りませんの。

（六）

其内に大層な發熱で終宵譫語を云つてたさうですが曉方とろ〳〵とするかと思ふと、母が參つて、
「御役所からお人が來たよ、お前に出て來いといつて。」
私は手も足も動きません。あの船のお蔭で此始末なんで、身体中痛まない所はない位ですの。
「まア、お茶なと飲んで參りませう」
といひますと、母が、
「だつて水路部へ直ぐ來いといふ事なんだよ。」
辛との事で起て顔を洗ひましたが、
「如何したと云ふンだらう？此町の爲に働いたんだのに、何が不足でお役所へなんぞ呼出すんだらう？」
「草臥て惘然してゐる最中に、卒然役所へ來いッて云はれたもんですから、何だかお礼でも受けさうで薄氣味惡く思ひましてね。
で、不承無精手袋を穿めて出て參りました。
水路部では、雪のやうな白裝束した御婦人でしたが其方が出て入らしつて、
「貴女はユーヂナさんと仰しやいますか？」
「はア、然やうでございます。」
「黑龍江の勇婦といふのは、まア、貴女の事でございましたか！」
「へえ？」と云つたぎりで。
するとまだ幾人か立派な奥樣方が出て入らしつて、種々お尋ねなすつたり、身體に觸つてみたり、肩を叩いたり、手を啓げて見たり、餘り種々な事を爲さるもんですから、何だ馬鹿々々しい、賣物ぢや有るまいしと思つて、出て了はうと思ひましたら、其内の一人の方がお引留なすつて、接吻なんかなすつて、
「まア、少しお待ちなさいましよ。貴姐に能くお尋ね

申して、上申書を作らなければならないンださうですから、」

と肩なんぞ叩いて、

「貴姐は昨日のお勳功で乾度グオルギヤ勳章が頂けますよ。さうすりや露西亞中へお名が弘まりますわ。眞個に貴姐はえらいお勳功を爲さいましたねえ、」

と仰しやるのです。然うして居ると、其處へセミラツツキイさんにまだ外に幾人も男の方が出て入らしつて、矢張お目出度なんぞツて仰しやるのですよ。



それから奥樣方が手を見せろと仰しやるから、手袋を外してお眼に懸けやうとしたら、肉刺が潰れて血が出ましたの。然うしたら皆さんが奇麗なハンケチをお出しなすつて拭て下さるやら何やらで、そりやもう大變なお取持。

其内にジノーウイエフさんが出て入らしつて此方へ來いと仰しやつて、彼君のお部屋へ參りましたら、

「昨日の始末を一通お話なさい、」

と仰しやいましたか

ら、

「何も私が申上る事は無いと存じます……閣下が御覽遊ばして、居らしつた通りでございますから。彼船を廻せと仰しやいまして、而も其時女なぞの出る幕ぢやないと仰しやつたではございませんか？　それよりか此方から伺ひたいのは、何故今日はお呼出になりましたのでせうか？　私は手も足も利かないで臥つてをりましたのを、無理に出て參つたのでございます。」

と申しますと、彼方も、そりや私が惡かつた。實は今日呼出したのは、昨日の始末書を拵へて、お前さんに御褒美の出るやうに手續をしなければならん、それで御苦勞を掛けたのだと、仰しやいまして、名前や身分を帳簿へお留になりましてから、

「これは御苦勞だつた。此後も亦今日のやうな事が有つたら、お國の爲だから、十分に働いて貰ひたい。もう引取つても宜しい、

といふ事ですから、御挨拶を申上げて退りました。で、お役所を出て河岸通を參りますと、何處の掩堡にも皆人が居て、中には新規に掘つてるのも有りました急いで私の掘つた所へ來て見ましたら、もう誰だか這入つてゐましたので、家でも案じてゐるだらうからと思つて、一先歸つて參りましたの。歸つて參つて、御褒美の出る話もしたり、子供の顏も視ましたから、復た男の裝束になつて、鐵砲とそれにパンを少しばかし用意しましてね、出懸に家の者に、若し復た何ぞ事が起つたら、早速河岸へ知らせるんだよ、然うしたら私が矢のやうに飛で來るからね。今晩は十二時ごろまで居て、それから一旦光景を見に歸つて來るからと、云置いて河岸へ往つて、夜晩くまで居りました。誠に好いお月夜でございましたよ。

十二時ごろ歸つて來たら、エウドーキヤが

「まア、さう齷促なさらずと、一時間でも好から、お休みなさいましな、」

ッていひますから、

「馬鹿おいひでない。基督の敵に勝たない內は、一分だつて休む事ちやない、」

ッて、また河岸へ往つて夜を明しましたのですよ。一週間ばかしは毎日毎晩河岸へ往つたり來たりしてゐたんですが、其内に陸軍の方は川越をして對岸へ渡ることになりましたから、私も後に跟隨て行かうと思ひましてね、其支度をして居りますと、宿と舍弟が歸つて參りました。

飛でもないと云つて、宿が如何しても從軍することを許して呉れませんの。尤も今度の戰では私は體を滅茶々々に壞して了つて、辛と歩いてゐた程ですから、其筈ですが。

兎も角も夫に從ふのが婦の道ですから、宿の申す事には背かれません。それで私の戰騷もお終局になつて了ひました。　（をはり）

譯者云ふ、余既に勇婦の直話繙譯の業を卒へ、其婦人の身を以て、伉慨難に赴き、烈々たる壯氣、嚴霜を凌ぐの慨あるに嘆服す、而して獨り竊に異しむ、當時露の戍兵寡しと云ふと雖も、全く無きにあらず渡船を舊埠頭より新埠頭へ送ること、若しゲオルギヤ勳章に値するほどの難事ならば、何ぞ平生長劍を横へ、双肩を聳かし、大道狹しとのさばりて、他の人民を土芥視する當局の軍人をして其事に當らしめずして、漫に之を事に關係なき一巾幗女兒に推諉し其をして恣に名を成さしめたるや、抑も一女兒をして名を成さしめたるは、即ち衛戍將士の怯懦爲すなきを證する所以、彼輩苟も男兒の端くれならば、宜しく當に腹十文字に劀裂くとまではゆかずとも、責ては首なと釣りて以て天下に謝すべきに、謀此に出でず、徒に武府在住の清の商民一萬有餘を驅りて、盡く之を川に陷れ、流屍三日江面を掩ひて、水の流を堰止めたる其蠻勇に誇るが如きものあるは何ぞや、由來臆病者は相手の敵意なき時、若くは腰ふなく／＼の時にのみ勇あり、露の軍隊は豈に臆病者の寄合か、然らずんば何ぞ其所爲の卑劣なるや、

室内裝飾占ひ

近藤不二

人は行住座臥の間に知らず〳〵その嗜好性質を表はすもので、細かに云へば、口のきゝやうに付ても、眉の上げ下げに付ても一々その心の秘密を語らざるものは無い、さればこそ世の中には人相だの墨色だのと云ふものが行はるゝ次第で、それは何も別に神の告げても魔法でも無く、その人の顏付や墨色が性行や運命を標榜して居るので決して不思議では無い、發音の爽やかな人はその性質が快活である、進退動作の節に適ふ人は心術が正しい、それは誰の目にも直に分る。決して秘そうとしても匿すことは出來ぬもので、無意識の間にその性質、嗜好、から延いて運命までも表はすのである。斯樣に一擧手一投足の間にも、旣に心の機微を漏すものであるとすれば、心の寫眞とも云つべき意匠に依りてその人の心をトすることは容易である。

賴山陽は性質飄逸洒落な人であつたからその手跡は天馬の空に躍るの勢があり、圓山應擧は着實溫厚の人であるからその繪畫は緻密寫實的で所謂念の入つた描法である、その外古くは顏眞卿の筆が誠實森嚴なる、東坡居士の書が磊々不羈なる、又現時の橋本雅邦翁の畫が脫俗であるなど、凡てその人の性行を談らぬは無い。

このやうに一本の筆の使ひ樣に由てさへその人の性質を見分ることが出來るとすれば、室內裝飾ほど人の性質嗜好運命を知るに便利なるものは無からう。

一口に裝飾と申しても、その裝飾の爲樣にいろ〳〵あつて、決して一樣には行かぬ、多くの調度、骨董品をこて〳〵と飾り立つるものもあれば、ほんの僅の品物を陳列べて、そして裝飾を整ふるのもある。何も道具が澤山あるから裝飾が爲てある、又品が少いから裝飾が出來て居ないといふ事は無いの多い少いは只モーその方法の如何にある。それは丁度紅、白粉をこつてりと着けて文金高髷の振袖姿も裝飾であれば、油氣の無い、S卷の束髮に僅かに一本の生花でも挿して白襟に被布と云ふ、高等な出立ちも裝飾である、或は氣取方は後者の方が寧ろ多かも知れぬ。

以上の裝飾はすべてその人の嗜好氣習から割出さるゝ、されば嗜好氣習は性質の活動、發作であるから、その裝飾の爲方を見て、この人は派手なのとか、又陽氣なのと、陰鬱なのと、嚴格なのとを知ることが出來る。從てその家庭が清、濁、運命の盛衰をトする事が出來るのである。

それから又裝飾の調度の多いのは無風流だと云ふ考から、掛物も對幅は俗である、同じくは表裝も澁味のあるもの、花も寸筒の籠花器に、ほんの一二本投げ入れに挿すと云ふ樣に凡て孤寂幽靜な裝飾をするものは、その性質、陰鬱で、斯樣な裝飾を好む家の主は往々猜疑、嫉妬の深い事もある。そして斯樣な家は表面家政の整ふた樣に見へても存外家庭は幸福で無い方が多い。下女や下男なども表面主人は服從して居ても實際心服だの敬愛だのと云ふ事は少い、況して運勢の隆盛など思ひも寄らぬ事である。大家や豪富の衰亡に傾かむとする時期には、往々この種の裝飾が施さるゝ。

斯樣に申すと派手な賑はしい裝飾をする主婦は陽氣で靜かな沈着いた裝飾をする主婦は陰氣で人が惡くて微運であると云ふ樣に見へて、所謂茶人風の飾りは惡く西洋流や書院風の派手な飾が善い樣にのみ見ゆるかも知らぬが、決して然樣計りは限らぬ、茶室的の裝飾にも快濶な陽氣な運命を意味する飾りもあれば書院風の飾りにも何處となく陰氣で寂しい裝飾もあつて一概に定むることは出來ぬ。が大体から申せば寂しい飾りは沈着して居る代りに孤寂な**趣味を寓して居賑やかに、派手な裝飾は陽氣で**

愉快な氣味に富で居る、易學で大極が兩儀に分れ兩儀が四象に分るゝ樣にこの裝飾鑑定法でも、大体を陰陽の二儀に分つたなければ成らぬ、その理論や原則を説くことは暫く止めて從來で余が實驗に徴したるもの三四を記して參考に供する

△裝飾の器具調度華やぎて麗はしく見ゆるは家門の繁昌を意味す、

△陳列せる道具類に暗色のもの多きか、裝飾の有樣活氣に乏しきは衰運若くは主人の不遇を意味す

△調度器物の大なるものを好むは主人の盛運を意味し、小なるを好むは衰運を意味す、玆に面白き實例あり某侯爵が鍛工に命じて造れりと云ふ銀製の盛花器を見しに器は楕圓形花皿四個を集合してこれを一基に纏塑したるものにして全體に花鳥を彫せるが素より現代名匠の手に成れるものなればその纖巧極致に達せるものなり而してその大さは四皿合せて周圍二尺高さ、一尺計なりし、又同時に一の盛花器を見しがそは黃瀬戸燒にして同じく楕圓形なりしが大さは長一間、巾四尺、高一尺餘、之を較するに若し前者が花間の春鶯囀なれば後者は山月高處に猛虎の嘯を開くに瞥ふべく、一は少女の纖手に弄ばるゝ菫草の如く一は落々たる長松の中空に聳ゆるが如し、宜なり後者は豐太閤がその桃山殿を飾るが爲に作りしものにして、而もその數十個ありしと云ふ、古の英雄と今の英雄と其の氣習性行の相違はこの二個の盛花器に依て充分に知ることを得るなり、

△掛物の表裝、卓被の類、凡て赤色を好むも人は競進を好むの性あり故に時として爭論を引き起すことあり

△紅色は慶賀を意味す、若し紅色のもの無意識に輻輳すれば必ず其家近き内に喜悅のことあるべし

△白色は憂愁を意味す、但し紅色に配合すれば喜悅吉事の兆とするなり、神事に用ふる白色はこの例に依り難し

△裝飾の器具調度餘りに整然と陳列され殆んど繪圖を見るが如きはその家發達なし、取り亂したると云ふ程にはあらぬも、配列の調度は隨分緩やかに裕たりとして、わざとらしからず裝飾されたるを麗はしき裝飾とは云ふなり

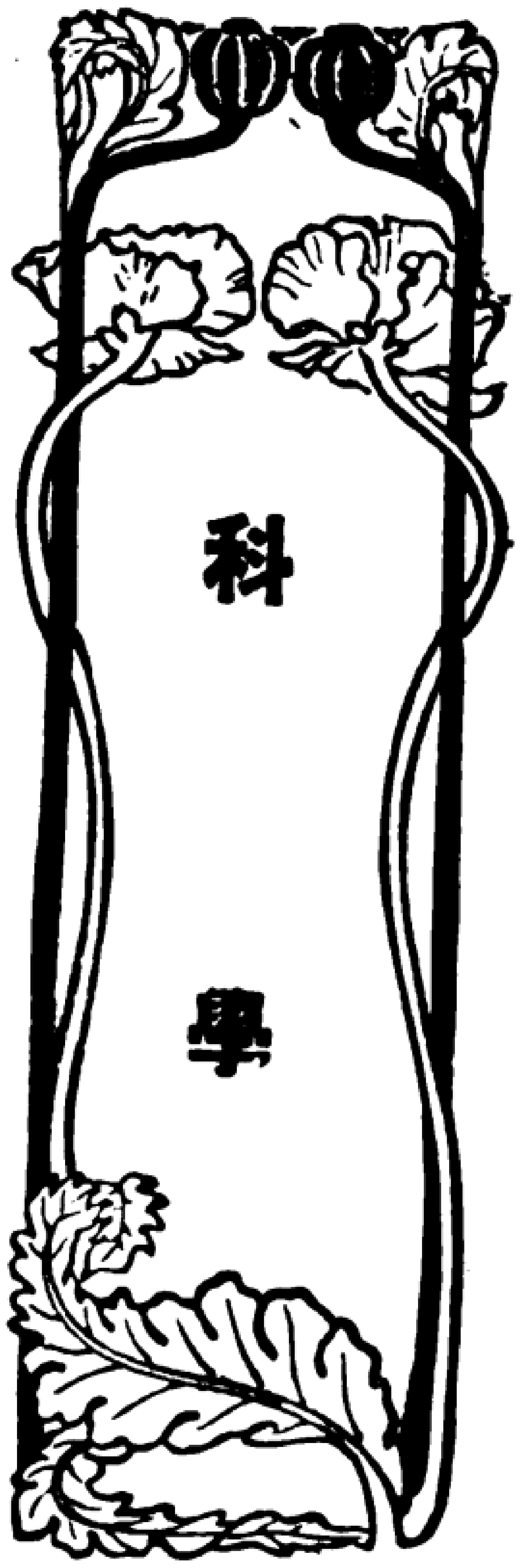
△屢々座敷の裝飾を變換するは目新しく愉快なるものながら、その主婦又は主人の心氣動き易きを表白して奥床しからず、來客の眼を喜ばしめん爲に來客中に一再ならず掛物を取代る人あれども斯の如きは極めてその人の性急短慮を表はすものなり

一瓶花の美はしきは家の富貴を意味す、但し美しきとは花の枝數の多少にのみ依るにはあらず、挿花に活氣のあるを云ふなり。

一花瓶の臺、香爐の臺その他、脚の高きを多く用ひられたるは主人快活の氣象なるべく低きを用ひて裝飾されたるは主人陰氣の人なるべし

一餘りに裝飾に意を用ひて、俗に云ふ見喚れと云はぬ計りに裝飾せる家の主人は徹の玩物喪志の類で多くは尊大の雄圖あることなし、大抵は外見体裁を好む人なるべし然りながら大賢は愚に似たりと云ふことありて何物も別に裝飾を施すことなく、極めて磊落不羈を裝ふて却てその裝飾せざる所に裝飾する人もあれば一概に定め難しそは見る人種々の狀況を參酌して鑑定せざるべからず

以上は眞にその二三を掲げたに過ぎない、妙諦は實地に接着せざれば悟了は難いのであろう。障子の切り張りをして客人を招じた北條の女隱居は如何なる氣風な人物で、金銀の道具や蒔繪の器を飾りたてゝ唐木細工の棚や机を列べた東山義政は何んな氣風の男だと云ふことを知つたならば室内裝飾判斷法も無下に排斥することも出來ぬであらうと思ふ。



雪の世界

山下末瑳雄

▲世界無比の風景國

遠山の嶺に先づ訪づるゝと見る程もなく、朝戸に帯引く麓の里の初雪となり、『木の間漏る月の影とも見ゆるかなまだらに降れる庭の白雪（西行）』となり、『雪降れば冬ごもりせる草も木も、春に知られぬ花ぞ咲きける（貫之）』の珍らかな眺となり、つひに『駒止めて袖打拂ふ影もなし、佐野の渡りの雪の夕ぐれ（定家）』『海までは色無き野なり、今朝の雪（島醉）』の大きな、潔よい眺めになつて、雪はこゝに冬の美觀を獨占する。

一陽來復の春になつてからも、『日のさして梅は匂ふや雪雫（鶯山）』と愛でられ、『俎の薺の上に雪もがな（林也）』となつかしまれ、かくて鶯の羽重げなる淡雪、雨がちに見ゆる哀れなり（一笑）』で、眺めは『雪解や朝々違ふ山の形（可亭）』に移り、空に似つかぬ雪解川を名殘に、花霞に世界を讓つてしまふ。雪の眺めのかくばかり豐かな我國の如きは蓋世界無比で、これを生涯雪といふものを知らぬ熱帶の國々、初雪雪解の趣を知らぬ常冬の極地に比べて見たらどうであらうか。

▲奥の吹雪

あらね（姉）はあんこ（長兄）、ボタ〱雪は殿樣

『春に知られぬ花』『常々は知らぬ榎や今朝の雪（鳳竹）』『明やらぬ寢覺の床に聞ゆなり、籬の竹の雪の下折れ（範妹）』などを動かぬ大雪の實景と心得て居る東京京坂四國九州などの人々には、恐くは溶け合つて降ボタ〱雪を珍しむ、雪半年の青森地方の此童歌の眞意は分るまい。

シベリヤのバイカル湖のあたりから北太平洋を指して壓して來る朔風が、檐の氷柱を吹き折るの時、倏ちにして飛雪片々、倏ちにして天地朦々、海を嘗め地を捲

き、横さまに狂ひに狂ふ北奧北海の雪の光景、いかな筆でも形容することは出來まい、轟々軋り來る列車は吹雪の斷間に隱見し、屋根の上で吠えて居た狗兒は音を收め、道行く人は檐下の小路を藁靴の音もなく走つて行く、木立の幹は北西の半面を劃然と限つて、吹き付けられた雪の胡粉で塗つたかのやうに白く、少くとも十二、一、二の三月の間は春に知られぬ花の眺めも稀なれば、雪の下折の禍といふとも無い。雪は一片々々の粉雪で、戸障子の立付を潜つて家の内へ堆く積るの

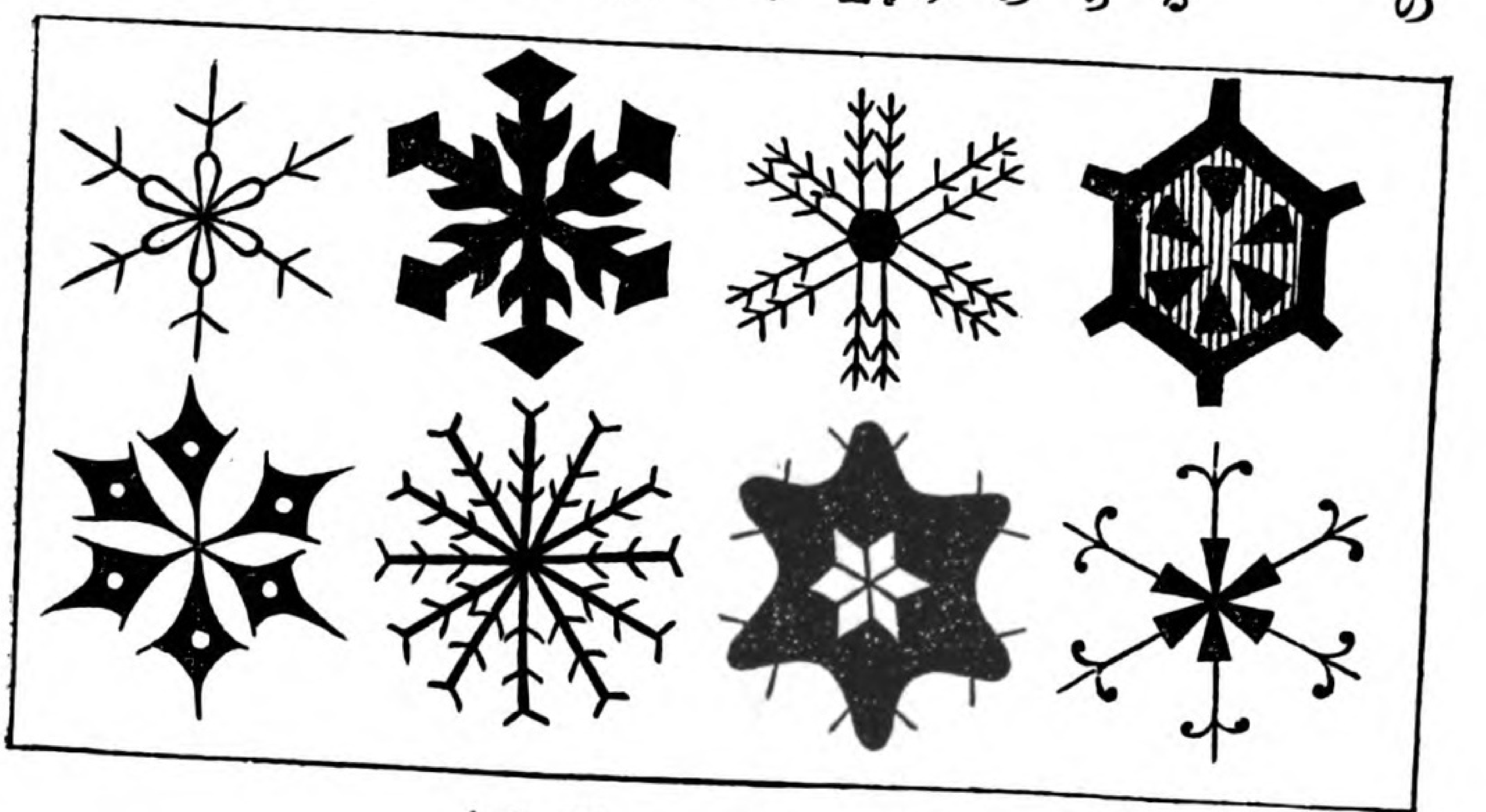


が、春までは其まゝ居る。下駄や唐傘は半年間は殆ど用のない品物で、風の一しきり毎に卷き上げられる粉雪は見る／＼五七尺の丘を作つて、此丘の位置が時々變る、彼地方の人は雪が降るとは言はぬ、「スドエフキ（ひどい吹きですね）デスヌスー」といふ。此ひどい吹雪の中を、頭巾造り付けの簑を着、藁靴はいて軍歌を唱ひながら學校へ走けて行く兒童の姿を見失ひ見出しするのは勇ましい景である。子供の樂む雪礫などは冬の始めか春の半ば過からの話で、枝にも止らす地にも落付かぬサラ／＼雪

は、迚も握つて固まるやうなものではないのだ。

▲雪の大偉觀

殘念なことには雪景の最偉觀たる氷田、氷河、氷山は我國には見られない。歐州に名高いアルプスの氷河は、幅が一マイル以上、厚みが六百尺からの推し固められた雪の塊で、これが溪に沿つて二三十マイルも流れ下り、暖い麓へ出て溶けて川となつて行く。北極地方のこれの大いのは、幅が五十マイル、厚みが二三千尺からあつて、それが山地から一日數尺乃至數十尺の速さで休みなく流れ下り、懸崖の處へ來るとガラ／＼と缺け落ちて、氷河の瀑布といふ世界無比の大偉觀を現出し、瀑下は復び癒



雪の形（一）

合して元の一塊の氷河となり、枚を啣んだ大軍の徐々と推し下る。瀑布の上端は目覺しい靑藍色で、氷河の面は白く、緣に靑味を帶びて居る。

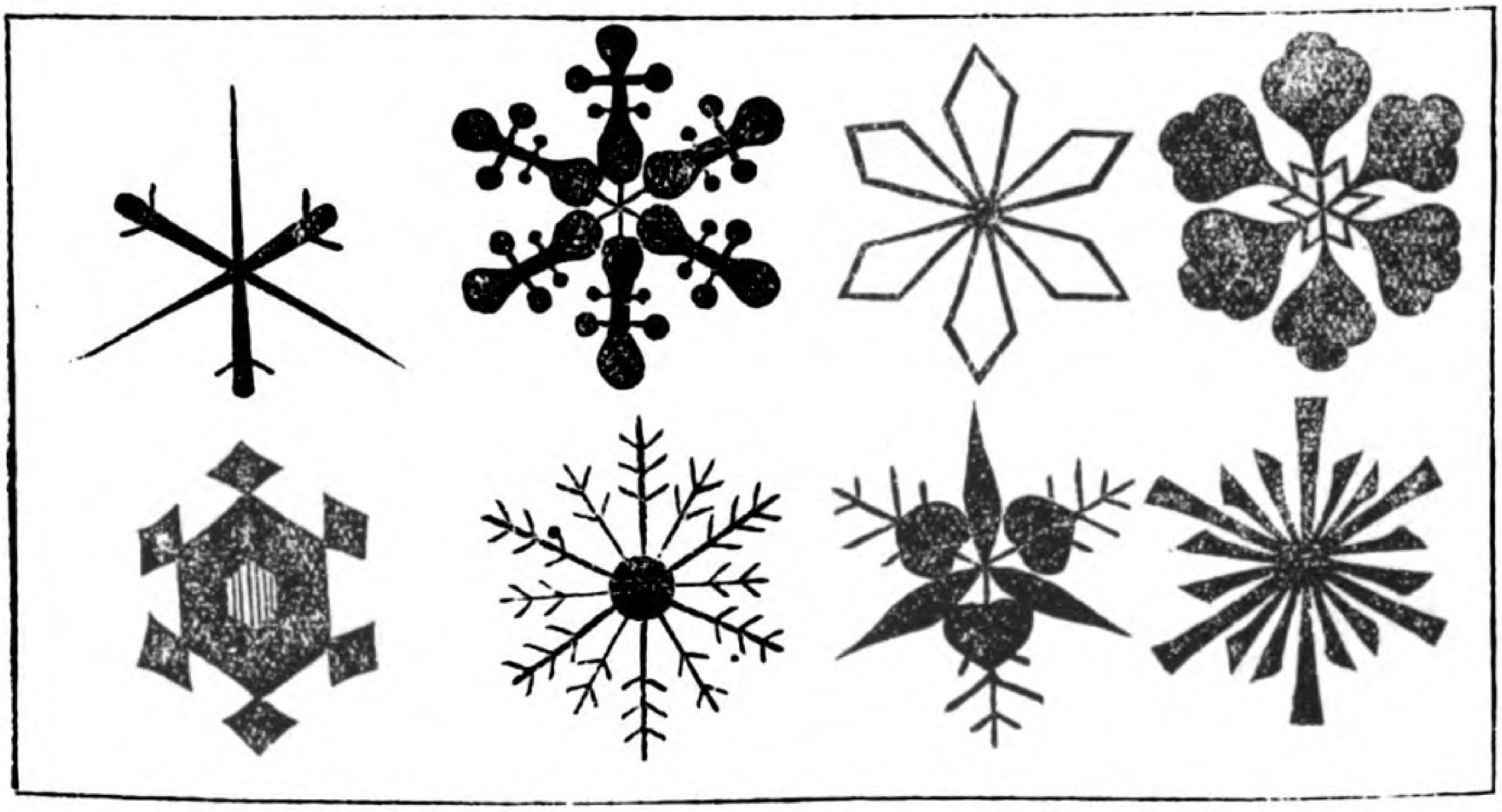
此崖が海岸なら、氷河は即ち崩えて海に落ち込み、氷山といふものになつて、波のまに／＼暖い方へ溶けに行く、氷が海に浮ぶのだから、水の上に出て居るのは僅に全体の十が一であるのに、よく圖に見る通り、其傍へかいた船の檣の十倍二十倍もあるでは無いか、小膽な詩人に此等の大景が歌へるだらうか。

▲雪の女性美

人間社會に男性美と女性美と相合して完美を得て行く通り、自然界

にも望遠鏡的の美と顯微鏡的の美と相表裏して全き美觀を形成つて居る。自然の美を完全に樂まうといふには此二方面の其一つを缺いてはならぬ。さて雪の眺めについて此二方面はどうなるだらうか。寒帶地方の大氷河大氷田、奥羽北海の大吹雪、これらは雄大な雪の男性美に相違ない。精緻微妙なる雪の女性美は、折り惑ふ梅が枝、白妙なす鶯の羽、「門の雪臼と盟の姿かな」などの、しほらしき小景に止るであらうか。否、眞の雪の女性美は猶其奥に潜んで居る。其奥とは?。乞ふ少く自分の見たところを紹介しやう。

自分が微妙精緻なる雪の女性美に接したのは明治三十年の冬から三



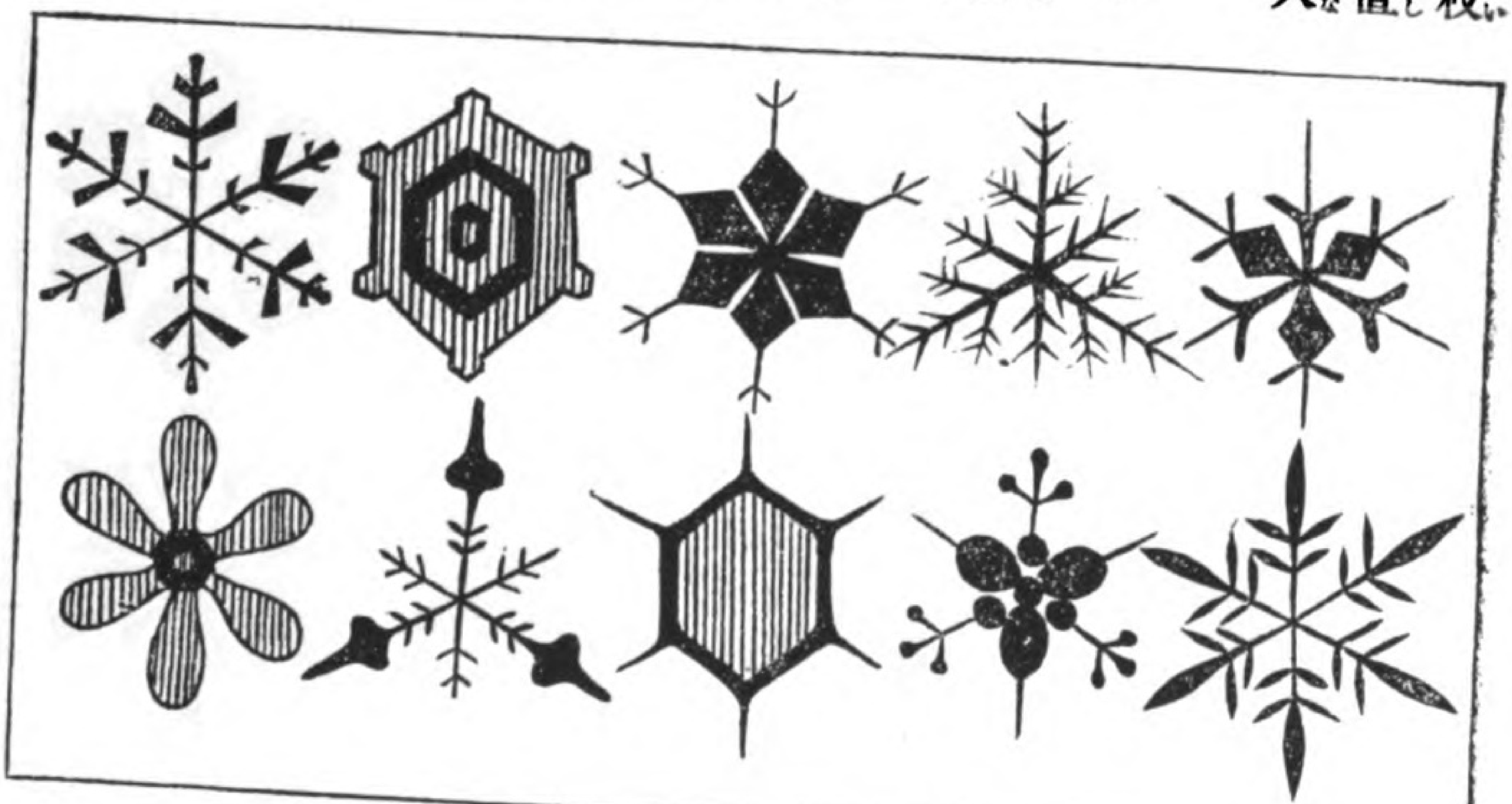
雪の形（二）

冬の間である。頭巾に藁靴黒服といふ支度で、庭中に佇んで、袖に受けた雪片に顯微鏡をかざした時の心持はどんなであつたらうか。今迄吹雪の大景色にのみ視慾を恣にした目には、峨嵯たる峻嶺を攀ぢ下つて平原に鶯を聞いた心持と言はうか。紛々落ち來る雪片、六花爛熳、六出芊々、其數や數ふべからざるでしかも人の面の殆一として同じものは無い、花瓣の如き廣き枝のもの、車の輪のやうに細き枝のもの、剣の如く尖つて居るもの、毬の如く圓いもの、中央に鏡を有するもの、鏡ばかりの枝なきもの、枝の六本あるもの、枝の三本あるもの、小枝の一本のもの、二本三本五本十本あるもの、平面

的のもの、角の生へたもの、二枚三枚軸棒でつなぎ重つたもの、直徑三分もある大きなもの、針の穴程の小いもの、眞に千態萬狀で、身の冷え髭の氷るも覺えぬばかり。爾後毎日暇ある毎に此美觀を恣にしたが、遂に思ひ付いて之を寫生し、其數積つて一千百餘、一番成績のよかつた日には、一日に百六十からあつた。若し雪の最多い夜の觀察が出來、適當な顯微鏡があつたらばと、今に遺憾に思つて居る。

▲雪の形

試みに黒板の上へ、雪を降らして御覽なさい。そして豫め準備して置いた顯微鏡の力を藉りて、其の形を大きくして御覽なさい。之れ



雪の形（三）

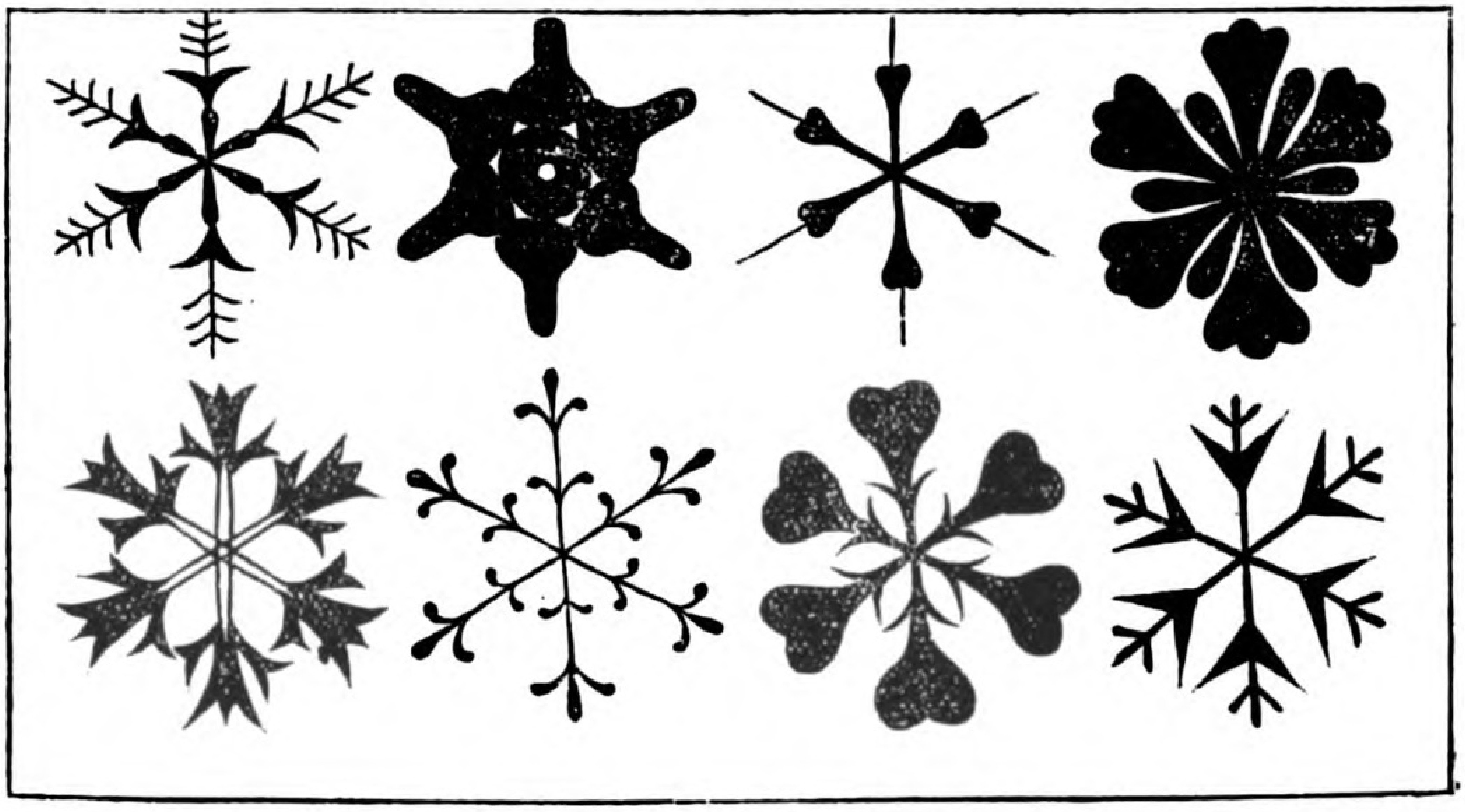
ほど美しい、又た調和したものは他に多くありません。

天界の秘密は、此方の手が器用で、目が敏くさへあれば、歴々として眼前に現はれる。薄片なもの、枝のやうなもの、大小打雜せた、種々雜多な雪片は、若し戶内と戶外との寒さが、同じであつたならば、室内で、ゆる〳〵研究することも出來やうが、それはまた、同じ天の支配の、許すべくもないので、或學者が、板の上へ落來るが早いか、之を寫眞にして、約八百種餘を得たことがある。

降りに降りしきる數十萬の雪片に對しては、其結晶の形、大いさ、否さ其密度さへも、同じくないと聞いて、誰だつて驚かないものが

あらう。が實際は、之を究むるに從つて、いよ〳〵驚くべきものがあるのみならず、これが結晶は、一面氷結の力に依ると共に、一面には嵐の力と、雲の壓力が、其形と密度とを變へて了ふのであつて、ます〳〵天の力を歎賞せざるを得ない。

雪の形は、大凡の人が知つて居るごとく、幾何學的の一美觀である。されば、其學者が集めたものは、同じのが二つとは無かつたばかりか、悉く、何とも云へないほど麗しい調和を保つて居て、物理の大法に準ひ、自から産れ出た、言換れば、自から本家ともいふべき、上層の雪片と同一の形を維持して居て、殆ど一絲亂れずとでも云ひ



雪の形（四）

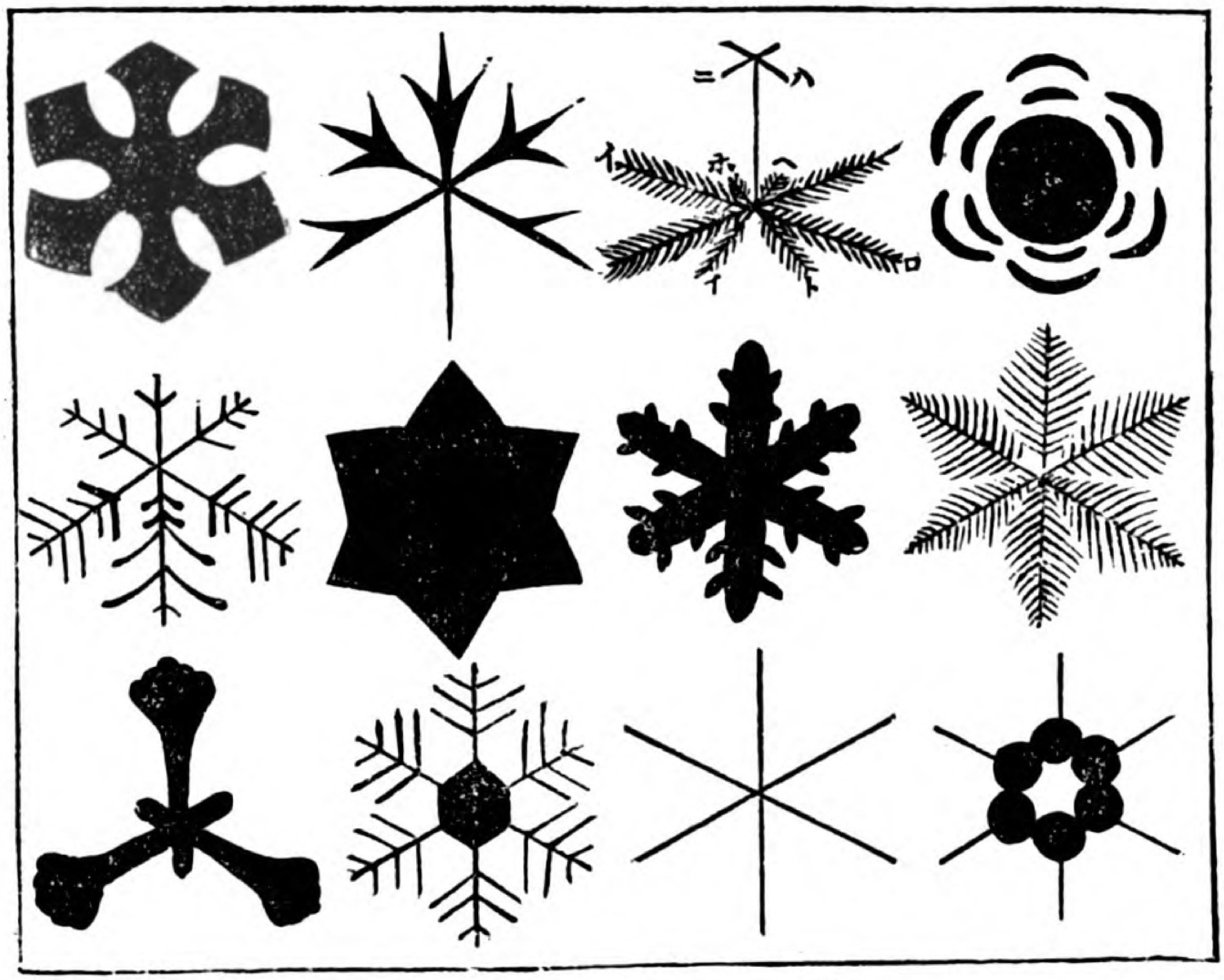
たい位であつた。といつて、上空の有樣が千變萬化して居る限りは、何も八百の内で、同形のものがないからつて、強ち驚くに及ばないのである。

元來、雪は、地上に落ちて來る時に、空氣を吸込んで、これが爲めに形を變へられ、又た各方面から附著する微分子に依つても、大きさを増されるが、其いづれに因るにしても、確かにして然かも不變なる天則に左右されて、いづこにゆかうとも、其形は絕へず對比して居る。

されば、雪片が、最高層の寒いところから落ちて來る時に、縱し、棒のやうな形や、扁平な形を失ふ又中層から落ちて來るものは、一

體に形が大きく、扁平に且つ緊つて居て、下層からのものは、形が最も大きく、又た緊がなくて、枝が突出て居る、のみならず、雪の粗末な部分から來る雪片は殆ど透明な輪廓を失つて、地に落つると直ぐに解けて了ふので、これは人をして失望させることが多い。

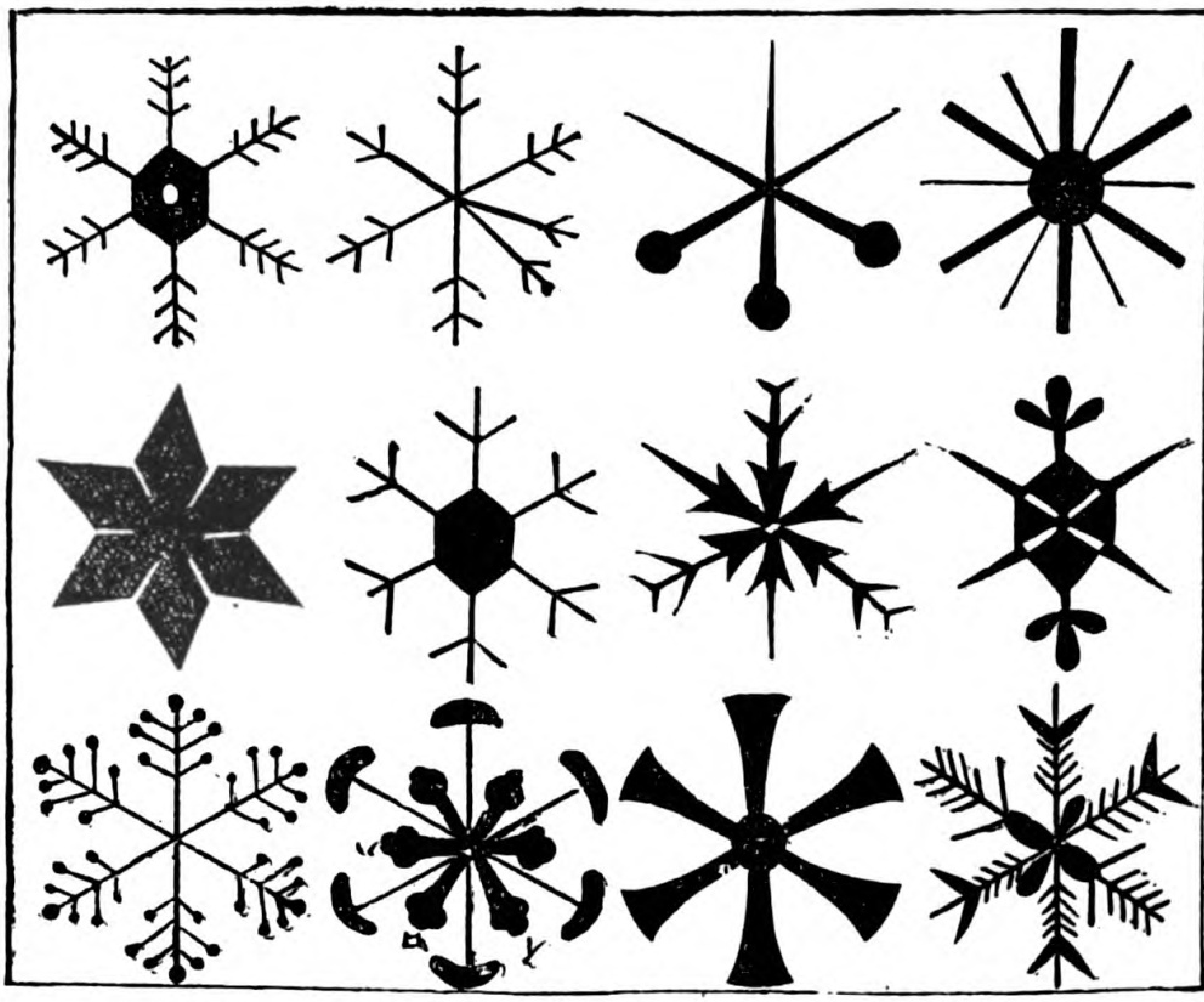
斯くいふものゝ、雪は悉く奇麗で完全な形を具へて居るとは言へない、廣い所を吹き廻るにしても、中層の雲界から附著する他の片のために、金環のやうにもなり、杖のやうにもなり、又窓飾のやうにもなつて、從



雪の形（五）

つて、吹雪の範圍が、極めて廣く渡る時などには、大低東と北とに最も奇麗な雪があるといふ説より推して、其雪片さへ見れば、事實上、吹雪がどれぐらゐの速力で、何處から吹いて居るかといふことも畧ぼ知れるのである。これは、各雲層とも、特有の雪の形があつて、風や嵐に形を頽されない限り、其所屬方面を察することが出來るのに起因する。通例、一番高い所に在るのは、形が細く棒のやうで、中層からの雪嵐には總じて完全な

形を失はぬものが多く、且つ又た、其內部が、いかにも複雜して居て、之れに依つて、時と場所と、其の雪の變化して來た事情を知ることが出來る。兎にも角にも、綿をちぎつたやうに降つて、昔から詩となり、歌となり、將た畫となつて居る、雪其物の、內容の美しさを增す棒、鞭、桿、纖糸、花、等各種の形が、主に空氣の作用で出來上るといふのは、頗る興味のあることで、併せて、其の結晶の、雲表に靜止して居る際に、眼に見えぬ水



雪の形（六）

分が、同時に兩方から一の片に附着して、美しい透明體を造るなども、確かに面白い事實である。

▲上に示す六十餘は、其中から趣の違つて居るのを拔き寫した、しかも略圖で、學理上の研究の如きは、態と一切立入らぬ。若し讀者がこれを見て、成程こんなものかと首肯いてくれるならば、自分はそれで滿足する。雪の圖譜としては、既に名高い江戸雪譜があり、北越雪譜があり、物理鑛物氣象學などの本の中にも隨分出て居るが、或はそれ

ら以上のあるものが入つて居るかも知れぬ。

▲雪の結晶

雪の結晶について一言して置く。雪は鑛物學上六方晶系といふ系統に屬し、根本の結晶形は二色あつて、大きなのは多く六方柱といふ、水晶のやうな柱の形、小いのは多く斜方十二面體といふ、菱形の面十二で包んだ形を持つて居る。普通の雪の一片は、此の如き結晶が、中心から多くは六方へ光線狀に凝り集つて出來たもので、即結晶の集像といふものである。が、雪の此の如き一片は、顯微鏡でなければ見えない極々細かい塵埃を心核として、それから六方へちやんと定つた角度を以て集つて一つの完き形をなして居るのだから、亂雜不規律の集合と思つてはならぬ。其定つて居て動かぬ角度は六十度が元で、それに二倍の百二十度、半分の三十度又其半分の十五度などである。

雪は水蒸氣が氷點以下に冷えて生ずるものであるから、雪の形は此時の温度、濕度、其變り工合、核になる細塵の形及多少、其他で夫々趣を異にする。

夫から攝氏零下二十三度半以下の寒い〱極地方の雪は、多くは只一本の細い針の形になるといふが、自分は零下二三度の日に隨分此の如き雪を見たから、針狀の雪は極地方でなければ出來ぬとは言ひ斷れない。

（完）

通俗科學 龍の話

佐藤禮介

今年は辰の年である。辰は即龍の事です。年の順に何故辰とか丑とか云ふ名を付けたのか、其の由來は兎も角爰には只辰に因んで昔の人の龍といふたのは何物であるか、又龍の字の付いて居る生物は何んな物かと言ふ事に付てお話をしやうと思ひます。

▲龍の形

龍は昔の人が想像して作り出したもので、地球上に生存するものでない事はいふまでもない。しかし昔の人は龍といふ生物が實際、此の地球上に生活して居るも

のと信じて居りました、其れ故種々な書物に隨分龍の事が記してある、甚しきは龍を見た人すらある、位です、居らぬものが見える筈はないのですから、多分、龍卷即ち今の言葉でいへば旋風でも見たのであらう。さて昔の人は龍を何んなものだと考へて居つたのが、其れを知のも亦面白い。本草綱目といふ書物にかう書いてあります、龍の形は九つの動物に似て形を備へて居る即ち頭は駝に似て居（駝とは今の駱駝のこと）龍の角は鹿に似て居り、眼は鬼に似て居り、耳は牛に似て居り、頸は蛇に似て居り、腹は蛟（蛟とは龍の類で、其の眉交生して居る動物だといふことですが無論實體のない想像物です）に似て居り、鱗は鯉て似て居り、爪は鷹に似て居り、掌は虎に似て居るといふのです。背には八十一枚の鱗を具へ其の聲は銅盤を打つ音に似て居る。是で見ると今でも銅の盥を叩いたならば龍の聲に似た音を聞くことが出來る譯です。口の傍には多くの鬚髯あり顎の下には明珠があり喉の下には逆立した鱗があるといふことです。



▲龍の活動

龍は氣を吐けば雲を生じ或は水を生じ、或は火を生ずる力がある、實に不思議な力を持つて居るものでありませんか、龍は鳥や蛇と同じ樣に卵の形で子を生み雄の龍は風上で鳴き雌の龍は風下で鳴く雌雄は一箇所に相集ればニつの小蛇に變ずるといふことで其の活動變化誠に自由自在なものと見えます、龍は性、粗猛であつて美

玉を愛し喜んで燕の肉を嗜み鐵と蜈蚣と棟の葉と五色の絲とは龍の最も恐怖する物である其れ故に燕の肉を食したる人は河海を渡ることを忌まねばならぬ、是れ龍の怒りに觸れる爲めでありましやう、又雨を祈るには燕の肉を供物にします、是れは龍を呼び出して雨を降らせる工夫と見えます、洪水を防ぐ祭りには鐵砲を供物にする、是は龍を喝して恐怖せしむる工夫であらう、又龍は春分即ち三月二十一日には天に登り秋分即ち九月二十三日には天より降て淵に入るといふことです、昔の人も隨分滑稽な想像をして恰も目に見える樣に上手に揑造したものです。

(三)龍卷

黒雲天に漲り墨を流た樣な空模樣の時、濱邊に出て海の方を眺めると空の所々から黒雲の柱が舞ひ下がることがある、又船に乗つて海



龍卷

の上に出て見ると彼の黒雲の柱が、空から舞ひ下ると同時に、下からは海水が繩の如く絢はれ、水の柱となつて天に向つて昇る樣に見える、斯樣な有樣を見て、昔の人は龍が天から下つて、水を卷き上げるのだと思て之を龍卷と稱して居りました、併し龍と云ふものがない以上は龍卷も他の原因で出來るものです、即ち理學上明かな理由があります。

海上の或る狹い場處に低氣壓が起ると周圍の氣壓の高い所から空氣が其の低氣壓の中心に向つて突進する、其の突進する風は地球の自轉の爲に作用せられて卍鞆繪の樣に低氣壓の周圍をグル〳〵と廻はるのです、風が卷き廻はれば廻はる程、益々低氣壓は甚しくなつて、其の中心には、眞空に近い柱狀の場所を生ずる、そこで海水は下から其の眞空に近い

場所に登り雲も亦上から其の低氣壓の場所に吸ひ付けられ舞ひ下る是を外から見ると前に申した樣に黒雲が水を吸ひ上げる樣に見える、さて空に向つて登つた上部の水は風の力で周圍に撒き散らされ下部の水は其のまゝ海中に落ち下る、小さな龍卷は只小さい水柱が現はれるばかりですが、大きい龍卷になると小舟などを卷き上げ、海に衝き落して數多の人名を損ふことがある。

斯樣な龍卷即ち旋風は只海上で起るばかりでなく、陸上でも時々見ることがある秋の末に野路を歩んで居る時に路に落ちた枯葉がクル〳〵と廻はり繩の樣に渦を卷いて高く空中に舞ひ上がる、是れは旋風の小さいので、其の大なる旋風になると、數多の人家を倒し數里の間の田畑を荒すことがあります。

（四）龍の落し子

龍の落し子は海に棲む長さ五六寸位の魚で此の魚は甚



だ奇妙な形と性質とを持つて居る殊に其の形が書に描いた龍に似て居るといふので、人は之に龍の落し子といふ名を付けた。

此の魚は我が國の近海の海藻の茂つて在る所に棲んで居ます、頭は長く吻は管の樣に突き出て其の管の先に口が開いて居る、眼は割合に大きくて海中に居る時は其の眼球がクル〳〵と四方に廻轉さする性がある、之は頭を動さずに四方を見廻はす爲です、若し此の魚を硝子の瓶に入れ海水と藻とを入れて飼つて置いて、外から見ると其の眼球の動かし方が實に奇妙である、頭の後には左右に壹枚づゝ鰭があつて、其れが丁度耳の樣に見える、側から見ると幾分か馬の頭の樣に見えるので英國などでは之に海馬といふ名を付けて居る胴は六角の柱の樣であつて堅い鱗で被はれて居り、尾は細長く四角柱の樣であつて且つ時計の撥條の樣に卷くことが出來ます、尾は此の魚にとつて實

に大切な物であつて水中を游ぐことも藻の枝を握つて體を休めることも皆此の尾の働きであります。

又一つの面白いことは兒を生む仕方であります此の魚の雄の腹には大きな嚢があつて雌は此の嚢の内に卵を生ます、其の卵は此所で孵つて生長し大きくなつて、雄の腹から外に出る。

（五）龍の鬚、龍眼、龍膽、

龍の鬚は又じやのひげとも云ひ、細長い葉を持つて居る草です、葉の長さ一尺許りで夏に穗を出して淡紫の花を開き豆粒位の靑色の實を結びます、樹の下や日蔭でも、よく


りゆうのひげ


りんだう

生茂るもので庭園や花壇の緣などに植ゑて賞翫せられます。

龍眼はむくろじの木と同類の常綠木で丈高くなります、元來熱帶に生ずるものであります、我が琉球にも栽えて居ります、其の實は人の指頭ほどの大きさで圓い球の樣な形であります、熱すると内に美味な肉があります、

龍膽は山野に生ずる草で高さ一二尺位、秋になると莖の頂に數多の藍色の花を開きます、其の根を採つて噛むと甚しい苦味があります、此の苦味は胃病を癒す

効能があるから種々の藥を製します、胃病の人が往々用ひる苦味丁幾は龍膽の根から製するものです、此の外龍の字の附る植物には龍舌蘭とか龍腦菊とか、龍の爪草とか種々あります、

物名には龍頭あり、龍吐水あり龍車あり、傳說には龍宮、龍王、龍神、龍馬などあり其他、幾多の小說的の話柄がある所を以て見ると、太古より數千年來人心に大なる影響を與へたものです。

鶯の話

新年の鶯は何と鳴くか、初日の出が東の空を破つた頃に、はや市內到る所庭の梅や橙へ來て茶々と鳴く決して決して法華經などゝ云ふて目出度き元日から鳴き出しはしない先づ起き上つてチャ／＼と呼んで枝から枝へと移つて行く初鶯迄が朝早く御茶が飲みたいのか又人に飲めと勸むるのか其處は皆さんの釋解次第、兎に角法華經と云はぬのが面白い、そこで日本には鶯が三種ある本州に產するものが二種、小笠原島に產するものが一種ある、

東京ぃ市內は鶯が渡つて來るのは（所に由ては年中居るかも知れぬが大多數は近傍の山地から渡つて來るもので是れは漂鳥と云つて宜からう）年々秋の中頃で近年氣を付けて居たら十月の二十六日の朝始めてやつて來た是れは一時に一所へ澤山に來ない漸々に增ねて來る、此頃の聲は初めに云ふて置いたチャ／＼チャ／＼と鳴くばかりで初聲として法華經を鳴き初めるのは年々二月の中頃（始めて聞いたのが二月の十五日）であるが始の內は甚だ拙で段々に生殖時期に近づく程好き音調で盛に鳴き出すのである此法華經は何時頃まで續けて居るかと云ふと春の始めから夏に入りて生殖時期を經てもまだ止めない晩夏までは鳴いて居るソレから秋に入てくると又元のチャ／＼／＼／＼と鳴く樣になる、だから晩夏に山地へ行くと法華とチャ／＼／＼／＼とか同時に聞かれる此時が鶯の移り變はる時でつまり鶯は春と秋とで一年の中に二度鳴聲の季節的變化をするものである、そこで夏は無論に法華經であるが產卵の場所が多くは山地であるから此頃になると市の內には居なくなる、此時分に武藏から相摸伊豆駿河等に掛けて恐らくは本州の山地は何所へ行つても大抵の所に盛に此鳥の鳴聲がする

鶯の產卵の季節は相摸及び駿河地方では年々四月から七月に亘て居る其營巢する所は多くは樹の上であつて就中「ばら」「もみぢ」「そろ」茶の樹等の上又は竹藪に作る事も隨分多い、何所へ作るものでも巢の材料は一定して居るキッと竹の枯葉で美事に組み合せて在つて入口が橫に向つて居るのが多い、巢の在る高さは地上一尺から四尺までの所に在るのが普通である、玉子の數は四ッから六ッまであるのが普通で其色はいつも必ず全體眞赤で斑紋を交へない又玉子の大さは巾が五分許りで長さは六分許りである

婦人と繪畫

（水彩畫のしをり）

三宅克己

私はこれより引續いて洋畫に關する御話を致ますしが、元來繪と申すものは、中々講話の上などで精敷說き盡せるものでありません、何うしても實際繪其物を御目に懸けた上でなくば御話も其効を奏じない譯であります、然し我邦今日の有樣では未だ洋畫の印刷が甚だ幼稚であります故、到底皆樣が御滿足になるべき精巧の繪を掲げる事は出來ませぬ、又從ふて充分の說明も仕兼ぬる樣な次第であります、然し出來ぬからと申して何時迄も其儘に差控へて居つては一向開發の途が附きませぬから萬事不完全ながら玆にこれを試みて見やうと思ひます、全體繪を書くと云ふ事は是は別才で誰にでも出來得る仕事でありません、故に私は假令本誌に於て繪の講話をするからと云ふて皆樣に繪を描く事を強ゆることは望みませぬ、其の描法の說明の如きは特に筆を手にさるゝ方々に對して多少の參考となれば甚だ滿足なのであります。

然し私は繪を味ふと云ふことは汎く皆樣に御勸申たい婦人として、繪を解する事の出來ぬ程不都合なことは無いかと思ひます。

凡そ婦人と云ふものは男子と違ひまして顏や頭の化粧は申迄も無く其服裝から室內の裝飾等に到る迄皆意を用ひ心を盡して工夫せねばならぬものと思ひます、其意を盡しますや如何なる點に向ふて居るかと申せば即ち美と云ふ事を表しだい言換へれば自分の意匠によりて他人の美感を引起たい、これは婦人の通有性で直に貴きものと思ひます、然しこれら美と云ふものを表す事にしても決して偶然に出來るものでない、能く色の調和及線の配合などを研究せねばなりませぬ、玆に於て聊か繪に對する心得があれば其點に於て大に得る處があらうと思ひます、世間には美と云へば價貴き物品を用ひ華美なる配色をせば夫れで美である斯の樣に心得て居られる方々もありますが、是は甚だ間違で總て眞の美と云ふものは必ずしも高價なるものに伴ふて居ると云ふものであるまいと思ひます、よし其價は廉に其品は假令粗惡であつても、若し其の調色配合の宜敷を得ば美的趣味は遺憾なく表れやうと考へます、然るを世には是等の心得を轉倒して美は一つに高價の物品に存じ何事も唯華美に打飾るを以て唯一の手段の如く誤解せらるゝ方々もある樣なれど、實に心得違ひの

最も甚敷ものと思ひます、されば其身位高き貴夫人にてありながら宛も賤劣なる醜業者の風采に陷り或は又良家の孃子にて其化粧の無趣味なる山家育ちの村孃にも劣る樣往々自分等の認むる處でありますが然もこれらに氣附ずして得々たる方々私の最も御氣毒に思ふ處であります、さて是等の不體裁を改めんには如何すれば可いかと申せば成程他にも種々の方法はあることゝ思ふが、其根本的敎養は如何にしても美術思想を養成することに歸するのであらうと思ひます、これを望まば先づ繪畫を手づから描ずともせめてはこれを味ふて能く其趣味を解することが何より肝要なることゝ信じます、さすがは美術思想の一般に發達せる歐米のことゝて其諸國の婦人の風采たるあながち美麗と云ふではありませんが、其色彩の配合より總ての調和私共の往々敬服する所であります、是等を想ふては未だ我邦婦人の彼の人々に及ばぬことを感じます、近來世上美術と云ふ文字を濫用し妄に美術と云ふ形容詞を附し美術何々美術何々などと世の深窓に在る諸孃子を誘惑せんとするが如き有樣でありますが、斯樣なものに心を奪れ所謂美術何々なるものを得て得意たるが如き到つては皆樣の爲め大に歎かねばならぬことゝ思ひます、こゝに於て自分は廣く世の婦人方に願います前にも再三述べた通り先づ第一繪の趣味を解する樣に勉めこれによりて得る智識を應用し種々なる方面に注文あらんとを希望しますさすれば其時こそ眞の美術簪も出來美術肩掛も出來美術御袴なり美術御足袋までが揃うかと考へます。

次に一寸口繪に就き御斷を致しますが、以來口繪の圖題は可成日常皆樣の御目に觸れる物品や、風景を擇びたいものと思ひます、此圖題も丁度前に述べた樣に雅致ある器物幽邃なる山水は遠くこれを他に求めねばならぬと云ふものではありませぬ、極く手近の器具或は又日常庭先に咲て居るツマラヌ花卉の樣なものでも、若し少しく注意して觀察すれば何れも皆相應の美は備へて居るので何れも立派な繪の手本となります、要は唯觀る人々の眼識如何にあることです、されば自分は出來得るだけ卑近なる圖題を擇びて徐々と描法等の說明を試むることにします。

英詩和歌對照

（藤生貞子）

はるかなる岩のはざまに獨り居て
　　　　人目おもはで物思はゞや　　　西行法師

Give me a cell
　　To dwell
Where no foot hath
　　A path;
There will I spend,
　　And end,
My weary years
　　In tears.　　　*— Robert Herrick.*

（大意）我に窟を與へよ、人の通ふに道なきところに住まんため。なやましきわが幾歳を、涙のうちに暮らし過ごさん。

（懊惱苦悶のはて、世を避け人を忌みて、獨棲を願ふところ、相似たらずや）

そこひなき淵やはさわぐ山川の
　　　　淺き瀬にこそあだなみは立て　　　古今集、戀

Passions are likened best to floods and streams:
　　The shallow murmur, but the deep are dumb.
So, when affections yield discourse, it seems
　　The bottom is but shallow whence they come.
　　　　　　　　　　— Sir Walter Raleigh.

（大意）情熱は河や流れと、よくも似たり。淺きはさゝやき、深きは默す。されば、情が言葉に出づる時、其出で來る底は淺しとぞ思はる。

〔註〕—*floods*=rivers. 詩に用ゆる語なり。*murmur*=詩にては、流水の音を形容するに、屢々用ひらるゝ語なり。 *yield*=to give out; to produce 即ち'發す'の意。*but*=only。*they come*=they は三行目の affections を指す代名詞なり。

（此兩者は殆むど符節を合するが如く一致せり。此英詩は全く偶然古今集の歌の意を敷衍したるものに外ならず）

熟語用法練習

At times.

あの方は時々私の所にお出でになります。
She calls upon me *at times.*

市外へ出る事も時には必要です。
It is necessary *at times* to go out of the city.

at times=時々、折々、往々。

At will.

あの人は何でも好いた者を勝手に持ち去りました。
He took away *at will* whatever he chose.

at will＝思ふまヽに、心に任せて、意の欲する儘に。

Bad blood.

あの二人の婦人の間には餘程惡感があるやうです。
It seems there is much *bad blood* between two ladies.

Bad blood (ill blood ともいふ)＝惡感情、憎惡の念。

Badly off.

あの人は、貧乏になつても、非常に廉潔な人です。
He is a very honourable man, though *badly off*.

Badly off＝不幸の境遇に陷りて、貧乏して。(ill off とも云ふ。又 better off; well off といへば有福にて富みたるの意なり。)

To bear down.

彼の雄辯は反對者をしてすべて屈服させました。
His eloquence *bore down* all the opponents.

To bear down＝壓倒す、うち破る。

To bear in mind.

いつかは家の主婦とならなければならぬ事を、お忘れなさるな。
Bear it *in mind* that you must be house-wife some time or other.

To bear in mind＝念頭を離さず、心に銘す。

作 文 の 心 得

英文を書くにも、また日本の文章を作るにも注意すべき心得として、こヽに Edward Everett Hale といふ人が擧げた七ヶ條を示しませう。

1. Know what you want to say. 先づ、爾の云はむとする事柄を知れ。(一知半解の事柄を書くべからず)
2. Say it. 知る所を言ふべし。
3. Use your own language. 爾自らの言語を用ひよ。(language は此には國語の意にあらず、すべて自己の言語を用ひ、他人の章句などを取る可からず)。
4. Leave out all fine passages. すべて花々しき文句を取り去れ。
5. A short word is better than a long one. 短き語は長き語よりも善しとす。
6. The fewer words, the better. 語數少ければ少き程よし。
7. Cut it to pieces. 個々の短文に切るべし。

以上平凡なるに似たれど、注意すべきなり。

眼の記憶 (博物の部)



トラ



タヌキ



クマ



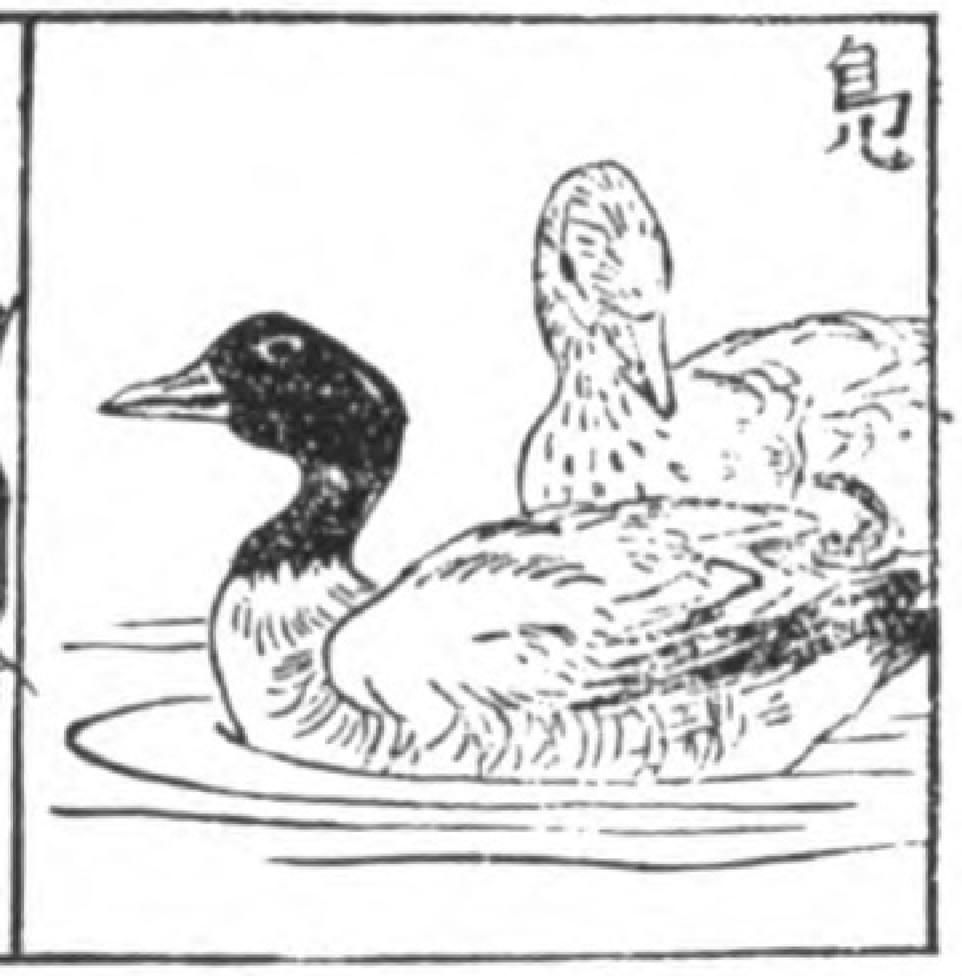
子コ



イヌ

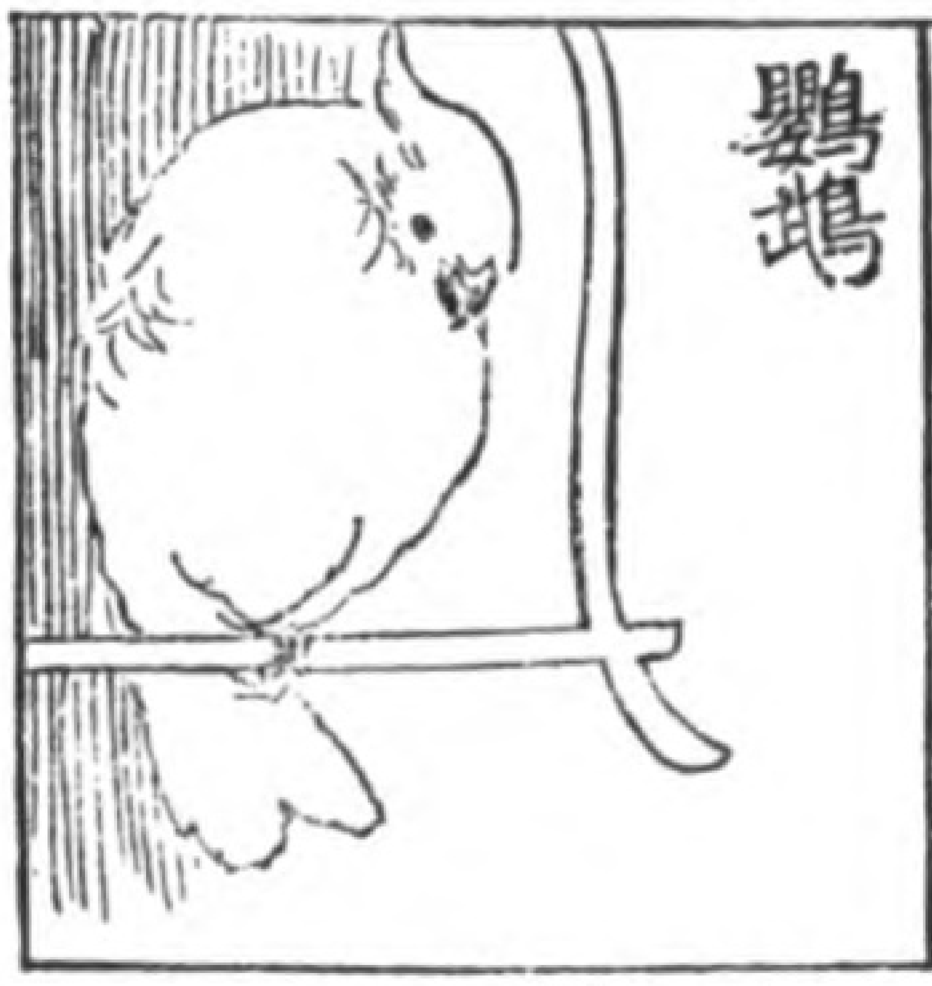


シカ



ケリ


カワセミ



オヲム



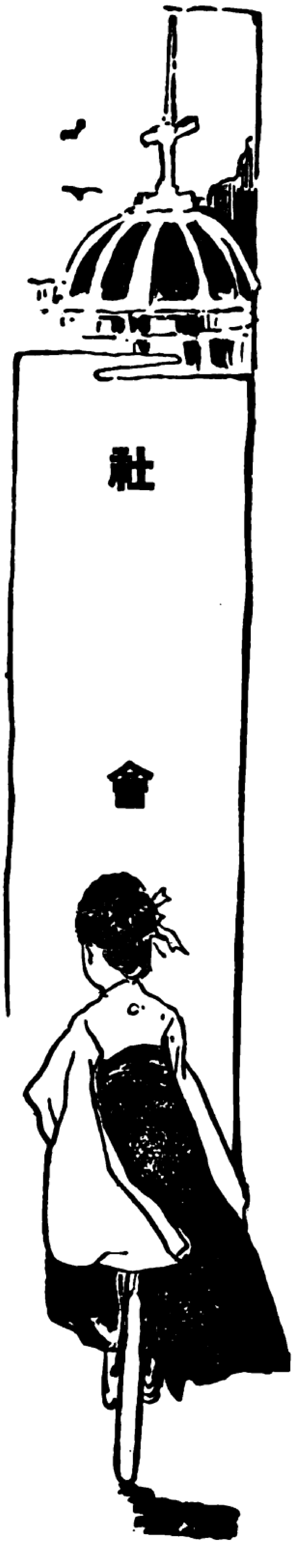
ハト



ツバメ



スヾメ



倫敦巴里　婚姻事情

歐洲新歸朝者某氏談
藤本軍次郎筆記

この婚姻事情は商用の爲久しく倫敦に在留せし某氏の談を在橫濱なる藤本氏が筆記して本誌に寄せたるものなり

△家庭的婦人

歐羅巴の婦人は其國々に依りて各々ちがつた特質と慣習がありますけれども、先づ巴里婦人と倫敦婦人との二つが重なるものであつて、今此の二つの特質をそれぞれ比較して見ますると、巴里の婦人を交際場裡の花とすれば、倫敦の婦人は寧ろ家庭的世話女房とも謂ふ可しである、巴里婦人は屋外に於て見るに宜しく、倫敦婦人は家內に於て見るのがよろしい。一方は花やかで一方は地味です。

△歩きやう

巴里婦人の三々伍々打連れて街頭を歩く風は、兩腕を前に組合せ、足の爪先を地につけて歩み、笑聲を發し、嬌語を轉しつゝ、如何にも立派で賑かですが、倫敦婦人の歩きますのは兩腕を垂れ足を平にして歩み、口數をきかず漫に笑はず、四邊に何事のあろうと我不關焉と小面憎い程落着きはらつて往來してゐます。

そうして又巴里婦人は華手な服裝を好むけれど、倫敦婦人は淡泊にして瀟洒な服裝を好むやうです、然し何も經濟向きと云ふのではない、單に華美好みと諸かり

との相違丈で、寧ろ其値段より云へば、巴里婦人より遙に贅澤な物を着てゐるのが澤山あります。

△おつくり

さて化粧法でいへば巴里婦人は衛生や何にかには頓着なく、白粉を塗り、紅を施し、或は化學的溫浴を爲し、甚しきは砒石の如き毒藥を服して其美を發揮するに努めるそれから又、澤山に子供を造らへると容色が惡るくなるといふので、二人以上の子を產むことを避けるが如き（佛國の人口減少の理由は種々あれども婦人の容色を重んずること確かに其一なり）罪惡を敢てして顧みないが、倫敦婦人、否英國婦人は一般に生理的化粧法を尊び、規則正しき運動と冷水浴とに天然の麗質を發揮することに努めて居る、其點の如きは我國の婦人が大に學ぶ可ぎ處である。

△遊　戲

されば遊戲の如きも、巴里婦人ならばそれ芝居だ、それ舞踏會だ、それ晩餐會だと騷ぎ立てるに引かへ、倫敦婦人は多く散步に乘馬、それからローンテニスや、クリツケツト、是等の衛生的な遊戲を好んで身神を活潑にせんことに努めてゐます、而して佛國の娘は、一寸遊びに出かけるにも頭の頂邊から足の爪先まで精一杯盛裝込んで出かけるけれど、英國の娘は頭も振下髮をぐる〳〵と頸筋の處に卷いたまゝ、麥藁帽を引被つて、木綿の衣服に頑丈な靴を穿き、手輕に扮裝ちて只一人何處へでも出かけるのです。

△表情術

併し乍ら何も英國の婦人が質撲一遍のむさくるしい女のみといふのでありません、又衛生的と云つても我國房州あたりから出る下女のやうなでく〳〵婦人とは大に違ひます、なか〳〵美人も多い、優にやさしい婦人が多い、それは英國の娘さん達が最も表情術に巧みなることとであります、英國一般の母親は如才なく情の敎育を娘達に授けてゐると云ふことです、亦娘達も朋友同士相集つては誰それの男を擒いでやつたなぞと得意氣に語り合つてゐる、佛國の娘先們は一寸男に思ひつかせることは巧ですが、英國の娘先們は例の落着きは

らつて妙に男を思ひ込ませる、男の心を腹の中まで引入れて不意に吐出す技術があるといふ事です、これを若し我國の如き形式的の風俗から見ると、恰も藝娼妓等の手練手管といいふて甚だ怪しからぬことに思はれますけれども、歐羅巴では決してそうではない殊に英國の男性の如く意志の強い頭の冷かな、人間であッ



て、物に驚かず騒ぬ男子を夫として其愛を得終世の友と定むるには、この表情術なるものは寧ろ甚だ必要であるといふ事になります。

△處女

英國の婦人、殊に處女なるものは（或は倫敦の娘們と云つても宜しい）種々の階級があるけれど、一般に佛國など、違ひ、甚

だ家庭が放任主義であります、ゆゑに妙齢の處女が青年の男子と交際するに其兩親が小言を云ふやうなことは決してない、(是れは處女に相應の眼識があつて痴情に走らぬ事を親より認められた結果です、)例ば娘が出歩くにも、佛國の如く從者を附したり或は時間を制限したり、そんな事は一切ありません。得體の知れぬ男子から娘に當てた手紙が來ても母親は決して疑ひませぬ、否、疑ふやうな事があつても娘に無斷で開封するやうなことはせませぬ、常傭の家庭教師でさへ堅く信書の神聖を守つて、敢て其信書を秘密開封するが如きことはありません。

△啓發的躾方

爾う申すと英國の家庭は甚だ危險千萬なものゝやうに御考でせうが、決して爾うではありませぬ、なか〳〵好く修つて居ます、和氣靄然たるものである、我國や佛國の如き娘の躾方が嚴重で干渉主義の家庭より數等大丈夫なものだと言はれて居ります、これは英國の家庭教育が啓發主義、反省主義であるからです、それは娘の子に限らず男の子にも同樣であつて、專ら獨立自尊責任などゝ云ふことを自然に修養される、注入的で無くつて反省的啓發的に自修せしめるからです。蓋し又男女交際が永い間英國の慣習となつて居るからでありませう。

△男女交際の眞義

これは歐羅巴諸國の中でも殊に英國に於て一番行はれてゐます、殆ど英國の令孃們は其男子との交際上に一切の自由を得て居つて、兩親及び兄弟等に何等の干渉をも受けない、それ故妙齡の男女互に其家へ訪問爲合つたり、只二人打連れて遊びに行つたり、遠慮會釋もない態である、けれども誰れとて是を異しむものはない、これは兩性の調和を得ると云ふことゝ、其交際の間に互に相愛し相信じたる配偶を得ると云ふことの必要から起つたものです、而して其交際たるや單に只此二つの要求から來たゞけで、決して我國なぞのやうな醜がはしい男女交際ではありませぬ。

△自由結婚

歐羅巴でさへあれば何れの國を問はず必ずしも自由結婚が行はれてゐる譯ではありませぬ、現に佛國の如き餘り行はれてゐない、只英吉利一國丈けが盛に行はれて居て、殆ど自由結婚の本場とも云ふ可きであります英國の令孃們は則ち其婿選みに就きて自己意志の自由を有し、兩親の承諾を求むることは單に形式のみに過ぎないのです、從て青春の感情一遍に流れ往々無秩序の配偶を見ることもあります、これは一利一害でせう。

△結婚期

英國に於ける婦人の結婚期は概して遲い、廿歳內外で結婚するのは甚だ稀で、多くは廿二三以後廿七八歳くらゐが結婚の盛期で中には三十歳以上の處女が結婚する例も多いとの事です、これは英國の慣習として結婚を約してから二三年乃至四五年の間そのまゝに爲しおき、公然たる儀式を擧げずして互に心相許しながら交際をしてゐる、上等の階級にある人なら兎も角、一定の財產なきものゝ如きは夫婦の生活に困難しない丈の財產を造らへる迄結婚しないのもある、何でも此間か一番樂しいと云ふ事です、小說などによく書いてありますが人世一生の樂みの期は男女相約して未だ結婚しない內だといふて、此間の消息が頗るおもしろく詩的に書かれてあります、然し又樂の半面は苦で、心がはりをしやしないかと互に氣を悶んだり、或は故障が出ては來ないかと心配したりするばかりでなく、中には實際辛き運命の下に破鏡の歎を見るものもある、さう云ふ塲合には大抵內密に押匿して了ふ、世間へ汎く知られては離婚と同樣、女の身に取りて非常な恥辱であるからです、然し甚しきものは男の心代りを口惜しまぎれに法庭に訴へ、損害賠償を要求する違業者もあります、男子の側に於ても亦其通りで、互に洒蛙々々乎として法庭に立ち、男は未だしも、女の朱唇より滔々と其男の薄情を述べ訴へ、或は今日迄に取交はした艶文を憚りもなく讀上るなどは餘に色氣のない話です、併し約婚をして婚禮するまで三四年の間双方相待つといふ事は日本でも追々さうなるでせう。

△婚約

男女互に結婚を承諾したるときは男子は約束の印として女に指環を贈りまする、又婚姻の際は別に一箇の指環を贈ります、婦人は此指環を左手の第三指に嵌めて返禮とするのです、昔は媒介人を以て一個の金銀貨の二分したものを互に贈り合つたとも言ひます、而して若し其婦人の兩親が婿たる可き男子から指環の外に贈物することを承諾したならば、男子は種々の物品を贈るも宜し、然ども這麽習慣は實際行はるゝ處と行はれぬ處とあるから、行はれない處では花を遣ります、其花は可成珍らしい立派な花で此花を贈ると云ふことは何處にても行はるゝ習慣です。

△結婚日

英國の各地方では我國のやうに忌日と云ふことがありますが、都では別段そんな日撰みをしませぬ、而して結婚の時日は凡て婦人の方から定めることになつてゐます、是は則ち婦人の特權である。

△持參金

佛國では花嫁には必ず相當の持參金附であるが、英國では持參金なしで嫁入りするのを普通としてゐます、殊に中流以下は最も左樣です、然し近頃では大分議論があつて、中には這麽事を主張してる人もあります、娘が結婚するに就きて親たるものは宜しく財產の幾分を頒ち與へざる可らず、例へ娘が遠慮をして一應之を拒むにしても誰か年老者から忠告してやつて、納得させる。親に財產あらば其娘が幾分を頒ち貰ふは寧ろ至當の權利であつて、又其婦人が夫への義務であります、如何となれば妻たるもの萬一の場合に於て夫の一家を維持し、子供の敎育費に當てなければならぬからです、其代り、婦人が持參金の義務あると同時に、男子も學校敎師、官吏、書記、商店員等の如き給料に衣食して別に一定の財產を所有しないものは、結婚の式を了るか否や直に生命保險をするの義務がある、是れは自己が不慮の死去に際して遺族を保護するが爲なのです。如何にも尤な議論だ、而して今日では實際此事が段々實行されつゝあるとの事です佛蘭西では男女結婚

を相許すと、日本の如く頓て婚禮の儀式に取かゝります、ですから婚姻の約成るや直に親戚知己に報道するのが例です、そこで其報知に接した親戚知己等も亦直に其家を訪ふて祝賀を述べるのです、而して種々の贈物をしますが、其贈物は甚だ手輕で、通例小刀十二挺を送るのを一般の慣ひとしてゐる、これは我國などでは甚だ忌むべきことで、刀は則ち切れることを意味するのですから、最も緣起の惡るいものですのに英國では一向構はないと見へて、反て小刀の贈物を目出度しとしてゐるやうです、或は其他に金錢を以つてするものもある、英國では前にも述べたやうに、眞實男女が自由に結婚を約して、それから愈婚禮の式を擧げる迄はなかなか永い時日を要するので、佛國などのやうに爾う手取り早く濟けて了ふ譯には行きませぬ。

亦佛國なぞでは妻に送る可き財產があれば男子は婚禮の前日に其讓狀を作る、而して此時は夫妻の親族を集めて其の面前で男子が手づから讓狀を造らへ記名をする、然し英國では一般に這麼事は餘り行はれてゐないやうです。

△結婚式

結婚式を擧ぐるには婚姻免狀と云ふものが入要で、又其婚姻免狀にも通例と特別との二種ある、通例のは檀那寺則ち附屬の敎會に行つて午前に其式を擧行し、特別のは各自の便宜に依り如何なる場所如何なる時間に於て式を擧るも敢て差支なく、唯其式場に一人の牧師さへ列席すればそれで宜い、だから地方の財產家なぞは多く此の特例の免狀を貰て自分の邸で婚禮をしてゐる、若又外國で婚禮の儀式を行ふ時は、船の中か或は公使館か、或は領事館に於て行ふ可き規定である。

△花嫁の服裝

婚禮は女に取り何國も一世一代の祝儀であるから、有らむ限りの善を盡し美を盡すのも無理はない、けれども其自分相應の服裝で、中流以下の階級にある婦人は寧ろ華美過る衣服や、不要な飾物を着けるのは反て人から蔑視され、衣服帽子及び其他の飾物はリンネル、レース、佛蘭西か印度製の肩掛、淡泊な寶石の粧飾を

つける位の事が好いとしてある、尤も中流以上の婦人は華美なものを選み、柔かな絹紗、錦襴緞子等の上等な織物を以て造らへ、花又は白の絹の組物を以て飾立てる、又頭に橙色の花環を被り、或は薔薇にて花環を造らへ蜜柑の花を間に入れる、而して網紗の綿布を以て面を覆ふのです。

佛國流では白絹の衣の上に引ずる程長い白き紗の覆衣を引掛けるのです。

兎も角花嫁の服地の色合は必ず白に限つてゐる、然し人に依つては白色に代ふるに藍色、或は淡緑色の上着薄色の袴を以つてするものも無いではない。

中年女か後家の結婚には帽子を被つたまゝです。

△花婿の服裝

花婿は一般にモーニング、ヅレッスを着て、酒樣とした縞の穿袴に紺のフロックコート、襟飾は華美な色物に限る。

結婚の時は堅く黒色を禁じてあります。

△陪席婦人の服裝

陪席婦人の服裝は花嫁のと趣が異つて、帽子の飾衣と衣服と同じ材料のものを以つて造へる、而して覆は被ることとあり被らぬこともあります。

△新婚の附添女

これは少くて二人、乃至十二人ぐらゐで、若し出來得るならば、花嫁の姉妹花婿の姉妹か其近い親類の女を以てするに限る、而して花嫁が極く若かつたら其ブライド、メイドは同年輩のものを以てするを好しとし、萬一花嫁が年增であつたら其附添女は宜しく注意して選ぶ可しです、何故なれば比較上甚だおもしろからぬからです。

△行列の順序

教會へ赴く行列の順序は第一番にブライド、メイド及花嫁の家族の者、第二番に陪席婦人と花婿の母、其次には其他の陪席婦人や朋友で、最後に花婿と花嫁の兩親が行く慣習である。(時としては一人各親となつて行くこともある。

△儀　式

敎會には花婿と其隨從者二人先に待てゐる、花嫁到着すると化粧部屋に入り頓て化粧部屋から祭壇に到る時は花嫁は其父に手を拉かれて第一に進み、次にブライドメイド進み、花婿の父は花嫁の母に臂を貸してブライドメイドの後に隨つて進む。はや此時花婿は朋友親戚等の隨



從者と共に祭壇によつて待つゝある、其立つてる地位は祭壇の眞中の式會の左側だ、而して花嫁が前に云つたやうな順序で進んで來ると、花婿は頓て其地位を變へて花嫁の右側に立ち新夫新婦の親戚朋友は總て新婦の側に列びながら近く牧師の方に向つて立つのです此時花婿は右の

手袋を脱ぎ花嫁は左の手袋を脱いで花婿へやる。

儀式中は男女共逆上して失敗することが多いから大に注意せねばならぬ、左もなくば一生の耻辱になる。

それから牧師は威儀を繕つて『今日此御婦人を婚姻の爲に此男子の方へ御與へになるのは阿誰であります』かと云ふと『それは私であります』と花嫁の父は滿面に喜色を湛えながら答へる。

さうすると今度は牧師が神に向つて此婚姻の披露をする、畢竟祈禱を捧げる、其意味は此結婚は神聖なるものであること、何か巧むところありての結婚、又醜陋なる獸性の結婚にあらざること、神の罰を恐れ神の正しき道に依り愼みかしこみたる神聖の結婚なることを誓ひ、それより結婚の目的につきて演説やうのことをやります。

△式後

儀式了れば戶籍中に證明捺印する、而して新夫は新婦の手を携へて化粧部屋へ入る、同時に席に列したる人人も皆其の後方に隨つて入つて了ふ、昔は新夫新婦此處にて接吻をしたさうですが、今日では那麽ことは一切しませぬ。

それから新夫は新婦に婚姻證書を渡す、これで大略濟んで了つて、ブライドメイドは帽針を以て隨從者の上衣に造花を挿留むる、これはしない處もある、佛國なぞでは凡てやるやうだ。

斯くして花嫁は花婿と相乘り馬車で眞先に教會を立出ます。他の者は其次に隨つて行く、而して此一列は頓て花嫁の家へ到着するのです。

△費用

結婚式の費用は凡て新夫の負擔で、儀式の始まる前、新夫の世話人から牧師、教會書記、教會の世話方一同へ祝儀を與へる。

一世一代の事ですから、新夫たるものは宜しく出來る丈け奮發す可しです。

時としては五磅乃至五百磅の祝儀を牧師へ送くることがある、但し規定は十志、則ち我國の五圓四十八錢ですけれども、中位の人では五磅乃至十磅ぐらゐ。

新婦の支度其他は其兩親の負擔です、又婚姻の日の朝餐も花嫁の父親から饗することになつてゐる。

△朝　餐

朝餐は頗る盛大なものです、中等以下の家庭では親類及び極心易い友人を招待するくらゐに止まるけれども中以上の大家では印刷に附した招待狀を幾十枚となく發する、而して是は花嫁の親からか或は其後見人から出すことに規つてゐます。

陪席の男女は新夫の方は無妻の少年を選み、新婦の妹がある時は是を以て當てる、而して新夫の陪席者は努めて新夫の身上に注意して、新夫のポッケットの裡に指環を入れることを忘れてはならぬ。

新婦のブライド、メイドも依然新婦の身上に注意して、婚姻の進物及び新夫新婦から配布する名刺のことを掌る。

此の新夫新婦の二人の名刺はブライド、メイド宜しく封筒に入れ、豫て用意しておかれた新夫新婦の朋友知己の氏名表に依り夫れ〳〵宛名を書いて配達するのだ

此名刺は凡て新郎の手に由つて作らへらるゝもので、名刺の表面には此後の自己夫妻の住所を記し、又新婚旅行から歸つて來る日を記しておくのです。

△朝餐の饗應

朝餐の御馳走は通例、茶、珈琲、酒、鳥獸肉、海老、サラダ、雛の丸燒・魚、豚(ハム)。燒肉、獸肉の吸物、アイスクリーム。乾杯の前にウエッヂング、ケーク(婚禮菓子)を切つて頒つ。

△新夫新婦の萬歲

最初に新夫新婦の萬歲を祝す、それより酒を酌む。新夫の家族中で一番年老つた人が發頭人となつて、先づ酒を酌むことを發言し、それより酒となるのです。

△祝　賀

一同新夫新婦の萬歲を祝すると、新夫は新婦に代つて一同に答禮する、次にブライドメイドの健康を祝す、世話人はブライドメイドに代つて亦答禮する。今度は花嫁の兩親の健康を祝する、花嫁の父答禮する、

同時に花嫁の兩親の健康を祝す、花婿の父亦之に答禮する。

若し其場に牧師が來會して居つたならば、無論其牧師の健康を祝する。

それから花嫁は定められたる自分の居間へ入つて了ふさうすると列宴者は一同食堂から座敷へ退くのです。

△新婚旅行

間も無く花嫁は華手な朝衣に着代へて花婿と共に新婚旅行の途に上るのです。

其跡で下女下男へ御祝儀をやります、これは花婿より與へるので、誰か世話人の一人が花婿に代つて胸飾、紐、小間物類を贈るのです。又花婿は花嫁へ何か美術的の必要品を送るのです。

扨又新婚旅行より歸つた日は朋友知己等の訪問を受くるので、新夫婦は倶に家に在つて、訪問者へ葡萄酒と婚姻菓子とを供することになつて居る。

△法律上のみの結婚

以上は正式の結婚、則ち法律上と共に宗教上の手續を了へた結婚ですが、中には單に法律上のみの結婚も尠くはない、これ必ずしも無宗教者と云ふ譯でもないけれども、一ツの畧式の結婚で、下等社會の人々か、又は公然の結婚を憚るものがやるのです。

それは新夫新婦打連れて人事登記役場に出頭し、唯新夫が已れの姓名と結婚せんとする女の名を申立て、次に證人二人立會つて、新夫新婦兩人とも其年齢及び未婚者なること、又前に宗教上の儀式を擧げたか否かと云ふことの陳述を濟して、共に登記簿に署名捺印すれば夫れにて足るのです。

又新夫新婦が其婚姻報告を公表されることを望まなかつたならば、二磅二志を拂つて免狀を受取ればそれでよい、恁うすれば新夫新婦の兩人と登記役人と二人の證人と、それから若し兩親が承諾をした結婚であれば其兩親との外、敢て誰も知り得るものはない。

兩親へさへ知らさないで手續を濟すことができる、これは無論其兩親が二人の結婚に不服であるときの手續

なのである。

猶此外の畧式は、單に新郎たるもの其兩親を初め知己朋友を自家に招待し、而して自己が結婚せんとする新婦を其處に伴ひ來り、これが僕の撰擇した女房ですと披露する丈で、法律上の手續も宗教上の手續もいらぬのである、これは蘇格蘭の田舍邊りで時々行はれる結婚ださうです、又甚しきは新夫新婦二人向合つて、私はお前を女房にする、私はお前を亭主にしますと言交はして、それで濟むのもあるとの事です、それは穿鑿つたら種々奇妙な結婚法もあらう、現に我國でも處に依り、又階級に依り雜多な結婚法があるやうにおもはれます。

△コートシップ(見合)

これは見合ひの間を云つたので、話は前に立戻ります今此コートシップから愈結婚するに就きての注意心得を一寸申しませう。

見合と云つても此コートシップは我國の如き見合とは違ひます、旣に相許した男女が其間に各自の氣質を呑込んで、將來一生の伴侶たらん時に不平遺憾なからんことを期するのである、前にも申したやうに英國では此間が甚だ永い、從て充分にお互の觀察もできやうし、又結婚後如何なる家庭を造る可きか、或はお互に如何なる考を以て社會に處すべきか、何を爲さむか等雙方確と腹を定めることができるのだ。

コートシップの間は男女相携へて公會の席、則ち交際社會等へ出しやばつてはならぬ。

此間は互に大に注視し合ふことを要す若し各自の人物長所短所それから抱負希望凡て一切を看破することが出來なくて大早計に結婚をしたならば、それは二人が生涯の不愉快ばかりでなく、遠く子々孫々迄の不幸を招くことになる。

此間にお互に心がはりをしてはいかぬ、一旦約束したる上は、それはお互に如何なる欠點があらうと、互に諫め合ひ挽め直し合つて行くのが當然である。

男子より結婚を申込んだ場合には男子は則ち申込人で其女に向つての請願人である。

身分の高いもの、則ち提灯に釣鐘的なは宜しくない、較合はぬは不縁の元とは敢て我國ばかりの諺ではないのだ。

例へ其女の實家の財産及び社會上の地位自家に劣つてゐやうとも、仝じく男子は請願人たる心得を失ふてはならぬ、又女も其通りで自家の門閥及び財産をひけらかしては宜しくない。

女は男の家族となり、男の姓を冒し、男の奉ずる宗教を信ずべき義務を負ひ、全然男に服從し其運命を托するもので、則ち大に女の自由をそぐが故に男たるものは宜しく婚姻を諾したる女に向つて感謝の意を表さねばならない。

貰つてやると思はず來て貰ふと思へ、然し女も己が愛し己が信ずる男なれば、貰はれてやるなぞと思はず貰つて貰ふと思はなければいけませぬ。

コートシップの間、男が女の實家へ赴く時なぞ、其女の家族に對して可成く尊敬の意を失はざるやう努むるが肝腎だけれども、自己を以て女の實家の家族のやうに考へるは惡るい。

女の家族も餘り馴々しくしてはいかぬ、只家族の友人であるやう思はねばならぬ。

男は未來の良人氣取をしてはいかぬ、又嫉妬の氣を表はすやうな擧動をしてはならぬ、女に於ても是は大に愼む可きことなのだ。

相當な原因無しに其男の過失に注視するは宜しくない凡てアラを穿鑿るが如き行爲はいかぬ、然らざれば互に愛を削ぐの患がある。

女は浮氣らしくてはいかぬ、餘り交際場裡なぞへ出掛けてはいかぬ、亦男に對して何に彼に辨疏的なるは惡るい、これは無論云ふ迄もないことです。　（完）

家庭生活

日本大地主　横山天涯

▲土地の概略

家事經濟を述べる前に先づ其の地方の一般を記して

置いて此家の地位名望の一斑を記しませう、この地方は未だ滊車も通じてをらぬ處で、中央の都會に比ぶれば百事、文化は遲れてをるのであります。郡役所もあり、裁判所もあり、電信局もあり、中學校もあり、といふので、郡下では第一の繁華、その縣では、四番を下らぬ町であります。併しながら、戸數が多い、といふ丈けで、特に産業といふものはなく、土地の者の言葉で申すと、事業も何もない、から仕樣のない地方で詰り「共喰」で遣ッてをる普通平凡の町である故に、此の町より、他國人に對して誇となるやうな、大した資産家もない、といつて執達吏の差押を食ふやうな破産者も、多くは見受けない、誠にそれは、四海波靜かな穩かな土地ですから、其處に住居を搆へてゐる——今ま私の述べんとしてゐる一家の如きも、之と特筆大書すべき珍聞もありませぬ。

▲田地と貸金

之より目的の生活狀態に移ります。地方で、中産以上の業務といへば、大抵極まつてをります。田地を持つてゐて、店を開いてをるのが普通です、店商賣といつても、酒か、醬油か、或は吳服物を商つてゐる位のものであります。なほ此の外に職業があれば、それは農民相手の貸金業、地方中産以上の職業と云へば、まア大抵斯んな處に、範圍が限られてをる。ですから私共が地方に旅行して、その町が如何なる性質の土地であるか、を見るに、何時も中産以上の分限者の職業によりて、判斷を下だすのです。その町の分限者は銀行頭取とか、或は他國と取引してゐる商業家であれば、その町は物質的文化の進んでゐる町で、單に田地で生活を立ててゐるとか、或は酒造とか、貸金とかであれば、その町は、なほ封建時代の風習を蟬脫しない土地と定めるです。

此の△△家は、御多分に洩れない田地で生活を立ててゐるので、副業としては貸金。外に之と稱すべき營業はないので、軒口八間の廣い店は、空洞としてゐる、最も鎖店風にしてはあるが。

田地は、時價に積れば三萬圓(實際賣却といふ節に至

れば三割位は減ず)が物はあるといふ事、貸金は七千圓位は出てをるとの噂、能くは判りませぬ、なんでも此町では五番と落ちない分限者。それであるのに、當主人は雜用が嵩んで、之では格は張り切れないと常に口癖のやうに澁い顏をして居らるゝのです。

▲生活費用

まづ此家の生活費用を擧ぐれば前述の如く、此家の業務は、田地と貸金、(貸金は七千圓)田地は、時價百二三十圓の石高、二百石、大地主の多い地方であれば、大した物持でもありませぬが、大分限者の居ない此の土地の事とて、二百石の田地でもあると、それは町では、有數の物持で御座います。そこで、小作米二百石の揚高、内場に積りて千三百圓、貸金九千圓――年一割と見て九百圓、合計二千二百圓の收入がある計算。因に申します、此家では、一切小作人に田地を卸ろしてをりますので。

更にその支出は如何であるか、と見ますると、相當の分限者であるから、一寸錯雜つてをります。

一　二百五十圓　租稅(地價一石高五十圓と見積る)
一　二十五圓　同上附加稅
一　二十圓　營業稅(貸金七千圓に對して)
一　十二圓　所得稅
一　二百十圓　町稅(一月七圓と見積り三十月負擔)
一　六十圓　地方稅

小計五百七十七圓

之が此家が、公民として、社會國家に支拂ふ稅金であります、更に敎育費を擧ぐれば

一　七十圓　中學生一人費用
一　五十四圓　小學生三人費用

之が小供の爲に支出せらるゝ費用、四男を中學に出してゐるのも、二三年前、此町に中學校ができたからであります、更に生活費を擧ぐれば

一　五百七十六圓　食費
一人の食費、一ヶ月四圓と見積り、大人十一人、それに幼兒三人を一人と見、合計十二人分の食費
薪炭、油等の費用も混入す

一 百二十圓　被服料（一人に付十圓宛）

一 四十四圓　醫藥代

十幾人の家族、幼兒の三人もゐるとなれば、一ヶ月の中、十五日位は、誰か知ら、醫師に掛つてをる、特に老人は、病人が起ると、八釜しいので。

一 五十圓　家屋修繕費

一 十八圓　宴會費

宴會費と申したからとて、町一同の新年宴會、忘年會、兵士送迎會等で、その他は、知事、郡長等の歡迎會位のもの。

一 五十圓　春秋二季祭禮費用

一 十圓　盂蘭盆費用

一 二十圓　寺院の割當

此の寺院の割當は、眞宗等に爲ると、隨分かゝるので。

一 二十四圓　寄附金（寺院、神社、及壯士等に對する臨時の費用）

一 四十圓　緣家慶吊費用

この慶吊費用は、隨分の高になるので、之には、七軒の緣家を見積つたのです

小計　百五十二圓

右の費用の外に、雜費はある、爰にその一二を擧ぐれば

一 六十圓　番頭一人給料

一 二十四圓　下女一人給料

一 十八圓　臨時使役人手間

小計　百二圓

先づ通常一家の支出は、あら〳〵斯の位の處でありませうか。

以上の費用を總計せば、千八百十五圓といふ計算に爲る、之を所得二千二百圓より引き去れば、三百八十五圓の純所得ある勘定となるのであります。が、之で濟めば、此家は、年々若干の潤益を遺こして、鼠算に殖えてゆくばかりでありますが、其樣は筏の通ほし繩、此の通常支出の外に、三年目、五年目、或は十年目毎に臨時の費用が出て參る、項を別にして、讀者の御覽に入れましやう。

▲臨時支出

臨時支出の重もなる者は、分家費用、娘の婚姻費用等で、その他葬式費用、法會等の費用であります。

その概算を申すと、此家位の資格であつて見れば、分家の費用は、少くも三千圓の大金が要る、婚姻に爲りますと、ちよと前に申して置きましたが、千三百圓乃至二千五百圓は要るのであります、

一　葬式入費　二百五十圓
一　大法事　二百圓　乃至三百圓
一　小法事　三十圓（外見を張る家になると百圓位要る）

等の費用は、五年に一度、十年に一度は乾度持ち上がるのであります、特に小さな法事に爲りますと、三年に一度位は廻り合つて參るので。毎年三四百圓の纏所得も、婚姻とか、分家とか申す事が、屢次起つて參ると、到底遣り切れませぬ、倘町會議員の選擧に、少くも百圓、多い時は、五六百も掛ることがある——驚いてはいけませぬ、地方では町村會議員の選擧に、以上のやうな金額が捐てられてゐるので、爾うして或位置の分限者は、體面上議員と爲らねばならぬので、之が六年に一度宛まわり合つてくる、地方の分限者て候と、格を張つてをる家でも、細かく計算すると、餘り暢氣な者でもありません。最も田地及貸金の外に、他に商業を營んでをる家は、別でありましやうが。



▲帳簿外の金

終りに、帳簿外の金、と題して、申して置くとが御座います、之は店商賣を遣つてゐる家に行はれてゐる事で、東京も其樣であるが、地方では、別に夫婦の間には、經濟を別に仕てをりませぬので、秩然と其の內儀、或は娘等の日常の費用を與へてをりませぬ。が、男の眼の屆かぬ費用も多いとであらうと思はれるに、之を別段支出を受けずして、ちやんと遣つてゐる、甚だ不思議に思はれるのであるが、實際を調べて見ると。

其れは斯うした事情が、一般に行はれてゐるのであります、その內儀・或は娘等は、商賣に店に出ると、



その都度、人知れず、そと若干の金錢を懷中に匿くす――此の地方ではシンガイ錢といつて、殆ど公然の秘密に、普く行はれてをるので、之が老人の懷中にあれば、所謂臍繰金。主人は、充分判つてをれ共、見て知らぬ振、此の金額は、集り〳〵て、娘の嫁入費用の一端にも充てられる、いや、母親の身に爲れば、衣裳は幾程あつても、不足に覺へるものと見え、何れの母親も、父親に隠くして、娘に入揚げる、その他主人の支出外に支拂はるゝ內室の費用は、槪ねその出所は、このシンガイ金、なんだか詰らぬ事を申すやうでありますが、必竟家事經濟の一種なれば、御參考までに申上げ

た譯。

貴婦人方は、出所曖昧のシンガイ金の事など、甚だ面白からぬ感を持たるゝであらうか、實際何れの家庭に於ても、店商費を遣つてをる家には普く行はれ、甚しきは、青年の遊蕩費も、小供の買喰錢も、多くは此の一種變則の支出法に依りて辨ぜられてをるのであります。野生は、我國の家事經濟が亂雜であるのも或は此處等に基づいてゐるのではあるまいかとも思ふのであります

▲多人數の家族

此の△△家ほど、家族の多い家は有りますまい。先づその人數を擧ぐれば、祖父一人、兩親、長男夫婦、



孫二人、次男夫婦、孫一人、之でまう十人に爲ります之に男の兄弟三人、妹四人、丁度十七人の大家族。併しながら、此の中、長女と次女とは、他に縁附いてゐるので、今は家にをらず、第三の弟、之も養子と爲つて、他家を繼いでをりますから、今日家に遺こつてゐるのは、十四人、隨分多人數の家族ではありませんか、之に番頭一人、下婢一人、都合十六人の家内であるので、暢氣なのは田舍の生活、夏は涼み臺の上、雪降る冬の夜は、團爐の周圍に、ぐるり輪を作り、此の十四人の人數に、近隣の誰れ彼、二三人相交りて、世間の噂に長き夜を更かすのであります、爾うして、その語り合つてゐる

のは、地方新聞の復習、隣町の何某の人物談、「彼の家は幾程の身代」であるとか、「某の子息は昨日東京へ出た」とか、恐にも附かぬ他人の身上談、他人の噂といへば、田舍は一体に斯うと申されませんが、此の地方ては、他人の噂に興味を持ち、寄ると觸ると、町の誰れ彼の噂、何時も同じ事を繰り返へして、樂しんでゐる、一ッは、他人の噂を措いては他に談話の材料が無いからでもありましやうが。

▲別　家

此家に、最も近い別家といふのが、二軒あります、何んでも十二三代も續いてゐる舊家であるから、舊い別家を擧ぐれば、隨分多いであらうが、祖父様の弟筋に當る別家は、二軒あるので、其れが亦不思議と、二軒共に何れも零落してゐるのであります。最も此の二軒の別家ばかりではなく、此家の別家といへば、昔日から身代を續けてゐるのがなく、如何した譯のものやら、別家の當時は、皆な歴然として出るのであるが、不思議と、十年、十五年の中に身代を潰ぶし、擧句の果は、本家の厄介となつて終るのが多いのであります故に此の地方では、△△の別家といへば、必らず身代を無くする者と定め、そらあの別家も、今に潰れるのだと、ずつと古い昔の昔より、此の町の不思議の一ッに數へられてゐるので。

今の別家も、同じく其れで、町の蔭口通り、十年と經たぬ中に、身代傾き、何れも今は零落してゐる、甲の別家は、祖父の弟が存世中は、町盡頭の、軒口二間の、狹小な家に、その運命を遺こしてゐたが、老人が無くなつたと同時に、長男は北海道に行き、今は漁船問屋に番頭となつてゐるとか聞きました。今一ッの乙の別家は、前の別家ほど酷しくはありませんが、唯、家屋が殘つてゐるといふ丈けで、老婦の噂に其の景氣を遺こして今の長男は、本家の口入で、郡役所の傭書記と爲つて、九圓とか、十圓とかの小給で、その日を過ごしてをるそうであります。別家の衰頽！揃ひに揃ふて、衰へゆくといふのは、甚だ不思議であるが、北國地方の、私共の故郷にも、同じく之に似た家があ

つたとを思ふと、或は世間に無い例でもない事で。仔細に調べると、乾度斯う衰へゆく原因があるに相違ない。

が、爰に一ツ面白い――と言つては如何であるが、世の相が見受けらるべき、一種の消息が御座います。それは別家が、斯う瓦解する迄には、固より幾多の曲折がある、最初は本家も見て見ぬ振もできず、隨分助力したとでもあらうし、別家も、また事情に促されて本家の助力を請ふたに相違ない。併しながら佛の顔も三度、其樣助力を續くることができず、遂には、出入人よりも尙以下に取扱はるゝやうに爲る……自分は、榮へてをる本家と、零落しつゝゆく別家との己人的干係を傍觀して、物質上の區別が、斯くまで人間に階級を作るものかと、何時も一種の感情に打たれたのであるが、しかも其の零落しつゝある――出入人以下に扱はれてゐる別家の男女が、獨一己に爲ると、本家の取扱に不滿もあれば、不愉快でもあらうが、他人に對すると、その本家に對する感情が、俄に變わるのが妙である、即ち、本家に助力を請ふも、拒絶せらるゝ果敢なき運命に落ちてゐながら他人に對すると、矢張富める本家を笠に着、妙に賴母しがつてゐる――恰も役所の小使が、幼時の友達に立身者あるを誇つてゐるやうに。



▲親戚

親戚――別家を詳細に記るしたから、親戚の事は、

概略にして置きましやう。此家に、法事とか、或は婚姻とか儀式張つだ事が起ると、隨分多くの親戚が揃ふので、左樣、前に擧げた別家はいふ迄もなく、舊式を重んずる田舍の事ゆゑ、祖先の出たなにがし村の某といふ、日頃往復しない遠緣の者迄、集る。が此の樣な遠緣の者を除くも、今の當主人の生家を筆頭として、娘の嫁いでゐる姻戚二軒、長男、次男の嫁の生家二軒三男の養子先、祖母の生家、その他、ちよと今の子供等に判らぬ親戚、姻戚、あら〳〵十六七軒もありませうか、死人ありて、葬式等の場合には、土藏の奥に仕舞つてある、過去帳を探がして、一々緣者に通知する、それは東京等のやうな都會に住める者の、意外に思ふほど緣者の系統を大事に爲る、以上は、直系の緣者を擧げたのであるが、如何敷すると、娘の嫁いでゐる家の緣戚等迄、親戚に數へる、此家の如きは、此の土地で、五本の指に數へらるゝ資産家であるから、矢張此の緣者の緣者迄、一切合切、親戚の中に數へらるゝので。ですから、五年に一度行はる大法事等の場合には、隨分多人數集る、之が貧家であつて、御覽なさい！例令親近の緣者でも、敬して遠かる。

が、盆暮等に贈物を配ばり、或は春秋二季の祭禮等に招ぐ親戚といつては、極近親の者ばかりで、其樣なに多くはない、今日此家の最も大事にしてゐるのは、娘の嫁いでゐる姻戚と、嫁の來てゐる家に、當主人の里家位のものであります、特に之が人情といふものでしやう敷、娘の嫁いでゐる姻戚は、最も重んぜられてゐる、爰に項を分ちて、親戚の根本である緣組の事を挾んで置きましやう。

▲緣組

孰れの地方でも變りはありますまいが、年頃の子息或は娘を持つた父母は、隨分心配なもので御座います、特に早婚の行はるゝ此の土地の事であるから、男の子ならば二十歲位になると、はや嫁の撰擇にかゝる、男の方の緣組は暫らく措き、娘を他家に出だす婿撰の場合を擧ぐると、年頃の娘を持つてをると、此家の如きであつて見れば、雨の降るやうに、親戚等の手を經て

縁談の申込が参る、申込が無ければ無いで心配であるが、彼家からも、此家からも、と五口も七口もあれば、また大にまごつく。彼處にしやう、此家にしやう、と其の當時の兩親の胸の中は、唯此事一つ、固より行先の婿の人物も大事であるが、先づ第一の問題は、先方の家格で、例令その相手の人物が、如何に高等の敎育を受け、才子とか、敏腕とかの評判が流傳されても、その家格が相應してをらぬと、その申込は、初手から物にならぬ。

嘗て斯んな事もありました、矢張此町に見えた事實であるが、製糸事業を起こしてゐる 某 の家にては、當時二三十里隔つてゐる都會の、高等學校に入れてをる長男に、嫁を迎へんとて、此町で二番の位置を占めてゐる 某 の家に縁組の申込を提出した。申込んだ此の家も當時相應の家格を占めてゐた家であるから、詮索の何のと面倒な事はなく、早くも談判纏まり、數日の中に結納まで濟んだのである。然るに、製糸の相場の變動より、此家は俄に産を減じて、辛うじて、長男の學費を送る身分に成り下がつた、之が爲に、進んで娘を遣らう、と意氣込んでゐた娘の家にては、その家格の落ちたのに辟易して、終に結納まで濟んだ此の縁談を揉み消した、のを自分は親しく實見したとがある



例令此の某の家が、身代を落としたにせよ、その長男は、高等學校の卒業期も近づき、且つ俊才の譽ある青年であるから、娘の婿としては、何等の見劣りもせぬやうに思はるゝのであるが、此の地方では、婿と爲るべき青年の人物は第二の詮索で、先づ第一の研究問題は家格〳〵。釣合はぬは不縁の基、といふ諺は、最も普く行はれ、其の父母の思想を支配してをるのであります。

然らば家格の釣合一つて、縁談が定まるか、と申しまするど、其樣は參りませぬ、次は婿殿の人物鑑定、家格の釣合は、直に判斷はつくが、婿となるべき青年の人物如何は、媒介口では判らぬ、之も同町内であれば、その人柄や、平常の品行などは、勞せずして判るが、二里三里、或は六七里隔つてゐる土地であつて見ると、なか〳〵判りませぬ。その土地の者に聞く、出入人を走らせて、其の家の近隣に評判を聞く、なほ心元なければ、母親自身、その土地に出張して、町の評判を調べる、それは〳〵念の入つたもの。

斯う調査に調査を盡して、なほ媒介口に仕て遣らるることがある、と悔んでゐるのも、ほんの暫期、ついその中に子供ができる、その母親は、また第二の娘に、相應の縁を探がさねばならぬこととなる……

以上は普通の場合を擧げたのであるが、縁談ほ、斯う一頁か、二頁に書き了るやうに、容易に運ぶのは異例で、一人の娘が身の定まる迄は、相手の人物は、五人か十人は、十分の九迄、交渉がすゝんで、しかも中途に破るゝのが普通で、撰びに撰び、詮索に詮索を盡して、根氣の盡きた擧句の果てに、漸やく落ち付く處に落ちつくのであります、特に兩親の惑ふて、常に苦しむのは、のつぴきならぬ深縁の者より申込の來る事で、その家或は、媒介者の顏に對して辭はるとのならないやうなハメに陷るともあり、或は既に兩親の間に決心は付いても、甲乙の間に競爭起り、その爲に據ろなく偶配好を失ふともあり、甚しきに至ると、輿入の當日に及んで破談と爲るともあるので、この地方では、縁組を神業として、常理を以て量るべからざる玄妙不

可思議の事と定められてゐるので。

斯くて玄妙不可思議の間より、漸やくにして緣談は成立するのであるが、その嫁入費用は、また驚くばかり、嫁入娘三人有てば、その家の身代は無くなる、とは、往日から此の土地に行はれてゐる言葉、誇張の言では有りませぬ、後に生計費用を掲ぐる場合にも出しますが、此の地方の婚姻費用、といへば、それは大したものであります。中分以上の家であると、少くも千圓、千五百圓乃至二千圓といふのが、先づ普通のやうに思はれる、言ふ迄もなく、簞笥の中の衣類に、此の二千圓内外の大金が棄てらるゝのであります、此の費用は可なりとするも、盃事等の附屆には、毎年十圓乃至二十圓の金は仕拂はれ、その上子供ができると、その子供に必要の衣類、翫具等に、また二十圓や三十圓の費用が消へてゆく、そら婿殿が、と、婿の來訪を受くれば、之を上座に据ゑて、一家の者、擧げて大騷に騷ぐ、娘一人出して置くと、それは〳〵氣骨が折れるものであります



▲家風

家風、と申して、此家の家風を今眼に見ゆるやうに、讀者に傳ふる譯には參りませぬが、此の家の老人の事を申すと、幾分歟その狀態が判らう、と思ひますから、一寸老人の爲人を紹介しましやう。

此家に老人のあることは、前に擧げた家族調で、讀者諸賢はすでに御承知でありましやう、此家の老人は、當年取つて七十八歳、隨分の老齢ではあるが、今でも朝は未明に起ぎ、冬でも冷水て顔を洗ひ、凝然と東に向ふて太陽を拜み、更に七八町離れてゐる、山の手の川端の、冬ならば寒風の頬を削りゆく、寂寥とした、人の影は固より、犬一疋居らぬ、祭禮の外は、何時もなんだか物淒い神社に赴きて、祈念を凝らし、それより足に任かせて、町の端から端、二十町ばかり續いてゐる町をぐるり一ト廻りするので、朝飯頃に爲ると、秩然と還つてくる、之が毎朝の事で、それに時刻も違はぬ、拂曉、此の老人の咳聲を前に通り行く聲がすると、ソラ――の隱居は、通りなさつた、まう起きにやなるまい、と此の老人の咳聲が、此町ては、「今起きる時刻だ」といふ時刻を告ぐる一種の音響ともなり、又「起きよ〳〵、朝寢は貧乏の基だ」といつたやうな意味を含んだ注意のやうにも聞かれるのであります。



此の老人の晨起、朝運動は此の町の名物であるばかりでなく、舊幕時代の習慣を其の儘、五番と下らね分限者の隱居樣であるにも拘らず、帽子は毛唐人の冠り者たと、藥鑵頭を冬の寒空にも曝らして、帽子の類は一切頭に着けず、衣服も、木綿物は重くて暖かいとい

ふので、止むを得ざる場合の外は、七十幾つの今日に至る迄、絹物は未だ嘗て身体に着けたとがないといふ、いやどうも餘程珍らしいむかし氣質の老人。

このやうな舊弊な、頑固な老人であるが、之でも德川時代には、町年寄を勤めたともあり、奉行衆と膝附き合せて語り合つた聞かぬ氣の人であつたので、町人の間に學問の行はれなかつた當時、町人の身を以て獨り某先生の門に入りて、四書五經の訓讀を聞き、和歌俳諧にも嗜味を持ち、今より二三十年前迄は、家の身代と共に、此の地方では、實に有數の學者であつたとか。昔日が斯うであるから、此町の舊い事といへば、此の老人は○○町の活字引、あの頃の祭禮には、どの様な練物が出たとか、この宮の建つたのは何年の何月であるとか、町の故事沿革は、掌を指すが如くちやんと暗んじてゐらつしやる。

斯うした老人であるから、一切萬事、新しい事は大の嫌ひ、なんでも舊い事をいつてをらねば、老人の氣に障るので。家の事も同じくそれで、諸種の帳面は、如何に不用に歸しても反古にしてはならぬ、故に此家には、百年前からの帳面が、土藏の奥に仕舞つてある、家屋の粧飾等も、昔日の儘に据ゑて置かねば、例へば縱の物を横にしても、甚だ老人の感情を害ふので。併しながら、時勢の變化は恐ろしいもので、この様な老人を大黒柱にしてゐる此の△△家も、十五六年前に比ぶると、ずつと變はつて來た、第一帳場の位置も變はつて、巖丈な欅の机も、華奢な桐の机と爲り、茶の間の鼠入らずは、臺所に隱されて、桑か何かの茶簞笥が大時計の下に飾られ、花莚さへ、平日出すのが奢の沙汰として、老人の只八釜しき小言があつたのに、今は奥の間には、絨氈は敷き詰められてあり、茶の間には厚綿の入つた布團が出てをる、之が甚だ老人の意に合はぬのであるが、今は隱居の身とて見て見ぬ振を爲てはをるが、如何かすると、今の若い者……と、日頃の鬱憤が迸しることもある。

斯う記るして參ると、此の△△家は、時勢に適應した當世風の家のやうに思はれるが、いや、どうして〳〵

之は單に外形の變化に止まるので、その內容は矢張昔日の儘、例へば飲食物にしても、平日は決して食膳に酒を見ることはできぬ、のみならず、副食物に砂糖さへ入れることがならぬのであります。

嘗て斯んな事件が起つたこともある——餘程以前の事であるが、今の長男の御嫁樣が、或日偶と御菜に砂糖を用つたのであります之を知つた老人、中途に食事を止め、一室に主人夫婦を招ぎ今の嫁は、この身代を無くする女郎の樣な女だと、藪から棒の大難題が持ち起つた、事の意外に驚いた主人夫婦は、胸を靜めて、その理由を質すと、平日の御菜に、砂糖を用つた、といふそれであつたので今更ながら主人夫婦は、老人の奇癖に驚いたといふことであります。



以上の記事で、大抵老人の人柄が瞭然したことであらうと思ひます、今日は隱居の勢力も、日に薄らいで居りますが、一家の切盛、子供の養育、番頭下婢の待遇等は、依然として昔日の儘、といつた方が事實に近いやうに思はれるので、思ふに、此の老人は、若者の間には、殆ど何等の勢力だもありませんが、老人の眼の明いてをる間は、此の△△家は、何時迄も〳〵今日の儘を維持することでありましやう。之は此の△△家ばかりではありませぬ、東京を離れて、十里、二十里、都會を離る丶次第に、今に此の老人氣質が、澎湃として田舍の家庭を形作つてをりますので、新教育の、新文明のと申したからとて、まだ家庭組織の根底の上には何等の影響だも、及んでをらぬ

のであります。

▲母親の病氣

局外から見ると、此家の如きは、此の地方でも、上に昔氣質の老人を戴いてをる丈けそれ丈け、能く修つてゐる家であるので、健全なる家庭の標本、と申しては、過褒でありましやうが、余り世間に評判の出ない極めて穏かな家庭のやうに思はれるのであります。局外で斯う思ふのも、また無理もありませんので、帳場に控へてをる今の番頭は、當年は六十幾歳の老人であるが、十七歳の若年より、四十幾年といふ長い間、此家に勤めてゐる――のを見ても、此家の大体は判りましやう。が、深く／＼その內情に入つて見まするると、那處も同じ秋の夕暮、矢張此家にも、波風は立つてゐるのであります。此頃、平日は藥一ッ服まない此家の母親は、神經衰弱とやらにて、ぶら／＼とした病氣に罹つてをる、何相した事と、雇人等に質して見ても、瞭然としませぬ。その中、町は騷々しい、といふので、十町ばかり隔つてゐる村落の何某の別宅を借り下女を伴ふて、今も尚、靜かに病氣を療治してをらるるといふ噂。最初は餘り世間の注意を惹かなかつたのであるが、不思議なるは、此の母親が病氣でぶら／＼し初めると、此家の長男――相續者は、母親が病氣であるといふにも拘らず、簿記の研究とか稱して、東京へ出たとであります。此の長男は、老人の系統を引いて、少しく偏屈といふ評判はあるが、如何にも氣の弱い、母親の病氣を、ふんそうかと、平氣で見てをるやうな人ではありませんのに。

▲嫁と姑

前にも言つて置きましたが、此家には、兄弟多く／＼、長男次男、何れも妻帶して、長男には二人の子供あり次男にも一人の子供がゐるとは、讀者の既に御承知の事で御座いましやう。然るに、當主人夫婦の外に、二夫婦あるとて、嫁と嫁との間に、何が原因といふ理由もなくして、屢々衝突起りて、如何歟すると、長男の嫁は、偶と生家に還へる、爾うして十日も、二十日も、歸つて來ぬとが多いのであります、軈てその第一

の嫁が歸つて參ると、今度は次男の嫁は、何とか口實を設けて、生家に歸る、といふやうな鹽梅式で、何時も嫁と嫁との間に、何か知ら睨め比が起つてをるのであります。

が、婦人間の衝突は、高が婦人(と申しますると、婦人方を輕んずるやうに聞えまするが、紛紜と申しましても、御婦人の衝突は、生家に歸つて、胸中の悶々を開く、といふ位が關の山)の事で御座いますが、延ひてその所天たる兄弟の衝突に爲ると、甚だ大事であります、然かも此の婦人の睨目比より、兄弟間の衝突も、起らぬでもないのであります、が、此の兄弟間の衝突も、單に男子と男子との衝突であれば、一家の大問題を喚ひ起こすやうなとはないが、この中間に、母親が關係し初めると、大事と爲るのであります。



恰も此の町第一流の名望家にして、分限者の稱ある此家にては、老人の眼の屆かざる微妙の間に於て、方に嫁と嫁――其夫と夫――嫁と姑、といふ順序を履んだ家庭の小波瀾が起こつてをるのであります。此故に此の家の母親は、神經を病んでと申しますると、ちと速斷に過ぎ、まだ深い原因が潜んでをるのでありますが、之は次節に讓り、單に嫁と姑との現狀を申せば末の子は可愛いといふ原則通り、此家の母親は、長男

の嫁よりも、得て次男の嫁に愛が傾いてをる、ですから、嫁と嫁との衝突には、何時も團扇が、次男の嫁に揚がる、最も姑方に聞きますると、「長男の嫁は、俄分限者の娘で、意地が汚なく、長男を唆かして、弟妹を粗末にする」からであるといふ、聞いて見ると、姑の方にも理屈があるやうです。

▲俄分限者の娘

俄分限の娘！弟妹を粗末にする！といふのは、啻に母親の言葉ばかりではありません、一家擧げて、出入人に至る迄、俄分限などと蔭口を叩くのであります。俄分限！隨分奇妙な固有名詞で、今日東京に住み玉へる讀者には、ちよと其の意味は、御了解に難からうと思ひますが、兎にかく此の地方では、中流以上の社會には、俄分限といふ言葉が行はれてゐるので。詰り學校或は兵營等に於て、その新入者は、侮蔑を受けてをりますやうに、保守の念に富み、門閥の家を喜ぶ地方にては、俄に身代を仕上げた者を俄分限といつて、輕んずるのであります。

此の長男の御嫁は、三里ばかり隔つてゐる某の町の、十四五年前ばかり前に、滅切身代を直した、或船問屋より來てをりますので、此の地方の言葉で申すと成程俄分限の娘。――私共の眼から見ますると、俄分限の娘だから、といッて輕んずべきではなく、否、俄分限の娘であれは、却つて世帶の苦勞にも堪へ、一家の切盛も巧みであらう、と人の妻としては、格式張つた、舊弊な家に育つた女子よりは、良いやうに思はれるのでありますが、その世帶じみた、物事に寛濶でありませんのが、養子を迎へた家附の娘なる、此家の母親の意に合ひませんのであります。

特に新教育を受けた長男が『今日は大家だからといつて、幾人の子供をぼんやり遊ばせて置くのはよくない、學校を卒業すれば、手職でも何んでも覺へさせ、一本立で、獨立の生活ができるやうにせねばいかぬ、家の別家が、皆零落しゆくのも、家に在る間は遊ばせて置くからだ』と苦言するのは、痛く母親の意に觸るので、之も彼の嫁の入智慧に相違ない。長男夫婦の世

の中と爲れば、此の澤山の子供に、財產も何も分けはしまい、と子供の行末を案ぜらるゝにつけ、子供を遊ばせて置くのが良くない、といふ長男の嫁が面白くなくなり、遂に何時となく母子の間に、妙に間隔ができる樣に爲つたので。母親が今日神經病に艱んでをりますのも、或は此處等に原因してゐるのであるまいか。

　家庭の中心たる母親が、家を離れて、うら淋しい村落に、病氣に苦しんでをりますのに、その長男は東京に出て、客旅の人と爲り、その御嫁は、子供をひき伴つ



れて生家に歸つてをる、どうも尋常の現象とは見へませぬ、然かも此家は、昔氣質の老人のゐる、此町でも評判の最も手堅い、家風の嚴重な家でありますのに。

▲波瀾の源

　此の家風の正しい△△家に、今日の如き尋常ならざる現象を示してゐるのは、私共の考へますには、家族多く、兄弟夫婦雜居してゐるのが第一の原因で、之が西洋諸國のやうに、父子別居制の行はれてゐる場所ならば、無論如斯な波瀾は起らぬのであらう、と思ひます、最も父子別居といふ

ことは、日本の習慣としては出來ぬ相談であるから、之は坐上の空論として置くも若し此家が、今日のやうに兄弟夫婦雜居でなければ、大に衝突を減ずることであらうと思ひます、が、今日迄、此の家の別家は、何れの家も零落する事實があつて見れば、當主人が、次男の別家に就て、躊躇してゐるのも、また無理はない。

次に兄弟の多い事であります。九人の子はあり、一一その子供の行末の案せらるゝのが世間一體の母心、若し然う多くの子供は居りませぬと、此の母親をして右の樣に長男夫婦の性情を疑ふ樣なことはありますまい

第三は、此家の家風は、大に今日の出來事を招いた原因であるらしい、長男の不平、嫁の苦勞等、ひツくるめて申せば、專ら田地の收益と、貸金で生活を立てゐる單純な生活であるからで、新事業に手を擴げない家風の然らしむる所であらうかとも思はれます、長男の職業も、次男の職業も、之と極まつた業務はないからではありますまいか。若し長男夫婦にしても、自己担任の職業があれば、之に心を奪はれて、今日の如き不平を起こすことはあるまいと思はれます。

長男の御嫁にしても、此家の家風から言はゞ、嫁の分際で、家の事など、小生意氣な、と非難もありましやうが、異日此家を繼ぐべき身であつて見ますれば、その行末を案ずるのが普通の女心、むしろ野生は、此の御嫁樣を殊勝とする者であるが、尙且、一家の非難を受け、俄分限の娘、などあられぬ蔭口を受くるのも詰り田舍流儀の舊弊氣質、あの晨起して、宮詣する老人が頑張つて、昔日の家風を其の儘、今日に於ても、何等の變異がないからではありますまいか。

要するに、此の……家の衝突、波瀾は、堅苦しく申すと、舊主義と新主義の衝突であらう、と野生は深く時勢の變化が、田舍――鐵道の音響だも仕ない僻地にまで及んでをるのに、驚くのであります。が、東京に出てゐる長男は、つい先日他所で會ひますと、父親の手紙を擴げ、母親の病苦を案じて、ほろ〳〵男泣に泣いてをりましたから、何れ近い中にお芽出度納まるとであらうと思ひます。

（完）

臺灣に於ける內地婦人

坪谷水哉

臺灣が日本の領土と爲てから、最早十年ばかり經て今は內地人の移り住で居る人も四五万人ある。けれども舊來の土人が三百万人餘もある中に、內地人がまだ僅に四五万人で、シカも永住の目的で居る人が少なく任期が滿ちたらばとか、金が儲かつたらばとか、何れも多くは早晩內地へ歸る考へで、骨を臺灣に埋める積りの人が甚だ少ない。是れ多くは自分の身體一とつで行き、家族團欒の樂しみが無いから、無理もないと思ふ。で、內地人が澤山臺灣へ往て、長く落ち着いて住む樣にするには、皆んな夫人同伴で往く樣にしたい。然るに多くの婦人の中には、臺灣の氣候風土や、航海の困難などを氣にして、行くことを憚り、良人は臺灣に住み、夫人は內地に居るといふ樣な家庭が往々ある。また臺灣に往て見たいと思ふても、家內から故障を言はれて、思ひ止まるといふ樣な人もある樣に聞いて居る。ソコで其う云ふ人達の爲に、臺灣に於ける內地の婦人の境遇を御話して、臺灣は行くに危險のない所、住むに愉快な所であることを傳へ、また臺灣に住で居る自分の娘などの身の上を、內地で頻りに心配して居らるゝ人達にも安心を與へたいと思ふ。で、其の御話することは、近く九月から十月に通じて、自分が親しく臺灣の內地を、殆ど南の端から、北の端まで、旅行して見て來た實驗談で、毫も想像を加へず、また懸直も言はぬ積りである。

臺灣が始めて日本の領地になつた當時は、總督府の官吏でも、または民間の實業家でも、內地の借金逃れなどの爲に、身體一とつを以てコソ／＼と出懸けて往た者が多かつた。また官民ともに、何分新開地で、時時土匪といふ亂民が蜂起したり、氣候風土の變化で、病毒に罹つたりする危險があるといふので、俸給などは遙かに內地に居るよりも多く支給して居た。故に幸ひに神妙にして居れば、誰れも相應に蓄財も出來る筈であつたけれども、實際には四五年の間、臺灣の月給

計りで、金を殘した者は無つた。此れは渡臺者が何れも獨身で往つたので、退屈の餘り、酒食や遊女に金を散じて、料理屋や遊廓ばかり繁昌し、折角移住者を優待したる趣意も、何の効能も無つた。といふのは、夫人を伴はぬ者が多いからである。ソコで近來總督府ては、成るべく夫人同伴を奬勵し、夫人のある者には月給を定額外に增給し、小兒が出來れば一人ごとにまた增給することにしたので、段々夫人の同伴者が增して來た。

　內地で考へると、家族が多くなるだけ生活が困るだらうと思はるゝが、臺灣では、家族のある者はそれだけ俸給を割增して給與せられ、家庭團欒して住むと、最早外に遊んで料理屋や遊廓へ無駄な金を使ふことが無くなる。また前に言ふ通り臺灣に住む者は、一般に俸給が內地より多い上に、住居は多く官宅または社宅で、屋賃は要らず、年中暖かい所だから、着物も少くて宜しく、米は一年に二度づゝ收れる所だから、直段が安い。斯ふ云ふ風に衣食住の生活費が少なくて、それで收入が多いのだから、近頃になつては、臺灣に居る內地人の月給取社會は、何れも福々然たる生活をして、前に負債のあつた人達も、今は大抵借金を返して仕舞ふた上に、相應に蓄財する樣になつた。此事は全く夫人渡航の効能で、料理屋や女郎屋には氣の毒ながら、臺灣の繁昌を進むる上には、莫大なる功を奏して居る。

　案るより生が易いと云ふ里諺の通り、方今臺灣に移り住で居る婦人達に就て、臺灣の生活は如何ですと聞くと、大抵は左の如く答へらるゝ。曰く、內地に居ますときには、臺灣へ行くと、途中で長い間船に乘るので、船に弱い者は、臺灣に着かぬ前に弱つて仕舞ふと聞て居たが、實際神戶から汽船に乘ると、日本郵船會社の船でも、大阪商船會社の船でも、西京丸とか、山城丸とか、臺南丸、臺北丸などゝて、近海航海の船などゝは比べ物にもならない大きな船で、沖へ乘り出しても大抵な浪風は知らぬ位で、神戶から臺灣の基隆港までは、四晝夜乃至長くも六晝夜位で到着して基隆

では汽船が棧橋へ横着けになつて居る。また上陸すると直ぐに停車場で、其所から汽車に乘ると、總督府のある臺北でも、開港場の淡水でも、または前に縣廳のあつた新竹街とか苗栗街などへは、何所も汽車に乘つた儘で往ける。それから島の南の方へ往くには、隆基からまた汽船に乘て、大抵な所へは二三晝夜で往けるが、其所の汽船は小さいから、船が嫌ひなれば陸上から行くにも、北方と南方に汽車の鐵道がある外に、中央のまだ汽車の通じない所は、輕便鐵道が敷かれて、双方を繫ぎ着け、其の輕便鐵道には土人の人夫が押して走らせる臺車といふがあつて、一家族四人位までは一車で送り、それが通常の人力車よりは遙かに早く走り、南方に往けばまた汽車があつて、嘉義、臺南、打狗などの各都會の間は、自在に往來が出來て、また內地では大層恐れて居た土匪など、云ふ者の、最早一人も無く、婦人の一人り旅行でも、汽車と輕便鐵道とで北の端から南の端まで、安全に通ることが出來て、百里餘の所を、都合よく通れば三日位で通過が出來る、といふて居る。

それから病毒や氣候の事に就て聞くに、何れの夫人もまた答へて曰く、成程臺灣は內地よりは熱い上に、夜になると急に冷しくなりて、氣候の變化が急な所だから、晝間の暑さに油斷して、夜間薄着で寢ると、直ぐに風土病に罹つて、此れまで多くの患者が出た相だが、近頃は皆は豫防に慣れて、夜間は暑くとも我慢して、肌膚を露はさぬ樣に注意するので、風土病は大抵豫防することが出來る樣になりました。また夏の盛りは暑熱に苦しみますが、其代りに冬の寒さといふとを知らず、此地に居ると、霜や雪は降たことが無いので野菜や果物は年中內地で見られぬ樣な旨い物が喰はれる。魚類などは澤山あるが、土人が餘り喰はないので內地よりは廉く買はれ、中にも內地では貴重な物としてある泥鰌などは、土人間では全たく喰べぬから、內地の何分一といふ直段で買はれ、また菓物の芭蕉の實や、鳳梨や、龍眼肉なども、內地では想像の出來ぬほど廉く買ふことが出來る。唯だ內地から輸入する與

服類とか、太物類、雜貨類などが、多少高價であるが、それもマア內地の二三割高と思へば十分だから、一般の生活は、內地に比べると餘程氣樂で御座いますと。

ソコで生活費は少なく、衛生にも甚だしい困難は無いとして、小兒の教育は如何かと聞くに、小學校は何れの市街でも、內地人の二三百人も居る所には必ず設けられ、內地から來た敎員で、內地同樣に教育して居るから、毫も不自由は無い。また臺北には高等女學校もあるから、年頃の子女を教育するにも困らない。また現今此の島に移り住で居る夫人達は、大抵は內地で相當な教育を受けた人ばかりで、內地の下等社會の裏店の山の神とか、片田舍の馬曳嬶とか云ふ樣な者が殆ど無いから、周圍の境遇が好いので、一般に惡るい感化が少ない樣だ。尤とも臺灣には、女郎だとか茶屋女だとか、良くない婦人も澤山入り込で居る相だが、此れは大抵一廓を限られて、普通の交際社會には面を出さねば、彼等の有るか無いかは、普通の婦人や、小兒などには知られぬ位だから、其害は割合に少ないと思ふと。

シカシ內地人が一體に少ない上に、婦人は尙ほ少なく、物見遊山とか、避暑旅行とか、または溫泉とか云ふ樣な、遊び場所も少ない樣だから、其う云ふことはサゾ不愉快だろうと尋ねると、これも想像とは違つて內地人の少ない代りに、少數なる朋友の間の交際が至つて親密で、互に親切に世話をして居ることは、仲々內地では見られぬ所である。また物見遊山なども、臺北、臺中、臺南などの都會では、劇塲も數所あつて、斷へず興行して居り、また公園もあれば倶樂部もあつて、家族打ち連れて日曜の散步も出來、知己集つて晩餐を偕にすることも出來るから、此れも內地で思ふほど退屈は無い。此上內地から純良の婦人が益ます入り込で來たならば、益ます交際の區域が廣まつて愉快だろうと。

マア現今臺灣に居る所の夫人達は、大槪こんな考へを有て居る。で、在臺灣の內地婦人は、大約四千人計りあつて、男子に比べると十分の一ほどある中で、茶

屋女とか藝娼妓など、云ふ怪しい素性の者を除くと、眞正の夫人で、一家の主婦たる者は、二千人そこらに過ぎぬ。然るに此れだけでも、良人の遊蕩を防止して風俗を矯正し、浪費を省いて家計を裕かにし、永住の慣習を養ふた効能は大いなるものである相だから、此の後の渡臺者は、成るべく細君を同伴し、婦人達も、臺灣は生活に容易い所と云ふことを悟りて、喜んで渡航する樣に願ひたいのだ。

獨佛兩都の正月

SK生

獨逸伯林の正月は未だ新年に成らない内に來る、即ち年の内に春が來て了ふのである。十二月廿四日の晩から始まる聖誕祭(英語のクリスマス)が丁度日本のお正月に似寄つたものである、是は獨逸國ばかりでなく耶蘇敎國は一般に然樣である。けれど獨逸は有繋ルーテルの生地丈有つて他國よりも一際盛んなのである、先づ十二月の初になると追々市中が賑ひ出して、各商店とも美麗なる裝飾を施して耶蘇祭の物品を陳列し、市中の廣場廣場には祭に用ふる樅の木即耶蘇樹の市場が立つ、此の耶蘇樹といふはタンチーと云ふ樹で日本の杉と樅の間をゆく樹である、此樹は日本の正月に於る松飾と均しく耶蘇祭には必ず無くてならぬ物に成て居て、大さは先づ一丈位はあらう。客間に擔ぎ込んで、之に金銀紅白の絲を引掛けたり、玩具を下げたり、蠟燭をつけたりして、美事に裝飾する。その由來を聞いて見ると、一体獨逸人の祖先はハイヂン人種と云つて、山林に住んで居て、冬の夜には、木の枝に燈をつけてゐたものださうな。その遺風を傳へて毎年の冬至になると門毎に此の樅の木を立て、之に燈火を點ずるといふ慣習があつたのを、後ちに、基督敎の方で、冬至と聖誕日との間が極く僅かであるのを幸ひ、うまく之を利用して、さては今の如く室内に飾るやうに成たのである。偖愈々二十四日となると早朝から、市中はまるで日本の大晦日の樣に騷動する、小僧は注文品の配達に驅廻り、下婢は仕立物の催促の爲め奔走し、家内は晩

の祭の準備に上を下へと混雜する。然るに日が暮れて、晩の五時六時頃になると、パッタリ止り市中は火の消えたやうに寂然となり、家内は嘻々として軈て御祭が始る。御祭は先づ家内中、盛裝して一室に集り讃美歌を以て始る。それが濟むと主婦客間を開く、玆には例の耶蘇樹が點火せられて燦爛の光を放つてゐる、其下には幾個も机が列べて在て、贈物が累々と積み上げてある。此の贈物は目上から目下へ與へる許でなく、目下からも目上に向つて、贈ることに成てゐる。又た祐福な家庭になると、其家の小供が近所の貧乏人の子供を招いて、菓子や玩具を與へて、面白く遊ばせることもある。翌日の二十五日は第一祭日と名け、多くは親類知己を訪問して面白可笑しく其日を送る。二十六日は第二祭目と稱し前日と變りはない。扨て其次は大晦日の晩から元日の朝へかけての年の關の景況、之が仲仲盛なものである。先づ大晦日の晩に成ると、都下の人々大方業をすて丶家を出で、其處等中をゾロ〱練つてゐる。處で十二時の鐘が鳴るや否や、往來に居る幾萬の群衆が、一時に口を開いてプロージット、ノイヤール（新年お目出度）を連呼する。すると又家に居る者も、皆な窓を明けて、往來の方を向いては、右のプロージットを唱へるので、その賑はしさと騷がしさは御話にならない。

佛國巴里の正月は日本人の眼には無趣味である、一夜明けたりとて別にかはつた裝飾もなく、御馳走もなく、亭主の着物もコックの前垂も昨日のまゝにて、見るもの聞くもの一として年と共に改つた心地はしないのである。唯だ平生「今日は」と簡單に云ふ挨拶を此日丈は特別に親しく手を握つて、丁寧に「新年お芽出たう」と言ふ位のものである。又回禮なども事々しく爲さずして大抵名刺の遣取で、すまして了ふから、名刺の發送は極めて多い、故に各郵便局では元日の前后數日間、名刺入の大籠三個を市内行、地方行、外國行と三種に區別して出して置き、特別の取扱をする事に成てゐる。ソレカラ年玉（エトレンヌ）とて、親類朋友などの親しい間に贈物を遣り取りするのである。

其の品には別段極りはないが、小說、物語、旅行記等の文學書が多い樣だ。されば新版物を商ふ書店は年末になると、店頭を美事に飾り付けて金銀青白燦爛たる美本を陳列して客の目を引くやうにしてある。又年玉は書物に限らず、自分の宿の門番も、下男や、下女や、平生親しく出入する家の其等には、年玉にとて少きは二三法、多きは十法程遣はす慣例である。又郵便配達夫にも同樣年玉を贈る、年末より年始にかけて、郵便配達夫は豫て受持の家々に小さき掛曆を配つて來るから、其の返禮として年玉二三法を與へるのであるが、こは殊に目立つてをかしい風習である。

世界第一の美人

先頃佛國巴里にて發行する「ヒイガロ」といふ新聞にて美人の投票を募りたるが、其結果世界第一の美人といふ名譽なる月桂冠は、米國女優の獲る所となりたり。同誌は世界各國より美人の寫眞の寄送を求め、其中より二十名丈けを撰擇し、其中に就き、讀者の撰投票を求めたるが、第一の高者は、米國の女優モード、ヒーアレー孃なりし、孃は齡十九年、ケンタツキー州の產にして、同國劇壇に於ても亦多少人に知らるゝにいたりしものならむ。而して噂する所によれば、「ヒイガロ」の投票發表せられし後、獨逸皇帝に、或人に語るらくセラルチン、ファーラー孃は朕が見たる美人中の最も美なる者なりしとのたまへたりしといふ。ファーラー孃亦米國に生れカルホルニヤ州に住み數年間歐洲に遊學せし者なりといふ。



蒙古王の家庭教師

麻軒生

劍戟を執つて外邦に懸軍深入したる武力的遠征は、畏くも神后皇后を初として吾人の祖先屢々之を試みしと雖も、教鞭を執つて敎外の地に單身進入したる平和的遠征に至つては、哀しい哉、吾人の歷史未だ曾て之を語らず。

內地の幼稚園に、小學校に、將た女學校に教鞭を執るの人は其數甚だ多しといへども、遠く海外に渡つて異邦の民を化育したるものは、未だ曾て之れ有らざるなり。

然るに今や、巾幗の婦人にして雄々しくも此の擧を

企つるものあり、其人を誰とかなす、即ち長野縣人河原操子女史其人なり、女史は多年女學界に在て敎育にたづさはり學殖才貌並び勝れたるの婦人なるが、こたび賢明なる蒙古喀拉沁王より家庭敎師として招かれ、其の聘に應じて單身萬里の異域に出立したりといふ、誠に未開の蠻土に文明の光を傳へんとする女史の此擧や盛んなりといふべく、宜しく我が婦人社會及び敎育社會は滿腔の誠意を致して、其の行を壯にせざるべからず。

女史は當年二十七歲、信州松本の產にして、其の母は早く世を去りたれば、父親の手一つに養はる、其の父は福島少將とも懇親の間柄なりとぞ、女史は二十七八年の頃長野縣師範學校を卒業し、長野市の尋常小學校に奉職したり、學校敎師としての女史の天才は殆ど神來ともいふべく、その含笑なる溫容と、優しき言語とは能く兒童の心を和げて、巧みに之を指導するの妙を得たり、されば一校の生徒は男生といはず女生といはず、翕然として皆な女史の脚下に集り、やさしき師の手に額髮撫でらるゝを、こよなき樂みとし、宛ら慈母の如くに仰ぎて、慕ひ懷きたるにぞ、父兄の滿足と喜悅はいふまでもなく、校長も此の良敎師を得たるを誇り、縣下敎育界の花よと稱揚したる程なりしと、然るに女史には同縣より選拔されて東京に出で、茗水溪畔の女子高等師範學校に入り、硏鑽數年、學業優等の聞え高かりしが、卒業の間際に至り、不圖肋膜炎を病み、醫師の勸告否み難く、一時休校して轉地療養を房總の海濱に試み、數ヶ月を空に送ると雖も、病狀捗捗しからぬ爲め、遂に退校するの止むなきに至り、長野に歸つて高等女學校の敎師となり、山水明眉の鄉土に病軀を横たへつゝありしも、偉才は到底一地方の有にあらず、病癒え本の健康に復するを待つて、再び東都に出で、下田歌子女史の家に寓し、專ら國文學の硏究に一身を委ねたり、此の折歌子女史には操子女史の志操の堅固なるに感じ、女流には惜しきものよ、あはれ男子に生れたらましかば、天晴有爲の材なるべきにと竊かに嘆じたることもありしとぞ。

其の後、歌子女史の推薦に由て、横濱の大同學校に聘せられ、支那人の女生徒に日本語、日本文學、唱歌等を教授し居りしも、一年餘にして同校を辭し、更にカトリック教のミッション、スクールなる紅蘭女學校に教鞭を執り、兼て支那語學校の教師となりて日本語を教ふる間、一方には生徒となりて支那語、佛蘭西語、獨逸語等を學習したるにぞ、元より學才非凡の女史の事とて、進步著しく速かにして、會話にも差支なきに至れり、女史が此間の精勵は人をして舌を卷かしめたるものありしと。

かく、支那語其他の修養に勉めたる事は、大陸に事を成すの階梯となり、一昨三十五年の五月といふに、再び歌子女史の推薦によりて、清國上海の城內に設けられたる務本女學堂の教師となりて渡航するに至れり、時に年齒二十五、未だうら若き女子が而も一人旅にて船中にあり、敢て衣裳を飾るにも非ず、扮飾を施すにも非ず、綿衣に袴着けたる質素の風釆、却て船中の人々に異樣と見做され、醜業婦ならんなど怪しからぬ噂を私語ぐものさへありたれど、女史は彼等の言を意に介せず、凛然たる勇氣面にあふれ、靜に身を横たへて枕頭に波濤の音を聞きつゝ、來ん異邦の空を待つものゝ如し、軈て船の上海に着し上陸するや、一ト先づ日本旅館に入りて船中の疲勞を休めんともせず、直ちに城內の務本學堂を訪ひ、其より學堂に關係ある支那人の家に止宿し、居ること一週許にして遂に城內の學堂內に移り住み、熱心に教鞭を執れり、同學校は彼の電奏事件にて有名なる經元珊氏の設立する所にて、女史は教頭の位置に据り、專ら日本語の教授をなし居たり。

かくて女史の教授の親切なる、又た其の慈愛深きには、國を異にし俗を異にする支那の女生徒等の心にも、痛く感じたるとみえ、先生々々と懷き敬ひ、就中一女子の如きは、師の髮の毛短く紡れ毛の額に下がるを見眞似に態と我が髮の毛を剪り來り、之を誇りがに指し示して「先生の髮の毛に似て居ましやう」と言ひたりしとか、我をも師と思へばこそかゝる事までをも見倣

ふならんかと、坐ろに涙含るゝ迄に嬉しく思ひたりしと、同女史の書信の端に見えたり。當時上海の城内は惡疫流行の折とて、殊に不潔を極め、一日に百餘の棺桶を出すの有様なりしも、女史は教育に殉する覺悟なれば平然として教壇に立ち、熱心其の職に盡したる膽勇の程は嘆ずるの外なし、かゝる有様なれば校員生徒いづれも女史を尊敬し、之に畏服せざるなく、大に日本婦人の面目を起したり、さるに同校の任期は一年の約束なりしかば昨年五月滿期となりし所、其の折しも彼の賢明を以て聞えたる蒙古の喀拉沁王より家庭教師招請の事を北京なる我が日本公使に依托し來りしかば、同公使は之を上海なる小田切總領事に照會したり、茲に於て小田切領事は女史を適任者と認め、之を相談せしに女史は快然として言下に承諾の旨を答へたるにぞ、總領事も其の男恥しき決斷と健氣さには舌を巻いて驚嘆したりといふ。

さて其より三ケ月許は經元珊氏の家に寓して支那語を研究し、蒙古國の使者來るを待ちて、昨年十一月二十三日上海を發し、大阪商船會社の大和丸にて揚子江を溯り、南京附近の名勝を探りつゝ北行の途に就きたり。

吾人は女史の此の擧を序するに當つて、勇心勃々、想は遠く女子の身邊に走せて活動の念禁ずるを得ず、筆端爲に躍るを覺ゆ。願ふに蒙古の地は曩昔豪傑を出したるの所、今や女史の啓發に由て第二の成吉斯汗を出す、亦た必ずしも遠き未來にはあらざるべし。誠に女史の此行や、其の名は家庭教師といふと雖も、實は文明の導師にして、德化を異域に及ぼすもの、啻に日本婦人の面目なるのみならず、祖國の光輝を發揚する尤も大なるものにあらずや、女史乞ふ、歸朝の日に於て遠征的教育の成功を吾人に語るあれや。

女子修養錄

永廻鐘江

▲處女の修養機關は、今日の所、高等女學校を唯一の

關門とす、之を從前の女大學流の敎育に比すれば、實に霄壤の差ありて、頗る改良の實を擧げたるものあれども、未だ以て完全なりとはいふ能はざるなり。

▲女子敎育の機關設備されてより、發達の日なほ淺きが故に、其の完備せざる所あるは、數の免がれざることなれども、之を女子の天職に考へ、之を卒業者の實蹟につきて觀察すれば、今日の敎育法の餘りに迂遠に、餘りに空疎に、餘りに効果の薄弱なるに慊焉たらざるを得ず。抑々

▲女子の天職とは何ぞ、是重大なる問題なり、實に人生の一大疑問なり。從つて、男女同權論は果して眞理なるべきか、男尊女卑の風習は果して不可なるべきか、結婚は果して人生必然的のものか、將た偶然的のものなるべきか等の諸問題を續發す吾人は、今玆にこれを解決せむとにはあらず。唯女子の修養を論ずるに當り、聊かその天職を說明せむと欲するのみ。先づ

▲男女兩性の天賦に考へよ。啻に生理的に一大相違あるのみならず。その心理的に截然たる區劃あるにあらずや。男子の勁健にして堅忍なる、女子の纖細にして温柔なる、これやがて、男女各々その天職を異にする所以自ら外的活動と內的活動とに、その職分を分つべき先天的約束ある所以にあらざるなきか。

▲楯を執り弦を鳴らして、强敵を退けたる女丈夫あり。朝に坐して百政を料理し、樽俎折衝、よく內治外交を全うしたる女王、世界にその例少しとせず何ぞ女子にして堂々國事に參與せられざるの理あらんや、政治に容喙せられざるの理あらんや。然れども、思へ、男女心身の相違は、各々天職を分つべき自然の理法を證明するものなることを、即ち纖細にして質實優美の肢體は、局面の狹小にして現實的なる家庭の活動に適し、緻密にして深切周到の性質は、關係の錯綜たる內政統理の任に堪へて巧に之を按排するの資を賦せられたるものに非ずして何ぞ、而も之を以て男子の粗大に對し男子の豪放に應じ、長短相補ひ剛柔相和し以て、人生至高の目的を究極すべく定められたるものにあらずして何ぞ。

▲かくいへばとて女子に室内の蟄居のみを奬勵するにはあらず、外社會の活步を禁足するにはあらず、唯だ其本分を正せよといふのみ。彼の慈善事業の如き、將た敎育事業の如きは、その性質上女子に最もふさはしき社會的事業なれば、慈愛に富める女子は其の本分を妨げざる範圍に於て宜しく此の方面に活動すべきなり。

▲世の文化愈々進みて、社會萬般の事業益々分業の必要を生ずるが故に、女子の手腕に俟つべき事業、日一日を加へて增加するや必せり。かの歐米諸國の女子が、如何に慈善事業に活動し、如何に敎育事業に盡瘁し、其他、如何に社會萬般の事業にその纖手を伸ばしつゝあるかを見よ。かくの如く女子の職務は唯一家庭にのみ局せられざるが故に、その理想とする所、從つてまた家庭の上にのみ限られざるや明かなり。されば、獨立して世に立ち、堂々男子と馳驅して、社會に活動する餘地を求むる、固より不可なしといへども、吾人はこれを以て、女子不婚論を眞理なるかの如く絕叫する巾幗者流に贊同すること能はず。

▲歐米諸國、殊に米佛二國に不婚の女子多きは、彼等が獨立自營の精神に富めるが故のみにあらず。彼等はセチ辛き家庭を作らむよりは、寧ろ氣樂なる獨身生活を好むこと、その主要原因たることを知らざるべからず。いはゞ、彼等は不婚を餘儀なくせられたるなり。その獨立自營を云爲するものゝ如きは、畢竟瘦我慢に過ぎざるなり。

▲是において吾人は、女子の理想とすべきは、先づ第一に圓滿なる家庭を作るにあることを主張せざるを得ず。まして慈善事業といひ、敎育事業といひ、女子の執るべきすべての社會的事業は、強ち獨身生活にあらざれば、これに盡瘁する能はずといふの理なし。立派に家庭を持ちながら、而も能くこれを遂行することを得るをや。

▲然れども、あらゆる女子は悉くその境遇を同じうせざるが故に、内自己の性格により、外種々の社會的事情の下に或は獨身生活をなして、專心社會的事業

に從事するは、必ずしも惡しきことにあらず。否無謀に不健全なる家庭を作りて、これが爲に辛酸を嘗め盡すの悲慘を演せむよりは、むしろ遥に勝るものあるべきなり。

▲故に多くの女子は、家庭を作るべきものなり時に或は獨身生活をなすものありとも、そは即ち例外なり、特別の例なることを忘るべからず。偶々無謀に家庭を作りたるものゝ、不幸をのみ見て、直に不婚論を以て、一般女子を律せむとするが如きは、實に主客顚倒首尾相反するもの、吾人の與せざる所なり。

▲女子の天職として、吾人の見る所かくの如し。この天職を全うすべき女子に對する今日の敎育は、果して如何。これ實に吾人の茲に細論せむとする問題なり。抑も今の女子は、十三四歳にして高等女學校に入り、五ヶ年の學業、終れば既に十八九歳となり。卒業後一兩年を過ぐれば、はや婚期の切迫するにあらずや。然らば果して今日の高等女學校の敎科及び敎授時數は、その卒業後一兩年にして、家庭を作るべき女子に對して、良妻賢母たるべき資格を得せしむるに足るか、否、その授くる所の敎科は男子の學校に課すると等しき普通學科なり、適々家政の一科ありといへども、僅々たる敎授時間に於いて、何ぞ複雜なる家事育兒の全斑に通せしむるを得べき。

▲家事科の敎ふる所、僅に家政の一端にして、而も多くは家庭を作れる經驗もなき敎師の、唯机上の空論を吐くに過ぎず。家政のことを學びたりといふとも、實は門前を通過したるに過ぎず、これを以て直に複雜なる家政に應用せむとすとも、疊上の水練、終に何等の効をか奏せん。かくして、彼等は高等女學校を卒業し口に家事科を學べりといふも、覺束なき哉。

▲今日高等女學校卒業生の家庭を作れるものにつきて、その在學中學び得たる家政學の効果如何を問はゞ、彼等は口を揃へて、『チットも應用が出來ません』『何の役にも立ちません』と答ふる外はあらざるなり。更に女學校卒業生を娶れる人に質せよ。『意外でした、今少し家の事が出來るかと思つてゐましたのに。マルでお

孃さんですもの』といひ、『兒どもを育てることなど、マルで駄目ですな。』といはざるもの果して幾人かある。甚しきに至りては、『氣位ばかり高くて、役に立ちません』といふものあるにあらずや。

▲假りにこれを酷評なりとしても、かくの如くにして敎育せられたる女子の主婦としての資格に欠くるものあるはいふまでもなく、一たび世の有爲轉變に遭遇したりとせよ。その狼狽その悲慘、蓋し名狀すべからざるものあらむ。抑も運命の變化は不可測なり。如何に周到の用意を以て婚儀を締結すとも、如何に圓滿なる家庭を作りたりとも、豈これを免るゝことの術あらんや。運命の變化、境遇の轉變に會ひても、嚴然自若、そのよく措置に窮せざることを得る所以のものは、精神上の修養與りて大に力ありといへども、蓋し身に一藝一能あり、以て世に立つだけの修養あるものにあらずんば、得て毅然として、運命の逆浪に對すること能はざるべし、女子の敎育に與るもの、茲に心を用ゐずして可ならんや。

▲是に於いてか吾人の女子敎育觀は、他日良妻賢母たるべき今日の女子に、最も有効なるべき準備的敎育を施すと同時に、萬一不慮の災厄によりて、彼等が運命に一大變化ありとも、沮喪失望なからしむるだけの修養を得せしむるにあり。而して今日の高等女學校はこの目的に適ふものにあらざるなり。

▲今日の高等女學校は、女子中學校なり、進んで高等敎育を受けんとする少數の女子には、或は今日の儘にて不可なかるべけれど、退いて家政を料理せんと欲する大多數の女子にとりては、頗る不完全不都合なりといはざるを得ず。然らば如何にこれを改造すべきか他なし、今日の女子中學校をして、女子實科學校又は家政學校たらしむるにあり。

▲今日高等女學校の修業年限は、五ヶ年又は四ヶ年なれば、最初の二ヶ年間は高等小學校の敎科に聯關して、今日の如く普通學科を授くるを可とす。然れどもこは單に國民としての常識を修養し、併せて凡百の學理を修養する素地を作るに止めよ、徒に高尚に馳せ架

空に流るゝことなかれ、要は各敎科の敎授をして、實用的ならしむるにあり。而して終りの二ヶ年又は三ヶ年間は、全く女子に適切なる專門的敎育を施さむことを要す。家政育兒に關するあらゆる事項を、或は學術的に或は實驗的に、實科實習の敎授時間を多くし、敎科目の數は唯修身・國語・家事・敎育・技藝・運動の五科目となし、各敎科悉く女子專門の敎育技藝を授くることゝなすべし。

女生徒の雪寃

某女子大學生

▲一日我友なる日本女子大學生の許を尋ねました、隔なき友垣の間に種々の話の有た末、社會が女子大學生に對する誤解に就て下の樣に話されました。

▲私達は幾何人から誤解されてもかまひません、所詮人に誤解と云ふ事は免れない事でありますから、私共はあなたがたに之を辯解し樣とは思ひません、私共は實行に表はして氣永に私共の眞心を表はすつもりでありますが、又一方から考へますと之から先此學校に入ろうと豫て希望して入らつしやる方々も人々の誤解を信用して折角堅い決心を挫く樣な事が有りましては誠に殘念でありますから所詮むだとは知りつゝつい辯解もしたくなります。

▲此社會に女子大學の學生と學校に關係のある方々を除いて、眞に此學校を知て居る人が幾人あるでしようか。恐らくは一人も無いだろうと思います、極端に云へば女子大學校の立た事も知らない人がある位ですもの、まあ誤解とか疑惑とかの重なものを云ふて見ますと。

一、彼の學校では良妻賢母以上のものを造ると云ふ事たが何にするつもりだらう。

一、彼の學校は實際に遠い、女子には不必要な高尚なものばかり敎へる。其爲に只理窟ばつて生意氣にばかりなる。

一、徒に流行を追ふハイカラ學校で奢つて居る。

▲これは只ほんの二三の事で無責任な人の云ふ事でありますが現に何日の雜誌太陽には立派に名前を出して此學校の批評がしてありました中に、女子大學は高等女學校に少し毛の生へた位のもので、高等學校にも及ばないものだと云ふてあります、又ある人があの學校のすぐ近處に下宿屋を建て（畢竟あすこの學生を下宿せしめるつもりであつたのでしよう）學校に學生を下宿させる樣に云つて來た處が學校では一言のもとにはね付けた處で夫では男子の學生を澤山に下宿させると云ふたそうな。

▲斯な事を聞て私達は何時も歎いて居ります、良妻賢母以上に何でなるものがあるでしよう、社會の云ふ良妻賢母と云ふ意味は何な意味か恐らくは、範圍の狹い程度の低い意味で云ふので其目から見たら或は夫れ以上に見えるかも知れませんがつまりは我國の母たり妻たり女子たる本分を立派に盡す事の出來る樣に廣く深く、研究しつゝあるのではありませんか、已に廣く且深く調べるには高尙な學問もせねばなりません、實際には不必要な學理も知らねばなりませんが、實地實際の事を知らずに何して夫れ以上の事が出來ましよう現に學校に關係のある人々の來た時或は他の客でも生徒等が皆工夫して室内を裝飾したり、日頃習つた料理とか、菓子とかを造つて手づから給仕迄してなるべく將來の爲になる樣にと勉て居るではありませんか、夫は大勢の生徒の中ですもの偶には理窟を云ふ人もあり生意氣を云ふ人もないとは云へませんが、夫を以て直に全體を推測するのは餘り酷です、心ある學生は恐らく涙を呑で時の至るのを待つて居る事でありましよう。

▲奢て居るのハイカラだのと云ふに至つては私達は何時も、笑て居ます、世間の人の質素だと云ふのは何でも人に目立たない、價の安い、年に不相應な地味なものさへ着て居て、裝飾氣などは少しもないつまり美と云ふ點には少しも重きを置かないのが其當を得たもの、樣に思ふて居ますが、併し年若き女子は國の花たり、人世の花であります、必ずしも其美を覆ひかくす

には及ばんではありませんか、必ずしも年不相應な地味な衣服を着るにも及ばず、價の安いものが經濟だと云ふわけでもありません、又同じ價のものゝ內で最年に相應した美に適たものを擇で着るのが一番宜しいではありませんか、或は髮にしてもです、元來日本では毛髮にすき油、水油びんつけ、などゝこて〳〵とぬりかためたのが宜いと思ふて居ましたが次第に學理の進むにつれ衛生上惡い事は申すまでもなく、人間の毛髮には何も特別に油をぬる必要はなく、人に依て餘りばら〳〵する人は格別、自然に毛の根から出る油で澤山であると云ふ處から次第に束髮にも油を用ゐなくなつた、夫と共に結び樣もいろ〳〵になつた之をハイカラと云ふのでしようかハイカラも良い方のハイカラなら進で夫を取るのに何の遠慮する處がありましよう、或は一輪のバラをかざすも一束のヴアイオレツトをかざるも身分不相應な事さへしなければ(美の點から云ふたなら)誠に優しい心掛ではありませんか。

▲又女子の學校と男子の學校と比較するに至ては最早コンモンセンスのある人の云ふ言葉とは思はれません、程度から云ふたら丁度高等學校に當る時代ではありますが、高等學校に劣て居るのは當然であります、併し高等學校も亦私の學校に劣て居るでしよう女生の學ぶものと男生の學ぶものと同じ高尙な學問としても自然其目指す目的の異ると共に互にある一點に付て優た點もあり劣た點もあるのは當然じやありませんか、之が常識のある人の云ふ言葉でしようか。

▲下宿屋の話に至ては笑止千萬と云はねばなりません、併し之は社會の我學校に對する態度の一番良い例の標本でありますあの學校の建た當時は何でしたでしよう、否今日もそうでありますが、社會は皆反對の位置に立て少しでも欠點あれかし失敗あれかしと注目して居る靑眼鏡をかけて見て居るのですものある堂々たる雜誌には女子大學試驗の苛酷と云ふ事が出て居ましたが、何處からあんな誤解を聞て來たのか試驗なら每日實地にいつもして居ますが、之は世間で云ふ試驗とは少し意味の異たものです現に家政部などでは普通に

云ふ試驗らしい試驗は未だ一度もした事はないそうです。

▲ほんとにも少し批評するなら實際に來て見か、たしかな人からよく聞き正すかして云ふなら、學校の將來の爲にもなる事ですから、却つて宜いのですけれ共實際見もせず、一寸聞きかぢつて口から出まかせに無責任に云ふのを見と、ほんとに社會の道德が低い故とは云ひながら夫を聞て悅で居る樣な人の多いのは誠になげかはしい次第です。語り終て友達は其思慮深い目に淚をためて居ました。

家庭雜觀

記者

四海同風　とは年賀狀の常套語なり、此の語簡なりと雖、御互樣に御目出度い心持を言ひ盡せり、即ち新玉の年立返る朝に於て、我の家庭に吹入る風は、彼の家庭に吹入る風と其の性質を同じうして、枝も鳴さず、塵埃も立てず、至極おだやかにして而も暖き感あり、此の風や、目にも見えず、肌にも觸れねど、心之を認めて、人、人と逢へば輙ち口を開いて御目出度うと言ふ、譬へば池心の魚鱗、有るか無きかの小波濺漣とゆるゝ水面に向つて泡沫を吐き出すと等しく、此の閒眞に平和の極致。

日本の松飾　は西洋の綠門に似て、其よりも氣の利きたるものなり、新年門前に松竹立てゝ、注連飾を張る時は、古き家も新しく見え、瑞雲何となく屋の棟に棚引く心地す、且つや箒子の痕は家の周圍に青海波を描いて淸新の氣屋の内外に充ち滿ちたり、疊は靑く、障子は白し、嗚呼快い心持なるかな、年中いつも斯くてありたし。

正月の御馳走　は年々歳々同じ雜煑餅にして、歳々年々同じ塩加減ながら、之を祝ふ時の心地は、言ふに言はれぬ味あり、式の如く杉箸を取つて先づ兩親の顏色を伺ひ、次に、女房の顏を見、子供の顏に及ぼすに、何れも滿面、喜色を帶びて、欣々然たり、快々然

たり、嗚呼此時のあぢはひ、天下何物か之に若くものあらんや。收め得たり一家の淸福。

旭日　拜める家は何となく陽氣なり、賑かなり、豐榮昇る朝日が東山の一角、若くは水天髣髴の間を劈いて出る時、其の最初の光に當る家居は誠に芽出度きものにて、百歲の壽も爲めに延ばすを得べし、殊に新年の初日出を座がら拜む時の心持は夫れ將た何にか譬へん、我等は家庭に此の旭日の光さへ有れば、庭も要らず、築山も要らず、況んや大厦高樓をや。

東京の太陽　は傾斜的なり、東京の地は人家櫛比の爲め、庇相を斜に射す赫灼の光は見るを得ると雖も、地平線上を橫に射す、若き光には當るを得ず、故に新年初日出を拜まんと欲せば、芝の愛宕、丸山、湯島天神等に態々出懸ざるべからずさもなければ、楷子を攀ぢて二階の屋根の物干の上に登らざるべからず、腿却なる哉。

蚤起獎勵、寢坊廢止の具として日取曆を利用する家あり、其の法は柱時計の下に日取曆を懸け、側に墨池と筆を備へ、每朝先頭第一に起き出でたるものより、順々に其の離床時刻と自己の署名とを曆の餘白に記入せしむ、斯くて一ヶ年此の法を繼續し、大晦日の晚に至りて之を調査し、等級を附して豫告の賞金を配分するなりとぞ、妙案といふべし、

表時器　といふ調法の器あり、此の器は勤人又は職工等の朝出晚退の時刻を、唯だ把手を押すのみにて分秒の誤なく眞正直に表記する裝置なり、從つて其價廉ならずと雖も、置物一つに百金を拾つるの餘裕ある家ならば、之を家庭に用ゐて家人の蚤起を獎勵するの具とするも可なるべく、又た細君が之を良人の歸宅に應用して、動もすれば他所へ廻り勝の習慣を戒むるも可ならん、呵々。

米櫃の一握　といふ事あり、二宮尊德翁の遺法なりとかや、即ち每朝米を精ぐ時、一升二升と米櫃より量り出す內より、一握丈を別に袋の中へ納れ置く事なり此法を實行する時は知らず識らずの間に餘計のもの溜り溜つて、富家の一端を成すは言ふまでもなく、慈善

薪拾の費を得る亦た極めて容易なり、故に一年の計は元日にありといふ其の元日の朝より此法を御實行ありては如何。

大根、胡蘿蔔、芋　の如き副食物も亦た然り、一度に全量を費ひ盡さずして、一片なり二片なりを、殘し置いて他日の用に供する時は、十日目に一度位は、此の播き集めにて、面白き總菜が出來るものなり、聞く農家にては金錢の節儉よりは寧ろ糧食の食越しを以て經濟の要とすと、一般の家亦た之に則つて可なり。

三食の割合　を定むるに、朝は腹一杯に認め、晝は腹八分に認め、夕は腹六分に認むるを適法とす、朝の腹は後に仕事を控へたれば減き易けれど、夕の腹は消化惡ければ加減せざるべからず、殊に辨當飯にて生活する者には、夕の飯が一番旨く喰べらるれど、喰ひ過ぎては所謂腹が脹れて目の皮たるむの境に入り、苦しきものなり、故に厨房を司る者は此間の生理を解せざるべからず。

炬燵　は家に在て無用有害の物なり、無精の習慣を養ふ具なり、西洋の煖爐は室内の空氣を適度に溫むるといふ効用あれど、日本の炬燵、置炬燵、安火に至ては、唯だ僅か許り手先と足先を焙るといふを取柄に、部屋の眞中にまでノシャバリ出で丶、家人を其所に吸收し、自由さへ拘束するの魔力を有す、故に家人一度之にかぢり付く時は、仕事も嫌になり、元氣も失なつて、いつかうつら〳〵と昏睡の狀に陷る、誠に見苦しき態なり、據て吾人の家庭に在ては須く炬燵を癈棄すべし、其の代り、家人を活動せしめよ、溫味自ら其内に起らんなり。

懷爐灰　を專門に製造する問屋あり。鼠色の灰筒累累として店頭に堆積す、是れ實に日本人の寒がりを證するもの懷爐を抱いて懷手の無精者の世に多きを示すものなり、國民の元氣なぞと申せど、之を見ては甚だ心元なき心地す、願はくば炬燵と共に之をも廢止して貰ひたし。



才媛詞藻

大町桂月撰

（天）山家新年　　　　姫路　照子

こぞよりの吹雪にまじり聞こゆなり
　ふもとの村の萬歳の音

評、萬歳の聲をよそに聞きて、吹雪の中に年を迎ふる山家のわびしさ、歌ひ得て切也。

（地）鶴　　　　安藝　松阪梅子

さしのぼる朝日の光脊にうけて
　高嶺を下る鶴の一群

評、すら〳〵と詠みこなして、調高く、巧を弄せずして何となく趣味あり。

（人）鶴　　　　静岡　佐塚ひで子

世にいでし聖者が軒の大松に
　たま〳〵下りぬ鶴のひと群

評、浮世の功名に迷ひ出でゝ、人なき宿に、鶴空しく下る、多少の感慨。

秀逸

鶴　　　　大阪　清野よし子

空高く舞ふまな鶴のせにのりて
　天つ御國の春を見てまし

評、揚州に遊ぶの意を翻して、心なさなく詠みたる所多少の詩趣あり。

山家新年　　　　備中　大西益子

楽しみて初夢見むと宵寝する
　枕にすごき狼の聲

評、初夢にて、新年をあらはし、狼の聲にて山家をあらはす所、作者の技巧見えて凄涼也。

鶴　　　　岐阜縣　白つゆ

冬がれしあしの葉かげに老づるの
　聲もみだれてあられふるなり

評、調も、意も、古くさけれど、一幅の活畫也。

山家新年

稲は苅りぬ薪は樵りぬ酒は醸みぬ
思ふ事もなく年明けにけり

備中　大西政代子

評、暮れにけりとする方、ふさはしかるべし。

鶴

ほの〴〵と二見があたりあけそめて
けさあたらしき鶴の一聲

神田　高窪ふさ子

鶴

神の代のはじめ覺えてはつ日かげ
をろがみ居れば鶴なきわたる

伊勢　岸田ちゑ子

鶴

鶴一つ雲井に昇る影見えて
左近の櫻風靜なり

水戸　馬場とし子

鶴

二つ三つ白帆浮べるみづうみに
夕日かすみて鶴なき渡る

栃木　澄江子

佳調

（山家新年、鶴、若菜）

● 山里のおのづからなる門松にたづの音高く年たちにけり　長野　木下菊子

● 山の井の千代のわか水くむごとに涸らぬ御代をまづ仰ぐ哉　埼玉　堀川鑑子

● 雛鶴に餌をやりなへて夕暮の庭掃くほどに月は昇りぬ　東京　外河花子

● 乳母が手に若菜摘みてし樂しさを今は我子の上に見るかな　京都　古川かつ

● 山の井に若水くみてしめはへし門にむかふる初日かげかな　芝　川井きく

● 召しませと若菜賣り行く賤の女が袂にかろく淡雪の降る　岡山　横山きよ子

● なゆ竹のとをよる子らの赤裳引裾ひきたれて若菜つますも　河内　大矢たれ子

● 歌ひつゝ若菜つみます姫君の緋の袴に春の風ふく　熊本　佐藤しん子

● 知らず〳〵村の果まで來つるかな星川つゝみ若菜尋れて　美濃　柴田春子

● 朝日さす高嶺の松にひなづるの千代よびかはす聲のゝどけさ　佐賀　大草のぶ

● 松が枝に鳴く音のどかに聞ゆなり巣立ち初めたるめをとひなつる　尾張　小豐やす子

●　上總　森田いし子

苔むせる巌の上の松が枝に千代よぶ鶴の聲ぞ聞ゆる
●　芝　鈴木花子

ひな鶴もともに八千代をよばふなりあさ日かげさす松の梢に
●　茨城　大橋夏子

初日の出羽かひにうけて大空を千代よびかはし鶴なきわたる
●　京都　村井澄江

さしのぼるあさひのどけき大空に立ちまふたづのこゑぞゆたけき
●　磐城　三島洋子

新らしき年のあしたの海の上を千代よばふ鶴の舞ふぞゆたけき
●　秋田　佐藤千代能子

たづねくる人は絶えたる山里に待としもなき年は來にけり
●　栃木　森田とみ子

朝日さす雲井の空に聲高く君が代祝ふ千代の友鶴
●　下總　増田なみ子

いくとせも心をのべに若菜つむ己が頭に雪は降りつゝ
●　東京　みどり

大ぞらに御代ほぐ鶴のこゑすみてふじがれ遠く朝日かゞやく
●　名古屋　松原わかな

山さとのすくれし景色ことさらに今朝あたらしく見えにけるかな
●　千葉　鶴子

杣人のうたごゑひくゝかすみきて霧よりあくる初春の空
●　芝　川井きく子

早咲きの梅も見がてらとひきませ若菜つみつゝ昔がたりせむ
●　本郷　田中薫子

都なる姉のおくりし羽子板をつきてぞ祝ふ山里の春
●　茨城　菊地みれ子

世の事のきこえぬ山のふもとにて御旗なびきて年祝ふなり
●　三重　亀井露登子

朝日影波にうつりて和歌の浦昔ながらに鶴ぞあそべる
●　伊勢　松の操

なく鶴の聲もゆたかに新玉の年立にけり小山田の里
●　駿河　林すぎ子

あしたつの聲ものどかに聞ゆなり朝日まばゆき富士のみ山に
●　芝　藤なはな

しめはへし軒ばの松にあさ日さして勇ましきかなはつ鶴のこゑ
●　日本橋　行形よし子

白鶴の歩む姿を御園生の池の鏡にうつしけるかな
●　信州　齋藤しん子

ほがら〱あけゆく峯の松の音に山下庵年あらたなり
●　伊勢　ゆき子

あづさ弓長き春日もくれにけり小松が原に若菜つむまに
●　本郷　中村八千子

雪折の竹の下よりもえ出でゝ春知りがほの初若菜かな
●　豊前　伊津見ふさ子

ほの〲と眞砂子一里の小松原明けゆく空を田鶴の一つら
●　印旛郡　平田すゞ子

あたらしき年をむかへて山里も心ばかりは春めきにける
●　神戸　中村菊子

春なりてかへりし姉と三年振野邊の若草つみてける哉

●高砂の尾上の松の年ふりて八千代を歌ふとも鶴の聲　東京　保谷いれ子

●九重の千代田の宮の大庭に若鶴むれて舞ひおりにけり　長門　植村せい子

●思ふどち若菜つみつゝ遊ぶ子の袂にかろく春風ぞ吹く　本所　酒井鈴

●病む母の看護のひまを野に出でゝ摘む初若菜薬ともなれ　京都　西澤まつ子

●裳のすりゐのしろと若菜つむ衣の袖に梅の花散る　伊勢　本多ひろ子

●松山の朱の鳥居に夕日さして江の水あさく白き田鶴たつ　牛込　西江靜子

●ゆたかなるみのりをさめて新年をむこふもうれし山もとのさと　相州　池邊みれ子

●山里は道もみわかず白雲のつもれるうちに年立ちにけり　神戸　中村菊子

●都なるわがせのさだめいのりつゝひとり山家に年をほぐかな　長門　杉山きくの子

●霞晴れて朝日をうけし白鶴の一聲なきぬ高砂の松　熊本　松岡貞子

和歌兼題

名所春　（〆切一月十五日）

海邊眺望

初鶯　（披露二月五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

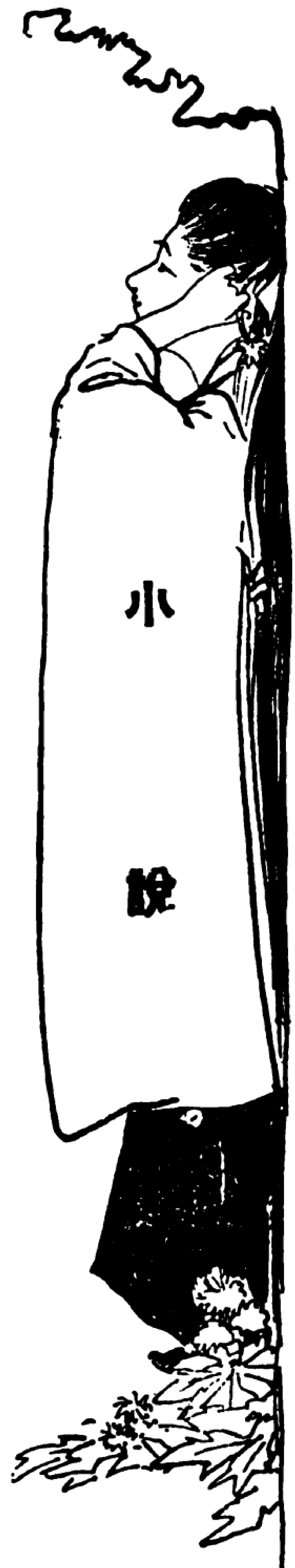
▲家庭日記

▲新體詩　（〆切一月十五日）

▲雜文

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は原紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙縒にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界させらるべし▲投書原稿一切返却せず



實生槭（上）

廣津柳浪

日光碓氷の紅葉、今を見外してはなぞ、新聞紙の記事に、坐ろに遊意を促されながらも、日々の俗務に心身ともに縛らるゝ果敢なさ、二日とは暇を得られぬので、あゝ、此秋も亦近郊に無名の勝地を探つて、せめてもの心床にしようと、漸く待ち得た日曜日を、午前は生憎來客に妨げられ、午後の一時と云ふに、僅かに牛込の我家を出る事を得た。それは、或年の十一月の七日、夕方までは外套も荷になりさうな、空の好く晴れた日であつた。

澁谷から目黒へと志したので、俥を驅つて新宿の停車場へ行くと、今しも滊車が出ようとする所、危く乘後るのを免かれて、ほッと息を吐いた。

四時それ〳〵の眺望はあるが、秋こそ最と勝れて、木と云ふ木、草と云ふ草、一葉一莖おのがじゝの色を染めて、畫筆執らぬ身にも、彼森を、此流をと、思ふ間に景色は變り行きて、なか〳〵に滊車の疾きも嬉しく、澁谷驛に着いたのも心付かなかつた。

驛夫の聲に車外へ下りて、二三歩踏出した時、今しも一輛先の車から下立ッた婦人、其横顔を見るより、能く似た人もと思つた。けれども、誰に似てるのであつたか、其誰なる者も、其時は思得なかつた。

婦人の形佳き丸髷、紺無地の吾妻外被の後姿の、特り勝れて見ゆるのに、私は目を離さず、軈て婦人を我右に見、後に見得るに到つた時、垂頭加減に歩んで居た婦人が不圖上げた顔に、私は眼と眼を見合せた。

婦人は生々と愛くるしい眼を見張つて、『あらッ、宇佐川さんでは居らッしやいませんか。』

『左樣です。貴女は……お丶、阿加名さんですか。』と私は果して知つた人で、而も以前は隣同士のと、奇遇に驚きながら、『先刻から何も見掛た人だとは思つたんですが、貴女とは思はなかつた。』

『左樣で居らッしやいませうとも。』と、お加名は昔ながらの下豐の頬に、ほんのりと笑靨を見せて、『まるで變ッて了つたんで御在ますもの。ほ丶ほ。』

『其樣事は無いですが……兎も角も構外へ出ませう。』

途端に我等を乘せて來た滊車は、靜かに動き初めた。見返ると、列車の窓の幾百の眼は二人の上に注がれて居た。

『御覽なさい、貴女と私と二人ぎりだ。はは丶丶丶。』

『あらッ、左樣ですわね。』

阿加名も其身の上に、驛員等が注視して居るのに氣付いたのか、赧めた顔を垂れて、疾いで私の後に從いて來た。叱咤もしかねまじき氣勢で、私等を待つて居た切符改の驛員は、追出しも爲たかの樣に、どうんと其戸を閉めたが、猶ほ此方を睨付けて居た。

阿加名は私が曾つて芝の琴平町に住んで居た時、隣家に呉服店を開いて居た上州屋勝山利兵衛と云ふ人の娘

で、兄が一人あつて、他に同胞は無かつた様に思ふ。私も其兄の利一とは同年で、小學から中學を卒業するまで、何時も同級ではあつたし、親密に交際つて居たから、其妹の阿加名とも、談話に遠慮をせぬほど懇親にして居た。私と彼等同胞との交際の絶えたのは、左様さ、其時から七年前、私が廿歳、阿加名は二歳劣の十八歳であつたと思ふ。

阿加名は何時見ても、万人に勝れた美人であるが、彼が十七八の時の美しさは、何時迄遇ッても忘れる事は出來ぬ、それは私ばかりではあるまい、琴平神社の縁日の夜なぞは、店に飾られた帯や友禅物の珍柄よりも、阿加名を見る爲に、何時も店の前に人は雲の如く、それも婦人が多かつたと云ッたらば、何位阿加名が美人として名高かつたが知れよう。

身代も店相應に太かつた様だし、娘は形の如き美人であるから、兩親も阿加名に傅かす夫は、官吏ならば局長以上、町家ならば十萬以上の、其も舊家でなければと望んで居たように、其頃聞及んで居たのである。兄の利一は其ほどにも思つて居なかつたようだが、阿加名は何であつたらうか、私が其隣家に住んで居た頃までは、一向色氣なぞは無かつた様だ、或ひは私ばかりが左様見て居たのかも知れぬけれども。

其翌年私は今尚ほ社員として職に務めて居る會社に入る事になり、次いで妻を迎へなどしたのであるが、私は妻とすべき婦人を探す爲めに、非常に奔走して與れた友人が、此に非常な美人があるけれども、何も其處に些と曰があるのでと話したのが阿加名が事であるから、私は大いに驚いた事があつた。

阿加名の兄の利一の友人で、私も中學校で知合であつた時山と云ふ男と、阿加名と何時か情を通じて居たものと見え、兄の口から兩親の耳に入つた時は、既に懐姙して居たさうで、兩親の驚愕は云ふばかりも無かつたが・世間へぱッとしては店の障と、時山とは手を切らせ、阿加名は田舎で産の紐を解かせて、二月ばかり前に

歸京させたと云ふのである。此は友人から聞得た處で、曰付でなければ、君が否と云つても、乃公が世話するのだが、實に殘念ぢやないかと、友人は更に云添へたのであつた。

私も斯と聞いた時には、實に口惜しい樣な氣がした。けれども、曰付を承知で、我妻に迎へようと迄、阿加名の容色に醉ふて居なかつたので、其儘に聞流して了つた事があつたが、其後六年、阿加名の噂をさへ聞かなかつたのに、今しも端なく其人に出會うたのである。

『宇佐川さん、』と、阿加名は後から私を呼掛け、歩を止めた私の顏を見て、莞爾しながら、『計らず御目に掛りましたので、何樣に嬉しう御在ませう。兄とは能く御噂を申上げましてね、御懐愛しく存じて居ましたのに……兄に逢ひました時に、御目に掛つた事を話して遣りましたら、何樣に喜ぶか知れませんよ。』

『何卒宜敷く御傳言を願ひます。御宅では、御兄さんは無論の事ですが、何方も御變も居らッしやらないでせうな。』

『はい、難有う御在ます。芝の方でも一同無事で御在ましてね、』と云掛けたが、ほゝと笑を漏して、『あのう、私はね、下谷の方に參つて居るので御在ますよ。』

『下谷に……左樣ですか。』と、私は阿加名の丸髷へ鳥渡眼を注いだ。

『御徒町の一町目で御在ますがね、北嶋喜一と御尋ね下さいますと、直きに知れますから、彼方角にお出でなさいましたら、御遊に御入來ッしやつて下さいまし。彼摩利支天樣を御存じて居らッしやいますでせう……彼前を突當りましてね、左に御屈りなさいますとね、直きに右側ですから、御序の節に御立寄を願ひます。』

『左樣ですか、北嶋さんの。何れ伺ひます。』

北嶋喜一と云ふのは、某貿易會社に聞こえたる敏腕家で、私は豫ねて其名を聞いて居たから、北嶋ほどの者

の妻に成つて居るとは、女は美しく生付く可きものだと思つた。

『貴方は、此御近所に御住居で居らッしやいますか。』

『いや、牛込の北町ですが、』

『左様ですか。では、今日は此御近所に、』

『左様です。郊外を散歩したいと存じたのでして、』

『御散歩、御羨しう御座んすわ。』と、阿加名は私の顔を凝乎と見て、『此邊へは度々入らッしやるんでせうね。』

『左様、度々と云ふのでもありません。』

『御存じて居らッしやるか知ら。』と、阿加名は小首を傾げて、『中澁谷の並木ッて云ふ處を、貴方御存じて居らッしやいますか。』

『中澁谷の並木。』と、私は並木と云ふ處は聞いた事も無いので、『左様ですな。中澁谷は此處ですが、並木……知りませんでしたな。』

『左様ですか。』と、阿加名は頼なげで、『並木と聞けば分るッて聞いて居たんですけども、』

『お待ちなさい、聞いて見て上げませう。』

私は茶店の小婢にも聞いて見た、俥夫にも人足にも四五の人へ問うて見たけれども、何れも知らぬと云ふのである。

阿加名は目に見ゆる迄力を落して、『知れませんかねえ。』

『左様です、困りましたな。』

『漸との思で、切角參つたんですけども、知れなきやア緣が無いんですわね。』と、伏目に成つた眼には涙含ん

で、他へ聞こゆるほどの太息を吐いた。

緣が無いんですわとの語は、私を妙に感せしめた。それと共に、彼の時山の事を思出したので、

「阿加名さん、處を聞いて知れないでも、御訪ねなさる人の名か苗字をお云ひでしたら、或ひは知つてる者が居るかも知れません。苗字は何と仰有るんですか。」

阿加名は私の問には答へないで、「並木と聞けば知れるッて云ッたんですけども、」と、考へながら、「並木ッて云ふ處は無いんだと見えますね。」

折柄通掛つた野良歸らしい農者が、阿加名の語を耳にしたのか振返つた。

私は農者の顏を見るより、「並木と云ふ處を知らんかね。」

「並木かね。」

「知つてお居でなの。」と、阿加名は早くも農者の前に立つた。

「左樣だね、並木ッて云ふ處の名は無えけんどね、此先の踏切を右に入るとね、櫻樹と楓樹の並木があるでがすよ。其道を並木ッて云ふ者もあるがね、誰でも呼ばる名で無えでがすよ。其處より他に、はア、並木ッて呼ばる處無えだがね、お前さまの聞かッしやる並木とは違ふかも知んねえね。」

阿加名は嬉しさに胸も躍る體で、「其並木ッて、此處から近いんですか。」

「近いの遠いのッて、」と、農者は目黑への線路を右へ越えた丘の方を指し、「あれ見さッせえ、彼處に眞紅に燒けた紅葉が見えるだね。」

私は焚るばかりの紅葉の梢頭が、丘の彼方の陰から僅かに見えるのを指し、「彼れかね。」

「左樣でがすよ。櫻花の頃も佳えけんど、紅葉の頃も佳えでがすよ。此處二三日が見頃だんべい。」

『左樣かい、有難う。では、何だね、彼丘の下の踏切を越えるんだね。』

農者は私の問に答へて、『左樣でがすよ。何でも取付の踏切を越えるだね。番人が片目だでね、片目を見たら越えさッしやるが可えだ。』

『お前さん、何も有難う御在ました。』

阿加名が謝辭を述ふ間に、農者はさッさと行ッて了つた。

『阿加名さん、好鹽梅でしたな。』

『ですけども、其並木が、私の尋ぬる並木ですか何ですか。』

『兎も角も行ッて御覧なさい。私も紅葉を探りに來たんですから、其並木まで御同道しませう。』

『はい。』とは答へたが、稍躊躇の色が動いた。

『私は並木まで御供をして、所處でお別に致したいので、まだ目黑の方へも廻りたいと思ふですから。』

『左樣で御在ますか。ぢやァ、其並木までお供を願ひます。貴方が御同伴だから、私何樣に心丈夫で御座んせう。』

私は阿加名の前に立ち、線路の柵に沿うて、彼踏切へ辿つたのである。

（下）

私等が踏切に達しようとした時、目黑驛からの滊車が進んで來た。阿加名は私と同伴であるのを、萬一列車の中に知人があつて見らるゝ事もやと恐れたのか、背向になつて立つて居た。

私は列車が過去つたので、

『阿加名さん、此踏切だと云ひましたな。』と、先に見た岡の蔭の紅葉をと仰視た。

「番人さんが居ますよ。」と、阿加名は小聲で。

「おゝ左樣でした。」

見れば、番人は尙ほ壯年の男でありながら、一眼盲ひた爲か風采揚がらず、色褪せた紺の小倉の服を着て、今しも番舍の中に入る處であつた。

「此處に違ひありません。」

私は阿加名に顏を見合せて、覺えず微笑みながら踏切を越えた。

阿加名は番舍を差覗いて、「鳥渡お尋ね申しますが、此路を參りますと、並木と申す處で御在ませうね。」

「何ですか知らんです。」

「あの、櫻樹と楓樹の並木が御座んすでせうかね。」

「行ッて見たら分るでせう。」

一眼の人には、美しき阿加名の顏も、何の効も無かつた。私は覺えず微笑んだ。

「一國な人ですこと。ほゝ。」と、阿加名も流石に微笑んで、私の傍近くへ來た。

踏切から件の小路へ入ると、俄かにうすら寒い風の頰に觸るを覺え、四邊忽ち暗うなりて、日もはや暮るかの心地が爲た。

仰視ると、幾株かの杉の大枝欹ひかゝり、丘と丘とは右左に迫つて、斯る處に、春は花、秋は紅葉の、雪と凝ひ錦と布く仙境があらうとは思はれなかつたので、私は我知らず歩を止めた。

阿加名は此淋しき境に催されたのか、太息を吐いたかと思ふと、「宇佐川さん、人の末ッてものは、何なるのか明日の事が知れないんですわねえ。琴平町に、貴方も居らッしやッた時分の事が、今になりましても思出さ

れましてね――彼時分の樣に樂い事は、もう／＼此以後、幾年過ッたッても、迚もありは致しませんよ。私なんぞは、何時でも左樣思ふんで御座ますよ。」と、指を折つて「此五年以來、一日だッても思出さない日ッて無かつたんですよ。」

私は阿加名の語の意味は充分了解したけれども、何か深い思があるので、其思の何であるかは察する事が出來なかつた。

「貴方にも、もう御子さんが居らッしやるんでせう。」

「左樣です。昨年迄に二兒の親になつて了つたです。はゝは。」

「御兒さんが御二人、まあ。」と、阿加名は熱心に私の顏を見て、「御二人とも、御手元に居らッしやるんでせうね。」

私は知れた事をと思ひながら、「さうです、妻の手に育てさせて居るのです。」

「まア、御羨しい。」と、阿加名はほろりと涙を溢した。

おゝ、左樣であつた。阿加名にも子があつたものを――田舍で產の紐を解いたとは、曾て聞いて居たが、其子の事を私の兒に思寄せて、斯くは心を傷めるのかと思ふと、如何にも氣の毒になつて、何とか慰めたいと氣付いたけれども、彼方の包んで居る秘密ではないかと、旣に開かうとした口を噤んだ。

「御兒さまも御母さまも、實に御仕合で居らッしやいますわね。」

「なに貴女、自分の子を自分が育て、自分の親に自分が育てられるのではありませんか。仕合も何もあッたものぢやないです。妻なんぞは、二兒になつて弱り切つて居る位です。はゝは。」

「まア勿體ない。」と、阿加名は涙を拭いて、「私なんぞは……なにね、私なんぞは、自分には覺がありませんけ

ども、世間にはね、種々な事情がありましてね……泣いても足りない苦勞をして居る親もあるので御在ますよ貴方の御新造さまが、實に御美しう御在ます。』と、今は啜泣に泣出したのである。

『阿加名さん、貴女は酷く神經を傷めてお居での樣だ。人が來たら怪しむでせう。氣を御鎭めなさい。阿加名さん、何したと云ふのです。些し歩いたら何です。』

私は其子を懷うて泣く人の心を、さこそと思遣つて、何とか和めようと勉めたけれども、其甲斐が無かつた阿加名は尙ほ泣きながら『嘸ぞ失禮な女だとお思ひなさいますでせうね。何して此樣に悲しいんです、自分にも可笑い樣でね、貴方。私、此樣事なんぞ、本統に何したんでせうか知ら……御羞かしう御座んすわ。』と、手巾を其顏に被うた。

『まア些とお歩きになるが可いのです。』

自分は斯う云ながら彼方を見ると、何時か歩を移して居たらしく、一條の小徑の通ずる處、左右には楓樹の並木、夕陽は其梢頭に夕榮の焚るばかり色濃く、樹身の半以下は西に丘續の、既や暮色に包まれ去るのか、一樹一枝の間に明暗色を殊にして、覺えず快哉を呼びたい程であつた。

『並木です、並木が見えました。』

私の聲が高かつたので、阿加名は手巾から顏を上げて『えッ、並木で御在ますッて。』

『左樣です。御覽なさい、紅葉の墜道を見る樣ぢやありませんか。』

『全くですわ、奇麗で御座んすこと。』

私は阿加名を見返ると、其頰には淚の痕を見せながらも、眼前の好風光に心を奪はれて眺入つた風情、私は其時ほど阿加名の美しさに撃たれた事は無く、今になつても彼時の事を思出す每に、恍惚として其風姿を思浮

かめるのである。

『此處が並木と云ふ處でせうかねえ。』

『左樣だらうと思ひます。』

私は阿加名と共に左右を見廻すと、右は丘、左は緩き傾斜をもつて低くなり行き、杉の苗木畑の一角から路は分れて、二三軒の草の家が彼方に見えて居た。

阿加名は草の家を凝乎と見ながら『私は彼家へ參りまして、尋ねて見たいと思ひますわ。』

『左樣、さうなさい。私は失禮ですが』と、帽子を脫つて、『此處でお別れと致し、彼並木をずッと先まで行ッて見たいと思ひます。』

『左樣で居らッしやいますか。御殘惜しう御座んすけども、』と、阿加名は賴なさうに、

『御目には懸りませんが、御新造樣へ宜敷く御傳言ッて下さいますように。』

『申聞けます。利一さんへ御逢ひの節に、』

『はい。御目に懸つた事を話しましたら、兄も何樣にか喜びませう。』

『失禮致します。』

『御名殘惜しう御座んすこと。』と、阿加名はまた淚含んで居た。

私は際限が無いと思つたので、帽子を被つて、『御氣をお付けなさい。』

『御機嫌よろしう。』

苗木畑の一角で、私と阿加名とは路の導くまゝに手を分つた。苗木は二尺とは伸て居ないので、阿加名が彼草の家へと辿る姿が、見やうと思はねでも見える。品よき丸髷形よき吾妻コートが、此陰鬱な木陰と彼草の家

とに、何となく對照の妙を覺ゆるのに、色白き中高の横顔に、稍憂の色を帶ひて、覺束なく歩みを移すさまが美しい中に淋味のある、何時までも忘られぬ風情と思つた。

農者が敎へた通、櫻樹槭樹〳〵と左右を圍んだ路は、遠く彼方へと續いて居る。飽まで日光を受けた枝は、今を命と色深く染めなし、木蔭なるは尙ほ綠濃く、境なるは色淺くして、濃き淡きとり〴〵の色の美しさ、彼も妙此も妙と、私は進むでもなく退るでもなく、眼の指す方へと歩を運ぶのであつた。

此路を今一間廣くし、右に人の丈よりも高く低く續ける岡を、路の下に見、左に低く打開き東は森に限られた地の中央に、一道の清流淺く碧の色を曳きたらんには、錦織出す龍田の川を武藏野に眺めんものをなど思ひながら、尙ほ梢頭の色に憧れて居た。



低い足音を、我脚下に聞いた時、不圖見下すと、五六歳位の一人の少女が、私の外套の袖に觸れなんばかり、ちよこ〳〵と來掛つて、不思議

さうに、私の顔を見上げた。

私も凝乎と其少女の顔を見下したが、何故とは知らぬけれども、妙に胸が騒いで、阿加名が此處に居たらばと見返つた。けれども、阿加名と別れた彼木蔭は、既に遠く後に去りて、遙かに深い深い墜道を望むが如く、別けて濃く染められた一本の樅樹が、暗くして底なきかとも疑がはるゝ其入口に强い色を投げて居るのが、畫にしたならばと思はれたので、勿論阿加名は見えず、彼少女の伴らしき者も其邊には見えなかつた。

私はまた其少女を見下すと、彼は其無邪氣な顔を轉じて、私が今しも通つて來た方へ去らうとした。



「ちよいと〳〵、お前一人かね。」と、少女の方へ一歩進んだ。

少女はまた歩を止めて、「あゝ左樣なのよ。」

「左樣、行くとこなの、歸るとこなの。」

「歸るとこよ。」

「何處へ行ッたの。」

「何處へも行かないの。」と、少女は其小さく握つた拳を見た。

氣付いて見ると、少女の手には實生の棫の、丈二寸とは伸ぬながらも、時知り顔に紅葉したのを、四五本握つて居た。

「好い物を持つてるのね。」

少女は嬉し氣に笑むで、凝乎と手中の棫を見た。

私は少女が笑むだ刹那に、能く似て居るぢやないか――阿加名の幼い時の顔に、今笑んだ時の顔が能く似て居る樣に思つた。

「お前、其の實生を何するの。」

「阿母ちやんに見ちえるのよ。」

「阿母ちやんに……阿母ちやん嬉しいだらうね。」

少女はにこ〱と打笑むだ。

「お前の名は何とお云ひなの。」

「時ちやんてのよ。」

「時ちやんかい。おゝ佳い名だね。歲、いくつ。」

少女は右の手を開いて見せて、「こえだけなの。」

「五歲なんだね、お前佳い子ね。」

少女は私の顏を親しげに見上げたが、『私、歸るわ。』
『左樣なら。』
『左樣なら。』
赤糸の亂立縞の、地は双子の、其も古びた布子に、緋金巾の附紐を結下げた後姿、ちよこ〳〵遠かり行くのを、私は凝乎と見送つたが、何云ふものか別れともない程可愛いので、少時は尙ほ佇立んで居た。
『何處の子か知ら、可愛い子だ。』
私は覺えず呟いて、家と云つては彼の暗き木蔭の傍に、二三の草の家のみである。見るからいぶせき彼の草の家から、彼樣可愛らしい兒が生れ出るものか。此邊には勿體ないほど佳い兒だのに……左樣だ、阿加名は彼草の家に入つて行つたが、尋ねる人とやらの家が知れたらうか、知れなかつたら、彼處を出て、此並木に來さうなものである。今までも其姿が見えぬのを思へば、尋ねる人とやらの家が、彼草の家の一つであつたかも知れぬ。それならば、まだ彼處に居るかも知れぬが……あゝ、彼の可愛い兒は、もう彼樣に遠く行ッて了つた。何して斯う懷かしい兒だらう。何樣家の子なれば、如彼も可愛くは生れたのであらうか……私は斯思ふ中に、何時か足は其子の後を追うて居た。
私が時ちやんの後を追うて、彼奧深く暗き木蔭の墜道の入口に達した時、お時はもう其中に吸込まるゝ樣に入つて、杉の苗木畑の此方を斜に、草の家の方へと歩んで行く。
時ちやん〳〵と、私が呼掛けようとした時、早くも彼方に聲が聞こえた、其は阿加名の聲である。
『お前さん時ちやんぢやないかい。』
時ちやんは阿加名が草の家の間から出て來て、其上半身に日光を浴びた美しさに、見恍れもしたらうし、珍

らしいとも思つたらうし、歩を止めて凝平と阿加名を見て居た。
阿加名は私の姿は未だ認めなかつたのか。時ちやんの方へ、一歩二歩と近付きながら、『お前さん時ちやんだらう。ね、左様だらう。それとも。』と、凝平と見下して、『違つて。え、ヽヽお前さん時ちやんだらう。ね、左様だらう。』
時ちやんは尚ほ凝平と阿加名を見上げて居るばかりだ。
『ね、左様だらう。』
阿加名は時ちやんの答を待つのもヽどかしい様子で、
『さア、御抱かりなさい。』
時ちやんは阿加名の爲るようになつて、其腕に抱上げられた。
阿加名は時ちやんを抱上げた時、俄かに他見を憚るかの様に、四邊を見廻した。私は見られぬ方が、顔を合せぬ方が、阿加名の爲に都合が好からうとは氣付いたが、既に後れて、阿加名は早くも私を認めた。
阿加名は私が左まで遠くは離れぬ處に立つて居たのに氣付いた時、非常に驚いた體で、目に見えるまで狼狽して、時ちやんを下へ卸さうとした。
私は早くも聲を掛けて、『非常に可愛い兒ですね、誰でも抱上げずには居られません、私も既に抱いて見たいと思つた位ですもの。』
阿加名は赧めた顔に頰笑みながら、『私、子煩惱だものですから、此位の子供さんを見ますとね、放擲ッては置けませんの。』
『左様でせうとも、私の様な男でも左様思ひますもの。』と、私は阿加名に近付いて、『御尋ねなさる人は御分り

でしたか。』

『はい、あの、其の何ださうで御在ます。』と、阿加名はどぎまぎしながら、『もう何處かへ轉居したさうでしてね、其轉居地も分りませんのです。』

『左樣でしたか、御氣の毒でしたな。』

『何も仕方が御在ませんわ、其人は居ませんでも、訪ねて參つた志さへ立ちますとね。』

『大きに左樣です。併し、殘念なものです、誰も覺がありますが。』

阿加名は私と談話を續けながらも、其眼は時ちやんを放れず、可愛さに心が溶て了いさうに見受けられた。

『其御子は、』と、私は草の家の一つを見返つて、『彼家のですか。』

阿加名ははツと思つた體で、伏目になりながら、『何で御在ますか……でも、餘り可愛う御座んすから、』と、時ちやんを抱締めて、『ねえ、可愛んだものね。』

前に時ちやんと呼掛けた事は忘れたかの樣に、唯可愛いからと云ふのである。

私は阿加名が尋ねたかつたのは、此時ちやんだと云ふ事を、此に到つて充分確め得たのである。で、私が何時までも此處に在るのは、阿加名の爲に不便であらうと察したので、

『阿加名さん、私は失禮します。』

『左樣で御在ますか。』と、阿加名は一旦斯う答へたが、何と思つたのか、『貴方、まア御宜敷いではありませんか。御茶でも貴方、私も今ね、餘り喉が乾いて仕樣がありませんから、今御茶を入れて貰つたのですよ。貴方も如何で居らッしやいます。お茶一碗上がる位は、まだ御宜敷いんで御在ませう。』

私は阿加名に曳留めらるゝ儘に、云ふ迄も無く喉を潤す物は欲しかつたし、次には好奇心――此場合好奇な

ぞとは云はれぬかも知れぬが――にも催されて、彼草の家の一つに導かれた。

草の家は全くの百姓家で、軒は傾き床は低く、疊の表は琉球の、赭黑いまでに古びて、圍爐裡には粗朶の煙が低く家外に靡いて、一入家の中を暗くして居た。

『時ちゃん好えだね、御新造さアに懐ッこして。』と、三十近い、色の黒い、鼻の低い顏のしやくれた、而も眼付の好人物らしい女が、家の中から出て來ると共に聲を掛けた。

此女が時ちゃんの母親で無い事は、一目見ても直ぐに知れるのだけれども、時ちゃんは彼の實生の楓を差出して、

『阿母ちゃん、こえ。』

『また取つて來たッね、また植ゑとくが可えだよ。』

『うむ。』と、時ちゃんは首肯いて、阿加名の腕から下りようと、體を動かし、足を打振つた。

『まア、じッと、してお居でなさい。』と、阿加名は尚ほ堅く懐締めた。

『貴女、御召物汚してはなりましねえに、』

『なアにね、』と、阿加名は尚ほ放さず、『時ちゃん……時ちゃんだわね。ほゝほゝゝ。本統に可愛くお成りだこと、其楓の實生をね、阿母ちゃんへ御預けお爲でね、叔母ちゃんに今少時懐れて居て下さいよ。』

『時ちゃん・嬉しかんべいね、其様美い叔母ちゃんに懐こしてるだもの。ほゝほ。楓預つて置くだよ。』と、實生を受取つて、『植えて遣んべいね。』

女は實生楓を植えやうと、其處に一坪ばかりを花壇らしく、細い女竹を垣らしく廻らしたのに進寄つた。

私も女の後に尾いて行ッて見ると、花壇には見る可き物とてはなく、鷄頭華の萎れながらも紅葉の色深く

其根下には鳳仙花の莖のみを止めて、此さへ霜に染められて居た。外には時ちやんの手植らしい實生の槭が十本ばかり可愛げに植ゑられてあつた。

女が竹片もて土を掘つては、一本々々植ゑるのを、私は傍から低聲で、

『彼の御新造は、度々此處に御出でだらうね。』

『御新造さんで御座ますか。』

『叱ッ。』と、私は押へて、『初めてお入でだッたかね。』

女は點頭いて見せた。

『左樣かい。』と、私が見返ると、阿加名は時ちやんの頰へ我頰を押當て居た。

女も今度は低聲で『彼兒の母親の御親類の方だ云ッてね、今日初めて御座らしやッたでがす。』

『左樣かい。』

私はもう此上間はずとも、明かに事情を解し得たので、女の傍を放れながら、不圖右方を見返ると、前に其木の下に憧れた並木が、此地よりは一段高く、一帶の錦繡となつて、遠く彼方へ流れて居る。梢頭は日光を浴びて紅く、木下蔭は靄に包まれて暗く、左方も高き森の彼方へ續きて、一杯の日光を受けて木々の色は、黃に染みたる、尙ほ綠なる、霜に飽いた若木の白膠木の、低く萎れて一點紅なる、また捨難い好景である。これでこそ、今日の探勝の甲斐もあつたと、去りがてに佇立んで居た。

『宇佐川さん、お茶を食上りませむか。』

阿加名に聲を掛けられ振返ると、阿加名は彼家に腰を掛けて、時ちやんを其膝に載せて、此方を見て頰笑むで居た。

私は其傍へ行ッて、「其樣に御可愛んですか。」

阿加名は私の頬笑んだのが、其胸を刺すやうにでも思つたのか、顏色が變つた。が、直ぐに頬笑むで、

「私も此樣兒があつたらばと、ねえ宇佐川さん。」と、戯言らしく云ッた樣だッたが、急に絕へ難い程其情に激する處があつたのか、涙含んだかと思ふと垂頭いて、時ちやんの領の邊へぱら／＼と、手巾も間に合はなかつた。

「おゝ、冷めた。」と、時ちやんは領を縮めて、無邪氣な眼は叔母ちやんの顏を見返つた。

阿加名は何にも云はないで、淋しい笑を漏した。

私は左樣思つた、何時まで邪魔をするでもないと。私は邪魔をする意は無かつたが、先方では何程邪魔だつたか知れないのである。斯う氣付いては、一刻も猶豫す可きでないと思つて、直ぐに暇を告げた。

阿加名は殘惜しげに、「私も御供を致したいんですけども、貴方は目黒に御廻んなさるんですから、此で失禮致します。」

私は女へも時ちやんへも暇を告げた。時ちやんの可愛さには、私も胸が迫るやうな氣がした。

「では、失敬します。」

私は別を告げた、阿加名は時ちやんを懷上げて、女は其後から私を送つて來た。

不圖見ると、小さい土鉢に、今年の實生の楓が植えてある。好い紀念だと、私は女に請うた、女は快く諾して、此も時ちやんが採つて來たのだと云つた。

私は其土鉢を手にして、愈よ三人に別を告げた。時ちやんは其所謂る叔母さやんに敎へられて、私が踏切近く來るまで、伯父ちやん左樣なら／＼と呼んで居た。

時ちやんは全く可愛い子で、私は何時も彼時の事を思出しては彼樅の下の可愛い姿が目に見えるのである。

北島喜一氏が某銀行の上海支店詰となつてから、今年でもう三年になる。阿加名も彼時夫と共に赴任したと云ふ事である。紀念の實生樅は、二ツ三ツ小枝さへうつて、そろ／＼見られる様になつて來た。時ちやんも嘸ぞ段々可愛くなつて行く事であらう！

（そはり）

ダイヤモンド

米國は世界に於て、最も平民的にして、最も實利的なる國民と稱せらる、然るに米國女子殊に紐育に於ける女子が、寶石を有することの多き、開闢以來未曾有のことなり、紐育市に於ける寶石の輸入專業者のみにても三百人以上ありて、歐洲に出張して、寶石買入をなす商人に至りては、數ふべからざるほどなり、南亞弗利加のダイヤモンド採集人の如きも、年々增加して、六千人の多數に達したるも、主として米國女子の需要に應ずるためなりとぞ。この寶石は、以前米國に於て、單に宴會の裝飾として用ひられしに過ぎざりしが、今日に至りては、日常の裝飾品として使用せられ衣服にも、帽子にも、頭にも、腕にも、胸にも、腰にも、靴にも、使用するに至れり、此の如く盛に使用せらるゝを以て苟も富豪といはるゝものゝ、之に費やす價格は、たゞ驚くの外なし、今その中に就て二三を擧ぐれば、ウイリヤムアストア女は百五十萬弗の寶石を有しヤコブアスト女、コルテリウスヴァンダービルド女はともに百萬弗、ベルモント女、ウヰロンマツカイ女は、各々百萬弗、ブライドレイマンチン女は八十五萬弗、ベリーベルモント女、及びオルムワイルゾン女は八十萬弗づゝ、ジエムスプルデン女は七十五萬弗等にして、その他七十萬弗より、十萬弗以上のものに至りては、一一數ふべくもあらず、ヨハンヤコブ女の如きは、二個の寶冠を有し、その一はダイヤモンドのみにて裝飾し、五十萬弗以上のものにして、他の一つはダイヤモンド及びその他の種々の寶石を加へて裝飾し、三十萬弗以上のものなりといふ。

此の如く米國女子間にダイヤモンドの持て囃さるゝは、米國民として、不思議なる如しといへども、決して怪しむに足らず、つまり裝飾の進歩したる結果のみ、而して裝飾の進歩は、米國民が、裝飾なるものゝ必要なることを知りて、之を重んずるより起りしものにして、極めて開化したる現象なりといふべし、我邦人より見れば、意外の感なき能はざれども、國力充實したらんには決して驚くに足らぬものなり、是に由りて裝飾と實用との關係は、常に合一なるものにあらず、また全く背馳するものにもあらぬこと知るべし。

次號記事豫告

（第四卷第貳號二月五日發行）

▲婦人壓服論　本田増次郎
▲女子の新教育　塚本はま子
▲新家庭　巖谷小波
▲男女の配偶　水原翠香
▲貴婦人の嗜好　中村鈴子
▲家政二十四時　河西璞
▲世話女房　戸板關子
▲一日醫者　糸左近
▲羊の話（科學）　佐藤禮介
▲齒の衛生　久保田誠麿
▲家庭叢話　堀内新泉
▲生花金針　翁屋主人
▲米國大統領の少時（史傳）　松浦政泰
▲家庭夜話　佐藤鈎
▲祝言の聽　島田俊雄
▲東西花くらべ（史傳）　宮澤すみ子
▲梅日和（小說）　小栗楓葉

毎月五日發行

定價表	
一冊（紙數二百八頁）金	二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金	七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金	一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金	二圓八十錢

内 定刊數……十二冊
増刊四回三、六、九、十一月價格同一

郵稅	
一冊	二錢

廣告料		
二十四字詰一行半頁（卅二行）一頁（六十四行）		
特等	四十四錢　十四圓〇八錢	割引三十三圓
一等	三十六錢　十一圓五十二錢	割引二十七圓
二等	三十九錢（ママ）　九圓二十八錢	割引二十二圓
三等	二十九錢　九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢郵券相添申込あれ

不許複製

明治卅七年一月一日發行　第四卷第壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　合資會社博進社工場　東京小石川區久堅町百〇八番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番千十八番
二千六百二十番三千二百二十九番

謹賀新禧

恭賀新年

博文館編輯局

主幹 坪谷善四郎

巖谷小波
石橋思案
岩田烏山
石倉翠葉
長谷川天溪
濱田四郎
西村駿次
堀川利太郎
鳥谷部春汀
鹿野直司
片山春帆
勝間恒彥
武内桂舟
田山花袋
武田櫻桃
鷹野勇雄
根岸由太郎

永廻藤一郎
中川葦舟
中村重造
上村左川
大町桂月
山中古洞
松原廿三階堂
近藤賤男
國府犀東
江見水蔭
齋木菊雨
齋藤紫白
岸上質軒
木村小舟
宮川大壽
篠崎竹舟
（以上イロハ順）

博文館主 大橋新太郎
大橋進一

博文館營業部

支配人 羽田福太郎
副支配人 杉山常次郎
副支配人 内山正如
元方支配人 大野金太郎

事務員

野口竹次郎
上村恭三
堀野賢龍
里見謙吉
田中六藏
宗像仲吉
加野十次郎
來島茂三郎
松原濱之助
關謹平
金子督太郎

小峯正一
古賀豐策
細野佐藏
兒玉幡太郎
片山宇吉
有田利雄
永井泰
荒井芳太郎
淺沼滿次郎
番塲宗八
大谷濱次郎

權藤文雄
横田地巴
繁田郁藏
福澤市太郎
上村新之助
林彥之助
神保直藏
今井淳
長嶺幸吉

小林源三
今井玉三郎
富所三郎
猿賀四郎
磯岡鷲郎

伊藤和三郎
小瀧文治
小林久四郎
佐藤誠

（後付の一）

恭賀新年

東京市神田區錦町二丁目
合資會社 **博進社洋紙店**
電話本局特一六〇三番
電話本局二四一〇番

專務理事 山本留次

事務員

山本九兵　武藏吉次
富田新太郎　黑澤倉治
九里誠一　織田保次郎
富谷松三郎　横山幸七
金原要一郎　石井次郎
上原董司　奥山善作

大阪市東區瓦町二丁目
合資會社 **博進社大坂支店**
電話東特四四五番
電話東一五〇八番

支配人 中村孝吉

事務員

長沼恒次郎　大貫丑之助
松本作藏　山本瀧三郎
長谷川金之助　澤田宮三
岡村九十九　小林勝太郎

恭賀新年

東京市小石川區久堅町百〇八番地
合資會社 **博進社工場**
電話番町四六番

理事 大橋光吉
副支配人 水谷景長

事務員

佐藤憲斌　小笠原廣俊
谷俊三　富井龍二郎
大内德亮　加藤錦之助
高橋正信　中西榮二郎
市川七作　浦山鐸太郎
近山喜代三　稻波虎吉
小田内東藏　飯塚市郎治

技手

秋川研太郎　西郷勝
鈴木正臣

職工長

内山長吉　吉岡泰五郎
深見豐次郎　大崎福太郎
田中安藏　蛭沼武守
吉田平吉　岡野勇五郎
中尾中　岩佐登吉
多賀新太郎

十洲 男爵細川潤次郎先生序 赤堀又次郎君校訂

心學叢書

全部六冊
一冊大約三百頁
菊判大和綴
正價郵税未定

德川氏の中世、太平既に久しくして四民奢侈に長し、淫逸に流れ、道德殆んと地に墮つ、石田梅巖先生深く感する所あり、慨然として廻瀾の志を起し、心を知るとの學問の始たるを悟り、平易の話を以て其説を講せられき、所謂心學是れなり、手島堵庵、脇坂義堂、中澤道二、奥田頼翁、柴田鳩翁等の諸家相踵きて、其道を説き一世を感起し明治の今日に及ふ本館今回諸家の遺書を捜り、其名著を校訂して發行せんとす、其卷中には心學に關する諸種の密書を加へ傍訓を施し、句頭を正し、一讀趣味多く資益する所を全からしむ、希くは江湖諸彦其遺志を繼きて、後進の士を裨益せられんとを

近日發行

第壹編（一月發兌）

●賣卜先生安樂傳授
●賣卜先生糖俵
●齊家論……石田勸平著
●塵とり……手島宗義著
●里俗教談錢湯新話……伊藤單朴著

第貳編（二月發兌）

●民の繁業……虛白齋著
●松翁道話……八宮齋譯

以下第三編より逐次發行第六編に至りて完結すべし今や一世の人心復小康に傾き道念德操日に漸く微ならんとす今や本書刊行は全く無用の業にあらさるべし

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

（後付の三）

世界お伽噺

巖谷小波山人著。有名畫伯密畫

定價改正廣告

世界お伽噺は世界の快話珍談を集め最も面白く編述したる家庭唯一の好讀物にして幼少年子女の歡迎を博し候依て其價格は極めて低廉に子女の喝望に供し候爲め

△紙數七十頁内外……有名畫家の挿畫十數個

△石版彩色刷表紙……用紙極めて上質にして定價僅に一册金七錢

未曾有の低價を以て去卅二年一月創刊し今日に至り第五拾二編『鬼大名』迄刊行發賣致候得共物價追次の騰貴にて其仕上り元價定價以上と相成毎巻不尠損失有之候に付不得止金壹錢の直上げをなし

今卅七年一月より全部(壹百巻)毎巻改正定價金八錢

に改正仕候間事情御諒察の上倍舊の御購求希上候

新版編次

第五十一編 ●三筋の金髪

此書はトランスペール士人の口碑から抜きたるものにして面白きお伽噺なり

第五十二編 ●鬼大名

此書は獨逸に有名なる勇士の譚にして彼地にてはオペラにも演ぜられし程の面白き本なり

第五十三編 ●魔法學校

之れはデンマークのお伽譚にして金持ちの子と貧乏人の子が相伴ふて眞黒い學校を訪た譚

◎世界お伽噺は廣く世界の神話傳説を蒐輯したるものなり

◎世界お伽噺は全部小波山人が特得無邪氣の麗筆より成る

◎世界お伽噺は毎編新進畫家の精密木版畫十餘個を挿入す

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

(後付の四)

訂正三版

文學博士加藤弘之先生著

道徳法律進化の理

製本既成

明治三十三年第一版第二版を發兌せし以來多少の研究を積み大に増補改訂を施し且つ井上元良兩博士其他諸氏の批評に對し答辨するが爲めに百八十餘頁を増して今回第三版を發兌せり抑も著者の倫理主義が專ら一元、因果、唯物、經驗、巧利進化の諸主義に依據するものなるとは前版の讀者が既に知られたる所ならん本版に於ては更に之を明瞭になしたりと信ず而かも其當否は一に讀者判斷に要せんのみ若も大方の批評に接することもあらば幸甚なり

全壹册　洋裝紙數約四百二十頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

發兌元　博文館

大町桂月君著

青年訓

今の世學生の修養に資すべき言をなして、其よく適切なるは大町桂月先生の獨壇なり。其言至理に合し時弊に切にして直に人の肺腑を刺し、其文雄健にして趣味あり百誦厭かす、實にこれ學生に取りては木鐸なり指南車なり、頑夫をして廉ならしむべく懦夫をして起たしむべし

著者敬白

全壹册　洋裝袖珍　美本　正價廿八錢　郵稅四錢

發兌元　博文館

（後付の五）

文學博士坪内雄藏
秋濤居士長田忠一 序文

佛國文豪ユゴー作 尾崎紅葉譯述

小説 鐘樓守

全貳册洋裝頗美 美本
上巻正價金九拾錢郵税金八錢
下巻正價金壹圓、郵税金拾錢
美術原色版四葉挿入
ユゴー、紅葉氏肖像入

◎原名ノートル、ダーム、ド、パリー◎

これ十九世紀五大傑作中の一位にある一大雄篇にして嘗て歐米の文壇を震動せしめたるヴヰクトル、ユゴーが心血を濺いで筆にせる史的且つ情的小説にして原著者一代の大作と認めらるゝもの曩に紅葉山人畢世の譯筆を此大作に染め中途病魔の襲ふところとなりしと雖もなほ筆を絶たず稿成り將に剞劂に附せんとするに際して病やうやく革り終に本書の完成を見るに至らずして他界の人となりぬ嗚呼當代の文豪として世擧つて其長逝を悼みたる山人が最後になれる纖美流麗の文は則ち本書に其面影をとゞめたるなり敢て請ふ世間情あり涙あるの士は一本を座右に供せよ

發行所 東京牛込 早稻田大學出版部
發賣所 東京日本橋區本町三丁目 博文館

名家の遺著

故文學博士 高山林次郎先生遺稿

樗牛全集

全三册

洋装上製
クロース製
背皮金字入
正價郵税
毎卷不同

故文學博士高山林次郎先生が、吾邦文藝界の發達に貢献せしと甚た多きは世人の知る處なり。其肉體は龍華寺境内、冷なる土中に横はれりと雖、言や永遠の生命を有して輝く。茲に彼れが遺文を蒐集して、彼れが思想に接して靈の泉を汲まんとする者、はた彼れが事業を研究せんとする者の便宜を計る。第一卷の納むる所は、

日本美術史稿

の外に、審美的論文十數篇とす。美術史稿は、彼れが後日大成せんが爲めに稿本として作りたるものなれど、觀察評論の警拔なる、吾美術發展の跡を闡明して餘蘊なし。

卷頭……高山文學博士肖像挿入
第壹部……美學上の研究
第貳部……日本美術史稿
第壹章……總論
第貳章……奈良朝以前の美術
第參章……天平時代
第四章……平安朝時代

上卷

美術及美術史

（定價壹圓五十錢小包拾五錢）

高山博士著

● 近世美學 上製五十五錢郵税十錢 並製四十錢郵税八錢
● 論理學 上製五十五錢郵税十錢 並製四十錢郵税八錢
● 世界文明史 上製五十五錢郵税十錢 並製四十錢郵税八錢

● 時代管見 正價三十錢 郵税六錢
● 文藝評論 正價三十錢 郵税六錢
● 平相國 正價十五錢 郵税四錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

簿記書類新刊

神戸高等商業學校教授 東奭五郎君閲
長崎縣立師範學校敎諭 山下與之助君著

普通簿記教科書

全壹册

菊判洋裝背クロース紙二百餘頁
正價金三十錢
郵稅金六錢

現時我邦の師範學校及高等小學校等に授くる簿記は多く高等簿記に限れり高等小學校に於て會日用簿記の一部を授くるも其言一種の家計簿記なる學生及官吏の生活内部を示したるに過ぎずして未だ實業家の計算整理法を講ずるものあるを聞かず著者茲に見るあり商業簿記に商業家の生計簿記と農業家の生計簿記とを各部互に相關聯せしめんが爲め多年此事に傾意せり、師範學校の如きは他日小學兒童の指導者を養成する所なれば無論此題意により授くる所の方針を取らざるべからず故に本書は師範學校教科用并に高等小學校簿記參考用書に充てん爲め懇切に綿密に編纂せり讀ふ其眞價は一卷を得て御諒知あらんとを

東京高等商業學校教授 佐野善作君校閲
東京高等商業學校卒業 曾我部純一君著

最新 家計簿記

全壹册

菊判和裝本文四號活字紙數二百餘頁美本
正價郵稅未定

第一●帳簿　第二●簿記　第三●勘定科目　第四●豫算の編成　第五●誤謬訂正の方法　第六●決算　第七●帳簿記入の練習　第八●女學生の會計帳簿　第九●公債株券の手形　第十●預金

本書は高等小學校以上の女學校に於ける家計簿記の參考要書たらしむると同時に一般家族の主婦たる人々に家政を整理せしむるの目的を以てしたる故に説明懇到を極めたり讀者此書によりて練習せば其稗益する所大なり殊に佐野教授は嚴密なる校訂と注意を與へられたれば家政上片時も缺くべからざる要書なり

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の入）

（後付の一〇）

蠶業叢書

本邦古來扶桑國と稱し蠶桑の業を以て名なり宜あり歷朝能く奬勵に勉め人民亦孜々之れが發達を企圖するを其現今に至り已に輸出物金額の大半を占むるの盛況に達したる眞に偶然にあらざるに似たり然りと雖も蠶絲は獨り本邦の特有物產にあらず清國の多產伊佛の精良尙は我を凌いて餘裕あり去れは本邦の蠶業は將來益々進て之れが勃興を圖り之が改善を講せざれば彼の列强に對峙すべくもあらず然るに本邦未だ斯業に關し學識經驗共に幼稚の域を脫せず本館於是當代斯業界に於て錚々の聞ゐある農商務省蠶業講習所本科出身者數氏の新著を請ひ蠶業叢書の名を以て逐次之を刊行し汎く當業の士に頒ち斯業改善の良友たらんを期す

●第一編　蠶業通論
●第二編　生絲檢查論
●第三編　栽桑新論
●第四編　桑樹病害論
●第五編　蠶體解剖論
●第六編　殺蛹乾繭論
●第七編　蠶病論
●第八編　蠶業經濟論
●第九編　製絲新論
●第十編　多化蠶飼育論
●第十一編　養蠶新論
(續刊)
●第十二編　蠶體生理論

—(全部十二冊)—

正價　壹冊金參拾錢●六冊金壹圓七拾錢●全部十二冊前金參圓參拾錢　▲郵稅壹冊六錢宛

發兌元　博文館

通俗農藝文庫

農學博士横井時敬先生校閲
農學士井上正賀先生編著

第拾壹編

養雞篇

洋裝　全壹冊

第一回……卵の孵化

第二回……雞の飼養、雞の飼養、雞舍、雞の管理、養雞暦、肉用雞類、卵用雞類、卵肉兼用雞類、愛玩用雞類、雞の鑑識法、雞の疾病、割勢術、卵の貯藏、雞の飼料分拆表

第一編●農學初步
第二編●作物生理
第三編●作物病理
第四編●土壤編
第五編●肥料編
第六編●氣候編
第七編●作物栽培
第八編●園藝編
第九編●養畜編
第十編●養蠶編
●續刊第十二編　農業經濟編

裝幀　全部十二冊　洋裝並製　印刷鮮明　緯編堅牢　每編續切

正價　一冊二十錢　六冊一圓十錢　十二冊二圓十錢●郵税一冊四錢

發兌元　博文館

明治三十七年一月改正

博文館雜誌廣告料

誌名	活字	等級	一行	一段	半頁	二段	一頁
太陽（四六判二倍大）	五號活字十九字詰	特等・一等・二等・三等	一行：五十五錢、四十四錢、三十六錢	一段（卅八行）：二十圓九十錢、十六圓七十二錢、十三圓六十八錢	半頁（五十七行）：卅一圓卅五錢、廿五圓〇八錢、廿圓五十二錢	二段（七十六行）：四十一圓八十錢、卅三圓四十四錢、廿七圓卅六錢	一頁（百十四行）：金八十圓、金六十圓、金四十八圓、金四十圓
實業世界 太平洋（菊判二倍大）	五號活字廿二字詰	特等・一等・二等・三等	一行：二十七錢、二十二錢、十八錢	一段（四十七行）：十六圓、十二圓六十九錢、十圓卅四錢、八圓四十六錢	菊版二頁（七二行）：二十四圓、十九圓十七錢、十五圓六十二錢、十二圓七十八錢	二段（九十四行）：三十一圓、廿五圓三十八錢、廿圓六十八錢、十六圓九十二錢	一頁（百四十一行）：金四十五圓、金三十七圓、金三十圓、金二十五圓
文藝倶樂部・少年世界（菊判）	五號活字廿四字詰	特等・一等・二等・三等	一行：五十四錢、四十四錢、三十七錢		半頁（三十二行）：十七圓二十八錢、十四圓〇八錢、十一圓八十四錢		一頁（六十四行）：金四十圓、金卅三圓、金廿七圓、金廿三圓
女學世界（菊判）	五號活字廿四字詰	特等・一等・二等・三等	一行：四十四錢、三十六錢、二十九錢		半頁（三十二行）：十四圓〇八錢、十一圓五十二錢、九圓廿八錢		一頁（六十四行）：金三十三圓、金二十七圓、金二十二圓、金十八圓
中學世界（菊判）	五號活字廿四字詰	特等・一等・二等・三等	一行：三十四錢、二十七錢、二十三錢		半頁（三十二行）：十圓八十八錢、八圓六十四錢、七圓三十六錢		一頁（六十四行）：金二十六圓、金二十一圓、金十七圓、金十四圓
地方行政 公民之友（菊判）	五號活字廿四字詰	特等・一等・二等・三等	一行：二十一錢、十八錢、十五錢		半頁（三十二行）：六圓七十二錢、五圓七十六錢、四圓八十錢		一頁（六十四行）：金十六圓、金十三圓、金十一圓、金九圓
圖書世界（菊判）	五號活字廿四字詰	上等・並等	一行：二十錢、十四錢		半頁（三十二行）：六圓四十錢、四圓四十八錢		一頁（六十四行）：金十二圓、金八圓

博文館圖書雜誌御註文規定

◎博文館の販賣　圖書雜誌は本目錄に記載せる自版數千種及一手販賣の數種にして他所發行品の取次販賣は一切致し不申候

◎一般の御註文　必ず前金御送付の上御註文被下度添金なき御註文は一切送本不仕候▲市內の御註文は代金引替に配達取計ひ可申上候

◎御送金の方法　郵便爲替なれば受取局を東京本局とし受取人を東京日本橋區本町三丁目博文館と爲替券面へ指定相成度郵券代用御送金は必ず一割增に相限り申候內へ御明記被下度

◎御發信の注意　御註文の書簡は書名、編次、冊數、住所姓名等文字明瞭に御認の事▲事故の御照會は御送金の年月日書名、冊數、及新舊の御認の事▲御問合の御書面は必ず返信用郵券又往復端書にて御中越の事▲宛名は總て博文館小賣係と御認の事▲尙は未納不足稅等の信書は其儘御返送可仕候

普通郵便は途中紛失の憂ひ有之候に付封緘等充分御注意可被下候

◎御註文品の事故　御註文品、品切等の際は出來期日を豫報可仕尙最近增刷の見込なき圖書は他の類書に變更御承諾方御願可申上候▲總て返金は御斷り可申上內規に御座候

◎金額の受領　金壹圓以上の御註文には受領證を發送可仕候得共一圓以下は送本丈にて辨用候事御承知可被下候

◎館友の待遇　一時に金五圓以上御註文の方へは博文館々友證を呈し爾後三ヶ年間御註文品につき書籍は正價の一割引又雜誌、全書類に前金割引あるもの及び豫約減價のものの外に五分の割引を以て特待可仕候

◎圖書切符の發賣　贈答御進物用又は御賞與品等に最適當なる圖書切符發賣仕候御入用の方は金高の多少に不拘御望みの金高に調製仕り優美なる箱入となし差上可申候

改正郵便規則摘要一覽

◎郵便料

○郵便物の大さ制限 [illegible] 分厚迄

第三種 [illegible] 錢

第四種 [illegible] 錢

◎外國郵便

○清國韓國中本 [illegible] 限り內地同一とす [illegible] 錢

三十三匁迄の [illegible] 五百

概算（書籍は內地の二倍內外なり 雜誌は內地の六倍內外なり）

◎小包郵便

○小包郵便料は郵便物の量目及配達地の區別に從ひ左表の賃金を納むること

量目＼配達區別	內地	內地臺灣間	內地清國間韓國
二百匁迄	一〇錢	三〇錢	三〇錢
四百匁迄	一五	三五	三五
六百匁迄	二〇	四〇	四〇
九百匁迄	三〇	五〇	五〇
一貫二百匁迄	四〇	六〇	六〇
一貫五百匁迄	五〇	七〇	七〇

◎內地に於ける [illegible] 一 [illegible] 內は一貫五百匁迄……五錢

小包郵便物の目方は一個一貫 [illegible] 匁迄長さ [illegible] 尺二尺迄 但し巾及厚各五寸以內のものは長三尺迄差出すことを得

○代金引換小包の御註文は御斷り申候

明治卅七年定期刊行雑誌

太陽

毎月一日一回發行

第拾巻

年刊十二冊▲定期增刊年四回（定價同一）大判（四六判二倍大）紙數二百八十頁寫眞版アートペーパー四頁背通八枚▲本文中の寫眞版三十二頁を色刷とし寫眞版數十個挿入
◎壹冊正價金參拾錢……郵稅二錢
前金〔●四冊金壹圓拾五錢●八冊金貳圓貳拾錢●十六冊金四圓貳拾錢▲外に要郵稅〕

東洋唯一の大雑誌たる本誌は今や歐米諸國の雑誌界に雄飛す▲世界の大勢を悉知せむと欲する者は先づ本誌を繙かざるべからず▲偏狹の主義と事實に遠かれる空理は本誌の排斥する所なり▲時事論評欄には毎月の事件を公平に論斷し▲論評之評論には世界論壇の趨勢を簡單に紹介し▲人物月旦には毎號内外の名士が性格[illegible]▲論説、小説、歴史、地理、太陽雜俎、[illegible]の各欄には[illegible]大家の文を掲載す▲口繪十[illegible]に[illegible]風俗あり▲本文三十二頁には[illegible]の寫眞[illegible]を挿入す▲英文欄二十四頁には[illegible]の大勢を記す

實業世界 太平洋

毎月二日十五日二回發行

第貳巻

年刊二十四冊▲外に臨時增刊發行
最大判（菊判二倍大）紙數八拾頁
▲外ニ寫眞版四枚挿入
●壹冊正價金拾貳錢……郵稅壹錢五厘
前金〔●六冊金六拾八錢●十二冊金壹圓參拾五錢●廿四冊金貳圓六拾錢▲外に要郵稅〕

太平洋は實業界の良師友たる本邦唯一の大雑誌也、▲口繪四頁悉く珍奇天下稀に見る所▲論評には當代第一流名家の卓説訪問談時評等を掲げ▲時代人物欄には實業家の人物性行平生嗜好等を直寫し特に事業成功の事蹟を紹介す▲實業世界は本誌の獨得とする所農工商水産業に關する專門家の學説及實驗談を載せ▲實業要報の機敏なる營業實況の詳細なる交詢欄の親切にして雑錄欄の趣味津々たる本年の大飛躍正に諸君の喝采を博すべき者あらん

文藝倶樂部

毎月一日一回發行

第拾巻

年刊十二冊▲定期增刊年四回（定價同一）▲菊判三百廿頁▲木版摺錦繪一枚▲原色版一枚▲寫眞版アートペーパー四頁、背通寫眞八枚挿入
●壹冊正價金貳拾五錢…郵稅貳錢五厘
前金〔●四冊金九拾五錢●八冊金壹圓八拾錢●十六冊金參圓五拾錢▲外に要郵稅〕

文藝倶樂部が文藝雑誌中の重鎭たるや今更喋々を要せざるべし、而かも今春より更に改善の實を擧げ以て一大飛躍を致したる所以のものは蓋し社會の嗜好と文藝の潮流とに先んじて大に文界に貢獻する所あらんと欲すれば也、試みに[illegible]を開て本誌を見よ、當代文豪の傑作小説は云ふに及ばず、[illegible]會の風潮流行より東西古今の佳話[illegible]事及び諸名家の隨筆、雑錄、名人の[illegible]文藝に關するもの大綱羅せざるは無く[illegible]摺原色版寫眞等美術の醇粹を盡して[illegible]なし

(二)

明治卅七年定期刊行雜誌

少年世界

每月一回五日發行　第拾卷

年刊十二冊▲定期增刊年四回（定價同一）▲菊判、紙數百三十六頁▲石版色刷二頁大一枚▲寫眞版四枚挿入

◎壹冊正價金拾錢……郵税壹錢五厘

前金（◎四册金參拾八錢◎八册金七拾五錢◎拾六册金壹圓四拾錢▲外に要郵税

我が少年世界は、創刊以來十年の歲月を重ね、誌運益々隆盛になりましたから、愈々編輯上に改良を加へ、殊に學校と家庭との敎育上に密接な連絡をとることにいたしました。即ち新年初刊の分から、口繪には、極彩色の標本及風俗畵を加へ、記事には、漣山人が獨特の筆で、國定敎科書と聯關して、更に淸新な敎訓小話を書きその他の記事も、主として學校の各敎科目の補充となる面白い記事を掲げて家庭の爲になる少年衛生と各地の學事通信とを掲げ、これまでの各欄は益々記事を精撰して、大勉强をいたします。

中學世界

每月一回十日發行　第七卷

年刊十二冊▲定期增刊年四回（定價同一）▲菊判、紙數二百四十頁▲習畫帖四頁▲寫眞版光澤紙四頁、普通八枚挿入

◎壹冊正價金貳拾錢……郵税貳錢

前金（◎四册金七拾五錢◎八册金壹圓四拾五錢◎拾六册金貳圓八拾錢▲外に要郵税

中學世界は中學程度學生諸子の師友として、靑年雜誌界を濶歩し來れるは遍ねく世の認むる所、今や創刊第七年に入るに際し更に一大飛躍を行ふ、本誌每號二百四十頁、卷頭には和洋畵手本寫眞版十六頁を載せ、内容は有益趣味ある現時名流の寄稿を收め、中學校師範學校其他全程度の各種實業學校に在る者をして課程外に新知識を得せしむる一大機關たり、又本誌は每號懸賞を以て汎く靑年投書を募集す、學校に入る能はざる學生諸子も本誌を購讀せば中學程度の知識を修養するを得べし

女學世界

每月一回五日發行　第四卷

年刊十二冊▲定期增刊年四回（定價同一）▲菊判、紙數二百餘頁▲習字畫帖八頁（内二頁極彩色刷）▲寫眞版アートペーパー四頁、普通寫眞版四枚挿入

◎壹冊正價金貳拾錢……郵税貳錢

前金（◎四册金七拾五錢◎八册金壹圓四拾五錢◎拾六册金貳圓八拾錢▲外に要郵税

女學世界が我國雜誌界の女王として無上の勢位を占めつゝあるは今更喋々を要せず、去る三十四年の春、本誌が女子敎育の皷吹者として生れ出で、年を閲すること爰に四回、日未た淺きに拘らず頓に異數の發達を爲して今や每月數萬部を發刊するに至りたるは獨り本誌の喜のみならず一般女學界の進歩に依りて其兹に至りたるは實に賀すべきの事なりとす、されば此際一層改良と注意を加へて各欄を增設し記事を精撰し愈々女學界の開拓を圖り、學窓と家庭に對して貢献する所あらんとす

明治卅七年定期刊行雜誌

地方行政 公民之友

毎月一回十五日發行

第貳卷

年刊十二册▲外ニ臨時增刊發行
菊判、紙數百廿八頁▲寫眞版四枚挿入
◎壹册正價金拾錢……郵稅壹錢
前金〔◎三册貳拾八錢◎六册五拾五錢◎拾貳册壹圓〇五錢▲外に要郵稅〕

公民の友は地方人士の良師友にして、自治制の發達と制新との大抱負を以て生れたる二十世紀に於ける唯一の市町村雜誌たり、當代錚々たる第一流の學者實務家の新論卓說あり、各地方に於ける自治界礎の消息狀態は漏す所なく報道せられ、法令あり町村規約あり、行政司法の裁判例あり、以て其範を此中に得べく、史傳には人物の月旦あり、其事犀利公正に雜俎あり、娛樂の裏に實益を收むるを得べし。質疑應答あり、彙報あり、趣味實益併せ有せる好雜誌なり。

外務省通商局御編纂 通商彙纂

毎月六回三、八日發行

三十六年四月改刊

年刊七拾二册▲外增刊年六回（隔月一回）
▲大判（四六判ノ二倍大）紙數五十頁
◎正價定期刊行分一册九錢（郵稅不要）臨時增刊分一册拾八錢（館負擔）
前金〔◎半ケ年分增刊共參拾九册金參圓六拾錢◎一ケ年分增刊共七拾八册金七圓〕

通商彙纂は外務省通商局の編纂に係るものにして海外貿易商又は貿易品製造家の爲に不可缺案內記なり、政府は世界の各地に普く領事館を設置して斷へず各國の商況を報告せしめ之を集めて本誌を發行せられしも刊行回數充分ならずして報告其時を遲れ或は商機を誤るべきを遺憾とし昨年四月より大に發行度數を增し紙面に大刷新を加へ卷を改め更に第一號より發行し以て當業者の爲に眞の耳目たるを期し其發行を弊館に命せらる、毎號各國の市街港灣工場等の風景風俗寫眞を挿入し文章は力めて通俗にして趣味を多くし全國貿易家及貿易品製造家の爲に最良の機關となせり

圖書世界

大橋圖書館內　圖書世界社　發行
博文館……發賣
每月一回二十日發行

年刊十二册▲菊判　紙數三十二頁
外に總目錄其他百餘頁を添ふ
◎壹册正價金參錢……郵稅壹錢
◎十二册拾八錢◎二十四册卅錢◎外要郵稅

單に大橋圖書館に於ける機關雜誌たるのみならず現時我國圖書出版界の趨勢を察知し得べき便利なる報告雜誌にして我讀書界に缺くべからざる要誌なり一たび之を繙けば新刊圖書の內容及其定價發行所等を知る、物を囊に捜るが如し

定時刊行全書

理學士佐藤傳藏君、理學士山崎直方君　共著
齋藤文學士、吉田理學士、伊藤良造君　補輯
七種文學士、田山花袋君

大日本地誌

▲全部十冊
大刊、背皮上綴
紙數　約九百壹頁

全部綱目

第壹卷……關東
第貳卷……奥羽
第參卷……中部
第四卷……近畿
第五卷……北陸
第六卷……中國
第七卷……四國
第八卷……九州
第九卷……北海道
第拾卷……琉球及臺灣

各編分欄『地質、地形、沿革、行政、教育、軍事、宗教、產業、地方誌』とし毎編精密地圖の着色せし者及寫眞版數百個を入る

▲第一卷『關東』新刊發賣▼

相模、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、伊豆七島及小笠原島、

第壹卷＝關東

都市彩色地圖拾葉
寫眞銅版貳百餘圖

紙數九百卅頁
◉正價金貳圓五拾錢
◉小包送料金拾五錢

●總論

●第一編　地文

▲第一章　地形
◎相模◎武藏◎安房◎上總◎下總◎常陸◎上野◎下野

▲第二章　海岸線
（一）相模灣（二）東京灣
（三）大平洋沿岸（四）海洋並に海流並に潮

▲第三章　地質
（一）汎論（二）三波川系
（四）古生大統（四）中生大統
（五）新生大統（六）噴出岩
（七）溫泉

▲第四章　氣候

●第二編　人文

▲第一章　沿革
（一）先史時代
（二）太古より寧樂朝時代に至る
（三）平安朝時代
（四）鎌倉幕府時代
（五）南北朝時代
（六）後鎌倉の時代
（七）諸侯割據攻伐の時代
（八）織田豐臣氏の時代
（九）江戸幕府時代
（十）維新以後

▲第二　政治、宗教
（一）行政（二）司法
（三）軍事（四）教育
（五）宗教（六）交通

▲第三章　產業
一農業　二林業
三水產　四工業
五鑛業　六商業

●第三編　地方誌

東京府　伊豆七島小笠原島
一東京市一東京府下の小都邑
一伊豆七島一小笠原島
神奈川縣
一横濱市一其他の都邑
埼玉縣　群馬縣　千葉縣
茨城縣　栃木縣

帝國百科全書

▲全部二百冊
每月二回刊行
紙數一冊三百廿頁以上

特製（總クロース金字入）正價
◉一冊　金五拾五錢
◉十冊　五圓
◉廿五冊　拾貳圓
◉五十冊　貳拾參圓
◉百冊　四拾五圓
◉全部二百冊　八拾八圓
▲郵稅各拾錢宛

並製（洋裝大判並綴）正價
◉一冊　金四拾錢
◉十冊　參圓五拾錢
◉廿五冊　八圓七拾五錢
◉五十冊　拾七圓
◉百冊　參拾參圓
◉全部二百冊　六拾五圓
▲郵稅八錢宛

（既刊書目）

●第一編　世界文明史……文學博士　高山林次郎君著

●第五十二編　支那文明史……文學士　白河次郎君　國府種德君　高[illegible]君著
●第五十三編　畜產汎論……農學士
●第五十四編　畜產各論……農學士　田口晋吉君著
●第五十五編　森林保護學……林學士　新島善直君著
●第五十六編　國法學……法學士　岸崎昌君　故　中村[illegible]君著
●第五十七編　黴菌學……農學士　井上正賀君著
●第五十八編　船舶學……法學士　赤松梅吉君著
●第五十九編　應用化學……工學士　[illegible]屋貞與君著
●第六十編　星學……理學士　須藤傳次郎君著
●第六十一編　農用器具學……農學士　西村榮十郎君著
●第六十二編　新撰三角法……理學士　松村定次郎君著
●第六十三編　有機化學……理學士　龜高德平君著
●第六十四編　邦語獨逸文典……文學士　青木昌吉君著
●第六十五編　無機化學……理學士　眞島利行君著
●第六十六編　新撰微分積分學……理學士　松村定次郎君著
●第六十七編　世界宗教史……文學士　加藤玄智君著
●第六十八編　栽培各論……農學士　田中節三郎君著
●第六十九編　農業經濟學……農學博士　横井時敬君　農學士　澤村眞君著
●第七十編　經濟汎論……法學士　池袋秀太郎君著
●第七十一編　應用機械學……工學士　[illegible]見道之君著
●第七十二編　植物學新論……理學士　飯塚啓君著
●第七十三編　近世氣象學……理學士　岡田武松君著
●第七十四編　教育學……文學士　熊谷五郎君著
●第七十五編　農政學……農學士　石坂橘樹君著
●第七十六編　農藝化學……農學士　井上正賀君著

●第七十七編　新撰解析幾何學……理學士　松村定次郎君著
●第七十八編　日本文典上巻……文學士　岡田正美君著
●第七十九編　同　下巻　同　同
●第八十編　[illegible]及政黨論……法學士　菊池學而君著
●第八十一編　土地改良論……農學士　上野英三郎君著
●第八十二編　獨逸文章論……文學士　青木昌吉君著
●第八十三編　佛蘭西文典上巻……文學士　松井知時君著
●第八十四編　同　下巻　同　同
●第八十五編　東洋歷史……文學士　幸田成友君著
●第八十六編　行政裁判法論……法學士　小林魁郎君著
●第八十七編　行政法汎論……法學士　小原新三君著
●第八十八編　養蠶及製絲論……農學士　井上正賀君著
●第八十九編　心理學……文學士　造見　湜君著
●第九十編　銀行新論附外國爲替……法學士　野口弘毅君著
●第九十一編　行政法各論……法學士　小原新三君著
●第九十二編　家禽學……農學士　月田藤三郎君著
●第九十三編　支那哲學史……文學士　中内義一君著
●第九十四編　園藝通論……農學士　高橋久四郎君著
●第九十五編　衞生化學……仙臺醫學專門學校教授　須田勝三郎君著
▲一名飲食物及嗜好物日用品檢查法
●第九十六編　刑事訴訟法論……法學士　濱口孝雄君著
●第九十七・八編　新撰函數論（上下二册）……理學士　倉田龍雄君著
●第九十九編　保險通論……理學士　奧村英夫君著
●第百編　世界宗教制度論……法學士　工藤重義君著
●第百一編　日本文明史……文學士　大町芳衞君著

《帝國百科全書續刊》

●水產學……農學士塚本道遠君
●害蟲論……理學博士佐々木忠次郎君
●議院法論……法學士工藤重義君
●進化論……文學士十時彌君
●日本敎育制度……文學士玉木三郞君
●地震學……理學博士大森房吉君
●人類學……理學博士坪井正五郞君
●世界上世文學史……文學士上田敏君
●新刑法論……法學士島田鐵吉君
●普通物理學……理學士久茂榮君

醫學新書

洋裝大判洋布
上綴脊皮金字
入堅牢美本

《既刊書目》

醫科大學助手 醫學士石原弘君著 ●藥物學……正價金貳圓 小包送四百匁

前王子精神病院長門脇眞枝君著 醫學博士片山國嘉君閱 ●精神病學……正價金貳圓 小包送四百匁

醫科大學助手 醫學士石原弘君著 ●人體解剖學上卷……正價金參圓 郵稅拾四錢

《續刊》

醫科大學皮膚病黴毒科敎室助手 醫學士旭憲吉君(留學中)著 ●泌尿生殖器病學

醫科大學耳鼻咽喉科學敎室助手 醫學士久保猪之吉君著 ●鼻科學

醫科大學敎室助手 醫學士石原弘君著 ●人體解剖學下卷

醫科大學助敎授 醫學士高山正雄君著 ●法醫學

醫科大學助敎授 醫學博士三輪信太郞君著 ●小兒科學

工業叢書

每編洋布上綴
中判金文字入

《既刊書目》

海軍機關學校敎授 工學士市川俊雄君著 ●水及油……正價五拾錢 郵稅八錢

尾州瀨戶陶器學校長 黑田政憲君譯 ●陶器製造化學……正價六拾錢 郵稅八錢

工學士糸山幸吉君著 ●機關車……正價六拾錢 郵稅八錢

工學士村瀨英一君著 ●構造强弱學……正價六拾錢 郵稅八錢

工學士重宗彥熊君著 ●工場管理法……正價八拾錢 郵稅拾錢

工學士大島辰之助君著 ●電氣工學一斑……正價六拾五錢 郵稅八錢

工學士君島八郞君著 ●道路學一斑……正價六拾錢 郵稅八錢

工學士矢野道也君著 ●油類工業分析……正價五拾錢 郵稅六錢

工學士町原[illegible]君著 ●動力發生及分配……正價壹圓 郵稅拾貳錢

工學士根岸政一君著 ●瓦斯及石油機關……正價五拾五錢 郵稅八錢

農學士井上正賀君著 ●釀造法一斑……正價六拾錢 郵稅八錢

法學士佐藤[illegible]君 工學士河合[illegible]君合著 ●工業經濟……正價五拾五錢 郵稅八錢

工學士[illegible]君著 ●工業金屬材料學……正價六拾錢 郵稅八錢

商業叢書

工學士 河原一郎君著 ●染色法……正價壹圓 郵税拾貳錢
工學士久野末五郎君著 ●水理一斑……正價六拾錢 郵税八錢
工學士藝田衛太郎君著 ●硝子製造法……正價八拾錢 郵税拾錢
工學士 淺野幸作君著 ●アルミニユーム製造法……正價七拾錢 郵税拾錢
理學士 齋藤賢道君著 ●工業用植物纖維……正價五拾錢 郵税六錢
工學士 增田知遠君著 ●船用機關學……正價六拾錢 郵税八錢
工學士久野末五郎君著 ●實地土木工學……正價八拾五錢 郵税拾錢

（續刊）

工學士 町原駒君著 ●紡績一斑
工學士 重見道之君著 ●工業數學
工學士 藤井光藏君著 ●セメント、石灰、人造石製造法
工學士 寒川恒貞君著 ●發電機發動機
工學士石井鎚太郎君著 ●橋梁學
工學士 加藤成一君著 ●造船術
工學士 大見銘一君著 ●ペイント製造及檢查法
工學士野津正之助君著 ●計算尺原理及使用法

▲全部拾貳冊
●特製大判總クロース金字入
●並製大判洋裝

（既刊書目）

	正價	郵税
法學士後藤勇君著 ●シンジケート及トラスト……特製	六拾五錢	拾錢
並製	五拾錢	八錢
在大學院法學士 勝部國臣君著 ●實用手形法釋義……特製	四拾錢	八錢
並製	參拾錢	六錢

法學士 桐生政次君著 ●世界商工業史……特製六拾錢 郵税拾錢 並製四拾五錢 郵税八錢
白耳義商業學士 飯田旗郎君著 ●商業汎論……特製六拾五錢 郵税拾錢 並製五拾錢 郵税八錢
法學士 稻野鎗助君著 ●國際貿易論……特製六拾錢 郵税拾錢 並製四拾五錢 郵税八錢
法學士 勝部國臣君著 ●實用商業會話……（小判特製）正價參拾五錢 郵税四錢
法學士 二宮基成君著 ●經濟學通論……特製七拾五錢 郵税拾貳錢 並製六拾錢 郵税拾錢
大山五郎君 加藤武男君 共著 ●銀行法規及手形判決例……特製六拾五錢 郵税拾錢 並製五拾錢 郵税八錢
法學士 森山守次君著 ●歐米商業實勢……特製六拾錢 郵税八錢 並製五拾五錢 郵税八錢
理學士 藤田外次郎君著 ●商業數學……特製七拾錢 郵税拾錢 並製五拾五錢 郵税八錢
農商務省商品陳列舘長 佐藤顯理君著 ●貿易事情……特製八拾錢 郵税拾貳錢 並製六拾五錢 郵税拾錢

東洋通史

文學士（漢文學科專攻）久保天隨君著

▲全部拾貳冊
隔月壹冊發行
大判和本總紙數三千[illegible]

全部略目

●第壹卷 ●第貳卷 漢族發生時代（太古より春秋の終に至る 戰國より楚漢に至る）
●第參卷 ●第四卷 ●第五卷 漢族繁榮時代……（前漢 後漢三國 兩晉六朝 唐）
●第六卷 ●第七卷 ●第八卷 ●第九卷 蒙古優勢時代……（宋 遼金 蒙古）

（八）

●第拾卷
●第拾壹卷
●第拾貳卷 歐人東漸時代……明清 清 清

正價 ●壹冊金五拾錢 ●拾貳冊五圓 ●六冊貳圓七拾錢 ▲郵稅壹冊八錢宛

▲第五卷迄……製本既成發賣

大和田建樹君著

能の栞

正價 ●壹冊金四拾錢 ●全部貳圓廿錢 ●參冊壹圓拾五錢 ▲郵稅壹冊六錢宛

▲第六卷……一月上旬發行完成

▲全部六冊 隔月壹回發行 中判和綴 每編詳密能圖插入

石倉翠葉君編

各宗本山名所圖會

▲正價郵稅各編不同……七冊既成發賣

洋裝大判每編 寫眞版數拾葉及 密畫數十個插入 隔月壹回發行

受驗問答叢書

▲全部廿四冊 洋裝袖珍紙皮 金字入上製 每月一回發行

正價 ●壹冊金貳拾錢 ●拾貳冊金貳圓 △郵稅壹冊四錢宛 ●六冊壹圓拾錢 ●廿四冊參圓八拾錢

▲第廿一編「新撰農業事項問答」（志岐農學士編）迄既成發行

竹貫登代多君執筆

數學講義錄

正價 ●壹冊金拾錢 ●拾貳冊壹圓拾錢 ●六冊五拾七錢 △郵稅壹冊壹錢宛（遞信省認可）

●算術（全十二冊）……第八號十二月十五日發行
●代數學（全十二冊）……第八號十二月十五日發行
●幾何學（全十二冊）……第八號十二月十五日發行

參部共各拾貳冊宛ニテ完結 洋裝大判並製 每月十五日發行

蠶業叢書

正價 ●壹冊金參拾錢 ●拾貳冊參圓參拾錢 ●六冊壹圓七拾錢 △郵稅壹冊六錢宛

△第十一編「養蠶新論」迄既成發行

▲全部拾貳冊 洋裝大判並製

農學博士 橫井時敬君校閱
農學士 井上正賀君著

通俗農藝文庫

△全部拾貳冊 洋裝大判並製 每月壹回發行 每編木版數拾個入

歴史書類

▲日本歴史

◎通　史

- 東京帝國大學教授文學博士萩野由之君編　**大日本通史**　（全三冊…中下卷近刊）上卷背皮上製　大判一〇〇〇頁　正價壹圓五拾錢　小包送四百匁
- 法學博士有賀長雄君著　**帝國史略**　全一冊背皮上製　大判一〇三〇頁　正價壹圓五拾錢　小包送四百匁
- 落合直文君　池邊義象君共著　**新撰日本外史**　藤俗數名寄畫挿入　全一冊背皮上製　大判一一〇二頁　正價壹圓貳拾錢　小包送四百匁
- 文學博士萩野由之君著　**中學教育日本歴史**　沿革地圖挿入（文部省檢定濟）上下二冊背皮上製　中判六七五頁　正價各五拾五錢　郵税各八錢
- 文學士木寺柳次郎君著　**日本歴史**　▲特製本　洋布上製　正價五拾五錢　郵税拾錢　全一冊洋並製　大判三七六頁　正價四拾錢　郵税八錢
- 松井柏軒君著　**新撰大日本帝國史**　全一冊洋並製　大判五六四頁　正價四拾錢　郵税拾貳錢
- 文學博士栗田寛君校閲　增田于信君著　**新撰日本小歴史**　西洋木版畫挿入　全一冊洋並製　大判二一七頁　正價拾五錢　郵税六錢
- 足立栗園君著　**通俗日本歴史**　全一冊洋並製　大判三三四頁　正價貳拾五錢　郵税八錢

◎時代史

- 林道春先生　林春齋先生共著　**標記本朝通鑑**　（本箱入）木版上等和紙刷　全八十四册和綴　大判四五六二枚　正價拾壹圓　運送料五拾錢
- 學卿大橋穆君著　**明治新刻日本政記**　木版和紙刷　全十册和本上綴　中判八五〇枚　正價壹圓六拾錢　小包送四百匁
- 坪谷善四郎君著　**通俗明治歴史**　全一册洋並製　大判三五〇頁　正價貳拾五錢　郵税八錢
- 前東京帝國大學講師内藤耻叟君著　**徳川十五代史**　全十二册洋並製　大判二九五二頁　正價一册廿五錢　郵税一册六錢
- 岸上操君著　**通俗徳川十五代史**　全一册洋裝並製　大判三三四頁　賣價貳拾錢　郵税八錢
- 南梁小宮山綏介君著　**徳川太平記**　全二册洋布上製　大判九九六頁　正價各七拾五錢　小包送四百匁
- 鹽見文準君編輯　**頭書圖槩日本外史獨學講義**　全四册和紙銅刻　中判一六〇枚　正價五拾錢　郵税八錢
- 文學士笹川臨風君著　**元錄時勢粧**　全一册摸皮上製　小判二六〇頁　賣價貳拾錢　郵税六錢
- 川崎紫山君著　**增補西南戰史**　全一册洋布上製　大判一三五〇頁　賣價八拾錢　小包送六百匁
- 陸軍大將野津道貫君序　藤野房次郎君著　**平壤包圍攻擊**　寫眞版畫入　全一册洋布上製　大判七八二頁　正價七拾錢　郵税拾八錢
- 海軍大將伊東祐亨君題辭　平田勝馬君著　**黃海大海戰**　寫眞版畫入　全一册洋布上製　大判八三八頁　正價九拾錢　郵税貳拾錢

▲東洋歴史

文學士久保天隨君著　**東洋通史**　全部十二册割引前金五圓　第四卷迄刊行濟　全部十二册和綴　大判壹册三百頁　正價一册五拾錢　郵税一册八錢

文學士木寺柳次郎君著　**中等教育東洋歴史**　沿革地圖及挿畫入（文部省檢定濟）　全一册背皮上綴　大判二八八頁　正價八拾錢　郵税拾貳錢

文學士幸田成友君著　**東洋歴史**　全一册洋並綴　大判三二四頁　正價四拾錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上製　正價五拾五錢　郵税拾錢

文學博士三島中洲君校閲　山名善讓君訓點　**資治通鑑**　木版和紙刷本箱入　全七十册和上綴　美濃判五一三三枚　正價拾參圓　通運賃五拾錢

標註春秋左氏傳校本　全十五册和上綴　半紙和紙刷木版　正價貳圓貳拾錢　小包送六百匁

安藤安格先生校訂　**標註史記讀本**　和紙刷木版　全六册和上綴　半紙判一三三三枚　正價參圓　小包送六百匁

石川鴻齋君輯補　**史記評林**　全廿五册和裝　半紙判和紙刷　正價五圓五拾錢　小包送壹貫貳百匁

近藤瓶城先生評註　**萬國史標十八史略評註**　和紙木版刷　全七册和上綴　美濃判四三二枚　正價壹圓貳拾錢　郵税貳拾錢

矢土錦山先生編纂　**廿二史言行略**　全六册和紙木版　美濃判　枚　正價壹圓　郵税拾六錢

城井悔庵君講述　**史記列傳講義**　全三册洋並綴　中判一七四三頁　正價各貳拾五錢　郵税各八錢

太田淳軒君講述　**十八史略講義**　全二册洋並綴　中判八八六頁　正價各貳拾五錢　郵税各八錢

林省三君編輯　**鼇頭插畫十八史略字引大全**　全四册和紙銅刻　中判一七二枚　正價五拾錢　郵税八錢

柴田方榮君校閲　關德君編纂　**鼇頭圖畫十八史略字引大全**　全二册和紙銅刻　中判一一二枚　正價參拾錢　郵税六錢

平井脊堂君講述　**戰國策講義**　全二册洋並綴　中判八〇〇頁　正價各貳拾五錢　郵税各八錢

▲西洋歴史

文學士木寺柳次郎君著　**中等教育西洋歴史**　沿革地圖及挿畫入（文部省檢定濟）　全一册背皮上綴　大判二六六頁　正價七拾錢　郵税拾貳錢

文學士吉國藤吉君著　**西洋歴史**　全一册洋並綴　大判三四八頁　正價四拾錢　郵税八錢　▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

河上清君著　**通俗獨逸歴史**　全一册洋並綴　大判三三四頁　正價貳拾錢　郵税八錢

文學士白石眞君編著　**獨逸史**　全一册洋布上綴　大判五五五頁　正價壹圓廿五錢　郵税拾四錢

文學士阪本健一君著　**伊太利亞史**　全一册背皮上綴　大判四二〇頁　正價壹圓廿五錢　郵税拾貳錢

英國マッカアシー著　法學博士高田早苗外二君共譯　**英國今代史**　一名[illegible]之側字　全一册[illegible]上綴　大判一〇七六頁　正價貳圓參拾錢　小包送四百匁

法學博士高田早苗君校閲　山本利喜雄君著　**露西亞史**　[illegible]圖插入　全一册[illegible]　大判[illegible]〇[illegible]頁　正價[illegible]四拾五錢　郵税[illegible]錢

佛國ボリュー氏著　有賀長雄　鎌田榮吉[illegible]　**露西亞帝國**　全一册背皮上綴　大判九〇六頁　正價貳圓　郵税貳拾錢

▲世界歷史

米國シヤツトソン氏著　大内暢三君譯
●歐洲十九世紀史　全一册洋布上綴　大判 四一八頁　正價壹圓廿五錢　郵稅拾貳錢

文學士史學專攻阪本健一君著
●世界史　上卷　全二册　洋裝背皮上綴　大判一〇八〇頁　正價壹圓六拾錢　小包送四百匁

仝
●仝　下卷　洋裝背皮上綴　大判一四五四頁　正價貳圓　小包送六百匁

長谷川天溪君著
●通俗世界歷史　全一册洋並綴　大判 三三四頁　正價廿五錢　郵稅八錢

東京專門學校講師松平康國君著
●世界近世史　全一册洋布上綴　大判 四二〇頁　正價壹圓廿五錢　郵稅拾貳錢

文學士幸田成友君譯述
●十九世紀史　全一册洋布上綴　大判 四一〇頁　正價五拾錢　郵稅拾貳錢

▲歷史參考書

文學博士坪井九馬三君著
●史學研究法　全一册背皮上綴　大判 五四六頁　正價壹圓六拾錢　郵稅拾四錢

文學士大町桂月君著
●日本文明史　全一册洋並綴　大判 三〇二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

文學士阪本健一君著
●日本風俗史　全一册洋並綴　大判 三四二頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　寫眞挿入　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

文學士白河次郎、國府種德兩君共著
●支那文明史　全一册洋並綴　大判 三二六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

文學博士高山林次郎君著
●世界文明史　全一册洋並綴　大判 三七六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵稅拾錢

文學博士萩野由之君編述
●日本歷史評林　全一册洋布上綴　大判一九一二頁　正價壹圓八拾錢　小包送六百匁

文學博士萩野由之君編述
●中等教育日本歷史要解　全一册洋布上綴　中判 四二四頁　正價五拾錢　郵稅六錢

宮田修君著
●新撰日本歷史問答　全一册紙皮上綴　小判 二二八頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

松原岩五郎君著
●新撰東洋歷史問答　全一册紙皮上綴　小判 二三六頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

長谷川誠也君著
●新撰西洋歷史問答　全一册紙皮上綴　小判 二四〇頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

宮本元球君著
●常陸誌料關城繹史　全一册和裝大本　正價金參拾錢　郵稅四錢

同
●常陸誌料郡鄉考　全三册和裝大本　正價八拾錢　郵稅拾錢

傳記書類

▲日本人

法學博士阪谷芳郎君編
◉**青淵先生六十年史** ◎一名近世實業發達史
全二冊洋布上製 大判二二二〇頁 實價壹圓五拾錢 小包目方九百匁

高橋光威君著
◉貝島太助翁の成功談 **炭鑛王**
全一冊洋並製 大判一五八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

大橋乙羽君著
◉**藤俠實歷**
全一冊洋布上製 小判二四六頁 實價貳拾錢 郵稅六錢

紫瀾坂崎斌君著
◉**陸奥宗光**
全一冊洋布上製 大判三五六頁 實價貳拾五錢 郵稅八錢

幸德傳次郎君著
◉**兆民先生** 肖像寫眞版入
全一冊洋並製 大判一二六頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

文學博士高山林次郎君著 筒井年峯君畫
◉少年史譚 **平相國**
全一冊洋並製 大判一四二頁 正價拾五錢 郵稅四錢

國府犀東君著 武內桂舟君畫
◉少年史譚 **鎭西八郎**
全一冊洋並製 大判一三六頁 正價拾五錢 郵稅四錢

文學士中內蝶二君著 小堀鞆音君畫
◉少年史譚 **旭將軍**
全一冊洋並製 大判一三六頁 正價拾五錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著 水野年方君畫
◉少年史譚 **鬼吉川**
全一冊洋並製 大判一四四頁 正價拾五錢 郵稅四錢

松井柏軒君著
◉**上杉謙信**
全一冊紙皮上製 小判一三四頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

〔少年讀本〕

▲全部五拾冊大判洋裝並綴每冊密圖拾餘個挿入百參拾頁

▲正價一冊拾參錢……郵稅一冊四錢▼

- ◉第一編 高島秋帆……福地櫻痴君著
- ◉第二編 白河樂翁公……中村秋香君著
- ◉第三編 河井繼之助……戶川殘花君著
- ◉第四編 三條實美公……依田學海君著
- ◉第五編 曲亭馬琴……饗庭篁邨君著
- ◉第六編 井伊掃部頭……巖谷小波君著
- ◉第七編 山田長政……遲塚麗水君著
- ◉第八編 錢屋五兵衛……法學士桐生悠々君著
- ◉第九編 春日局……岸上質軒君著
- ◉第十編 水戶烈公……野口珂北君著
- ◉第十一編 桐野利秋……春山育次郎君著
- ◉第十二編 藤田東湖……大和田建樹君著
- ◉第十三編 伊能忠敬……幸田露伴君著
- ◉第十四編 新井白石……文學士武島羽衣君著
- ◉第十五編 水野越州……中島二葉君著
- ◉第十六編 池大雅……田山花袋君著
- ◉第十七編 木內宗吾……松原廿三階堂君著
- ◉第十八編 西鄉隆盛……川崎紫山君著
- ◉第十九編 坂本龍馬……阪崎紫瀾君著

●第二十編 横井小楠……大野酒竹君著
●第廿一編 貝原益軒……石原笠軒君著
●第廿二編 渡邊華山……渡邊霞亭君著
●第廿三編 中濱萬次郎……石井研堂君著
●第廿四編 近衛忠熙公……勢多章之君著
●第廿五編 間宮倫宗……文學士 笹川臨風君著
●第廿六編 周布政之助……堺枯川君著
●第廿七編 荻生徂徠……內田不知庵君著
●第廿八編 松平伊豆……法學士 森山吐虹君著
●第廿九編 中江藤樹……國府犀東君著
●第三十編 島津齊彬公……春山鶴峯君著
●第卅一編 高野長英……千河岸櫻所君著
●第卅二編 橋本左內……文學士 桐生悠々君著
●第卅三編 釋月性……千河岸櫻所君著
●第卅四編 平野國臣……文學士 白河鯉洋君著
●第卅五編 熊澤蕃山……文學士 幸田成友君著
●第卅六編 雲井龍雄……玉木椿園君著
●第卅七編 野中兼山……北村秀陽君著
●第卅八編 大鹽平八郎……猶紫山君著
●第卅九編 佐久間象山……塚原澁柿君著
●第四十編 小栗上野介……勢多章之君著
●第四十一編 阿部伊勢守……熊田葦城君著
●第四十二編 松尾芭蕉……國府犀東君著
●第四十三編 石川丈山……田岡嶺雲君著
●第四十四編 德川吉宗……草野正義君著
●第四十五編 烈女お藤……藤本藤陰君著
●第四十六編 林子平……松居眞玄君著
●第四十七編 塙檢校……長谷川天溪君著
●第四十八編 本居宣長……落合直文君著
●第四十九編 高田屋嘉兵衛……中村冷露君著
●第五十編 大槻磐水……大槻如電君著

▲海外人

●英雄末路 ナポレオン　文學士煙山專太郎君著
全一冊紙皮上製 中判 二六四頁 正價參拾錢 郵税六錢

●カーネギー　慶應義塾教授菅綠陸君著
全一冊紙皮上製 中判 一五四頁 正價貳拾五錢 郵税四錢

〔世界歷史譚〕

▲全部參拾六冊大判洋裝並綴密畫拾餘個挿入紙數每冊百四拾頁

▲正價一冊拾參錢 郵税一冊四錢宛▼

（全部書目）

●第一編 釋迦……文學博士 高山林次郎君著
●第二編 孔子……文學士 吉國藤吉君著
●第三編 耶蘇……文學士 上田敏君著
●第四編 ビスマーク……法學士 笹川潔君著
●第五編 ハンニバル……文學士 大町芳衛君著
●第六編 マホメット……文學士 坂本健一君著
●第七編 漢高祖……文學士 三浦菊太郎君著
●第八編 ネルソン……法學士 島田文之助君著
●第九編 岳飛……文學士 笹川種郎君著
●第十編 コロンブス……法學士 桐生政次君著

●第十一編　ガリバルヂー……法學士　岸崎　昌君著
●第十二編　彼得大帝……法學士　佐藤信安君著
●第十三編　華聖頓……文學士　關山義春君著
●第十四編　孔明……法學士　安藤儉明君著
●第十五編　ソクラテス……文學士　久保天隨君著
●第十六編　グラッドストン……法學士　近松宇太郎君著
●第十七編　歷山大王……文學士　幸田成友君著
●第十八編　王陽明……文學士　白河次郎君著
●第十九編　ガーフウ井ルド……文學士　酒井小太郎君著
●第二十編　デモステ子ス……文學士　十時彌君著
●第廿一編　ウ井リヤムセキスピーヤ……法學士　中村可雄君著
●第廿二編　ナポレオン……文學士　土井晚翠君著
●第廿三編　孟子……法學士　永井石峯君著
●第廿四編　成吉思汗……法學士　太田三郎君著
●第廿五編　クロンウエル……法學士　松岡國男君著
●第廿六編　ゴルドン將軍……法學士　赤松紫川君著
●第廿七編　グランド將軍……法學士　布施鱗太郎君著
●第廿八編　ウ井ルリントン……文學士　高木尙介君著
●第廿九編　クリスピー……法學士　名尾良辰君著
●第三十編　メッテルニッヒ……法學士　森山守次君著
●第卅一編　カピテンクック……法學士　谷野格君著
●第卅二編　ジャンダーク……文學士　中内義一君著
●第卅三編　シーザー……文學士　柳山清君著
●第卅四編　査列斯大王……法學士　中大路正雄君著
●第卅五編　フランクリン……文學士　熊谷五郎君著
●第卅六編　ニュートン……文學士　三好愛吉君著

▲列傳体

●高僧實傳(佛教各宗)　傳文館編輯局校訂　全一冊背皮上製 中判一〇五〇頁　正價六拾四錢 郵稅拾錢

●續高僧實傳(佛教各宗)　江見水蔭君校訂　全一冊背皮上製 中判一〇二〇頁　正價六拾四錢 郵稅拾錢

●近世百傑傳　千河岸貫一君編　全一冊紙皮上製 小判五六八頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

●續近世百傑傳　千河岸貫一君編　全一冊紙皮上製 小判四八八頁　實價貳拾五錢 郵稅六錢

●維新三傑　川崎村山君著　全一冊和裝上製 中判一三〇頁　正價拾貳錢 郵稅四錢

●遊俠傳　文學士笹川臨風君著　全一冊紙皮上製 小判二八八頁　實價拾錢 郵稅四錢

●三百諸侯　戸川殘花君著　全一冊洋布上製 大判　頁　正價壹圓貳拾錢 小包送六百匁

●近世世界十偉人　著名文學政治大家合著　全一冊紙皮上製 小判八八二頁　正價五拾錢 郵稅八錢

●東西二十四傑　著名文學政治大家合著　全一冊紙皮上製 小判五六二頁　正價參拾五錢 郵稅六錢

▲人物評論及逸話

太陽評論記者 鳥谷部春汀君著
●明治人物評論　全一册紙皮上綴 小判 四二三頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢

同
●續明治人物評論　全一册紙皮上綴 小判 四四八頁　正價參拾錢 郵稅六錢

同
●明治人物小觀　全一册紙皮上綴 中判 四二八頁　正價參拾八錢 郵稅八錢

勢多章之君編
●明治名家古人評論　全一册紙皮上綴 小判 二三四頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

伊藤侯、井上伯、山縣侯直話
●元勳談　全一册洋並綴 大判 二〇二頁　實價貳拾錢 郵稅六錢

鈴木光次郎君編
●明治豪傑譚　全一册紙皮上綴 小判 三八六頁　正價參拾錢 郵稅六錢

安藤紫陽君 箕輪焦獄君共編
●名士の父母　全一册洋並綴 中判 一五二頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

無何有道人編
●名士の平生　全一册紙皮上綴 小判 二四六頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

中央新聞社編纂
●名士の嗜好　全一册紙皮上綴 小判 三四六頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

大橋乙羽君著
●名流談海　全一册紙皮上綴 小判 二九〇頁　正價參拾錢 郵稅四錢

坪谷善四郎君編
●當代名流五十家訪問錄　全一册紙皮上綴 小判 四八〇頁　正價四拾錢 郵稅六錢

地理書類

▲日本地理

理學士山崎直方君 同佐藤傳藏君共著
●大日本地誌　全部拾册大判脊皮上綴 總紙數凡七千頁

全國を十部に分ち、其地形地勢より說き起して、歷史上の沿革、產業の盛衰、行政、司法、宗教、敎育、軍事、交通等に至る迄、精査細述、漏す所なし、蓋し本邦地理書中の巨擘たるを疑はず

第壹卷『關東』　大判九百參拾餘頁 地圖寫眞百餘頁挿入　正價貳圓五拾錢 小包送四百匁

理學士佐藤傳藏君著
●日本新地理　全一册洋並綴 大判 三一四頁　正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢 郵稅拾錢

大和田建樹君著
●通俗日本地理　全一册洋並綴 大判 二九六頁　正價參拾錢 郵稅八錢

上村左川君著
●新撰日本地理問答　全一册紙皮上綴 小判 二三八頁　正價貳拾錢 郵稅四錢

●日本名勝地誌　全十二册洋並綴 中判五一〇〇頁　正價一册參拾錢 郵稅一册八錢

◉第一編　畿內之部　◉第二編　東海道之部上
◉第三編　東海道之部下　◉第四編　東山道之部上
◉第五編　東山道之部下　◉第六編　山陽道之部
◉第七編　北陸、山陰道之部　◉第八編　南海道之部

◎第九編 北海道之部　◎第十編 西海道之部
◎第十一編 琉球之部　◎第十二編 臺灣之部

◎太陽紀念增刊 **海の日本** 全一冊洋並綴 大判太陽倍紙數 賣價參拾錢 郵稅六錢
▲特製本紙皮上綴 賣價四拾錢 郵稅七錢

▲海外地理

◎理學士佐藤傳藏君著 中等教育 **地理學教科書**（上卷日本ノ部）（下卷外國ノ部） 全二冊脊皮上綴 大判四二四頁 正價一冊五拾錢 郵稅一冊八錢

◎理學士佐藤傳藏君著 **萬國新地理** 全一冊洋並綴 大判三三八頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

◎澁江保君著 **通俗世界地理** 全一冊洋並綴 大判三四〇頁 正價參拾錢 郵稅八錢

◎武田櫻桃四郎君著 新撰 **世界地理問答** 全一冊紙皮上綴 大判二八二頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

◎西島長爾君著 實歷 **清國一班** 全一冊紙皮上綴 小判二五〇頁 賣價拾五錢 郵稅六錢

▲地學

◎理學博士横山又次郎君著 **地學概論** 全一冊洋布上綴 大判二七〇頁 正價九拾錢 郵稅拾錢

◎農學士志賀重昂君著 **地理學講義** 統計表數葉挿入 全一冊洋並綴 中判一六二頁 正價參拾五錢 郵稅四錢

◎峯是三郎君著 中等教育 **新編地文學** 全一冊洋並綴 中判四〇〇頁 正價五拾錢 郵稅八錢

◎理學士佐藤傳藏君著 **地質學** 全一冊洋並綴 大判三三六頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

◎農學士志賀重昂君著 **日本風景論** 密畫挿入 全一冊洋布上綴 大判二五八頁 正價九拾錢 郵稅拾貳錢

◎農學士志賀重昂君著 **河及湖澤** 密畫挿入 全一冊洋並綴 大判二二八頁 正價四拾錢 郵稅六錢

◎木村小舟君編 新撰 **地文天文問答** 全一冊紙皮上綴 小判二三六頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

▲地圖

◎理學士佐藤傳藏君著 中等教育 **日本地圖** 統計表及寫眞版三十二葉挿入 全一冊洋上綴 大判七〇頁 正價四拾五錢 郵稅八錢

◎理學士佐藤傳藏君著 中等教育 **萬國地圖** 統計表及寫眞版四十葉挿入 全一冊洋上綴 大判八〇頁 正價六拾錢 郵稅八錢

▲海内紀行及旅行案内

◎博文館編輯局主幹坪谷善四郎君著 **日本漫遊案内** 東部 府縣廳所在地銅版圖廿二頁、風景寫眞八十二圖、全國東半部彩色刷大地圖添附 洋布上綴紙美本 中判六四〇頁 正價壹圓 郵稅拾貳錢
▲西半部は近日中出版發賣の豫定なり

◎野崎左文君 田山花袋君共著 增訂 **漫遊案内** 全一冊洋布上綴 袖珍六二六頁 正價五拾錢 郵稅八錢

◎大橋乙羽君著 增補 **千山萬水** 寫眞版百數十個挿入 全一冊洋布上綴 小判七〇二頁 正價五拾錢 郵稅拾錢

續千山萬水　大橋乙羽君著　寫眞版百數十個挿入　全一册洋布上綴　小判六五〇頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

耶馬溪　大橋乙羽君著　彩色美麗寫眞版五十葉挿入　全一册洋布上綴　小判一五六頁　正價四拾錢　郵稅四錢

檜木笠　文學士久保天隨君著　全一册紙皮上綴　小判五〇〇頁　實價貳拾五錢　郵稅六錢

一簑一笠　大町桂月君著　寫眞版八葉挿入　全一册紙皮上綴　小判三七六頁　正價參拾錢　郵稅六錢

枕頭山水　幸田露伴君著　全一册洋並綴　中判二二四頁　正價拾五錢　郵稅四錢

南船北馬　田山花袋君著　寫眞銅版十六葉挿入　全一册紙皮上綴　小判五〇〇頁　正價四拾錢　郵稅六錢

續南船北馬　田山花袋君著　全一册紙皮上綴　小判五一六頁　實價貳拾五錢　郵稅六錢

紀行文集　大橋乙羽君編　密畫二十葉挿入　全一册背皮上綴　中判一〇〇六頁　正價六拾錢　郵稅拾四錢

續紀行文集　岸上質軒君編　全一册背皮上綴　中判一〇三四頁　正價六拾錢　郵稅拾四錢

續々紀行文集　岸上質軒君編　全一册背皮上綴　中判一〇〇六頁　正價六拾錢　郵稅拾四錢

旅行案内　大橋乙羽君著　彩色木版寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判二五六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

東北西南探涼案内　萬朝報探涼軍記者合著　密圖及寫眞版口繪挿入　全一册紙皮上綴　中判七一〇頁　實價參拾錢　郵稅拾錢

日本鐵道線路案内記　日本鐵道會社編纂　全一册洋並綴　中判五七六頁　正價四拾五錢　郵稅拾四錢

▲海外紀行及旅行案内

小波洋行土產　巖谷小波君著　寫眞版數葉挿入　全二册洋布上綴　中判新形八四〇頁　正價一册壹圓貳拾錢　郵稅一册拾貳錢

歐山米水　大橋乙羽君著　彩色美麗寫眞版及木版密畫數十葉挿入　全一册特別上綴　大判一七〇頁　正價壹圓五拾錢　郵稅八錢

歐米小觀　大橋乙羽君著　石版及寫眞版數多挿入　全一册洋布上綴　小判二六二頁　正價四拾錢　郵稅四錢

歐米漫遊雜記　鎌田榮吉君著　寫眞版挿入　全一册紙皮上綴　中判四二四頁　正價四拾五錢　郵稅六錢

大英國漫遊實記　水田榮雄君著　寫眞版挿入　全一册紙皮上綴　中判七〇〇頁　正價七拾錢　郵稅拾錢

米國漫遊雜記　松井廣吉君著　寫眞版十六枚挿入　全一册紙皮上綴　中判二八六頁　正價參拾八錢　郵稅六錢

米國渡航案内　飯島榮太郎君著　寫眞版挿入　全一册紙皮上綴　中判三七二頁　正價四拾錢　郵稅六錢

西伯利亞漫遊白山黑水　文學士石澤發身君著　寫眞版挿入　全一册紙皮上綴　中判三二六頁　實價貳拾七錢　郵稅六錢

支那漫遊燕山楚水　内藤湖南君著　寫眞版挿入　全一册紙皮上綴　中判三三八頁　實價貳拾七錢　郵稅六錢

▲名所圖會及地方風俗

本派本願寺名所圖會　石倉翠葉君著　寫眞銅版三十四葉入　全一册洋並綴　大判三九四頁　正價六拾錢　郵稅拾錢

●大谷派本願寺名所圖會　石倉翠葉君著　石版寫眞及寫眞銅版十六葉挿入　全一册洋並製　大判二二八頁　正價四拾錢　郵稅八錢

●佛光寺名所圖會　石倉翠葉君著　寫眞銅版十六葉挿入　全一册洋並製　大判一〇八頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●日蓮宗各本山名所圖會　石倉翠葉君著　寫眞銅版二十二葉挿入　全一册洋並製　大判三五六頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

●成田山名所圖會　石倉翠葉君著　寫眞銅版廿三葉挿入　全一册洋並製　大判一五八頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

●善光寺名所圖會　石倉翠葉君著　寫眞銅版廿葉挿入　全一册洋並製　大判二七六頁　正價四拾五錢　郵稅八錢

●日光名所圖會　石倉翠葉君著　寫眞銅版二十四葉挿入　全一册洋並製　大判五一〇頁　正價六拾五錢　郵稅拾貳錢

●江戶名所圖會　長谷川雪旦君畫　（和紙木版刷）　全廿册和上製　大判一一七三枚　正價五圓　小包送一貫三百匁

●江戶名所花曆　長谷川雪旦君畫　（和紙木版刷）　全四册和上製　美濃判一五六頁　正價四拾錢　郵稅六錢

●東都歲事記　長谷川雪旦君畫　（和紙木版刷）　全五册和上製　美濃判　正價六拾五錢　郵稅六錢

●木曾街道圖會　長谷川雪旦君畫　（和紙木版刷）　全二册和上製　中判　正價參拾錢　郵稅四錢

●諸國年中行事　博文館編輯局編纂　木版掛錦繪及寫眞銅版挿入　全一册洋並製　大判三二〇頁　正價貳拾五錢　郵稅貳錢五厘

農業書類

▲養蠶及製絲

●養蠶及製絲論　農學士井上正賀君著　▲特製本　洋布上製　全一册洋並製　大判三三八頁　正價四拾錢　郵稅八錢　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●養蠶と製絲　横山源之助君著　寫眞版挿入　全一册洋並製　大判二四〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●蠶業通論　農學士本多岩次郎君校閱　三谷徹君、池田榮太郎君共著　全一册洋並製　大判二五二頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●蠶業汎論　農學博士横井時敬君校閱　吉池慶正君著　全一册洋並製　中判二二四頁　正價拾五錢　郵稅四錢

●蠶業經濟論　梅田實也君著　全一册洋並製　大判二九二頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●蠶業篇　農學士高田鑑三君著　全一册洋並製　大判二一四頁　正價拾五錢　郵稅六錢

●養蠶篇　農學博士横井時敬君校閱　吉池慶正君著　上下二册洋並製　中判四五〇頁　正價各拾五錢　郵稅各四錢

●養蠶手引草　佐々木祿太郎君著　全一册洋並製　大判一八六頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●育蠶要錄　農商務省蠶業講習所技師富月國馬君著　全一册紙皮上製　小判三三八頁　實價貳拾錢　郵稅四錢

- 多化蠶飼育論　山田鳥次郎君・大森孫十郎君共著　全一冊洋裝　大判　三二二頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 蠶躰解剖論　松下憲三郎君著　木版銅圖數十個挿入　全一冊洋裝　大判　二三二頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 殺蛹乾繭論　谷鶴君著　全一冊洋裝　大判　二五〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 蠶病論　岩淵平介君著　全一冊洋裝　大判　二四六頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 桑樹栽培全書　農學士石渡繁胤君校閲　池田榮太郎君著　全一冊洋布上製　大判　七六八頁　正價壹圓廿五錢　郵稅拾八錢
- 栽桑篇　農學博士横井時敬君校閲　吉池慶正君著　全一冊洋裝　中判　二八〇頁　正價拾五錢　郵稅四錢
- 栽桑新論　池田榮太郎君著　全一冊洋裝　大判　二五〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 桑樹病害論　岩淵平介君著　全一冊洋裝　大判　二四五頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 製絲篇　農學博士横井時敬君校閲　吉池慶正君著　上下二冊洋裝　中判　五六〇頁　正價各拾五錢　郵稅各四錢
- 製絲新論　森正恒君・井上隆君共著　全一冊洋裝　大判　三一四頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 生絲檢查論　德川實也君著　全一冊洋裝　大判　二五〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢
- 養蠶新論　名川隆山君著　全一冊洋裝　大判　二二六頁　正價參拾錢　郵稅六錢

▲農產製造

- 農產製造篇　農學士今關常次郎君著　全一冊洋裝　大判　二五四頁　正價拾五錢　郵稅六錢
- 菜食篇　農學士大工原銀太郎君著　全一冊洋裝　中判　二八二頁　正價拾五錢　郵稅六錢
- 肉食篇　農學士辻幡太郎君著　全一冊洋裝　中判　三八二頁　正價拾五錢　郵稅六錢
- 飲料篇　農學士塚本又喜君著　全一冊洋裝　中判　三三六頁　正價拾五錢　郵稅六錢
- 味噌醬油篇　農學士西村榮十郎君編　全一冊洋裝　中判　三三〇頁　正價拾五錢　郵稅六錢
- 砂糖篇　農學士石井淳二郎君編　全一冊洋裝　中判　三六二頁　正價拾五錢　郵稅六錢

▲通俗農業書

- 増訂農學入門　合本　農學博士稻垣乙丙君著　全一冊和裝　大判　三七二頁　正價參拾五錢　郵稅八錢
- 仝（分本）卷一　和裝　大判　一一〇頁　正價拾壹錢　郵稅四錢
- 仝（分本）卷二　和裝　大判　一二一頁　正價拾貳錢　郵稅四錢
- 仝（分本）卷三　和裝　大判　一四二頁　正價拾五錢　郵稅四錢
- 農業讀本（文部省檢定濟）　農學博士横井時敬君著　上下二冊和裝　大判　一二五枚　正價各拾四錢　郵稅各四錢

茅原茂君著　寫眞版及彩色密畫挿入
農學博士橫井時敬君校閱
●農業大意
全一册洋並綴　大判二四二頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

通俗
農藝文庫
農學士井上正賀君著
▲全部拾貳册　洋裝大判並綴　每月壹回發行　每編木版數拾個入
▲正價壹册貳拾錢郵稅壹册四錢

〔既刊書目〕
第一編●農學初步編
第二編●作物生理編
第三編●作物病理編
第四編●土壤編
第五編●肥料編
〜〜〜〜
第六編●氣候編
第七編●作物栽培編
第八編●園藝編
第九編●養畜編
第十編●養蠶編

〔續刊〕
第十一編●養鷄編〜第十二編●農業經濟

福羽逸人君著
●果樹栽培全書
▲分賣正價卷ノ一參拾錢
全四册洋並綴　大判六七四頁　正價壹圓五錢　卷ノ二、三、四各貳拾五錢　郵稅各六錢

農學士恩田鐵彌君著
●實用苹果栽培書
全一册洋並綴　大判一三二頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

農學博士玉利喜造君校閱　川上喜兵衛君著
●葡萄栽培書
全一册洋並綴　大判二三六頁　實價參拾五錢　郵稅八錢

小□□□吉君著　寫眞版挿入
●果樹と蔬菜
全一册洋並綴　大判二五八頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

福羽逸人君著
●蔬菜栽培法
全一册洋並綴　大判五四〇頁　正價七拾錢　郵稅拾貳錢

工業書類

大橋乙羽君著　寫眞版挿入
●住居と園藝
全一册洋並綴　大判二五八頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

農學士東條秀介君校閱　東京農學園主江原春夢君著　石版色摺畫十三葉挿入
果樹草花盆栽庭造
●園藝全書
全一册洋並綴　大判四五二頁　正價六拾錢　郵稅八錢

同　寫眞銅版及木版密畫挿入
果樹草花盆栽庭造
●續園藝全書
全一册洋並綴　大判三五四頁　正價六拾錢　郵稅八錢

井上繁次郎君著
實用
●家屋改良建築法
全一册紙皮上綴　大判一五六頁　正價四拾錢　郵稅六錢

竹貫直次君著　寫眞密畫入
●造家と築庭
全一册洋並綴　大判二五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

工學士松永新之助君著　彩色木版寫眞版挿入
●化粧品製造法
全一册洋並綴　大判二五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

農學士石阪橘樹君著
●日用品製造法
全一册洋並綴　中判二八二頁　正價拾五錢　郵稅六錢

農學士石阪橘樹君著
●廢物利用篇
全一册洋並綴　中判三三八頁　正價拾五錢　郵稅六錢

金子男爵題辭　戸田翠香君編
●實業實典
全一册脊皮上綴　中判二一一八頁　實價壹圓五拾錢　小包送六百匁

石井研堂君著
〔少年工藝文庫〕
全廿四册洋並綴　大判凡百廿頁宛　正價一册拾五錢　郵稅一册四錢

商業書類

（既刊書目）

第一編●鐵道の卷
第二編●水道の卷
第三編●瓦斯の卷
第四編●寫眞の卷
第五編●電話の卷
第六編●硝子の卷
第七編●紡績の卷
第八編●活版の卷
第九編●汽船の卷
第十編●製紙の卷
第十一編●銅山の卷
第十二編●電燈の卷
第十三編●陶器の卷
第十四編●漆器の卷
第十五編●時計の卷
第十六編●マッチの卷
第十七編●織物の卷

天城安政君著
●増訂 商業讀本　全四册和本綴　大判六八八頁　正價四册七拾錢　郵税四册拾六錢
分賣▲卷の一、卷の二、正價各拾錢　郵税各四錢
▲卷の三、卷の四、正價各貳拾錢　郵税各六錢

高等商業學校教授水島鐵也君校閲　濱田四郎君著
●補習教育 商業入門　全三册和本綴　大判四三二頁　正價一册拾八錢　郵税一册四錢

大倉喜八郎君題辭　森一兵君著　彩色木版寫眞版挿入
●商家書翰文　全一册洋並綴　大判二四六頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

安藤保作君著
●商業文範　全一册和製並綴　大判一八二頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

村井弦齋君著
●繪入小僧讀本　全一册洋並綴　大判七〇頁　正價拾貳錢　郵税四錢

醫學書類

松本重太郎君序文　森一兵君著　寫眞版挿入
●商業大意　全一册洋並綴　大判二四〇頁　正價貳拾五錢　郵税六錢

天城安政君著
●少年商業文庫 勤儉貯蓄　全一册洋並綴　大判一二八頁　正價拾五錢　郵税四錢
●少年商業文庫 商業の栞　全一册洋並綴　大判一三二頁　正價拾五錢　郵税四錢
●少年商業文庫 商業算の話　全一册洋並綴　大判凡一三〇頁　正價拾五錢　郵税四錢

東京醫科大學教室助手醫學士石原弘君著
●醫學新書 藥物學　全一册脊皮上綴　大判一〇六〇頁　正價貳圓　小包送六百匁

醫學博士片山國嘉君校閲、前王子精神病院長門脇眞枝君著
●醫學新書 精神病學　全一册洋布上綴　大判一一〇〇頁　正價貳圓　小包送六百匁

東京醫科大學教室助手醫學士石原弘君著（全二册下卷近刊）
●醫學新書 人體解剖學上卷　脊皮製洋布上綴　大判五五〇頁　正價參圓　郵税拾六錢

東京醫科大學耳鼻咽喉科學教室助手醫學士久保猪之吉君著
●醫學新書 鼻科學　全一册脊皮上綴　大判　正價　郵税

前王子精神病院長門脇眞枝君著
●精神病看護學　全一册洋布上綴　大判二四六頁　正價五拾錢　郵税八錢

前王子精神病院長門脇眞枝君著
●狐憑病新論　全一册洋裝上綴　大判一七六頁　正價五拾錢　郵税八錢

仙臺醫學專門學校教授須田勝三郎君著
●衞生化學　全一册洋並綴　大判四一五頁　正價四拾錢　郵税八錢
●一名飲食物日用品嗜好品檢査法
▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢　郵税拾錢

○工業書類　○商業書類　○醫學書類

（一二三）

醫學博士三島通良君著 ●學校衛生學 全一冊洋裝上製 中判 三六〇頁 正價七拾五錢 郵稅八錢

醫學士小川劍三郎君著 ●通俗衛生眼のはなし 全一冊洋並製 中判 一一四頁 正價拾八錢 郵稅四錢

醫科大學藥學得業士金澤駿君著 ●通俗治療救急法 全一冊紙皮上製 小判 三一〇頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

陸軍藥劑監石塚左玄君著 ●通俗食物養生法 全一冊洋裝上製 大判 二五〇頁 正價七拾錢 郵稅六錢

醫學士守矢親國君譯述 ●生殖器新書 全一冊洋裝上製 中判 四五六頁 正價九拾錢 郵稅拾錢

醫學得業士首藤環君編 ●醫術開業試驗問答叢書（前期）全一冊紙皮上製 中判 四九二頁 正價六拾錢 郵稅八錢

●同（後期）全一冊紙皮上製 中判 八〇四頁 正價九拾錢 郵稅拾四錢

文學書類

▲文學總書

奧村信太郎君著 ●通俗文學汎論 全一冊洋並製 大判 三二六頁 實價貳拾錢 郵稅八錢

大和田建樹君著 ●日本大文學史 全五冊洋並製 大判 一四七〇頁 正價一冊四拾錢 郵稅一冊八錢

▲文學雜著

文學士笹川臨風君著 ●支那文學史 全一冊洋並製 大判 三二二頁 正價四拾錢 郵稅八錢 ▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學博士坪內雄藏君著 ●英文學史 全一冊洋布上製 大判 九五〇頁 正價貳圓 小包送四百匁

●同 分本 全三冊洋並製 大判 九五〇頁 正價一冊六拾錢 郵稅一冊六錢

文學博士高山林次郎君遺稿 ●樗牛全集（上卷一月上旬發行）全三冊洋布上製 大判 約四百五十頁 正價壹圓五拾錢 郵稅拾六錢

文學博士高山林次郎君著 ●時代管見 全一冊紙皮上製 小判 五二〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

文學博士高山林次郎君著 ●文藝評論 全一冊紙皮上製 小判 四八〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

北村門太郎君遺稿 星野、島崎、平田、戶川、四君共纂 ●透谷全集 全一冊洋並製 中判 八六〇頁 正價壹圓 郵稅拾六錢 ▲特製本 洋布上製 正價壹圓參拾五錢 郵稅拾八錢

內田不知庵君著 ●文藝小品 全一冊紙皮上製 小判 六一〇頁 實價貳拾五錢 郵稅六錢

國府犀東君著 ●龍吹鶴誹 全一冊紙皮上製 小判 二六四頁 實價拾五錢 郵稅四錢

文學士大町桂月君著 ●大絃小絃 全一冊紙皮上製 小判 四二〇頁 正價參拾錢 郵稅六錢

齋藤綠雨君著 ●みだれ箱 全一冊紙皮上製 小判 三九八頁 正價貳拾八錢 郵稅四錢

國文書類

齋藤綠雨君著
● あられ酒　全一冊紙皮上製 小判 四六五頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢

與謝野鐵幹君作
● うもれ木　全一冊紙皮上製 小判 二六八頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

大和田建樹君著
● 新文林　全一冊洋裝 中判 四三二頁　正價貳拾四錢 郵稅八錢

▲文典

文學士岡田正美君著
● 解說批評 日本文典　上下二冊洋裝 大判 六〇八頁　正價各四拾錢 郵稅各八錢
▲特製本 洋布上製 正價一冊五拾五錢 郵稅一冊拾錢

落合直文君著
● 中等教育 日本文典（文部省檢定濟）　全一冊背皮上製 中判 四八八頁　正價六拾錢 郵稅拾錢

落合直文君著
● 中等教育 文法教科書　全一冊背皮上製 大判 一二六頁　正價四拾五錢 郵稅六錢

落合直文君著
● 日本大文典　全一冊背皮上製 大判 八三四頁　正價壹圓七拾貳錢 郵稅拾八錢

大和田建樹君著
● 新撰假名遣活法　全一冊洋裝 大判 一七〇頁　正價拾五錢 郵稅貳錢

▲國文集

內藤耻叟君校閱 大宮宗司君校註
● 校註神皇正統記　全一冊洋裝 大判 二五八頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢

中村秋香君校訂
● 吉野拾遺詳解　全一冊洋裝 大判 一五二頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

大和田建樹君刪定
● 中等教育 刪定徒然草（文部省檢定濟）　全一冊洋裝 大判 一一二頁　正價拾八錢 郵稅四錢

佐々木信綱君校註
● 校註徒然草　全一冊洋裝 大判 二〇六頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢

佐々木信綱君校註
● 校註竹取物語　全一冊洋裝 大判 七六頁　正價拾貳錢 郵稅貳錢

佐々木信綱君校註
● 校註土佐日記　全一冊洋裝 大判 五〇頁　正價拾錢 郵稅貳錢

佐々木信綱君校註
● 校註方丈記　全一冊洋裝 大判 六〇頁　正價八錢 郵稅貳錢

佐々木信綱君校註
● 校註伊勢物語　全一冊洋裝 大判 一〇六頁　正價拾貳錢 郵稅四錢

佐々木信綱君校註
● 校註更科日記　全一冊洋裝 大判 九四頁　正價拾貳錢 郵稅四錢

文學博士萩野由之君、落合直文君、池邊義象君校註
● 源氏物語　全五冊洋裝 中判 二五七八頁　正價一冊廿五錢 郵稅一冊參錢

文學博士萩野由之君、落合直文君、池邊義象君校註
● 榮花物語　全三冊洋裝 中判 一五六〇頁　正價一冊廿五錢 郵稅一冊參錢

太平記	全三冊洋裝	中判一七二〇頁	正價一冊廿五錢	郵稅一冊參錢
平家物語	全一冊洋裝	中判六六〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
水鏡 大鏡	全一冊洋裝	中判四八〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
增鏡	全一冊洋裝	中判四二〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
古今著聞集	全一冊洋裝	中判四七〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
保元物語、平治物語、秋の夜長物語、鴉鷺合戰物語	合一冊洋裝	中判四三〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
竹取物語、伊勢物語、徒然草、紫式部日記、住吉物語	合一冊洋裝	中判四三〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
土佐日記、枕草紙、更科日記、方丈記	合一冊洋裝	中判四四〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
十六夜日記、落窪物語、辨内侍日記	合一冊洋裝	中判四五〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
とりかへばや物語、堤中納言物語、四季物語	合一冊洋裝	中判四三〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
中務内侍日記、讃岐典侍日記、和泉式部日記、蜻蛉日記	合一冊洋裝	中判四三二頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
濱松中納言物語、大和物語、唐物語	合一冊洋裝	中判四五〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
宇治拾遺物語、多武峯少將物語	合一冊洋裝	中判五二〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
十訓抄、公事根源	合一冊洋裝	中判四二〇頁	正價貳拾五錢	郵稅參錢
國學院編纂 名文評釋	全一冊洋裝	大判四五二頁	正價五拾錢	郵稅拾錢

漢文書類

落合直文君編 中等教育國文軌範	全一冊洋裝	中判三八〇頁	正價貳拾五錢	郵稅六錢
[illegible]野勇雄君編 新撰國文問答	全一冊紙皮上製	小判二六六頁	正價貳拾錢	郵稅四錢

▲漢文法

石川鴻齋君著 文法詳論	全二冊和紙刷	大判一二五枚	正價四拾錢	郵稅六錢
石川鴻齋君著 續文法詳論	全二冊和紙刷	大判一一五枚	正價四拾錢	郵稅六錢
太田才次郎君編 新撰漢文問答	全一冊紙皮上製	小判二五〇頁	正價貳拾錢	郵稅四錢

▲經史

文學士（漢文學科專攻）久保天隨君著 四書新釋大學	全一冊和本製	大判一三〇頁	正價拾五錢	郵稅四錢
同 四書新釋中庸	全一冊和本製	大判二〇〇頁	正價貳拾錢	郵稅六錢

（二六）

著者	書名	體裁	頁數	定價・郵稅
文學士（漢文學科專攻）久保天隨君著	四書新釋 論語	全二册和本綴	大判七二六頁	正價一册四拾錢 郵稅一册八錢
同	四書新釋 孟子	全二册和本綴	大判一〇九八頁	正價一册六拾錢 郵稅一册拾錢
內藤耻叟君講義	四書講義	全二册洋並綴	中判九〇〇頁	正價一册貳拾五錢 郵稅一册八錢
林退菴君著 中島筑山君訓點	新註 四書補註備旨	全五册和紙銅刻	小判二四四枚	正價壹圓 郵稅六錢
後藤點	四書讀本	全一册洋並綴	大判二六〇頁	正價參拾錢 郵稅六錢
後藤點	四書	全十册和紙木版	大判二〇五枚	正價壹圓六拾錢 小包送六百匁
後藤點	五經	全十一册和木版	大判三四〇枚	正價貳圓貳拾錢 小包送八百匁
內藤耻叟君講義	小學孝經忠經講義	合一册洋並綴	中判四七〇頁	正價貳拾五錢 郵稅八錢

▲諸子

著者	書名	體裁	頁數	定價・郵稅
文學博士根本通明君講述	老子講義	全一册和本綴	大判三九六頁	正價五拾錢 郵稅八錢
小宮山綏介君講義	老子、列子、孫子、吳子、講義	合一册洋並綴	中判四三〇頁	正價貳拾五錢 郵稅八錢
太田淳軒君講義	莊子講義	全二册洋並綴	中判九一〇頁	正價一册廿五錢 郵稅一册八錢
小宮山綏介君講義	韓非子講義	全二册洋並綴	中判九〇〇頁	正價一册廿五錢 郵稅一册八錢
城井悔菴君講義	荀子講義	全二册洋並綴	中判九八八頁	正價一册廿五錢 郵稅一册八錢
村岡櫟齋君訓點	增評 荀子箋釋	全二册洋並綴	大判四五〇頁	正價七拾錢 郵稅拾錢

▲漢文集

著者	書名	體裁	頁數	定價・郵稅
文學士（漢文學科專攻）久保天隨君著	文章軌範精義	全部六册（續編三册近刊） 正編三册和本綴	大判一一七二頁	正價一册四拾錢 郵稅一册八錢
岡三慶君著註	論評副註 正續文章軌範文法講義	全一册大判洋布上綴		正價壹圓八拾錢 小包送六百匁
安原健堂君箋註	正續文章軌範讀本	合本洋布上綴	大判五五〇頁	正價七拾五錢 郵稅拾四錢
安原健堂君箋註	正文章軌範讀本	全一册洋並綴	大判二五〇頁	正價參拾錢 郵稅六錢
安原健堂君箋註	續文章軌範讀本	全一册洋並綴	大判二九六頁	正價參拾錢 郵稅八錢
石川鴻齋君講述	正文章軌範講義	全一册洋並綴	中判四七〇頁	正價貳拾五錢 郵稅八錢
石川鴻齋君講述	續文章軌範講義	全一册洋並綴	中判四〇六頁	正價貳拾五錢 郵稅八錢
森昌作君編	正續文章軌範獨學講義	全四册和紙銅版	中判一八四枚	正價五拾錢 郵稅拾錢

●訂正文章軌範獨學　上田泰造君校　榧木寬則君編　全二冊和綴　小本銅版刷　正價六拾錢　郵稅六錢

●唐宋八大家文讀本　村瀨栲亭君編　全八冊和紙刷　大判銅刻　正價壹圓八拾錢　郵稅貳拾錢

●續唐宋八大家文讀本　賴衣臣君編　全十二冊和紙刷　大判銅刻　正價貳圓　郵稅貳拾錢

●日本名家經史論存　太田和耻堂君撰論　全十五冊和綴　半紙判木版刷　正價貳圓貳拾錢　小包送六百匁

●高等漢文軌範　文學士大町桂月君、文學士白河鯉洋君編纂　全一冊銅刻　中判和紙刷　正價六拾錢　郵稅六錢

●帝國漢文讀本　全五冊洋綴　大判一〇八〇頁　正價壹圓七拾錢　郵稅一冊六錢
▲第一卷正價參拾錢　第二卷以下各參拾五錢

作文書類

▲作文法

●作文寶典　大和田建樹君著　全一冊紙皮上製　中判一七二〇頁　正價貳圓貳拾錢　小包送四百匁

●袖珍實用作文寶典　大和田建樹君著　全一冊洋布上製　小判一〇二二頁　正價六拾五錢　郵稅六錢

●作文熟語字典　百束持中君編纂　全一冊洋布上製　小判九八〇頁　正價八拾錢　郵稅拾錢

●中等教育作文法　文學博士萩野由之君著　全一冊洋綴　中判五〇〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●通俗文章學　宮川鐵次郎君著　全一冊洋綴　大判三〇〇頁　正價參拾錢　郵稅八錢

●記事論說文範　上村左川君編　美麗寫眞版挿入　全一冊洋綴　大判二四四頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●女子作文の栞　華族女學校學監下田歌子女史著　全一冊和綴　大判二三六頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

●作文自在　岸上操君編　彩色木版寫眞銅版挿入　全一冊洋綴　大判二七四頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●作文組立法　大和田建樹君著　全一冊洋綴　大判一六九頁　正價拾五錢　郵稅六錢

●今體作文六大秘訣　池田一倒君著　全一冊紙皮上製　小判　頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●新体作文例題　元木貞雄君選輯　全一冊銅刻　中判和紙刷　正價八拾錢　郵稅拾六錢

●學生必携作文資料　堀江秀雄君著　全一冊洋綴　小判二一六頁　正價拾五錢　郵稅四錢

●國語漢詩類語作文錦囊　井上敏夫君著　全一冊紙皮上製　小判四三〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

●作文資材美辭寶典　西村眞次君編　全一冊洋綴　小判四一二頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

▲修辭及演說

●修辭學　文學士武島又次郎君著　全一冊洋綴　大判三〇六頁　正價四拾錢　郵稅八錢
▲特製本　洋布上製　正價五拾五錢　郵稅拾錢

●早稻田大學講師島村瀧太郎君著　**新美辭學**　全一冊背皮上綴　大判五四四頁　正價壹圓參拾錢　郵稅拾四錢

●宮田修君著　**通俗言語學**　全一冊[illegible]並綴　大判[illegible]〇頁　正價貳拾五錢　郵稅八錢

●中島氣崢君著　**演說活法**　全一冊洋布上綴　小判　頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●坪谷善四郎君著　**演說討論軌範**　全一冊洋並綴　中判二〇〇頁　正價參拾錢　郵稅八錢

●博文館編輯局編纂　**祝辭演說法**　彩色木版寫眞版挿入　全一冊洋並綴　大判二五〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●若林玵藏君著　**速記術**　全一冊紙皮上綴　中判一三二頁　正價四拾錢　郵稅四錢

▲書翰文

●中村秋香君著　**書翰文大成**　▲和裝箱入正價壹圓　全一冊洋布上綴　大判三四八頁　郵稅拾六錢　正價壹圓六錢

●內山幻堂君著　**明治書翰文大全**　寫眞版八葉挿入　全一冊洋並綴　大判四六〇頁　正價五拾錢　郵稅拾錢

●大和山建樹君著　**書簡組立法**　全一冊洋並綴　大判一六〇頁　正價拾五錢　郵稅六錢

●樋口一葉女史著　**通俗書翰文**　彩色木版寫眞銅版挿入　全一冊洋並綴　大判二四六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●華族女學校學監下田歌子女史著　**女子書翰文**　木版書翰挿入　全一冊和並綴　大判二二八頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

辭典書類

▲漢字辭典

●石川鴻齋君校訂　鼇頭音釋**康熙字典**（銅刻上帙入）　▲桐函入上製正價五圓五拾錢　全六冊和紙刷　中判一五二二枚　小包送九百匁　正價四圓五拾錢　小包送六百匁

●市河濟流君、高井思明君校訂　三音四聲**字貫**（銅刻上帙入）　▲桐函入上製正價六圓　全五冊和紙刷　中判一六一〇枚　小包九百匁　正價五圓參拾錢　小包送六百匁

●石川鴻齋君校訂　篆文詳註**日本大玉篇**（銅刻上帙入）　全三冊和紙刷　中判七二八枚　正價貳圓六拾錢　小包送四百匁

●土生柳平君校正、木村品太郎君編輯　明治大廣益**會玉篇大全**（銅刻上帙入）　全三冊和紙刷　中判六六四枚　正價貳圓六拾錢　小包送四百匁

●石川鴻齋君著　**新撰日本字典**（銅刻上帙入）　全二冊和上綴帙入　中判一〇一〇頁　正價壹圓　郵稅八錢

●靑木輔淸君編　**廣益中字典**　全一冊洋布上綴　中判八三〇頁　正價八拾錢　郵稅拾錢

●戶田翠香君著　**文章字典**（銅刻上等和紙刷）　全一冊和上綴帙入　中判五八二頁　正價七拾錢　郵稅六錢

●太田淳軒君著　新撰**歷史字典**（銅刻上等和紙刷）　全一冊和上綴帙入　中判四九五頁　正價六拾錢　郵稅六錢

●石川鴻齋君補閱、川田孝吉君編輯　增補**和漢**歷史文章**字引**　銅刻和並綴　中判二〇四枚　正價五拾五錢　郵稅拾貳錢

太田淳軒君著　**新撰明治字典**　銅刻和紙上綴　小判四七〇頁　正價參拾八錢　郵稅四錢

齋木寛直君著　**明治文選字引**　銅刻和紙上綴　小判二一六枚　正價貳拾五錢　郵稅四錢

風月庄左衛門君編　校正三版　**増字文選字引**　全一册和紙並綴　中判銅刻　正價貳拾五錢　郵稅四錢

長岡道謙君著　**新刻正字通**　銅刻和紙上綴　小判五二七枚　正價參拾五錢　郵稅四錢

青藍居士編　歷史文章　**皇國字典**　全一册和紙上綴　小判銅刻　正價貳拾貳錢　郵稅四錢

棚橋廣君著　新撰　**漢語字引**　銅刻和紙上綴　小判一三八枚　正價貳拾五錢　郵稅貳錢

大月晴四郎君編　**懐中玉篇**　銅刻洋布上綴　小判三三六頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

寒澤振作君著　**新撰五千字典**　全一册洋並綴　小判二七〇頁　實價拾錢　郵稅六錢

▲國語字典

大和田建樹君著　**日本大辭典**　全一册總皮上綴　大判一八〇〇頁　正價貳圓廿五錢　小包送四百匁

大和田建樹君著　**日本小辭典**　全一册洋布上綴　小判一八八〇頁　正價七拾五錢　郵稅八錢

大宮宗司君編纂　**日本辭林**　全一册洋並綴　小判七二〇頁　正價參拾錢　郵稅六錢　▲特製本　洋布上綴　正價四拾錢　郵稅八錢

内山正如君著　**新撰日本節用**　全一册和上綴帙入　中判銅刻五二〇頁　正價壹圓　郵稅拾錢

棚橋廣君著　**日本いろは新字典**　全一册銅刻和綴　小判二二〇枚　正價參拾錢　郵稅四錢

博文館編輯局編　袖貞　**草いろは早引節用**　全一册和並綴　小判銅刻　正價貳拾錢　郵稅六錢

和歌書類

▲和歌作法

大和田建樹君著　**歌まなび**　全一册洋布上綴　中判一〇三八頁　正價壹圓五拾錢　郵稅拾六錢

佐々木信綱君著　増補　**詠歌自在**　全一册洋布上綴　中判七八〇頁　正價壹圓　郵稅拾貳錢

落合直文君著　**新撰歌典**　全一册洋並綴　中判六一〇頁　正價四拾錢　郵稅八錢

華族女學校學監下田歌子女史著　**詠歌の栞**　全一册和並綴　大判三一〇頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

佐々木信綱君著　**詠歌辭典**　全一册洋布上綴　小判一三七六頁　正價七拾五錢　郵稅八錢

宮澤春文君著　**作歌自在**　彩色木版寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判二四〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

文學士武島羽衣君著　**霓裳歌話**　全一册紙皮上綴　小判三四〇頁　實價貳拾錢　郵稅六錢

▲和歌集

佐々木信綱君校註 **賀茂眞淵翁全集** 全二册洋並綴 中判一〇〇〇頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註 **本居宣長翁全集** 全一册洋並綴 中判五四二頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註 **香川景樹翁全集** 全二册洋並綴 中判一〇二三頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註 **小澤蘆庵翁全集** 全一册洋並綴 中判五二二頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註 **近世名家々集** 全二册洋並綴 中判一〇七三頁 正價一册參拾五錢 郵稅一册八錢

佐々木信綱君校註 **近世長歌今樣歌集** 全一册洋並綴 中判五七〇頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註 **桂園門下家集** 全一册洋並綴 中判五七〇頁 正價參拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君校註 **明治名家々集** 全二册洋並綴 中判一一五四頁 正價一册卅五錢 郵稅一册八錢

文學博士木村正辭君校訂 **萬葉集代匠記** （全十二册自第一輯至第十二輯） 洋裝大判並綴 凡三六〇〇頁 正價一册[illegible]錢 郵稅一册六錢
▲第七輯迄製本出來、第一二輯共郵稅八錢宛

文學博士木村正辭君校訂 **萬葉集目錄代匠記** 全一册洋並綴 大判一九四頁 正價四拾錢 郵稅六錢

佐々木信綱君校註 **古今和歌集、貫之家集、躬恒家集、有則家集、忠岑家集** 合一册洋並綴 中判四一八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

後撰和歌集、元輔家集、能宣家集、順家集、天德歌合 合一册洋並綴 中判四〇六頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

拾遺和歌集、公任家集、紫式部家集、清少納言家集 合一册洋並綴 中判三八八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

後拾遺和歌集、相模家集、輕信卿母集、高陽院歌合 合一册洋並綴 中判三九二頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

金華和歌集、詞花和歌集、堀川百首 合一册洋並綴 中判三八八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

千載和歌集、永久百首、忠度朝臣集、後京極自歌合 合一册洋並綴 中判四〇六頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

新古今和歌集、自贊歌、鴨長明集 合一册洋並綴 中判四〇八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

林下集、源三位頼政集、山家集、金槐集 合一册洋並綴 中判四九四頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

悅目抄、無名抄、歌がたり、にひまなび、新學異見、外二書 合一册洋並綴 中判四二八頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

校註明倫歌集 全一册洋並綴 大判二二一頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

岸本宗道君校註 **校註古今和歌集** 全一册洋並綴 中判二四八頁 正價[illegible]五錢 郵稅四錢

佐々木信綱君校註 **百人一首講義** 全一册洋並綴 中判三〇〇頁 正價貳拾錢 郵稅四錢

佐々木信綱君校註 **百人一首略解** 全一册洋並綴 大判 頁 正價拾五錢 郵稅六錢

佐々木信綱君著 **おもひ草** 全一册洋布上綴 中判凡一五〇頁 正價五拾錢 郵稅六錢

佐々木信綱君編纂 **竹柏園集** 全二册紙皮上製 小判五一六頁 正價一册卅五錢 郵稅一册六錢

●庭の摘草 附東遊記 子爵黑田清綱君、松所敦子君共撰 村松今朝太郎君編
全一册和上綴 中判 二六二頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

●賀茂翁家集 賀茂眞淵翁著 仲田顯忠翁校正
全五册和綴中本 木版刷二二三枚 正價六拾錢 郵稅拾錢

●類題武藏野集 仲田顯忠君編
全四册和綴中本 木版刷二三〇枚 正價六拾錢 郵稅拾錢

●類題探風集 黑澤翁滿君編
全四册中本 木版 二百餘枚 正價五拾五錢 郵稅拾錢

●後撰和歌集標註 契冲阿闍梨證註 賀茂眞淵君後編 平田豆流君增註
全四册和綴 大本木版刷 正價八拾四錢 郵稅拾錢

●むぐらぬ集 黑澤翁滿君著
全四册和綴 大本木版刷 正價八拾四錢 郵稅拾錢

▲新體詩

●新體詩歌自在 中郁秋香君著 大和田建樹君著
全一册洋布上綴 中判 八三四頁 正價壹圓貳錢 郵稅拾錢

●新體詩學 西村醉夢君著
全一册洋並綴 小判 二二四頁 正價拾五錢 郵稅四錢

●創作要訣 美文韻文 鹽井雨江君、武島羽衣君、大町桂月君合著
全一册洋並綴 中判 二〇六頁 實價拾貳錢 郵稅六錢

●花紅葉 美文韻文 文學士大町桂月君著
全一册洋布上綴 小判 四二二頁 正價參拾錢 郵稅六錢

●黃菊白菊 美文韻文 文學士土井晚翠君著
全一册紙皮上綴 小判 四〇二頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

●天地有情 文學士土井晚翠君著
全一册洋布上綴 小判 二三〇頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

▲唱歌

●霓裳微吟 美文韻文 文學士武島羽衣君著
全一册紙皮上綴 小判 三六八頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

●暗香疎影 美文韻文 文學士鹽井雨江君著
全一册紙皮上綴 小判 三五四頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

●磯馴松 美文韻文 佐々木信綱君、印東昌綱君合著
全一册紙皮上綴 小判 四一二頁 正價貳拾八錢 郵稅六錢

●雪月花 散文韻文 大和田建樹君著
全一册紙皮上綴 小判 六二六頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

●深山櫻 散文韻文 大和田建樹君著
全一册紙皮上綴 小判 七〇二頁 正價四拾錢 郵稅六錢

●藻鹽木 散文韻文 大和田建樹君著
全一册紙皮上綴 小判 五九〇頁 實價貳拾五錢 郵稅六錢

●歐米名家詩集 大和田建樹君著
全一册洋並綴 大判 六〇二頁 正價參拾錢 郵稅六錢

●海軍々歌 海軍大主計竹內十次郎君著 征清
全一册洋並綴 小判 四六頁 正價參錢 郵稅四册迄貳錢

〜家庭唱歌〜 木村小舟君作歌 田村虎藏君作曲
全十二册洋並綴 小判每册四〇頁 實價一册貳錢五厘 郵稅三册迄貳錢

●第一編 桃太郎
●第二編 舌切雀
●第三編 松山鏡
●第四編 花咲翁
●第五編 浦島太郎
●第六編 文福茶釜
●第七編 勝々山
●第八編 羅生門
●第九編 一寸法師
●第拾編 猿蟹合戰
●第拾壹編 俵藤太
●第拾貳編 瘤取り

漢詩書類

▲詩作法

● 巖谷修、三島毅、岡千仞、栗本鋤雲、石川鴻齋諸先生校訂
佩文韻府 全百册唐本綴七帙入 銅刻大判六〇二〇枚 正價四拾圓 小包送三貫六百匁

● 石川鴻齋君校訂
圓機活法（銅刻和紙刷上帙入）全三册 中判 和上綴 六七五枚 正價參圓 小包送四百匁

● 湯文路君著
詩韻合璧（銅刻和紙刷上帙入）全五册 小判 和上綴 五八〇枚 正價壹圓 郵税六錢

● 瀧川昇君編
新撰月令詩韻活法（銅刻和紙刷上帙入）全二册 小判 和上綴 三六九枚 正價六拾錢 郵税六錢

● 山陰劉文蔚豹君・吉岡保道君編
詩韻含英異同辨（銅刻和紙刷上帙入）全二册 小判 和上綴 二一〇枚 正價四拾錢 郵税四錢

● 永田方正君編
明治新訂作詩精選（銅刻和紙刷上帙入）全二册 小判 和綴 一九九枚 正價四十錢 郵税四錢

● 石川鴻齋君編
幼學便覽 全二册 小判 和並綴 銅刻 正價拾八錢 郵税四錢

● 石川鴻齋君著
詩法詳論 全二册 大判 和並綴 一一〇枚 正價四拾錢 郵税六錢

● 柳井絅齋君著
作詩自在 彩色木版寫眞版挿入 全一册 大判 洋並綴 二四六頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

▲詩集

● 大槻東陽君著
詩文良材 全二册 和紙木版 大判 枚 正價五拾五錢 郵税六錢

● 岸上質軒君編
明治二百五十家絶句 全二册 紙皮上綴 中判 六四四頁 正價六拾錢 郵税八錢

● 小宮山綏介君講述
詩經講義 全一册 洋並綴 中判 四八〇頁 正價貳拾五錢 郵税八錢

● 太田淳軒君講述
唐詩選三體詩講義 全一册 洋並綴 中判 四六四頁 正價貳拾五錢 郵税八錢

俳諧書類

▲俳諧作法

● 雪中庵雀志宗匠校閲 五乳人釣雪君編
俳諧提要 全一册 和装上製 中判 横綴美本 正價五拾錢 郵税八錢

● 老鼠堂永機君編
俳諧自在 全一册 洋布上綴 小判 一二三〇頁 正價壹圓貳拾錢 郵税拾錢

● 三宅嘯軒君著・彩色木版寫眞銅版挿入
俳諧獨學 全一册 洋並綴 大判 二五六頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

● 高井蘭山君著
俳字節用集 全二册 和紙木版 小判 枚 正價貳拾錢 郵税貳錢

○漢詩書類（詩作法、詩集）　○俳諧書類（俳諧作法）

（三三）

●和歌俳諧節用集　廣田精知君著　伊藤松宇君校訂　全二册　小判　和紙銅刻　二九二枚　正價參拾五錢　郵税四錢

●付合作法全集　伊藤松宇君校訂　名家手蹟寫眞銅版挿入　全一册　大判　三六三頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

▲俳諧句集

●芭蕉全集　老鼠堂永機君、阿心庵雪人君校訂、寫眞版挿入　全一册　大判　三〇四頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

●其角全集　老鼠堂永機君　阿心庵雪人君校訂　寫眞版挿入　全一册　大判　二八〇頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

●嵐雪全集　雪中庵雀志君校訂　名家手蹟寫眞版入　全一册　大判　二九〇頁　洋並綴　賣價貳拾錢　郵税八錢

●支考全集　老鼠堂永機君、其角堂機一君校訂　名家手蹟寫眞版入　全一册　大判　三四〇頁　洋並綴　賣價貳拾錢　郵税八錢

●許六全集　大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版入　全一册　大判　三〇〇頁　洋並綴　賣價貳拾錢　郵税八錢

●也有全集　岡野知十君校訂　名家手蹟寫眞版入　全一册　大判　二八四頁　洋並綴　賣價貳拾錢　郵税八錢

●蓼太全集　不白軒梅年君、雪中庵雀志君、雪簑人子貫君校訂　寫眞版挿入　全一册　大判　三二二頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

●素堂鬼貫全集　大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入　全一册　大判　二八八頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

●蕪翁句集　角田竹冷、佐藤飯人、大野洒竹三君校　全三册　美濃判　木版　和紙刷　正價壹圓　郵税拾錢

●蕪村曉臺全集　大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入　全一册　大判　三〇〇頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

●一茶句集　俳諧寺社中校　全二册　木版　和裝　和紙刷　正價貳拾五錢　郵税六錢

●一茶大江丸全集　大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入　全一册　大判　三二〇頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

●蕉門十哲集　老鼠堂永機君、晉雪庵柳涯君校訂　名家手蹟寫眞版挿入　全一册　大判　三〇二頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

●芭蕉以前俳諧集　大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入　全二册　大判　六三〇頁　洋並綴　正價一册參拾錢　郵税一册八錢

●元祿名家句集　大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入　全一册　大判　二八六頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

●俳諧句合全集　角田竹冷君校訂　名家手蹟寫眞版挿入　全一册　大判　二九八頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

●俳諧類題句集　尾崎紅葉君校訂　名家手蹟寫眞版挿入　全二册　大判　七二〇頁　洋並綴　正價一册參拾錢　郵税一册八錢

●修身俳諧不朽集　其角堂永機宗匠外四大家校　森槃直君編　全二册　和綴中本　木版刷　一八八枚　正價參拾五錢　郵税八錢

●明治俳句　中村秋竹君編　全一册　紙皮上綴　小判　五〇〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢

●俳家成美全集　桒窓無角君著　全一册　小判　五二〇頁　洋並綴　賣價貳拾錢　郵税八錢

●掌中俳諧七部集　芭蕉翁編　全二册　和裝小本　正價貳拾貳錢　郵税四錢

●俳諧玉葉集　一葉舍仙鬼翁輯　全一册　和裝長本　正價拾五錢　郵税四錢

北村季吟君撰　高井蘭山君訂
●俳諧增山の井　全二册和裝中本　正價貳拾貳錢　郵税六錢

禾木園主人輯
●今人發句集　全二册中本橫綴　正價參拾八錢　郵税拾錢

▲俳文及雜著

巖谷小波君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
●俳諧文集　全一册　大判　三二八頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

巖谷小波君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
●俳諧論集　全一册　大判　三三〇頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

巖谷小波君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
●續俳諧論集　全一册　大判　三〇六頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

大野洒竹君校訂　名家手蹟寫眞版挿入
●俳諧珍本集　全一册　大判　三一八頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

佐藤飯人君校訂　大判古俳人手蹟寫眞入
●俳諧紀行全集　全一册　大判　四〇〇頁　洋並綴　賣價貳拾錢　郵税八錢

鵜澤四丁君校訂　名家眞蹟寫眞版挿入
●俳諧逸話全集　全一册　大判　三三二頁　洋並綴　正價參拾錢　郵税八錢

角田竹冷君校閲　星野麥人君、牧野望東君合著
●俳諧年表　全一册　大判　二八六頁　和上綴　正價六拾錢　郵税八錢

戲曲書類

▲謠曲及能狂言

大和田建樹君著
增補●謠曲通解　全一册　大判　一七八六頁　背皮上綴　正價壹圓八拾錢　小包送六百匁

大和田建樹君著
●謠曲文粹　全一册　小判　五三〇頁　紙皮上綴　正價參拾五錢　郵税六錢

幸田露伴君校訂（上卷狂言記、中卷續狂言記、下卷狂言記拾遺）
●校訂狂言全集　全三册　中判　凡一三〇〇頁　和上綴　正價一册五拾錢　郵税一册八錢
▲上峡入合本　正價壹圓六拾五錢　小包送四百匁

大和田建樹君著　彩色木版寫眞銅版挿入
●謠と能　全一册　大判　二七六頁　洋並綴　正價貳拾五錢　郵税六錢

大和田建樹君著　每編密畫挿入
●能のしをり　全六册　中判　二〇〇頁　洋並綴　正價一册四拾錢　郵税一册六錢

▲淨瑠璃集

芳賀文學博士　三上文學士序文　山本九馬亭君著
●淨瑠璃通解　大判　和裝美本　第三編迄出來　一册凡二五〇頁　全部十二册
▲正價一册參拾五錢　全部參圓八拾錢　郵税一册六錢宛

水谷不倒君校訂
●義太夫百番　全一册　小判　六七六頁　洋布上綴　正價壹圓　郵税拾貳錢

饗庭篁村君著
●巢林子撰註　全一册　大判　四四二頁　洋並綴　正價八拾錢　郵税拾錢
▲特製本　洋布上綴　正價壹圓　郵税拾貳錢

◎外に帝國文庫及續帝國文庫全部百冊中淨瑠璃書十一卷あれ共本目錄小說書類中第四〇頁に右文庫壹百卷の書名を掲載せしを以て當欄には省略せり

大阪五行 義太夫本 上等半紙木版摺

（正價壹枚參厘五毛の割）

一 ●忠臣藏 鶴ヶ岡 ▲正價六錢六厘 郵稅貳錢
二 ●同 桃井館 ▲正價八錢 郵稅貳錢
三 ●同 けんくわ場 ▲正價拾六錢壹厘 郵稅貳錢
四 ●同 鹽谷館 ▲正價拾壹錢九厘 郵稅貳錢
五 ●同 鐵砲場 ▲正價拾錢壹厘 郵稅貳錢
六 ●同 勘平腹切 ▲正價拾七錢壹厘 郵稅貳錢
七 ●同 茶屋場 ▲正價拾六錢四厘 郵稅貳錢
八 ●同 山科雪 ▲正價拾九錢六厘 郵稅貳錢
九 ●同 天河屋 ▲正價拾四錢 郵稅貳錢
一〇 ●同 夜討 ▲正價八錢七厘 郵稅貳錢
一一 ●忠臣講釋 喜內住家 ▲正價拾壹錢九厘 郵稅貳錢

一二 ●忠臣講釋 宅兵衛上使 ▲正價拾壹錢五厘 郵稅貳錢
一三 ●二度目清書 寺岡切腹 ▲正價拾壹錢五厘 郵稅貳錢
一四 ●太功記 本能寺 ▲正價拾錢壹厘 郵稅貳錢
一五 ●同 局注進 ▲正價拾貳錢九厘 郵稅貳錢
一六 ●同 尼ヶ崎 ▲正價拾參錢六厘 郵稅貳錢
一七 ●朝顔日記 濱松小屋 ▲正價拾錢壹厘 郵稅貳錢
一八 ●同 宿屋 ▲正價拾五錢七厘 郵稅貳錢
一九 ●菅原 道明寺 ▲正價拾錢壹厘 郵稅貳錢
二〇 ●同 車曳き ▲正價七錢參厘 郵稅貳錢
二一 ●同 佐太村 ▲正價拾七錢五厘 郵稅貳錢
二二 ●同 松王屋敷 ▲正價拾貳錢六厘 郵稅貳錢

二三 ●菅原 てらこや ▲正價拾九錢九厘 郵稅四錢
二四 ●安達ヶ原 袖萩祭文 ▲正價拾四錢七厘 郵稅貳錢
二五 ●同 一ツ家 ▲正價拾貳錢九厘 郵稅貳錢
二六 ●一の谷 小次郎魁 ▲正價四錢九厘 郵稅貳錢
二七 ●同 須磨組打 ▲正價拾錢五厘 郵稅貳錢
二八 ●同 陣屋 ▲正價拾七錢壹厘 郵稅貳錢
二九 ●兜軍記 わこや琴責 ▲正價拾壹錢五厘 郵稅貳錢
三〇 ●先代萩 竹の間 ▲正價八錢 郵稅貳錢
三一 ●同 政岡忠義 ▲正價拾四錢 郵稅貳錢
三二 ●妹背山 山掛合 ▲正價廿壹錢參厘 郵稅四錢
三三 ●同 鱶七使者 ▲正價九錢八厘 郵稅貳錢
三四 ●同 竹に雀 ▲正價拾貳錢貳厘 郵稅貳錢
三五 ●二十四孝 勝賴館 ▲正價拾錢八厘 郵稅貳錢

三六 ●同 景勝足駄 ▲正價五錢九厘 郵稅貳錢
三七 ●同 勘助住家 ▲正價拾八錢五厘 郵稅貳錢
三八 ●同 十種香 ▲正價拾貳錢貳厘 郵稅貳錢
三九 ●三代記 三浦わかれ ▲正價拾八錢九厘 郵稅貳錢
四〇 ●日吉丸稚櫻 五郎助住家 ▲正價拾貳錢九厘 郵稅貳錢
四一 ●盛衰記 源太勘當 ▲正價拾貳錢 郵稅貳錢
四二 ●同 笹引 ▲正價拾參錢六厘 郵稅貳錢
四三 ●同 さかろ ▲正價拾八錢貳厘 郵稅貳錢
四四 ●彥山 すまの浦 ▲正價九錢八厘 郵稅貳錢
四五 ●同 瓢簞棚 ▲正價拾壹錢五厘 郵稅貳錢
四六 ●同 毛谷村 ▲正價拾五錢七厘 郵稅貳錢
四七 ●千兩幟 いな川內 ▲正價拾五錢 郵稅貳錢
四八 ●卅三間堂 平太郎內 ▲正價拾錢八厘 郵稅貳錢

四九 ●御所櫻 辨慶上使 ▲正價拾參錢參厘 郵稅貳錢
五〇 ●同 辨慶遺袖 ▲正價拾錢八厘 郵稅貳錢
五一 ●千本櫻 大物浦 ▲正價拾錢八厘 郵稅貳錢
五二 ●同 茶見世 ▲正價拾四錢七厘 郵稅貳錢
五三 ●同 すしや ▲正價拾九錢六厘 郵稅貳錢
五四 ●矢口渡し 八郎物語 ▲正價拾五錢七厘 郵稅貳錢
五五 ●同 渡し場 ▲正價拾貳錢貳厘 郵稅貳錢
五六 ●玉藻前 道春館 ▲正價拾貳錢貳厘 郵稅貳錢
五七 ●蝶花形 小阪部館 ▲正價拾參錢參厘 郵稅貳錢
五八 ●阿波鳴門 順禮歌 ▲正價拾八錢五厘 郵稅貳錢
五九 ●三日太平記 松下住家 ▲正價拾五錢 郵稅貳錢
六〇 ●岸姫松 朝比奈上使 ▲正價拾參錢六厘 郵稅貳錢

六一 ●白石噺 田植 ▲正價拾錢壹厘 郵稅貳錢
六二 ●同 新吉原 ▲正價拾參錢六厘 郵稅貳錢
六三 ●加賀見山 草履打 ▲正價八錢七厘 郵稅貳錢
六四 ●同 長局 ▲正價拾五錢 郵稅貳錢
六五 ●同 亦輔住家 ▲正價拾四錢參厘 郵稅貳錢
六六 ●讐仇討 新左衛門屋敷 ▲正價拾參錢參厘 郵稅貳錢
六七 ●同 別れ ▲正價拾錢五厘 郵稅貳錢
六八 ●同 瀧の段 ▲正價拾七錢五厘 郵稅貳錢
六九 ●腰越狀 泉三郎館 ▲正價拾錢五厘 郵稅貳錢
七〇 ●八陣 政清本城 ▲正價拾參錢六厘 郵稅貳錢
七一 ●合邦辻 合邦内 ▲正價拾五錢七厘 郵稅貳錢
七二 ●近江源氏 盛綱館 ▲正價拾六錢四厘 郵稅貳錢

七三 ●嫗山姥 しやべり ▲正價九錢四厘 郵稅貳錢
七四 ●伊賀越 沼津里の口の段 ▲正價拾錢五厘 郵稅貳錢
七五 ●同 平作切腹 ▲正價拾錢五厘 郵稅貳錢
七六 ●同 岡崎雪降 ▲正價拾八錢九厘 郵稅貳錢
七七 ●阿漕浦 平治住家 ▲正價貳拾錢參厘 郵稅四錢
七八 ●姫小松 俊寛島物語 ▲正價拾貳錢九厘 郵稅貳錢
七九 ●日蓮記 勘作住家 ▲正價拾壹錢貳厘 郵稅貳錢
八〇 ●三略巻 鬼一菊畑 ▲正價拾六錢八厘 郵稅貳錢
八一 ●同 橋辨慶 ▲正價參錢五厘 郵稅貳錢
八二 ●花の上野 志渡寺 ▲正價拾五錢七厘 郵稅貳錢
八三 ●女舞衣 三勝酒屋 ▲正價拾四錢參厘 郵稅貳錢
八四 ●戀飛脚 新口村 ▲正價拾參錢參厘 郵稅貳錢

八五 ●紙屋治兵衛 時雨こたつ ▲正價拾參錢六厘 郵稅貳錢
八六 ●堀川 猿廻し ▲正價拾七錢壹厘 郵稅貳錢
八七 ●お染久松 質見世 ▲正價拾九錢貳厘 郵稅貳錢
八八 ●新板歌祭文 野崎村 ▲正價拾八錢五厘 郵稅貳錢
八九 ●桂川連理柵 帶屋 ▲正價貳拾錢六厘 郵稅四錢
九〇 ●夕霧 揚屋 ▲正價八錢 郵稅貳錢
九一 ●戀緋鹿子 八百屋の段 ▲正價拾錢壹厘 郵稅貳錢
九二 ●八百屋献立 おちよ半兵衛 ▲正價拾壹錢九厘 郵稅貳錢
九三 ●昔八丈 城木屋 ▲正價拾七錢八厘 郵稅貳錢
九四 ●同 鈴ケ森 ▲正價五錢九厘 郵稅貳錢
九五 ●播州皿屋敷 鐵山館の段 ▲正價拾貳錢貳厘 郵稅貳錢
九六 ●ひばり山 中將姫雪責 ▲正價拾壹錢五厘 郵稅貳錢

九七 ●双級巴 釜入り ▲正價八錢 郵稅貳錢
九八 ●累物語 埴生村 ▲正價拾壹錢九厘 郵稅貳錢
九九 ●同 土ばし ▲正價拾壹錢貳厘 郵稅貳錢
一〇〇 ●木下蔭 竹中砦 ▲正價貳拾貳錢 郵稅四錢
一〇一 ●同 壬生村 ▲正價拾五錢七厘 郵稅貳錢
一〇二 ●梅の由兵衛 聚樂町 ▲正價拾貳錢九厘 郵稅貳錢
一〇三 ●あしや 狐わかれ ▲正價九錢四厘 郵稅貳錢
一〇四 ●苅萱 高野山 正價八錢 郵稅貳錢
一〇五 ●お妻八郎兵衛 うなぎ谷 ▲正價拾六錢四厘 郵稅貳錢
一〇六 ●布引 綿くり馬 ▲正價九錢八厘 郵稅貳錢
一〇七 ●國性爺 獅々城 ▲正價拾貳錢六厘 郵稅貳錢
一〇八 ●龜山噺 在所の段 ▲正價拾錢八厘 郵稅貳錢

一〇九 ●二代說 秋津島腹切 ▲正價拾七錢壹厘 郵稅貳錢
一一〇 ●佐倉曙 子別れ ▲正價拾八錢五厘 郵稅貳錢
一一一 ●反魂香 吃又平 ▲正價拾錢壹厘 郵稅貳錢
一一二 ●和田合戰 市若丸初陣 ▲正價拾壹錢五厘 郵稅貳錢
一一三 ●比翼塚 長兵衛內 正價拾參錢六厘 郵稅貳錢
一一四 ●娵景清 日向島段 ▲正價拾五錢 郵稅貳錢
一一五 ●闇書待 幸內住家 ▲正價拾貳錢 郵稅貳錢
一一六 ●老婆餅 馬追の段 ▲正價四錢貳厘 郵稅貳錢
一一七 ●膝栗毛 赤坂並木 ▲正價拾錢五厘 郵稅貳錢

▲文藝雜著

●日本歌謠類聚　大和田建樹君著　長井金升君校訂　全二册脊皮上綴　中判　二〇四八頁　正價一册六拾錢　郵稅一册拾六錢

●俗曲大全　博文館編輯局編纂　全一册脊皮上綴　中判　一〇九〇頁　正價六拾錢　郵稅拾六錢

●聲曲自在　博文館編輯局編纂　彩色木版寫眞版挿入　全一册洋並綴　大判　二四八頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●琴曲獨稽古　彩色木版寫眞版挿入　蕉亭金升君著　全一册洋並綴　大判　二四八頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

●都々逸一千題　鶯亭長井金升君著　全一册紙皮上綴　小判　五六〇頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

〔風雅文庫〕　鶯亭長井金升君著　全六册紙皮上綴　袖珍小形美本　正價一册貳拾錢　郵稅一册四錢

第一編●都々逸の栞
第二編●冠句の栞
第三編●狂歌の栞
第四編●狂句の栞
第五編●狂躰句の栞
第六編●雜俳の栞

小說書類

▲新作小說

●紅葉全集　故尾崎紅葉君著　十千萬堂藏版　▲第一編正價壹圓八拾錢　全部六冊洋布上製　大判金文字入美本　郵稅拾六錢　第一編十二月中旬發行

●換菓篇　泉鏡花君外十四氏新作　全一冊新形美本　中判　三〇〇頁　正價六拾錢　郵稅六錢

●女道樂　村井弦齋君著　石版彩色密畫挿入　全一冊和裝上製　大判　四六六頁　正價八拾錢　郵稅拾貳錢

●酒道樂　村井弦齋君著　木版彩色密畫挿入　全二冊洋布上製　大判　五五四頁　正價一冊六拾五錢　郵稅一冊八錢

●露伴叢書　幸田露伴君著　全一冊洋布上製　大判　一八九〇頁　正價貳圓五拾錢　小包送六百匁

●新小說　社會主義　文明の大破壞　理學士依緣軒主人譯　全一冊洋並製　大判　四五四頁　正價四拾錢　郵稅八錢

●社會百面相　內田不知庵君著　全一冊洋並製　大判　五五四頁　正價五拾五錢　郵稅拾貳錢

●忘れがたみ　若松賤子女史遺稿　櫻井鷗村君編纂　全一冊洋布上製　中判　六三二頁　正價壹圓　郵稅八錢

●一葉全集　樋口一葉女史著　全一冊洋並製　大判　四八六頁　正價四拾錢　郵稅拾錢

●花鳥集　大橋乙羽君著　彩色木版密畫挿入　全一冊洋布上製　中判　一二八〇頁　五價壹圓　郵稅拾八錢

●初子集　大橋乙羽君著　彩色木版密畫挿入　全一冊洋布上製　小判　五九六頁　正價四拾錢　郵稅六錢

●風月集　大橋乙羽君著　彩色木版密畫挿入　全一冊洋布上製　小判　四二二頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

●若菜籠　大橋乙羽君著　彩色木版密畫挿入　全一冊和本製　小判　三二〇頁　正價貳拾八錢　郵稅四錢

●累卵の東洋　大橋乙羽君著　政治小說　全一冊洋並製　小判　二〇六頁　正價拾八錢　郵稅四錢

●ひげ男　幸田露伴君著　木版彩色密畫挿入　全一冊洋並製　大判　二四八頁　正價參拾錢　郵稅六錢

●女波男波　巖谷小波君著　寫眞銅版挿入　全一冊紙皮上製　小判　六二二頁　正價四拾錢　郵稅八錢

●笑　巖谷小波君著　寫眞銅版挿入　全一冊紙皮上製　小判　五三八頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

●戀　江見水蔭君著　寫眞銅版挿入　全一冊紙皮上製　小判　三八二頁　正價參拾錢　郵稅四錢

●星　江見水蔭君著　寫眞銅版挿入　全一冊紙皮上製　小判　六八四頁　賣價貳拾五錢　郵稅八錢

●月と梅　江見水蔭君著　寫眞銅版挿入　全一冊紙皮上製　小判　三六二頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

●筆と紙　石橋思案君著　全一冊紙皮上製　小判　五一六頁　賣價貳拾五錢　郵稅六錢

●山陰麒麟　福地櫻痴君著　寫眞銅版挿入　全一冊紙皮上製　小判　四六〇頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

▲飜譯小說

●椿姫　長田秋濤君著　コロタイプ及彩色寫眞銅版三葉挿入　全一冊洋並製　大判　四八〇頁　正價八拾五錢　郵稅拾貳錢　▲特製本　洋布上製正價金壹圓　郵稅拾四錢

●小公子　若松賤子女史譯述　肖像入　全一冊洋並製　大判　三七四頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

●十五少年　森田思軒君譯述　寫眞版及密畫入　全一冊洋並製　大判　二九六頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

○小說書類（飜譯小說、稗史小說）

文學士大町桂月君譯述
日露戰爭未來記 全一册洋竝綴 大判一五八頁 正價拾八錢 郵稅四錢

高橋光威君譯述
ロビンソン **絕島漂流記** 全一册洋竝綴 大判三二〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

押川春浪君著
傳奇小說 **銀山王** 全一册洋竝綴 小判三二七頁 正價參拾錢 郵稅六錢

押川春浪君譯述
海底軍艦 全一册紙皮上綴 小判三九八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

押川春浪君著
英雄小說 **武俠の日本** 全一册洋竝綴 小判四八二頁 正價四拾錢 郵稅六錢

押川春浪君譯述
海島探險 **塔中の怪** 全一册洋竝綴 小判三三二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

櫻井鷗村君譯述
勇少年冒險譚 **初航海** 全一册紙皮上綴 小判三一八頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

〔世界冒險譚〕

櫻井鷗村君著 中村不折君畫
全十二册洋竝綴 正價參拾錢
紙數一册二百五十頁以上
中判 口繪挿入 郵稅六錢

第一編 金堀少年
第二編 遠征奇談
第三編 二勇少年
第四編 續遠征奇談
第五編 決志少年
第六編 漂流少年

第七編 殖民少年
第八編 航海少年
第九編 不撓少年
第十編 朽木の舟
第十一編 俠勇少年
第十二編 絕島奇談

水田南陽外史譯述
魔法醫者 全一册紙皮上綴 小判三二〇頁 正價拾貳錢 郵稅四錢

文學博士元良勇次郎君評論 文學士戶澤姑射君譯述
愛と心 全一册洋竝綴 大判一一八頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

櫻井鷗村君譯 西洋木版密畫挿入
少看護婦 全一册洋竝綴 大判一三二頁 正價拾五錢 郵稅四錢

▲稗史小說

〔帝國文庫〕

▲全部五拾册 紙數壹册千頁 中判總クロース背皮金字入

▲正價金一册六拾錢 郵稅一册拾六錢宛

【全部書目】

第一編 眞書太閤記 卷一……博文館編輯局校訂
第二編 眞書太閤記 卷二……博文館編輯局校訂
第三編 眞書太閤記 卷三……博文館編輯局校訂
第四編 眞書太閤記 卷四……博文館編輯局校訂
▲附 太閤朝鮮軍記
第五編 源平盛衰記……博文館編輯局校訂
第六編 南總里見八犬傳 上卷……博文館編輯局校訂
第七編 南總里見八犬傳 中卷……博文館編輯局校訂
第八編 南總里見八犬傳 下卷……博文館編輯局校訂
第九編 東海、奥羽、木曾、江ノ島道中膝栗毛……博文館編輯局校訂
第十編 梅暦春告鳥……博文館編輯局校訂
第十一編 通俗三國志 上卷……博文館編輯局校訂
第十二編 通俗三國志 下卷……博文館編輯局校訂
第十三編 三馬傑作集……博文館編輯局校訂
第十四編 柳澤、越後、黑田、加賀、伊達騷動實記……博文館編輯局校訂
第十五編 京傳傑作集……博文館編輯局校訂
第十六編 種彥傑作集……博文館編輯局校訂

（四〇）

●第十七編　星月夜鎌倉顕晦録・北條九代記……博文館編輯局校訂
●第十八編　通俗十二朝軍談・通俗武王軍談……博文館編輯局校訂
●第十九編　甲越軍記……博文館編輯局校訂
●第二十編　通俗呉越軍談・通俗漢楚軍談……博文館編輯局校訂
●第二十一編　楠廷尉秘鑑……博文館編輯局校訂
●第二十二編　風來山人傑作集……博文館編輯局校訂
●第二十三編　西鶴全集　上卷……（發賣禁止）
●第二十四編　西鶴全集　下卷……（發賣禁止）
●第二十五編　滑稽名作集　上卷……博文館編輯局校訂
●第二十六編　滑稽名作集　下卷……博文館編輯局校訂
●第二十七編　其磧自笑傑作集　上卷……大橋乙羽君校訂
●第二十八編　其磧自笑傑作集　下卷……大橋乙羽君校訂
●第二十九編　人情本傑作集　上卷……博文館編輯局校訂
●第三十編　氣質全集……博文館編輯局校訂
●第三十一編　珍本全集　上卷……博文館編輯局校訂
●第三十二編　珍本全集　中卷……博文館編輯局校訂
●第三十三編　珍本全集　下卷……博文館編輯局校訂
●第三十四編　人情本傑作集　下卷……博文館編輯局校訂
●第三十五編　赤穗復讐全集……博文館編輯局校訂
●第三十六編　水滸傳　上卷……博文館編輯局校訂
●第三十七編　水滸傳　下卷……博文館編輯局校訂
●第三十八編　忠臣藏浄瑠璃集……幸堂得知君校訂
●第三十九編　四大奇書　上卷……博文館編輯局校訂
●第四十編　續氣質全集……博文館編輯局校訂
●第四十一編　四大奇書　下卷……博文館編輯局校訂
●第四十二編　近松時代浄瑠璃……饗庭篁村君校訂
●第四十三編　大岡政談……博文館編輯局校訂
●第四十四編　佛教各宗高僧實傳……博文館編輯局校訂
●第四十五編　仇討小説集……博文館編輯局校訂
●第四十六編　馬琴傑作集……博文館編輯局校訂
●第四十七編　浄瑠璃名作集……博文館編輯局校訂
●第四十八編　侠客傳全集……博文館編輯局校訂
●第四十九編　續仇討小説集……博文館編輯局校訂
●第五十編　近松世話浄瑠璃……饗庭篁村君校訂

▲全部五十冊　紙數壹冊千頁以上　洋裝中判クロース　背皮金文字入美本

續帝國文庫

▲正價金六拾錢　郵税拾六錢（小包送二百匁餘）

（既刊書目）

●第一編　眞田三代記　●附日本武士鑑……博文館編輯局校訂
●第二編　近世説美少年錄……博文館編輯局校訂
●第三編　日本歌謠類聚　上卷……大和田建樹君編
●第四編　日本歌謠類聚　下卷……大和田建樹君編
●第五編　修紫田舍源氏……博文館編輯局校訂
●第六編　竹田出雲浄瑠璃集……水谷不倒君校訂
●第七編　朝夷巡島記……博文館編輯局校訂
●第八編　兒雷也豪傑譚……博文館編輯局校訂

● 第九編 江戸作者淨瑠璃集……水谷不倒君校訂
● 第十編 前々太平記 ●附 前太平記……博文館編輯局校訂
● 第十一編 太平記……博文館編輯局校訂
● 第十二編 紀海音淨瑠璃集……水谷不倒君校訂
● 第十三編 續近松淨瑠璃集……水谷不倒君校訂
● 第十四編 近松半二淨瑠璃集……水谷不倒君校訂
● 第十五編 後太平記 ●附 北條五代記……博文館編輯局校訂
● 第十六編 脚本傑作集 上卷……（發賣禁止絕版）
● 第十七編 京山全集……博文館編輯局校訂
● 第十八編 校訂落語全集……石橋思案君校訂
● 第十九編 並木宗輔淨瑠璃集……水谷不倒君校訂
● 第二十編 紀行文集……故大橋乙羽君校訂
● 第二十一編 一九全集……博文館編輯局校訂
● 第二十二編 漂流奇談全集……石井研堂君校訂
● 第二十三編 邯鄲諸國物語……博文館編輯局校訂
● 第二十四編 校訂續紀行文集……岸上質軒君校訂
● 第二十五編 續水滸傳……田中従吾軒君 三木愛花君校訂
● 第二十六編 傾城水滸傳……博文館編輯局校訂
● 第二十七編 文耕堂淨瑠璃集……水谷不倒君校訂
● 第二十八編 白縫譚 上……博文館編輯局校訂
● 第二十九編 白縫譚 下……博文館編輯局校訂
● 第三十編 北雪美談時代鏡……博文館編輯局校訂
● 第三十一編 常山紀談……江見水蔭君校訂
● 第三十二編 萬物滑稽合戰記……石井研堂君校訂
● 第三十三編 續一九全集……博文館編輯局校訂
● 第三十四編 校訂黃表紙百種……幸堂得知君校訂
○ 第三十五編 校訂俳優全集……博文館編輯局校訂
● 第三十六編 校訂俗曲大全……長井金升君校訂
● 第三十七編 續々紀行文集……岸上質軒君校訂
● 第三十八編 續馬琴傑作集……博文館編輯局校訂
● 第三十九編 脚本傑作集 下卷……水谷不倒君校訂
● 第四十編 續京傳三馬傑作集……博文館編輯局校訂
● 第四十一編 釋迦八相倭文庫 上卷……博文館編輯局校訂
● 第四十二編 釋迦八相倭文庫 下卷……博文館編輯局校訂
● 第四十三編 種彥短編傑作集……幸堂得知君校訂
● 第四十四編 俊傑神稻水滸傳 上卷……博文館編輯局校訂
● 第四十五編 俊傑神稻水滸傳 中卷……博文館編輯局校訂
● 第四十六編 俊傑神稻水滸傳 下卷……博文館編輯局校訂
● 第四十七編 校訂近世奇談全集……法學士柳田國男君 田山花袋君校訂
● 第四十八編 校訂名家短篇傑作集……幸堂得知君校訂
● 第四十九編 佛教各宗 續高僧實傳……江見水蔭君校訂
● 第五十編 校訂名家漫筆集……博文館編輯局校訂

▲演劇脚本

福地櫻痴居士新作 肥後武士江戸藝者 **花盛劇楓葉** 全一册 洋地綴 菊判 一一八頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

福地櫻痴居士作 密畫挿入 **山中平九郎** 全一册 洋地綴 菊判 一六八頁 正價參拾錢 郵稅六錢

福地櫻痴居士作　密畫挿入
芳哉義士の譽
全一册洋並綴　大判一五二頁　正價參拾錢　郵稅六錢

高安月郊君譯述　イプセン作
社會劇
全一册洋並綴　大判四〇〇頁　正價八拾錢　郵稅拾錢
▲特製本　洋布上綴　正價壹圓　郵稅拾貳錢

水谷不倒君校訂
脚本傑作集　上卷
洋裝脊皮上綴　中判一〇八〇頁（發賣禁止）

同　下卷
洋裝脊皮上綴　中判一一六〇頁　正價六拾錢　郵稅拾六錢

▲講談落語

石橋思案君校訂
落語全集
全一册脊皮上綴　中判一〇九二頁　正價六拾錢　郵稅拾四錢

依田學海君校閲　伯圓講演
菅公
全一册洋並綴　大判二五四頁　正價參拾五錢　郵稅六錢

松林伯圓翁講演　御前講談　寫眞銅版挿入
中山大納言
全一册紙皮上綴　小判三七四頁　正價貳拾五錢　郵稅四錢

鶯亭金升君著　新撰落語
福
全一册紙皮上綴　小判三一二頁　正價參拾錢　郵稅四錢

家事書類

▲家政及手藝

華族女學校學監下田歌子女史著
家政學
全二册和並綴　大判四三〇頁　正價一册參拾錢　郵稅一册六錢

岸上操君著　彩色木版寫眞銅版挿入
家政案内
全一册洋並綴　大判二五六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

華族女學校學監下田歌子女史著
家事要訣
全一册和並綴　小判二八二頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

三浦智之君著
實用家事經濟學
全一册紙皮上綴　小判一八四頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

華族女學校學監下田歌子女史著
女子手藝要訣
全一册和並綴　大判二六二頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

飯田呉服店主任小岩井規太郎君、同副主任鹽田眞三君合著
實用裁縫全書
全一册和並綴　大判約二六六頁　正價五拾錢　郵稅八錢

吉田調子君著　彩色寫眞銅版挿入
裁縫と編物
全一册洋並綴　大判二六二頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

博文館編輯局編纂　彩色木版寫眞銅版挿入
衣服と流行
全一册洋並綴　大判二三六頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

▲禮式及料理法

坪谷善四郎君著　彩色木版寫眞銅版挿入
增訂 日本女禮式大全
全一册洋布上綴　大判五九二頁　正價九拾錢　郵稅拾六錢
◇蒔繪函入特製和上綴　正價壹圓貳拾錢　小包送四百匁

華族女學校學監下田歌子女史著
女子普通禮式
全一册和並綴　大判二六二頁　正價參拾五錢　郵稅八錢

大橋乙羽君著　彩色木版寫眞銅版挿入
和洋禮式
全一册洋並綴　大判二四八頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

中島義式君著
新撰女子作法書
全一册洋並綴　大判一四〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

- 新撰小學女禮式　中島毅式君著　密畫挿入　全一册　洋　並綴　大判　二二〇頁　正價貳拾五錢　郵税六錢
- 料理手引草　華族女學校學監下田歌子女史著　彩色木版寫眞銅版挿入　全一册　洋　並綴　大判　三三〇頁　正價參拾五錢　郵税八錢
- 實用料理法　藤本藤陰君著　彩色木版寫眞版挿入　全一册　洋　並綴　大判　二八四頁　正價貳拾五錢　郵税六錢
- 西洋料理法　佐々木孝君著　全一册　洋　並綴　大判　二五四頁　正價貳拾五錢　郵税六錢
- 八百善料理通　八百善主人著　全一册　和装　中本　和紙刷　正價參拾五錢　郵税六錢
- 漬物早指南　小田原屋主人編　全一册　和装　中本　和紙刷　正價拾貳錢　郵税四錢
- 料理早指南　醍醐山人編　全二册　和装　中本　和紙刷　正價貳拾五錢　郵税六錢
- 料理いろは庖丁　風羅山人編　全一册　和装　中本　和紙刷　正價拾八錢　郵税四錢

△婦女必讀雜著

- 女學生訓　文學士大町桂月君著　全一册　紙皮上綴　小判　二五六頁　正價貳拾五錢　郵税四錢
- 女學生の栞　松原岩五郎君著　全一册　洋　並綴　中判　三三〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢
- 女訓評釋　千河岸櫻所君評釋　全一册　和　上綴　大判　四二六頁　正價六拾錢　郵税拾錢
- 下女讀本　村井弦齋君著　繪入　全一册　洋　並綴　大判　一一〇頁　正價拾五錢　郵税四錢
- 家庭教育　華族女學校學監下田歌子女史著　泰西所見　全一册　和　並綴　大判　二五二頁　正價參拾五錢　郵税八錢
- 家庭の必得　華族女學校學監下田歌子女史著　全一册　和　並綴　大判　二六八頁　正價參拾五錢　郵税六錢
- 學校の心得　華族女學校學監下田歌子女史著　全一册　和　並綴　大判　二三〇頁　正價參拾五錢　郵税六錢
- 母親の心得　華族女學校學監下田歌子女史著　全一册　和　並綴　大判　二六八頁　正價參拾五錢　郵税八錢
- はゝのつとめ　醫學博士三島通良君著　全一册　洋布上綴　大判　三一二頁　正價七拾五錢　郵税拾錢
- 育兒と衞生　西田敬止君著　彩色木版寫眞版挿入　全一册　洋　並綴　大判　二四四頁　正價貳拾五錢　郵税六錢
- 婦女家庭訓　華族女學校學監下田歌子女史著　全一册　和　並綴　大判　三六二頁　正價參拾五錢　郵税八錢
- 日本女子立志編　千河岸櫻所君編　木版彩色口繪挿入　全二册　和　並綴　大判　七三六頁　正價一册六拾錢　郵税一册八錢
- 帝國女子修身鑑　東京女學館講師西田敬止君著　全四册　和　並綴　大判　四二四頁　實價一册拾錢　郵税一册貳錢
- 外國少女鑑　華族女學校學監下田歌子女史著　全一册　和　並綴　大判　二三八頁　正價參拾五錢　郵税六錢
- 內國少女鑑　華族女學校學監下田歌子女史著　全一册　和　並綴　大判　二二八頁　正價參拾五錢　郵税六錢
- 庭訓お伽噺　華族女學校學監下田歌子女史著　全一册　和　並綴　大判　二三四頁　正價參拾五錢　郵税六錢

遊戯書類

▲遊技及體操

書名	著者	體裁	定價
お伽噺教艸	華族女學校學監下田歌子女史著	全一册和並綴 大判 二四二頁	正價參拾五錢 郵税六錢
女子遊戯の栞	華族女學校學監下田歌子女史著	全一册和並綴 大判 二三〇頁	正價參拾五錢 郵税八錢
婦女教育明治姫鏡	濱木義顯君著　彩色木版密畫挿入	全一册和紙刷 大判 三一四頁	正價六拾錢 郵税六錢
明治才媛美譚	熊田宗次郎君著　寫眞版十二葉挿入	全一册紙皮上綴 中判 六〇六頁	正價五拾錢 郵税八錢
明治閨秀美譚	鈴木光次郎君編	全一册洋並綴 小判 一七二頁	正價拾貳錢 郵税貳錢
明治の令嬢	讀賣新聞記者 關如來君著　寫眞版十二葉挿入	全一册洋並綴 中判 一八二頁	正價參拾五錢 郵税四錢
現代女氣質	櫻井鴎村君著	全一册紙皮上綴 小判 三八〇頁	正價參拾五錢 郵税四錢
新案福引種本	石橋思案君序文 加野孤雁君編	全一册新形美本 中判 一六〇頁	正價拾八錢 郵税四錢
内外遊戯法	上村左川君編纂　彩色木版密畫挿入	全一册洋並綴 大判 二五〇頁	正價貳拾五錢 郵税六錢

書名	著者	體裁	定價
劍舞術教範	神刀流劔舞開祖日比野正吉君著　密畫挿入	全一册洋並綴 中判 一九四頁	正價拾八錢 郵税四錢
相撲大觀	三木愛花君 山田春塘君共編　力士寫眞版挿入	全一册洋並綴 中判 三二四頁	正價[illegible]拾八錢 郵税六錢
相撲新書	上司子介君著　寫眞銅版挿入	全一册紙皮上綴 小判 三二三頁	正價貳拾五錢 郵税四錢
相撲と芝居	上司子介君 山岸荷葉君合著　寫眞銅版挿入	全一册洋並綴 大判 二三六頁	正價貳拾五錢 郵税六錢
全國兒童遊戯法	太田才次郎君著	全三册洋並綴 大判 四五〇頁	實價一册拾錢 郵税一册四錢
昆虫採集	農科大學安藤謙吉君著	全一册洋並綴 小判 一五〇頁	正價拾貳錢 郵税貳錢
ボート競漕	法科大學遠山熙君著	全一册洋並綴 小判 一四〇頁	正價拾貳錢 郵税貳錢
新游泳術	稻田實君著	全一册洋並綴 小判 一三六頁	正價拾貳錢 郵税貳錢
ベースボール クリツケツト	津田素彦君著	全一册洋並綴 小判 一八〇頁	正價拾貳錢 郵税貳錢
庭球術	野田圭園君著	全一册洋並綴 小判 一五〇頁	實價八錢 郵税貳錢
銃獵案内	佐野信三郎君 内藤健行君合著	全一册洋並綴 小判 一九六頁	正價拾貳錢 郵税貳錢
鳥獸狩獵法	志岐守二君著	全一册洋並綴 小判 一四八頁	實價八錢 郵税貳錢
漁魚術	滿尾藤次郎君著	全一册洋並綴 小判 一二〇頁	實價八錢 郵税貳錢

遠山熙君著
●馬術　全一冊洋並綴 小判一三二頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

志岐守二君著
●陸上競走　全一冊洋並綴 小判一五二頁　賣價八錢 郵税貳錢

三井末彦君著
●蹴鞠と自轉車　全一冊洋並綴 小判一二六頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

津田素彦君著
●射的術及弓術　全一冊洋並綴 小判一二〇頁　賣價八錢 郵税貳錢

志岐守二君著
●室內遊戲法　全一冊洋並綴 小判一三二頁　正價拾貳錢 郵税貳錢

西川政憲君著
育兒體育 ●健康要訣　全一冊紙皮上綴 小判一二〇頁　正價參拾錢 郵税四錢

破竹居士著
●健康と遠足　全一冊紙皮上綴 小判二三二頁　正價參拾錢 郵税四錢

博文館編輯局編纂
●易占及骨相法　寫眞銅版挿入　全一冊洋並綴 大判二六〇頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

澁江保君著
西洋秘傳 ●魔術　全一冊洋並綴 大判三五〇頁　正價參拾錢 郵税八錢

博文館編輯局編纂
●秘術傳法　彩色木版密畫寫眞版挿入　全一冊洋並綴 大判二六〇頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

▲圍碁

中川龜三郎君、小林鐵次郎君、巖崎健造君合著
●圍碁大鑑　全二冊和上綴 大判二〇〇頁　正價五拾錢 郵税六錢

十七世本因坊土屋秀榮君校訂　山田權平君著
●新撰圍碁錦囊　全三冊和上綴 小判三一八頁　正價五拾錢 郵税四錢

方圓社員六段大澤銀次郎君編
●絶妙秘訣 圍碁獨習案內　全三冊和並綴 小判一〇一枚　正價參拾五錢 郵税四錢

方圓社員六段大澤銀次郎君編纂、田村音兵衛君補輯
●新撰定石 圍碁獨稽古　全三冊和並綴 小判一〇七枚　正價參拾五錢 郵税六錢

故七段小林鐵次郎君遺稿　男二段小林鍵太郎君編述
●圍碁全書 圍碁入門　全一冊和並綴 中判八六頁　正價拾五錢 郵税貳錢

●圍碁全書 圍碁初歩　全一冊和並綴 中判八〇頁　正價拾五錢 郵税貳錢

●圍碁全書 圍碁定石　全一冊和並綴 中判八二頁　正價拾五錢 郵税貳錢

●圍碁全書 圍碁詰方　全一冊和並綴 中判八八頁　正價拾五錢 郵税貳錢

●圍碁全書 圍碁布石法　全一冊和並綴 中判八四頁　正價拾五錢 郵税貳錢

●圍碁全書 評釋 古今名家打碁集　全一冊和並綴 中判八五頁　正價拾五錢 郵税貳錢

●圍碁全書 互先定石集　全三冊和並綴 中判二五六頁　正價一冊拾五錢 郵税一冊貳錢

●圍碁全書 近古名人打碁集　全一冊和並綴 中判八六頁　正價拾五錢 郵税貳錢

●圍碁全書 近世名人打碁集　全一冊和並綴 中判八八頁　正價拾五錢 郵税貳錢

●圍碁全書 今代名人打碁集　全一冊和並綴 中判八八頁　正價拾五錢 郵税貳錢

平田純一郎君編述
●圍碁と將棊　彩色木版寫眞銅版挿入　全一冊洋並綴 大判二三八頁　正價貳拾五錢 郵税六錢

▲茶の湯及生花

岡崎淵沖君著 江剌家協一君著
各傳比較 點茶活法 全四冊和上綴帙入 大判七〇〇頁 正價貳圓五十錢 小包送六百匁

茶の湯大全 全一冊洋布上綴 中判五〇八頁 實價六拾錢 郵税八錢

博文館編輯局編纂
茶の湯と生花（彩色木版寫眞銅版挿入）（優雅木版畫）全一冊洋並綴 大判二五八頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

壯月齋恩一烏君編纂
挿花盆石 四時の詠（優雅木版畫）全三冊和紙上綴 大判一四〇枚 正價五拾錢 郵税六錢

秀貫齋月一陶君編纂
挿花盆石 正風花鏡 全三冊和紙上綴 大判二〇二枚 正價五拾錢 郵税六錢

榮雲齋先生編
挿花大樂抄圖會 全二冊和裝木版 美濃紙刷 正價四十錢 郵税六錢

大霞庵河村一洗君選
新撰活花圖式 全二冊木版 美濃紙刷 正價四拾錢 郵税六錢

江原春夢君著
盆景、盆石 盆山、盆庭 秘訣圖解 全一冊洋並綴 大判二二〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

順石軒翁編
盆山百景圖 全四冊和紙上綴 大判木版刷 正價壹圓四錢 郵税拾錢

中島信義君著
草木實驗 盆栽仕立秘法（木版密畫數十個挿入）全一冊洋並綴 大判一八一頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

文學士大町桂月君著 中川蘆舟君畫
少年世界定期增刊 日本少年傳 全一冊洋並綴 中判美本 正價拾五錢 郵税壹錢五厘

中村經年君編
論孫子童觀抄 全十三冊 和裝大本 正價壹圓八拾錢 小包送四百匁

大和田建樹君著
日本歷史譚（每册有名畫伯密畫十數個挿入）全廿四册洋並綴 大判各八〇餘頁 正價一册八錢 郵税一册貳錢

第一編 日本開闢
第二編 畝傍山
第三編 三韓征伐
第四編 聖德太子
第五編 菅公
第六編 九郎判官
第七編 曾我兄弟
第八編 惡七兵衛
第九編 相模太郎
第十編 楠公
第十一編 日蓮
第十二編 大塔宮
第十三編 豐太閤
第十四編 七本鎗
第十五編 關ヶ原
第十六編 水戸黄門
第十七編 四十七士
第十八編 平田篤胤
第十九編 櫻田門外
第二十編 七卿落
第廿一編 彰義隊
第廿二編 城山
第廿三編 平壤
第廿四編 威海衛

故落合直文 池邊義象 兩君著 畫伯數名密畫入
家庭教育歷史讀本 花の白雲 全一冊洋並綴 大判一九二頁 正價拾八錢 郵税四錢
家庭教育歷史讀本 卯花月夜 全一冊洋並綴 大判二一四頁 正價拾八錢 郵税四錢
家庭教育歷史讀本 紅葉の錦 全一冊洋並綴 大判二一〇頁 正價拾八錢 郵税四錢
家庭教育歷史讀本 枯野の雪 全一冊洋並綴 大判二三六頁 正價拾八錢 郵税四錢

少年書類

▲少年史傳

▲少年文學

〔少年文學〕

▲全部參拾貳冊
中判和綴
錦繪及密畫入
各百六拾頁以上

▲正價一冊金拾貳錢郵稅一冊貳錢宛

- ●第一編　こがね丸……巖谷小波君著
- ●第二編　二人むく助……故尾崎紅葉君著
- ●第三編　今辨慶……江見水蔭君著
- ●第四編　維新三傑……川崎紫山君著
- ●第五編　雨の日ぐらし……山田美妙君著
- ●第六編　寶の山……川上眉山君著
- ●第七編　二宮尊德翁……幸田露伴君著
- ●第八編　姉と弟……嵯峨の舍君著
- ●第九編　當世少年氣質……巖谷小波君著
- ●第十編　親の恩……宮崎三昧君著
- ●第十一編　紀文大盡……村井弦齋君著
- ●第十二編　大石良雄……原抱一君著
- ●第十三編　暑中休暇……巖谷小波君著
- ●第十四編　近江聖人……村井弦齋君著
- ●第十五編　河村瑞賢……高橋太華君著
- ●第十六編　甲子待……南新二君著
- ●第十七編　太閤秀吉……高橋太華君著
- ●第十八編　德川家康……矢部五洲君著
- ●第十九編　俠黑兒……故尾崎紅葉君著
- ●第二十編　陸奥の長者……幸堂得知君著
- ●第廿一編　新太郎少將……高橋太華君著
- ●第廿二編　賴山陽……三宅靑軒君著
- ●第廿三編　上杉鷹山公……故大橋乙羽君著
- ●第廿四編　菅相丞……遲塚麗水君著
- ●第廿五編　日蓮上人……幸田露伴君著
- ●第廿六編　五少年……中村花瘦君著
- ●第廿七編　二代忠孝……武田仰天君著
- ●第廿八編　平賀源内……水谷不倒君著
- ●第廿九編　高山彥九郎……村上浪六君著
- ●第三十編　寧馨兒……石橋思案君著
- ●第卅一編　加藤淸正……江見水蔭君著
- ●第卅二編　契沖阿闍梨……宇田川文海君著

●巖谷小波君作、久保田米齋君密畫、寫眞製版八葉挿入
お伽芝居　**春若丸**　全一冊洋並綴　中判一七六頁　正價拾錢　郵稅壹錢

●巖谷小波君、武田櫻桃君、木村小舟君合作　春帆君密畫、寫眞製版八葉添
お伽小說　**海陸大王**　全一冊洋並綴　中判一八二頁　正價拾錢　郵稅壹錢五厘

●江見水蔭君作　古洞君密畫　寫眞製版八葉挿入
暑中大探檢　全一冊洋並綴　中判美本　正價拾錢　郵稅壹錢五厘

▲少年理科書

石井研堂君著（有名畫家密畫十數個挿入）

〔理科十二ケ月〕（全十二冊洋並綴　大判各凡九〇頁）正價一冊拾錢　郵稅一冊貳錢

●第一編　颶風船
●第二編　雪達磨
●第三編　花の錦
●第四編　汐干狩
●第五編　植物園
●第六編　蜻蛉祭
●第七編　游泳臺
●第八編　富士詣
●第九編　暴風雨
●第十編　銃獵者
●第十一編　幻燈會
●第十二編　歸省錄

木村小舟君著　石版密畵四葉挿入
●春夏秋冬理科手引草　全一册洋並綴　大判三二四頁　正價參拾八錢　郵稅八錢

木村小舟君著
●理科春秋　全一册洋並綴　大判一八六頁　正價貳拾錢　郵稅四錢

博文館編輯局編纂　寫眞銅版數多挿入
●植物園　全一册洋並綴　大判一三六頁　正價拾錢　郵稅壹錢五厘

同　同
●動物園　全一册洋並綴　大判一三六頁　正價拾錢　郵稅壹錢五厘

藥學得業士金澤嚴君著　寫眞版挿入
●寫眞及幻燈　全一册洋並綴　大判二四〇頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

橋本奇策君著
●實驗應用寫眞術　全一册洋並綴　小判一八〇頁　正價拾錢　郵稅貳錢

▲少年叢書

少年世界編輯部編纂（彩色各國徽章其他口繪十數葉挿入）
●明治少年節用　全一册洋布上綴　新形中判六百頁　正價七拾五錢　郵稅拾貳錢

堀江秀雄君著
●夜學讀本　全一册洋並製　大判一八八頁　正價貳拾五錢　郵稅六錢

幼年書類

▲幼年讀本

巖谷小波君編（每卷名家密畫挿入）

●幼年讀本日本歴史　全一册洋並綴　大判一四〇頁　正價拾五錢　郵稅四錢
●幼年讀本世界歴史　全一册洋並綴　大判一三八頁　正價拾五錢　郵稅四錢
●幼年讀本日本地理　全一册洋並綴　大判一一八頁　正價拾五錢　郵稅四錢
●幼年讀本世界地理　全一册洋並綴　大判一二〇頁　實價拾錢　郵稅四錢
●幼年讀本日本立志談　全一册洋並綴　大判一二〇頁　正價拾五錢　郵稅四錢
●幼年讀本世界立志談　全一册洋並綴　大判一二〇頁　實價拾錢　郵稅四錢
●新年狂言春駒　全一册和並綴　中判一二八頁　實價五錢　郵稅四錢

巖谷小波君著（有名畫家密畫十數個挿入）
〔日本昔噺〕　全廿四册洋並綴　大判極彩色表紙　正價一册五錢　郵稅一册貳錢

一編●桃太郎
二編●玉の井
三編●猿蟹合戰
四編●松山鏡
五編●花咲爺
六編●大江山
七編●舌切雀
八編●俵藤太
九編●かち〱山
十編●瘤取
十一編●物臭太郎
十二編●文福茶釜
十三編●八頭の大蛇
十四編●兎と鰐

十五編●羅生門
十六編●猿と海月
十七編●安達ヶ原
十八編●浦島太郎
十九編●一寸法師

二十編●金太郎
廿一編●雲雀山
廿二編●猫の草紙
廿三編●牛若丸
廿四編●鼠の嫁入

巖谷小波君著（有名畫家密畫拾數個挿入）
日本お伽噺
全廿四册洋並綴　大判極彩色表紙　正價一册六錢　郵税一册貳錢

一編●八咫烏
二編●田村將軍
三編●玉取
四編●源三位
五編●八幡太郎
六編●武藏坊
七編●一休和尚
八編●東照宮
九編●姨捨山
十編●川中島
十一編●玄武門
十二編●白虎隊

十三編●鎭西八郎
十四編●最明寺
十五編●朝比奈
十六編●櫻井驛
十七編●草薙劍
十八編●日吉丸
十九編●文覺上人
二十編●和唐内
廿一編●高千穗
廿二編●鬼童丸
廿三編●熊本城
廿四編●宇治川

巖谷小波君編（毎編有名畫家密畫數十個挿入）
世界お伽噺
全百册洋並綴　大判極彩色表紙　正價一册八錢　郵税一册貳錢

第一編●世界の始
第二編●五色の石
第三編●珊瑚島

第四編●魔法博士
第五編●無人島大王
第六編●鬼婆と少女

第七編●法螺先生
第八編●二人王子
第九編●小人島
第十編●孫悟空
第十一編●驢馬姫
第十二編●大人國
第十三編●豫言書
第十四編●王城乘取
第十五編●續法螺先生
第十六編●猿智惠小僧
第十七編●酋長征伐
第十八編●夢の三郎
第十九編●鷲の踊
第二十編●光明姫
第廿一編●鷄の使
第廿二編●火の車
第廿三編●三人片輪
第廿四編●白い鳥
第廿五編●消炭太郎
第廿六編●十二王妃
第廿七編●狐の裁判（上）
第廿八編●狐の裁判（下）
第廿九編●奇躰の洋燈
第三十編●獵師大臣
第卅一編●九重塔
第卅二編●虹の橋

第卅三編●魔法の卵
第卅四編●岩の船
第卅五編●鐵の王子
第卅六編●鐵の猿
第卅七編●浮かれ胡弓
第卅八編●豆の王
第卅九編●三つの難題
第四十編●德利長者
第四十一編●梨の殿樣
第四十二編●黑足小僧
第四十三編●黄金の船
第四十四編●幸福の花
第四十五編●大洪水
第四十六編●刀三本
第四十七編●石の行方
第四十八編●手無し姫
第四十九編●啞の女王
第五十編●骸骨島
第五十一編●三筋の金髮
第五十二編●鬼大名
第五十三編●魔法學校
（續刊）
第五十四編●綠の小鳥
第五十五編●森の女王

巖谷小波君作（武内桂舟君畫）

明治お伽噺

▲正價一冊金拾貳錢　郵税一冊四錢宛

▲全部拾貳冊　大判洋裝並綴　毎月壹回發行

（既刊書目）

第壹編●お伽十番
第貳編●お伽三幅對
第參編●新八犬傳（上）
第四編●新八犬傳（下）
第五編●お伽四天王（上）
第六編●お伽四天王（下）
第七編●新伊蘇普物語
第八編●お伽十二支（上）

（續刊）

第九編●お伽十二支（下）
第十編●お伽洋行船（上）
第十一編●お伽洋行船（下）
第十二編●お伽立志噺

教訓繪ばなし

▲正價一冊金五錢　郵税一冊貳錢宛

▲全部廿四冊　洋裝大判色刷　毎月貳回發行　密畫數拾個挿入

（既刊書目）

第壹編●家庭の卷……武田櫻桃君編
第貳編●お噺の卷……木村小舟君編
第參編●海軍の卷……武田櫻桃君編
第四編●陸軍の卷……木村小舟君編
第五編●動物の卷……武田櫻桃君編
第六編●植物の卷……木村小舟君編
第七編●ポンチの卷……武田櫻桃君編
第八編●遊戲の卷……木村小舟君編
第九編●地理の卷……武田櫻桃君編
第十編●歷史の卷……木村小舟君編
第十一編●立志の卷……武田櫻桃君編
第十二編●冒險の卷……木村小舟君編
第十三編●修身の卷……武田櫻桃君編
第十四編●お伽の卷……木村小舟君編
第十五編●戰爭の卷……武田櫻桃君編
第十六編●逸話の卷……木村小舟君編
第十七編●奇談の卷……武田櫻桃君編

（續刊）

第十八編●娯樂の卷
第十九編●理化の卷
第二十編●博物の卷
第廿一編●發明の卷
第廿二編●衛生の卷
第廿三編●天文の卷
第廿四編●地文の卷

理科書類

▲理化及天文

● 理學士鶴高德平君著 **有機化學** 全一冊洋並製 大判四〇〇頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

● 理學士眞島利行君著 **無機化學** 全一冊洋並製 大判三五四頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

● 工學士鳥居休夫君著 **中等教育有機化學** 全一冊脊皮上製 中判四二〇頁 正價四拾錢 郵税八錢

● 藤野條吉君、花井七三郎君、草野堅藏君共著 **通俗理化一斑** 全一冊洋並製 大判三三〇頁 正價參拾錢 郵税八錢

● 武田櫻桃君編 **新撰化學問答** 全一冊紙皮上製 小判二六八頁 正價貳拾錢 郵税四錢

● 寺崎留吉君編 **新撰物理學問答** 全一冊紙皮上製 小判二〇二頁 正價貳拾錢 郵税四錢

● 理學士須藤傳次郎君著 **星學** 全一冊洋並製 大判三三二頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

● 理學士岡田武松君著 **近世氣象學** 全一冊洋並製 大判三三八頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

● 理學博士横山又次郎君著 **天文講話** 木版挿畫九十九個入 全一冊洋布上製 大判二八四頁 正價壹圓拾錢 郵税八錢

● 理學士鹽野敬三郎君編 **科學藝術純正寫眞術** 全一冊洋皮上製 中判凡三五〇頁 正價壹圓 郵税八錢

▲博物學

● 第二高等學校教授理學士安田篤君著 **增補訂正植物學汎論** 密畫挿入 全一冊脊皮上製 大判六四八頁 正價貳圓 郵税拾六錢

● 理學士飯塚啓君著 **植物學新論** 全一冊洋並製 大判三一四頁 正價四拾錢 郵税八錢
▲特製本 洋布上製 正價五拾五錢 郵税拾錢

● 高橋章臣君著 **中等教育博物階梯** 全一冊洋布上製 大判七六頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

● 理學士會田龍雄君著（上下二册正價同一） **新撰動物學** 全二冊洋並製 大判五六〇頁 正價一册四拾錢 郵税一册八錢
▲特製本 洋布上製 正價一册五拾五錢 郵税一册拾錢

● 川村守義君著 **通俗動物學** 密圖入 全一冊洋並製 大判三〇〇頁 賣價貳拾錢 郵税八錢

● 永島長五郎君著 **通俗昆蟲學** 全一冊洋並製 大判二八〇頁 正價參拾錢 郵税八錢

● 寺崎留吉君編 **新撰動植物學問答** 全一冊紙皮上製 小判二二六頁 正價貳拾錢 郵税四錢

● 寺崎留吉君編 **新撰鑛物地質問答** 全一冊紙皮上製 袖珍金字入美本 正價貳拾錢 郵税四錢

哲學書類

▲倫理及心理學

文學士蟹江義丸君著
倫理學
全一册 洋並綴 正價四拾錢
大判 三三〇頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

足立栗園君著
通俗倫理學
全一册 洋並綴 正價貳拾五錢
大判 三三八頁 郵稅八錢

木村鷹太郎君著
東洋倫理學史（全二册）下卷近刊
上卷洋布上綴 正價貳圓八拾錢
大判一〇二四頁「小包送四百匁

木村鷹太郎君著
東洋 西洋 倫理學史
全一册 洋並綴 正價四拾錢
大判 三五八頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾錢 郵稅拾錢

綱島榮一郎君著
西洋倫理學史
全一册 背皮上綴 正價壹圓參拾錢
大判 五六四頁 郵稅拾四錢

文學博士元良勇次郎君著
現今 將來 倫理及宗教
全一册 洋並綴 正價五拾錢
大判 一八六頁 郵稅六錢

綱島榮一郎君補譯
快樂派倫理
全一册 洋並綴 正價五拾五錢
大判 二四八頁 郵稅六錢

德谷豐之助君編
新撰 心理論理問答
全一册 紙皮上綴 正價貳拾錢
小判 二七六頁 郵稅四錢

永廻藤一郎君編
新撰 倫理教育問答
全一册 紙皮上綴 正價貳拾錢
小判 二五六頁 郵稅四錢

文學博士加藤弘之君著
增補 改訂 道德法律進化の理
全一册 洋並綴 正價五拾錢
大判 四三〇頁 郵稅八錢

文學士速見滉君著
心理學
全一册 洋並綴 正價四拾錢
大判 三一六頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

▲宗教

法學士工藤重義君著
世界宗教制度論
全一册 洋並綴 正價四拾錢
大判 三四二頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學博士姉崎正治君著
宗教學概論
全一册 背皮上綴 正價壹圓五拾錢
大判 六〇〇頁 郵稅拾六錢

文學博士姉崎正治君著
宗教哲學
全一册 洋並綴 正價四拾錢
大判 四〇〇頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

文學博士姉崎正治君著
上世印度宗教史
全一册 洋布上綴 實價五拾錢
大判 三〇四頁 郵稅八錢

文學士加藤玄智君著
宗教新論
全一册 洋布上綴 實價七拾錢
大判 四八四頁 郵稅拾錢

文學士加藤玄智君著
世界宗教史
全一册 洋並綴 正價四拾錢
大判 三一六頁 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

內山正如君 瑜伽理圓君著 寫眞版挿入
世界宗教一斑
全一册 洋並綴 正價貳拾五錢
大判 二六〇頁 郵稅六錢

淵御日錢君著
活ける法華經
全一册 洋並綴 正價參拾錢
大判凡一六〇頁 郵稅四錢

▲參考雜著

- 醫學士近藤常次郎君著　**臥三年**　全一冊 大判 二五二頁 洋並綴　正價參拾五錢 郵税八錢
- 兆民居士中江篤介君著　**一年有半**　全一冊 大判 二八八頁 洋並綴　正價參拾五錢 郵税八錢
- **續一年有半**　▲一名無神無靈魂　全一冊 大判 三六六頁 洋並綴　正價參拾八錢 郵税八錢
- 文學博士加藤弘之君著　**天則百話**　全一冊 大判 三〇八頁 洋並綴　正價參拾錢 郵税六錢
- 文博博士井上哲次郎君述　**巽軒講話集**（初篇）　全一冊 大判 五四〇頁 洋並綴　正價七拾錢 郵税拾貳錢
- 文學博士井上圓了君述　**巽軒講話集**（貳篇）　全一冊 大判 六四〇頁 洋並綴　正價八拾錢 郵税拾四錢
- 男爵石黑忠悳君著　**甫水論集**　全一冊 大判 四一二頁 洋並綴　正價五拾錢 郵税拾錢
- 男爵楫羽美靜君著　**況翁閑話**　附況翁談片　全一冊 大判 三〇〇頁 洋並綴　正價貳拾五錢 郵税六錢
- **人事百話**　全一冊 大判 二四〇頁 洋並綴　正價貳拾錢 郵税四錢

教育書類

▲教育學

- 文學士熊谷五郎君著　**教育學**　全一冊 大判 三八二頁 洋並綴　正價四拾錢 郵税八錢
  ▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢 郵税拾錢
- 永持德一君著　**通俗教育學**　全一冊 大判 三一二頁 洋並綴　正價貳拾錢 郵税八錢
- 文學士中野禮四郎君著　**東洋 西洋 教育史**　全一冊 大判 三一〇頁 洋並綴　正價四拾錢 郵税八錢
  ▲特製本　洋布上綴　正價五拾五錢 郵税拾錢

▲試驗問答及學校案内

- 博文館編輯局編纂　官私立諸學校　**就學案内**　寫眞版挿入　全一冊 大判 二四〇頁 洋並綴　正價貳拾五錢 郵税六錢

〔受驗問答叢書〕　全廿四冊 小判 紙皮 金文字入　正價一冊貳拾錢 郵税一冊四錢

（既刊書目）

- 第一編　新撰日本地理問答……上村左川君編
- 第二編　新撰日本歷史問答……宮田修君編
- 第三編　新撰世界地理問答……武田櫻桃君編
- 第四編　新撰東洋歷史問答……松原岩五郎君編
- 第五編　新撰西洋歷史問答……長谷川誠也君編
- 第六編　新撰國文問答……鷹野勇雄君編
- 第七編　新撰漢文問答……太田才次郎君編
- 第八編　新撰算術問答……竹貫登代多君編
- 第九編　新撰代數問答……竹貫登代多君編
- 第十編　新撰幾何問答……竹貫登代多君編

- ●第十一編 新撰化學問答……武田櫻桃君編
- ●第十二編 新撰物理問答……上村左川君編
- ●第十三編 新撰動植物學問答……寺崎留吉君編
- ●第十四編 新撰地文天文問答……木村定次郎君編
- ●第十五編 新撰法制經濟問答……中村重造君編
- ●第十六編 新撰文官普通及裁判所書記試驗問答……小野拓君編
- ●第十七編 新撰倫理教育問答……永頭藤一郎君編
- ●第十八編 新撰鑛物地質問答……寺崎留吉君編
- ●第十九編 新撰心理論理問答……德谷豐之助君編
- ●第二十編 新撰和英文典問答……上村貞子君編
- ●第廿一編 新撰農業要項問答……志岐農學士編

▲修身及立志

- ●改正 西國立志編　文學博士中村正直君譯述　全一册 洋並製 中判 六〇八頁　正價貳拾七錢 郵稅八錢
- ●益軒十訓　東京女學館教授西田敬止君編　全一册 脊紙上製 中判 一一〇二頁　正價壹圓 郵稅拾六錢
- ●言行要錄　慶應義塾教授菅綠蔭君著　全一册 紙皮上製 中判 二六八頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- ●成功要錄　慶應義塾教授菅綠蔭君著　全一册 紙皮上製 中判 二二〇頁　正價貳拾八錢 郵稅四錢
- ●偉人修養錄　風間禮助君著　全一册 洋並製 中判 四〇八頁　正價四拾錢 郵稅八錢

- ●學生訓　文學士大町桂月君著　全一册 紙皮上製 小判 二四八頁　正價貳拾錢 郵稅四錢
- ●續學生訓　文學士大町桂月君著　全一册 紙皮上製 小判 二五六頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢
- ●處世訓　文學士大町桂月君著　全一册 洋並製 小判 二五〇頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢
- ●青年訓　文學士大町桂月君著　全一 洋並上製 小判 三二〇頁　正價貳拾八錢 郵稅四錢
- ●處世要訓　高等師範學校教諭本田增次郎君著　全一册 洋並製 中判 二四〇頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- ●成功遂志 勤學要訣　米國ジョン、トット氏原著 吉田巳之助君譯述　全一册 洋並製 中判　正價貳拾八錢 郵稅六錢
- ●出世之栞　マーデン原著 羽化仙史譯述　全一册 紙皮上製 小判 三〇六頁　實價拾五錢 郵稅四錢
- ●日常行爲法則　法學士丸尾昌雄君著 彩色木板密畵寫眞版挿入　全一册 洋並製 大判 二五六頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢
- ●勤學と處世　法學士桐生政次君著 彩色木板密畵挿入　全一册 洋並製 大判 二四〇頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢
- ●世界格言大全　澁江保君著　全一册 洋布上製 小判 一三七二頁　正價四拾錢 郵稅四錢

繪畫書類

▲畫學

石川鴻齋君著 **畫法詳論** 全三冊 和綴 大判 一五〇枚 正價五拾錢 郵税六錢

野口珂北君著 野口小蘋女史畫 **畫法自在** 木版密畫百頁挿入 全一冊 洋綴 大判 一五〇頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

佐藤竹次郎君編 **古今對照 習畫帖** 全二冊 和紙木版 大判 三十七枚 正價七拾五錢 郵税六錢

伊藤眞楯君 岡村増太郎君合著 **幾何畫法**（文部省檢定濟） 全一冊 洋綴 中判 一五四頁 正價拾貳錢 郵税四錢

佐久間鍵壽君著 **支那歴代名畫論評** 全一冊 和綴 大判 二三二頁 賣價貳拾五錢 郵税八錢

狩野永納君著 **本朝畫史** 全六冊 和装 半紙本 和紙刷 正價七拾五錢 郵税八錢

▲畫譜

小林永濯君畫 **子供遊び畫帖** 全一冊 和装上製 大判 錦繪木板刷 正價參圓五拾錢 郵税貳拾錢

瀧和亭翁畫 **花鳥畫譜** 全一冊 和装上製 大判 錦繪木板刷 正價參圓 郵税拾四錢

酒井抱一畫伯編 **光琳百圖** 全二冊 和紙木板 大判 七二一枚 正價五拾錢 郵税四錢

狩野探幽畫伯筆 **探幽百富士** 全四冊 和紙木板 大判 一一〇枚 正價壹圓 郵税拾四錢

狩野探信君編 **探幽縮圖 聚珍畫譜** 全三冊 和紙木板 奉書大判 六九枚 正價貳圓 郵税拾四錢

谷文晁畫伯筆 谷文晁 **本朝畫纂大全** 全四冊 和紙木板 大判 一一〇枚 正價壹圓貳拾錢 郵税拾錢

西川祐信君畫 **祐信畫鑑** 全三冊 和紙木板 大判 五三枚 正價四拾五錢 郵税拾錢

中島亨齋君畫 **亨齋畫譜** 全二冊 和紙木板 大判 四二枚 正價參拾錢 郵税六錢

毛筆畫研究會編 **初心毛筆畫譜** 全五冊 和装木版 和紙彩色刷 正價一冊拾貳錢 郵税一冊四錢
▲山水之部 一冊 ▲花鳥之部 一冊 ▲獸類之部 一冊 ▲人類及魚之部 一冊 ▲雜之部 一冊

立齋廣重君畫 **廣重畫譜** 全三冊 和紙木板 中判 七七枚 正價七拾錢 郵税六錢

黄園五岳君畫 **俳諧畫譜集** 全二冊 和紙木板 小判 枚 正價貳拾錢 郵税四錢

雄齋國輝君畫 **俳人百家撰** 木板密畫挿入 全一冊 和紙木板 中判 五〇枚 正價貳拾錢 郵税貳錢

諸名家合作 **地口畫譜** 全一冊 和紙木板 大判 二七枚 正價拾八錢 郵税貳錢

定家卿撰 **錦葉百人一首** 附 女大學 女今川 全一冊 大本和装 木板刷極彩色美製 正價貳圓 小包送四百匁

小川寫眞店輯 **東京百美人帖** 綺巧寫眞印刷 全一冊 舶來光澤紙 大判 鮮明寫眞刷 正價壹圓五拾錢 郵税八錢

京都 大阪 **今様美人風俗** 全一冊 舶來光澤紙 大判 鮮明寫眞刷 正價壹圓貳拾錢 郵税八錢

習字書類

▲書學

前田默鳳君著
●書學捷徑（乾坤二册、乾之卷正書坤之卷草行書）
全二册唐本仕立 大判木板刷表本 正價一册五拾錢 郵稅一册六錢

石川鴻齋君著
●書法詳論
全二册 和上綴 大判 一〇〇枚 正價四拾錢 郵稅六錢

三宅靑軒君著
●書法自在 彩色木版寫眞版挿入
全一册 洋並綴 大判 二二〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢

市河米菴君著
●略可法
全二册和紙木板 大判 一五〇枚 正價四拾八錢 郵稅六錢

卷菱湖君書
●書法千字文
全一册和紙木板 大判 六三枚 正價參拾錢 郵稅四錢

古筆了信君閱　靑藿居士編
●日本書畫人名辭書
合一册洋布上綴 中判 七五二頁 正價八拾錢 郵稅拾錢

新安黃小溪撰黃楊子黃威子校訂
●重刻内閣秘傳字府
▲一名歷代名書要論
全一册 和本綴 美濃紙 木板 正價四拾五錢 郵稅六錢

近衞公、西園寺侯題字、大隈伯、井上文科大學長外數君序文
在早稻田大學、增田乙四郞君著
●大日本啖良文字
全一册 洋並綴 大判 石版刷 正價貳拾五錢 郵稅四錢

▲書體字書

市河米菴君著
●楷行薈編（上等和紙木板刷）
全十五册和上綴 大判 六二五枚 正價參圓 小包送六百匁

前田默鳳道人著
●五體字書
全一册和裝上綴 中判 凡千頁 正價參圓 小包送六百匁

關濱南君著
●行書類纂（上等和紙木板刷）
全十二册和上綴 美濃判 六〇〇枚 正價貳圓拾錢 小包送六百匁

瀨尾鴎齋君編纂
●草叢（上等和紙木板刷）
全十二册和上綴 美濃判 七〇〇枚 正價參圓五拾錢 小包送六百匁

秦駿自鞭甫氏校
●六書通（上等和紙木板刷）
全三册 和上綴 美濃判 一五〇枚 正價七拾錢 郵稅六錢

西陵陳策嘉謀父先生纂輯
●韻府古篆彙選
全册 木板 美濃判 和紙 刷 正價壹圓參拾錢 郵稅拾四錢

松崎祐三君編
●古押譜
全七册 和上綴 美濃判 二二八枚 正價壹圓參拾錢 郵稅拾四錢

丸山可澄君輯
●正續花押藪
全十册和紙下帙入 美濃判 四六九枚 正價貳圓五拾錢 小包送六百匁

市河米菴君著
●墨場必携（和紙木板刷）
全六册 和上綴 中判 一五三枚 正價七拾錢 郵稅八錢

河村墨稼君書
●十體千字文
全一册和紙木板 中判 一八二頁 正價貳拾參錢 郵稅四錢

▲男子習字帖

吉田晚稼先生書
●吉田晚稼楷書千字文
全一册 和上綴 半紙判 三五枚 實價貳拾五錢 郵稅四錢

○習字書類（男子習字帖、女子習字帖、和漢、法帖）

- 柳澤小陽君著 ●三體千字文　全一冊和紙木板　半紙判　七五枚　正價四拾錢　郵稅四錢
- 巖谷一六先生書 ●一六蘭亭帖　全一冊和紙木板　半紙判　二五枚　正價貳拾錢　郵稅貳錢
- 日下部鳴鶴君書 ●鳴鶴蘭亭帖　全一冊和紙木板　半紙判　二五枚　正價貳拾錢　郵稅貳錢
- 佐瀬得所君書 ●行書千字文　全一冊和紙本板　美濃判　枚　正價參拾錢　郵稅四錢
- 新岡久頼君書 ●短册習字帖　全一冊和紙木板　奉書判　枚　正價壹圓　郵稅六錢
- 大和田建樹君著 ●明治書翰文　巖谷一六居士書　全一冊和紙木板　大判　一〇〇枚　正價參拾錢　郵稅四錢
- 依田學海君著 ●新撰應用書翰　巖谷一六居士書　全一冊和紙木板　大判　八五枚　正價參拾五錢　郵稅四錢
- 河村吉之輔君著 ●初學手紙の文　全二冊和紙木板　大判　一〇〇枚　正價參拾五錢　郵稅六錢

▲女子習字帖

- 多田親愛君書 ●假名習字帖 古今和歌集序　全一冊　奉書刷　綸子表紙　美本　正價八拾錢　郵稅四錢　▲大判特別製　正價壹圓貳拾錢　郵稅六錢
- 下田歌子女史編 ●女子用文習字帖　坂正臣君書　全二冊和紙木板　大判　一四四枚　正價八拾錢　郵稅八錢
- 大和田建樹君著 ●明治女子書簡文　小野鵞堂君書　全一冊和紙木板　大判　一〇〇枚　正價四拾錢　郵稅四錢

- 橘千蔭君書 高等女子習字帖 ●烏丸帖　全一冊和紙木板　大判　二四枚　正價參拾五錢　郵稅四錢
- 橘千蔭君書 假名習字帖 ●新百人一首　全一冊和子木板　大判　五一枚　正價參拾錢　郵稅四錢

▲和漢法帖

- 卷菱湖君書 ●眞書千字文　全一冊大判　石刷折本　正價八拾錢　郵稅拾錢
- 佐瀬得所君書 ●眞書千字文　全一冊大判　石刷折本　正價六拾五錢　郵稅拾錢
- 市河米菴君書 ●楷書千字文　全一冊大判　石刷折本　正價四拾五錢　郵稅八錢
- 市河米菴君書 ●行書千字文　全一冊大判　石刷折本　正價四拾五錢　郵稅八錢
- 歐陽詢君書 ●眞書千字文　全一冊大判　石刷折本　正價四拾五錢　郵稅六錢
- 董其昌君書 ●赤壁賦　全一冊大判　石刷折本　正價四拾五錢　郵稅六錢
- 文徵明君書 ●赤壁賦　全一冊大判　石刷折本　正價參拾八錢　郵稅六錢
- 文徵明君書 ●行書千字文　全一冊大判　石刷折本　正價四拾五錢　郵稅六錢
- 趙子昂君書 ●行書蘭亭帖　全一冊大判　石刷折本　正價參拾八錢　郵稅六錢
- 孫過庭君書 ●行書千字文　全一冊大判　石刷折本　正價四拾五錢　郵稅八錢

外國語學書類

●天朗帖 王羲之君書
全一冊大判石刷折本 正價五拾錢 郵稅六錢

●草書千字文 孫過庭君書
全一冊大判石刷折本 正價四拾五錢 郵稅八錢

●聖母帖 懷素君書
全一冊大判石刷折本 正價參拾五錢 郵稅六錢

●落花詩 蘇東坡君書
全一冊大判石刷折本 正價四拾五錢 郵稅六錢

●隷書千字文 隆詠君書
全一冊大判石刷折本 正價四拾五錢 郵稅六錢

▲名家筆蹟

●流芳遺墨 勝海舟君編（木板上等和紙刷）●附 追贊逸話
全二冊和上帙入 奉書刷 七二枚 正價壹圓五拾錢 郵稅拾四錢

●亡友帖 勝海舟君編（絹表紙木板上等和紙刷）
全一冊和上綴 奉書大判 五五枚 正價壹圓參拾錢 郵稅拾錢

▲文典

●邦語英文典 文學士畔柳都太郎君著
全一冊大判 洋紙綴 三三四頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

●英文典語句慣用法 文學士畔柳都太郎君譯述
全一冊中判 洋布上綴 二六〇頁 正價六拾錢 郵稅六錢

●初等英文典教科書 石川辰之助君編
全一冊中判 洋布上綴 一五〇頁 賣價貳拾五錢 郵稅四錢

●邦語獨逸文典 文學士青木昌吉君編
全一冊大判 洋紙綴 二三二頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

●獨逸前置詞使用法 文學士杉谷泰山君編述
全一冊大判 洋布上綴 一四六頁 正價五拾錢 郵稅八錢

●邦語獨逸文章論 文學士青木昌吉君編
全一冊大判 洋紙綴 二七八頁 正價四拾錢 郵稅八錢
▲特製本 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅拾錢

●邦語佛蘭西文典 文學士松井知時君著
全二冊大判 洋紙綴 五九六頁 正價一冊四拾錢 郵稅一冊八錢
▲特製本 洋布上綴 正價一冊五拾五錢 郵稅一冊拾錢

●對譯應用佛蘭西文法 今村有隣君著
全一冊中判 洋布上綴 二七二頁 正價壹圓貳拾錢 郵稅拾錢

●佛蘭西文法節約要規 佛國文部大臣裁决
全一冊大判 洋紙綴 一〇頁 正價拾錢 郵稅貳錢

●佛蘭西文典 福田富治君著
全一冊中判 洋布上綴 五五四頁 賣價四拾錢 郵稅拾錢

●佛語文選 安藤忠義君編
全一冊中判 洋布上綴 一四四頁 正價五拾錢 郵稅六錢

▲會話

●初等英語會話教科書 石川辰之助君著
全一冊中判 洋布上綴 一八〇頁 賣價貳拾五錢 郵稅四錢

石川辰之助君著
●通俗英語案内　全一冊　大判　三一二頁　洋並綴　正價貳拾五錢　郵稅八錢

島田豐君　島田弟丸君合著
●英和應用會話指針　全一冊　小判　二三二頁　洋布上綴　正價參拾錢　郵稅四錢

法學士勝部國臣君著
●商業叢書實用商業會話　全一冊　小判　二二八頁　洋布上綴　正價參拾五錢　郵稅四錢

博言博士イーストレーキ君著
●英和袖珍商人會話必携　全一冊　小判　二三八頁　洋布上綴　正價參拾五錢　郵稅四錢

齋藤忠三郎君著
●實用英和商業會話　全一冊　中判　八六頁　厚表紙上綴　正價貳拾錢　郵稅四錢

米國理學士齋藤清次郎君著
●英和禮式會話　全一冊　小判　一三六頁　紙皮上綴　正價貳拾錢　郵稅四錢

京都府警察部通譯稻垣襄之助君、同藤川東太郎君共著
●警官必携實用警察會話　全一冊　小判　二五八頁　洋布上綴　正價四拾錢　郵稅四錢

露國神學士西海枝靜君著
●實用露和會話　全一冊　小本　二六八頁　洋布上綴　正價參拾五錢　郵稅六錢

滿洲旗士紹古櫟君校訂　陸軍少將福島安正君著
●自邇集平仄編四聲聯珠（支那會話）　全一冊　大判　八三六頁　洋布上綴　正價貳圓五拾錢　郵稅貳拾錢

▲作　文

宇野[illegible]一君著
●英文書簡文　全一冊　中判　三五〇頁　紙皮上綴　正價四拾五錢　郵稅八錢

增田藤六君著
●英語文章軌範　全一冊　中判　一九六頁　紙皮上綴　正價五拾錢　郵稅四錢

▲讀　本

石川辰之助君著
●初等實用作文教科書（文部省檢定濟）　全一冊　中判　一八〇頁　洋布上綴　正價四拾錢　郵稅六錢

島田騏君、島田弟丸君合著
●實用英和作文　全一冊　小判　二四〇頁　洋布上綴　正價參拾錢　郵稅四錢

文學博士坪内雄藏君著
●英詩文評釋　上下二冊洋並綴大判六五八頁　上卷正價七拾錢　郵稅八錢　下卷正價六拾錢　郵稅六錢
▲特製　洋布上綴合本　正價壹圓六拾錢　郵稅拾六錢

校訂飜刻　ナショナル
●第一讀本　全一冊　中判　一〇二頁　洋上綴　正價拾五錢　郵稅四錢
▲特製本　脊皮上綴　正價拾八錢　郵稅四錢

校訂飜刻　ナショナル
●第二讀本　全一冊　中判　一七二頁　洋上綴　正價貳拾四錢　郵稅六錢
▲特製本　脊皮上綴　正價參拾錢　郵稅六錢

校訂飜刻　ナショナル
●第三讀本　全一冊　中判　二五六頁　洋上綴　正價參拾錢　郵稅六錢
▲特製本　脊皮上綴　正價參拾五錢　郵稅八錢

校訂飜刻　ロングマンス
●第一讀本　全一冊　中判　一二八頁　洋布上綴　正價貳拾五錢　郵稅四錢

校訂飜刻　ロングマンス
●第二讀本　全一冊　中判　一三二頁　洋布上綴　正價參拾五錢　郵稅六錢

校訂飜刻　ロングマンス
●第三讀本　全一冊　中判　一八〇頁　洋布上綴　正價四拾錢　郵稅六錢

澁江保君註譯　ロングマンス
●第一讀本註釋　全一冊　中判　三二八頁　洋並綴　正價參拾錢　郵稅六錢

澁江保君註譯　ロングマンス
●第二讀本註釋　全一冊　中判　三八六頁　洋並綴　正價參拾五錢　郵稅六錢

澁江保君註釋 ロングマンス 第三讀本註釋 全一册 中判 三四〇頁 洋並綴 正價四拾錢 郵稅六錢

澁江保君註釋 ロングマンス 第四讀本註釋 全一册 中判 五三六頁 洋並綴 正價四拾五錢 郵稅八錢

高等商業學校雇敎師ハツード、スワン君著 英文 極東の光 全一册 中判 一九四頁 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅四錢

高等商業學校雇敎師ハツード、スワン君著 ジヤパニース、シンス 全一册 中判 六〇頁 洋並綴 正價貳拾錢 郵稅貳錢

高等商業學校雇敎師ハツード、スワン君著 イングリツシ、シンス 全三册 大判 頁 洋並綴 正價一册拾錢 郵稅一册貳錢

津田梅子女史著（文部省檢定濟） イングリツシユ、ストーリーズ 全一册 中判 一六〇頁 洋布上綴 正價參拾五錢 郵稅四錢

津田梅子女史著 グリーキ、ストリーズ 全二册 中判 二〇一頁 洋布上綴 正價四拾五錢 郵稅四錢

津田梅子女史編 英文 法螺先生 全一册 小判 八六頁 洋並綴 正價貳拾錢 郵稅貳錢

津田梅子女史編 英文 氷洲の少年 全一册 小判 九八頁 洋並綴 正價貳拾五錢 郵稅貳錢

同 英文 二都譚 全一册 中判 二八四頁 洋布上綴 正價五拾五錢 郵稅六錢

同 英文 頓機翁物語 全一册 小判 二〇六頁 洋並綴 正價參拾錢 郵稅四錢

櫻井彥一郎君著 フエーマス、ストーリーズ 全一册 中判 一五〇頁 洋布上綴 正價參拾五錢 郵稅四錢

櫻井彥一郎君編 英文 從軍記者 全一册 小判 一〇〇頁 洋並綴 正價貳拾錢 郵稅貳錢

櫻井彥一郎君著 英文 シーザー物語 全一册 中判 一一〇頁 洋布上綴 正價參拾錢 郵稅四錢

英學新報社校訂詳註 英文 勇士の紀念 全一册 小判 一〇四頁 洋並綴 正價貳拾錢 郵稅貳錢

藤生金六君著 英文 空中船 全一册 小判 九〇頁 洋並綴 正價貳拾錢 郵稅貳錢

英學新報社校訂詳註 英文 高山探險 全一册 小判 一〇二頁 洋並綴 正價貳拾錢 郵稅貳錢

エー、エム、ベーコン君著 フエリーテールス 全一册 中判 一八八頁 洋布上綴 正價四拾錢 郵稅四錢

英學新報社校訂詳註 英文 ヘレワード 全一册 小判 一〇〇頁 洋並綴 正價貳拾錢 郵稅貳錢

村井知至君撰 ダイヤログス、エンド、ドラマス 全一册紙皮上綴 中判 一九六頁 正價參拾錢 郵稅四錢
▲特製本 洋布上綴 正價四拾錢 郵稅六錢

戸川明三君譯註 英文譯註 世捨人 全一册 中判 二〇八頁 洋並綴 正價參拾錢 郵稅四錢

文學士淺野和三郎君譯註 英文譯註 奇々怪々 全一册 中判 八九頁 洋並綴 正價參拾錢 郵稅四錢

川井運吉君著 英文 繫思譚 全一册 小判 七四頁 洋並綴 正價貳拾錢 郵稅四錢

高柳龍吉君編 英文 近江聖人 全一册 小判 一三八頁 洋並綴 正價貳拾錢 郵稅四錢

村井弦齋君原著、高柳龍吉君譯 英和對譯 近江聖人 全一册 小判 二四〇頁 洋並頁 正價參拾五錢 郵稅六錢

巖谷小波君原著、リツテル女史英譯 英和對譯 日本昔噺 桃太郎 全一册 大判 六八頁 洋並綴 正價拾參錢 郵稅四錢

巖谷小波君原著、グリーン女史英譯
英和對譯日本昔噺 **玉の井**　全一册洋並綴 大判七八頁　正價拾參錢 郵税四錢

巖谷小波君原著、リッテル女史英譯
英和對譯日本昔噺 **猿蟹合戰**　全一册洋並綴 大判七〇頁　正價拾參錢 郵税四錢

巖谷小波君原著、リッテル女史英譯
英和對譯日本昔噺 **松山鏡**　全一册洋並綴 大判六〇頁　正價拾參錢 郵税四錢

巖谷小波君原著、グリーン女史英譯
英和對譯日本昔噺 **花咲爺**　全一册洋並綴 大判七〇頁　正價拾參錢 郵税四錢

巖谷小波君原著、コルビー女子英譯
英和對譯日本昔噺 **舌切雀**　全一册洋並綴 大判六〇頁　正價拾參錢 郵税四錢

米國アンドリュー、カーネギー氏著
英文 **實業之帝國**　全一册洋並綴 小判一七二頁　正價參拾錢 郵税四錢
▲特製木洋布上綴　正價四拾五錢 郵税四錢
▲別製教科用紙皮中判　正價四拾錢 郵税四錢

米國富豪カーネギー氏著
英文 **富の福音**　全一册洋並綴 小判一三六頁　正價貳拾五錢 郵税四錢
▲別製教科用紙皮四六判　正價貳拾八錢 郵税四錢

川井運吉君編
英文 **白百合**　全一册洋並綴 小判九〇頁　正價貳拾錢 郵税貳錢

杉山重義君著
レッセントスピーチス、ナフス、イングリッシステーツメーン　全一册洋並綴 中判一三三頁　正價四拾錢 郵税四錢

ハーツホーン女史編
故巖本嘉志子 **英文集**　全一册洋並綴 小判一四四頁　正價參拾錢 郵税四錢

高島捨太君編
和文英譯集　全一册洋並綴 中判一九八頁　正價參拾錢 郵税四錢

ハーツホーン女史校訂
英文 **エリアッド物語**　全一册洋並綴 小判一七〇頁　正價參拾錢 郵税四錢

同
英文 **倫理思想**　全一册洋布上綴 大判一〇四頁　正價四拾錢 郵税四錢

文學士戸澤正保君譯註
英文譯註 **浮世の旅**　全一册洋並綴 小判二四八頁　正價貳拾五錢 郵税四錢

豐島定君譯註
英文譯註 **帳中說法**　全一册洋並綴 中判二四二頁　正價參拾五錢 郵税四錢

杉山重義君編
英文 **逸話集**　全一册洋並綴 中判一〇〇頁　正價貳拾五錢 郵税四錢

文學士田中西熊君譯註
英文譯註 **みさを物語**　全一册洋並綴 中判二三二頁　正價參拾五錢 郵税六錢

ハーツホーン女史著
アーサー王物語　全一册洋布上綴 中判一九四頁　正價四拾錢 郵税四錢

▲英和辭典

島田豐君著
學生用英話字典　全一册總皮上製 小判一三四八頁　正價壹圓參拾錢 郵税拾錢

島田豐君、島田弟丸君合著
學生用和英字典　全一册總皮上綴 小判一三[illegible]頁　正價壹圓 郵税拾錢

同
袖珍 **學生用英和字典**　全一册洋布上綴 袖珍二〇五六頁　賣價八拾錢 郵税八錢

祖山錦三君、大田黑重五郎君編纂
英和商業作文辭彙　全一册脊皮上綴 大判二八四頁　正價壹圓卅錢 郵税拾錢

數學書類

◎高等數學は便宜上全部省略す

▲普通科

- 理學士敷島晉君著　普通教育 **算術教科書**　全二冊 中判 洋 並綴 頁　正價各貳拾五錢 郵税各六錢
- 竹貫登代多君著　**算術手引草**　全一冊 中判 四七六頁 脊皮上綴　正價五拾錢 郵税六錢
- 片山清雄君、三田曄信君合著　理論適用 **普通算術**　全一冊 中判 三九八頁 洋 並綴　正價參拾錢 郵税六錢
- 三田曄信君著　實用 **數學一萬題**　全一冊 中判 五一〇頁 洋 並綴　正價四拾錢 郵税八錢
- 峯是三郎君著　地理歷史教育 兵事理科實用 **新題算術**　全一冊 中判 二六〇頁 洋 並綴　正價拾八錢 郵税四錢
- 竹貫直人君著　**數學遊戲**　全一冊 大判 二五〇頁 紙皮上綴　正價貳拾五錢 郵税四錢
- 竹貫登代多君著　新撰 **算術問答**　全一冊 小判 一五〇頁 紙皮上綴　正價貳拾錢 郵税四錢
- 竹貫登代多君編　數學講義録 **算術**（通信省認可）　第六號迄出來　全十二冊 大判 一冊八〇頁 洋 並綴　正價一冊拾錢 郵税一冊壹錢
- 岡村增太郎君著　尋常小學 **筆算教科書**　文部省檢定濟　全一冊 中判 四六〇頁 脊皮上綴　正價四拾錢 郵税八錢

日記及雜書

- 博文館編輯局編纂　明治三十七年 **當用日記**　全一冊 大判 五五六頁 洋布上綴　正價五拾錢 郵税四錢
- 明治三十七年 **當用日記**　全一冊 中判 五五六頁 脊皮特製　正價五拾錢 郵税拾錢
- 明治三十七年 **當用日記**　全一冊 中判 五五六頁 洋布上綴　正價參拾五錢 郵税拾錢
- 明治三十七年 **當用日記**　全一冊 小判 五二二頁 洋布上綴　正價參拾錢 郵税八錢
- 明治三十七年創製 **新形懷中日記**　全一冊 細長形 洋布上綴 美製　正價貳拾錢 郵税四錢
- 明治三十七年 **懷中日記**　全一冊 小判 三〇八頁 洋布特製　正價拾八錢 郵税四錢
- 明治三十七年 **懷中日記**　全一冊 小判 三〇八頁 洋布上綴　正價拾貳錢 郵税四錢
- 慶應義塾教授菅緣隆君撰　**學生日記及通信用紙**　全一冊 菊二倍 六六頁 洋 並綴　正價貳拾貳錢 郵税八錢
- 文武堂編纂　明治三十七年 **英文懷中日記**　全一冊 長方形 三一二頁 紙皮上綴　正價貳拾五錢 郵税六錢
- 博文館編輯局編纂　彩色美麗 木版插入　家傳寶典 **明治節用大全**　全一冊 大判 一二三二頁 脊皮上綴　正價壹圓六拾錢 小包送六百匁
- 内藤恥叟君校訂　少年必讀 **日本文庫**　全十二冊 中判 一冊四六〇頁 洋 並綴　正價一冊廿五錢 郵税一冊六錢
- 内藤恥叟君、小宮山綏介君標註　近古文藝 **温知叢書**　全十二冊 中判 一冊四六〇頁 洋 並綴　正價一冊廿五錢 郵税一冊六錢

卅七年度雜誌初刷表

●太陽
▲第一號一月一日發行……新年大附錄●滿韓詳密大地圖
每月一回一日發行◎增刊年四回 大判(四六二倍判)二百八十頁
▲正價參拾錢 郵稅參錢五厘

●實業世界 太平洋
▲第一號一月一日發行……新年大附錄●日本工業大地圖
每月二回一日十五日發行 大判(菊二倍判)八十頁
▲正價拾貳錢 郵稅貳錢

●文藝倶樂部
▲第一號一月一日發行……新年大附錄●金千圓の大福引券入
每月一回一日發行◎定期增刊 年四回◎菊判三百二十頁
▲正價廿五錢 郵稅參錢五厘

●少年世界
▲第一號に限り一月一日發行……新年大附錄●海戰將棊(桂舟畫三度刷)
每月二回一日十五日發行◎定期增刊 年四回◎菊判百三十六頁
▲正價拾錢 郵稅貳錢

●中學世界
▲第一號一月十日發行……新年大附錄●現代海陸七將傳 六十六頁
每月一回十日發行◎定期增刊 年四回◎菊判二百二十六頁
▲正價貳拾錢 郵稅貳錢五厘

●女學世界
▲第一號に限り一月一日發行……新年大附錄●家庭雙六 石版六色刷(梶田半古畫)
每月一回五日發行◎定期增刊 年四回◎菊判二百八頁
▲正價貳拾錢 郵稅貳錢五厘

●地方行政 公民之友
▲第一號一月十五日發行……新年大附錄●國費及地方費累年比較圖表(三度摺)
每月一回十五日發行 菊判百二十八頁
▲正價拾錢 郵稅壹錢五厘

博文館發行圖書雜誌特約大賣捌所

東京　東京堂　　**大阪　盛文館**

東京　北隆館　書籍雜誌店
同　東海堂
同　良明堂
大阪　吉岡平助
名古屋　川瀨代助
京都　東枝律書房
熊本　長崎次郎
博多　積善館支店
久留米　菊竹金文堂
長野　西澤喜太郎
名古屋　永東書店
長崎　虎與號商店
金澤　宇都宮書店
鹿兒島　吉田幸兵衛
廣島　積善館支店
京都　飯田信文堂
神戸　寶文館
長岡　覺張治平

水原　西村六平
名古屋　新文舍
松本　水琴堂
橫濱　第一第二有隣堂
博多　博文社
同　眞海書店
岡山　武內彌三郎
同　週營堂
神戸　日東館
同　船井新聞商店
同　熊谷久榮堂
大津　太田支店
秋田　成見清兵衛
京都　便利堂
同　寶文館
高岡　學海堂
松江　川岡清助
長崎　渡邊重吉

松山　向井藏次郎
德島　井關新聞舖
弘前　今泉道次郎
同　近松書店
札幌　進振堂
同　富貴堂
函館　魁文舍
同　一二堂
臺南　小出書店
甲府　柳正堂
宇都宮　內田濱吉
上諏訪　宮坂日新堂
高松　龜友堂
濱松　谷島屋書店
千葉　多田屋支店
靜岡　吉見書店
山口　超世館
小樽　川南重祢

鹿兒島　金光堂
大分　甲斐治平
盛岡　佐藤庄兵衛
新潟　北光社
富山　中田書店
福井　品川太右衛門
前橋　煥乎堂
和歌山　三宅小次郎
增田　東海林書店
東京　栗原書店
同　盛春堂
同　松邑三松堂
同　加島至誠堂
同　盛文堂
同　勉強堂
同　聚星堂
同　福島書店
同　服部書店

博文館發行圖書雜誌特約賣捌所

東京 林平次郎
同 目黒支店
同 春祥堂
同 有斐閣
同 青木嵩山堂
同 新橋堂
同 小林仙鶴堂
同 中西屋
同 水野慶次郎
同 小島書店
同 大倉書店
同 青野書店
同 丸善株式會社
同 神戸國太郎
同 榊原友吉
同 日本堂
同 淺見文林堂
同 榮松堂
大阪 柳原喜兵衛
同 岡島新聞舗
同 梅原龜七
同 青木嵩山堂
京都 大黒屋書舗
神戸 高梨東神堂
名古屋 耐成堂
四日市 伊藤善太郎
山田 古川小三郎

同 有文堂
岡崎 岡崎活版所
同 伊藤小文司
豐橋 富田安一
見附 中遠日進社
掛川 叢文堂
沼津 蘭契社
横濱 丸尾書店
同 弘集堂
鴻ノ巣 長島盛化堂
八王子 熊澤兼太郎
東金 多田屋本店
福岡 多田屋支店
水戸 川又銀藏
同 寺田支店
長濱 文泉堂
大津 文泉堂支店
岐阜 郁文堂
關 松野書店
松本 松榮堂
同 高美書店
長野 荻原朝陽館
同 北辰堂
上諏訪 堀田盛文堂
岡 三光堂
上田 西澤支店

伊那 福澤定次郎
小諸 中屋七郎兵衛
飯田 皆川半四郎
飯田 西澤支店
宇都宮 臨雲堂
栃木 宮川庸三郎
同 城山堂
足利 三泉堂
同 青木宇一
平 清光堂
白河 奥村書店
郡山 虎屋忠左衛門
同 磐岳堂
須賀川 橋本太平
喜多方 瀬野屋書店
福島 上野屋書店
仙臺 藤崎祐之助
同 有千閣
同 佐勘書店
同 木村文助
同 松榮堂分店
同 弘道館
佐沼 近源商店
盛岡 便益堂
一ノ關 文港堂
青森 今泉支店

八ノ戸 伊吉商店
同 浦山政吉
山形 八文字屋書店
同 牧野德太郎
米澤 盛文堂書店
鶴岡 日向源吉
酒田 鈴木喜八
本庄 吉田政五郎
横手 大澤鮮進堂
大曲 榊田繁治
秋田 大島開成堂
大館 藤島常三郎
小濱 吉岡昌太郎
敦賀 山上宗兵衛
福井 日新館
同 中村六三郎
鯖江 大谷幸藏
金澤 近田書店
富山 小林濟重堂
長岡 目黒十郎
高田 高橋書店
直江津 柿村書店
三條 原山商店
河原田 中山萬平
同 浦本令一
柏原 中井正吉

篠山 小山富之助
舞鶴 坂根善藏
豐岡 石田松造
米子 今井郁文堂
松江 大蘆庄次郎
同 園山文會堂
益田 入江文林堂
濱田 安達共榮堂
龍野 竹内伊八郎
姬路 木村次作
津山 仁科照文堂
岡山 吉原弘文館
尾道 兒玉芸香堂
同 北辰社
山口 一二三堂
同 桂山陽堂
岩國 白銀日新堂
德島 東西堂
下關 重野集文堂
同 上山松造
和歌山 津田源兵衛
洲本 成錦堂
四條 金川支店
松山 土肥書店
高知 澤本駒吉
久留米 田中幸次郎

中津 野依曆三
同 梅津壽平
杵築 非野儀三郎
佐賀 河內壯助
同 大坪萬六
唐津 牧川德次郎
佐世保 五郎川書店
長崎 集榮堂
熊本 長崎支店
同 中山知新堂
宮崎 修進堂
同 阪田蹄泉堂
同 津野融貫堂
鹿兒島 谷村藤吉
函館 小島大盛堂
小樽 白鳥書店
同 伊藤祐愛
岩內 池田大盛堂
札幌 小鹽自治堂
同 岩城民次郎
旭川 三澤庄作
根室 山本利輔
琉球 村田彌三郎
釜山 吉見勝次郎
[illegible]港 波多野商會
同 青木大成堂
シヤトル 古屋政次郎

（二）

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

● 東京市內

東京 杉本七百丸
同 小林新兵衛
同 上原光風館
同 積文堂
同 大塚太洋堂
同 松川堂
同 盛花堂
同 柏屋松榮堂
同 廣集堂
同 金剌芳流堂
同 鳳文堂
同 森江佐七
同 鴻盟舍
同 田沼代理店
同 有朋堂
同 清弘堂
同 大黑屋平吉
同 佐野旭堂
同 三宅半四郎
同 河內屋
同 清水泰五郎
同 播磨屋
同 吉村卯太郎
同 青地文明堂
同 松成堂
同 松江堂
同 辻岡文助
同 吉川半七
同 岡崎屋書店
同 若林喜吉
同 金榮堂
同 武藏屋
同 方圓閣
同 靜々堂
同 太田商店

東京 松崎求古堂
同 有隣堂
同 東文館
同 國光書房
同 三省堂
同 盛後屋
同 一心堂
同 岡島拾次郎
同 敬文館
同 杏文堂
同 宮內雜貨店
同 鮮泉堂
同 金櫻堂
同 洗心堂
同 丸山舍
同 河合書店
同 櫻井書店
同 池田書店
同 永田書店
同 文園宗書店
同 中庸堂書店
同 長井庄吉
同 金盛堂
同 南江堂
同 永岡書店
同 大川屋錠吉
同 飯田書店
同 山陽堂
同 青山堂
同 岸田雜貨店
同 京屋
同 貫故堂
同 日成堂
同 北原線吉
同 赤心社
同 得策堂
同 文明堂

東京 高知堂
同 文會堂
同 杉盛堂
同 世界堂
同 昌榮社
同 昌平堂

● 畿內

山城 田中治兵衛
同 田中種玉堂
同 松田庄助
同 東枝出張店
同 藤森改進堂
同 吉村勉強堂
同 藤井孫兵衛
同 笹田彌兵衛
同 小川柳枝軒
同 便利堂支店
同 河合卯助
大和 鹿田群文堂
同 木原保吉
河內 西條長榮堂
同 阪口自助社
同 安井共進社
同 一成舍
和泉 慶鰲堂
同 中村德次郎
同 集廣舍
同 船野六平
攝津 三田新聞舖
同 川瀨日進堂
同 松村九兵衛
同 三輪源兵衛
同 中川勘助
同 恒川文榮堂
同 羅音館
同 策之房
同 井上開運堂
同 前川文華堂
攝津 魚住悅五郎
同 汐川郁支堂
同 寺倉光照館
同 大垣久太郎

● 東海道

伊賀 安屋勝次郎
同 榮高書店
同 藤堂三書
同 保田書店
伊勢 渡邊東吉
同 新家德次郎
同 清玉堂
同 岩田與吉
同 木村溫史堂
同 別所藤四郎
同 加藤書店
同 松田新聞舖
同 豐穗讃次郎
同 松田卸三郎
同 中津原書店
志摩 松井文四
同 山下三折堂
同 伊藤信次郎
同 結城重助
尾張 三輪文次郎
同 中京堂
同 三輪伊六
同 耕芳圖
同 淺見經太郎
三河 愛友舍
同 中根信三
同 高須書店
同 西尾新聞會社
同 鐵鐵堂
同 世賜堂
同 永田逵治
三河 報新舍
同 開進堂
遠江 古澤良作
同 三原屋甚藏
同 相佐郁文堂
同 近江屋茂吉
同 大石鎌三
同 東清堂
同 明治舍書店
同 田中松太郎
同 精々堂
同 文魁堂
同 林新聞舖
同 弘文堂
駿河 靜陵館
同 新聞堂
同 瀧治三郎
同 門駿新聞店
同 古澤安太郎
同 實業社
同 廣瀨市藏
同 野見義助
同 太陽堂
同 杉山書店
甲斐 坂本鶴四郎
同 徵古堂
同 眞盛堂
同 須藤孝平
同 正榮堂
同 平山錦米館
同 依田久太郎
同 弘文館
同 知新堂
同 小坂藤作
同 荻原岩吉
伊豆 山梨啓次郎
同 甘晴堂
伊豆 村上書店
同 內田佳兵衛
同 成玉堂
同 秋田米次郎
同 岸澤政吉
同 堺屋書店
同 相模屋
相模 林初三郎
同 鈴八書店
同 石村重造
同 竹川啓次郎
同 飯尾外次郎
同 平井清八
同 川上書籍店
同 茅ヶ崎堂
同 山本佐兵衛
同 三宅藤兵衛
同 小川堂
同 向山正章
同 三友社支店
武藏 高野幸吉
同 古屋支店
同 小林尚文館
同 明文堂
同 鈴山商會
同 金澤堂
同 大矢尚文堂
同 青木百太郎
同 川島平左衛吉
同 金子瀾門
同 小出藏助
同 近榮堂
同 紅房
同 文華堂
同 爲文社

○全國取次販賣所

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

武藏 山田滿次郎
同 飯持錄平
同 篠田利右衞門
同 協立舍
同 奈良市太郎
同 弘聞堂
同 清水書店
同 日の出屋
同 共和堂
同 紅雲堂
安房 岩城書店
同 竹田書店
同 鳥海書店
同 遠藤金太郎
同 宮地平太郎
同 福原彌助
同 長峰和兵衞
上總 播磨屋常吉
同 至誠堂
同 勉精堂
同 鈴木啓次舍
同 郁文堂
同 藤平四郎七
同 松井文盛堂
同 根本爲三郎
同 國松書店
下總 立澤拾五郎
同 坂入門十郎
同 改眞本社
同 新々堂
同 明文堂
同 中村善吉
同 堤安五郎
同 高寺清兵衞
同 知新堂
同 木內嘉兵衞
同 新聞雜誌同盟店
同 立眞舍

下總 吉田德兵衞
同 田中屋太平
同 中島拾三
同 諸岡萬藏
同 井上勇次
同 簗瀨書店
同 春風舍
常陸 宮田梧七
同 大塚屋彌平
同 寺田分店
同 富澤德次
同 山口好之助
同 太田屋常七
同 內田清太郎
同 田所午次郎
同 橋本光文堂
同 寺井十次郎
同 柳旦堂
同 高梨卯吉
同 伊沼彌助
同 太平堂
同 資文堂
同 日進堂
同 東洋堂
同 木村幸介
同 好古堂
同 川口重黏

● 東山道

近江 澤一商店
同 廣田七次郎
同 山田嘉右衞門
同 東枝支店
同 淡海堂
美濃 博榮堂
同 玉成堂
同 安藤茂太郎

美濃 平野利兵衞
同 岡安豐助
同 上田源藏
同 森井彥十郎
同 順風舍
同 日弘堂
飛驒 桝屋重兵衞
同 打保雜誌店
同 荒垣明治堂
同 丸川玉泉堂
同 榾下書店
同 寺澤汲古館
同 松本正信
信濃 鶴林堂
同 氣賀澤庄五郎
同 金華堂
同 高見澤和市
同 芳潤堂
同 小山廣文堂
同 明倫堂
同 今村書房
同 長田忠之助
同 桝屋久次郎
同 都築文明堂
同 遠山商店
同 小林佐平治
同 小野澤千代松
同 共和堂
同 文友堂
同 山下條三郎
同 岩下袈裟吉
同 矢島民也
同 刈間甚八郎
同 神村律
同 小宮山儀一
上野 山田屋金兵衞
同 竹內藤吉
同 中村孫四郎

上野 木田福三郎
同 文心堂
同 煥乎堂支店
同 耕雲堂
同 山口商店
同 清水文開堂
同 正林堂綱吉
同 荻原太一郎
同 柳風舍
同 中島愛次郎
同 內山港三郎
下野 永樂屋
同 紙屋五郎平
同 高木正々堂
同 片山平太郎
同 相場領平
同 塚田郁文堂
同 大鹽文榮舍
同 金子銀四郎
同 笹島愛司
磐城 文魁堂
同 谷津屋
同 高山富三郎
同 橋本悌輔
同 中島儀兵衞
同 丁字屋與七
同 高本大榮
同 吉成謙四郎
同 登利屋廣吉
同 安藤屋榮藏
同 笹森書店
同 小黑儀兵衞
同 鯨井喜平
岩代 小原機三郎
同 田中書店
同 鶴屋新作
同 眞柄至誠堂

岩代 高橋重雄
同 森萬作
同 荒井陽久堂
同 吉井啓次郎
同 油屋商店
同 鈴木萬助
同 齋藤松柏堂
同 鈴木宮造
同 吉田榮進堂
同 宗形彌兵衞
同 新明文七
同 柳沼靖一
同 漸進堂
同 大內政治
同 博向堂
陸前 鈴木榮三郎
同 高藤書店
同 佐政商店
同 松榮堂支店
同 佐藤養治
同 山口德之助
同 朝野堂
同 小杉彥十郎
同 伊東德三郎
同 菊地重造
同 伊勢德之助
同 宮崎日新館
同 日進堂
同 白榮堂
同 阿部商店
同 武川正助
陸中 木津屋七太郎
同 廣文館
同 岩手通信社
同 關忠治
同 淺利佐太郎
同 龜梨商店
同 伊藤豐吉

陸中 東北堂
同 大里榮次郎
同 八重樫廣治
同 岡田書店
同 北村千藏
同 野田豁
同 奈良商舖
同 白野忠吉
同 三ヶ田忠治
同 岩手興農商會
同 河北堂
陸奧 澤田久兵衞
同 佐藤尙文堂
同 松山禎祥堂
同 柳田要太郎
同 藤田商店
同 佐々木忠藏
同 文林堂
同 岩館商店
同 苫米地商店
同 文華堂
羽前 川島準次郎
同 小池藤次郎
同 大泉善助
同 地主文藏
同 遠藤純平
同 大山分店
同 風間五右衞門
同 相原太吉
同 柿本書店
同 遠藤權兵衞
同 舟山彥兵衞
同 高橋富五郎
同 橫尾謙四郎
同 上村不五郎
同 田宮彌右衞門
同 青木彥兵衞

（四）

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

羽前 喜早伊勢治
同 田宮政藏
同 小池爲治
同 菅間兵左衞門
同 荒川孝四郎
同 佐藏茂一
同 三澤光之助
同 大井兼吉
同 橋本由松
同 田中豐作
同 佐藤倉吉
同 鈴木仙五郎
同 伊藤書店
同 金子幸太
同 鈴木庄五郎
同 金子京吉
同 巴屋辰藏
同 竹岡善助
同 荒井太四郎
同 西田芳松
同 細井商店
同 倉田角次
羽後 中村種吉
同 板谷商店
同 青山堂
同 東海林支店
同 伊藤彌七
同 荒川保太郎
同 成田市五郎
同 本間金之助
同 白崎善助
同 越後屋虎五郎
同 和田清助
同 西野六左衞門
同 中島貞治
同 高田吉之助
同 川村孫四郎
同 高山謙助
羽後 平澤清左衞門
同 富田三次郎
同 岩川和吉
同 鎌田貞助
同 大内馬五郎
同 小原金治
同 伊藤龍太
同 藤田雅五郎
同 糸井書店

●北陸道

若狹 木崎文々閣
越前 平澤潤助
同 谷口伊太郎
同 西村伊八
同 小泉文榮堂
同 南部平兵衞
同 不破清七
同 山崎書店
同 井田書店
同 酒井文榮堂
同 廣川才吉
同 堂森書店
加賀 近田嘉千彌
同 醉香堂
同 須貝廉太郎
同 深城文林堂
同 紺藤治三郎
同 森井紀陽舘
能登 小栗北陸館
同 白尾屋
同 河内勇作
同 富光堂
同 川端龜次郎
同 山上嘉一郎
同 千田末松
越中 大橋甚吾
越中 毛利研精堂
同 舟崎精二
同 守川吉兵衞
同 車吉兵衞
同 長谷川喜一郎
同 高橋直基
同 清水雄吉
同 島田幸助
同 石原八太郎
同 櫻田興作
同 北一屋書店
同 塚原書店
同 水野儀三郎
越後 時事堂
同 原貞治
同 島道義光
同 伊丹屋藤吉
同 野島書店
同 堀澤清造
同 大竹新平
同 長谷川辰一郎
同 櫻井產作
同 金子書籍店
同 益田久作
同 笛木又平
同 室直支店
同 高橋郁文館
同 高桑儀作
同 桑野庫之助
同 佐藤清三郎
同 櫻井支店
同 宮島新聞舖
同 酒井屋書店
同 古島九八
同 齋藤治吉
同 阪川宇三郎
同 樋口小左衞門
越後 交信舍
同 伊倉長三
同 清野書店
同 川口藤作
同 清水書店
同 宣布書院
同 小林尚文館
同 岡村利平
同 潤身堂
同 早川朔平
同 吉田俊人
同 木村直太郎
同 中村勝信
同 盤城屋勇
同 香塲吉次郎
同 田中榮作
同 早津鐵三郎
佐渡 藤井新太郎
同 幅野長祕
同 荒井忠平
同 生田金治
同 畠野幹多
同 吉岡如雲堂
同 近藤祐藏
同 曾我商店

●山陰道

丹波 鹽見與一郎
同 足立弘文館
同 文進堂
同 北川至寶堂
同 柏原九郎兵衞
同 堀重助
同 立誠堂商店
同 大西好文堂
同 入江辰之助
丹後 鵜飼文英堂
同 澤田廣英堂
丹後 南波庄兵衞
同 青柳文海堂
同 中村三代三
但馬 永田一馬
同 山本錦英堂
同 柳田直藏
同 久代俊平
同 石田支店
同 坂本書肆
因幡 金居堂
同 久松堂書店
同 横山敬次郎
同 旭日堂書房
同 原豐吉
同 靜田學堂
同 島田龜藏
同 山本吉太郎
同 能勢正登
伯耆 德岡長藏
同 三好治兵衞
同 八木橋愛信堂
同 加島崇太郎
同 坂田精華堂
出雲 有田傳助
同 光谷梅五郎
同 遠藤和助
同 直良杏次郎
同 堀又之助
同 山本善右衞門
石見 古井成吉
同 齋藤萬笈舍
同 三浦梅太郎
同 安江學養館
隱岐 河田商店
同 佐々木熊吉

●山陽道

播磨 博文堂
同 圓尾白堂
同 朝榮社
同 近藤喜保
同 清水興吉
同 上住新聞舖
同 澤田安藏
同 松野來々堂
同 藤尾書林
美作 木村新聞舖
同 石田吉太郎
同 英進社
備前 細謙舍
同 本郷安次郎
同 森博文堂
同 與田金正堂
同 西澤新聞舖
同 大國文友堂
備中 備陽舍
同 渡邊春次郎
同 藤井思正堂
同 龜山新助
同 鄉木盛文堂
同 橋野梅松堂
備後 藤木文暉堂
同 森盛文堂
同 小島盛文館
同 宮城玉文堂
同 奥愛次郎
同 鈴岡新聞舖
同 前川大成堂
同 長商店
同 安田斯文堂
同 阪井得一
安藝 友田新聞舖
同 淵野進步堂
同 井上龜吉

博文館發行圖書雜誌全國取次販賣所

●全國取次販賣所

安藝 三木文明堂
同 淸水日進館
同 平山敬進堂
同 神代賤身
同 松村恭助
同 田上商店
同 博文堂
同 片山商店
周防 長谷川作次郎
同 米谷列藏
同 朝本明文堂
同 牧野精昌堂
同 片山新聞舖
同 野上瀧三郎
同 宮川臣吉
同 山根信一
同 西村長之助
同 弘中悠吉
同 三奈木青陽堂
同 山縣太郎
同 香葉作右衛門
同 精學堂書店
長門 山名曲江堂
同 村田梅龍堂
同 田中北濱館
同 藤川東輔
同 岡貫一
同 柳井商店
同 西村勝之助
同 中原書店
同 山田明倫堂
同 岩本彌左衛門
同 池田茂助

●南海道

紀伊 生駒任天堂
同 前田新聞舖
紀伊 宮井書店
同 淸水丹鶴堂
同 今川正文堂
同 木村書店
同 山田保久
淡路 福浦文藏
同 前川文化堂
同 奕誉館
阿波 井關桒吉
同 黒崎精二
同 坂井蔦吉
同 藤井是平
同 四宮德太郎
同 内田悦三郎
同 田岡民次郎
讃岐 松浦次郎吉
同 開文舍
同 宮脇仲次郎
同 備井兵林館
同 龜友堂支店
同 神崎書店
伊豫 中野光
同 岡部利三郎
同 石崎本店
同 宮内書店
同 本山伍郎
同 近本啓太
同 秋山丈太郎
同 四村商店
同 村上正一
土佐 開成舍本店
同 小川代治
同 村岡書店
同 山中書店
同 野町毅助
同 明倫堂
同 三宮利太郎
同 岡村書店
同 田内運平
同 池内賓行
同 山崎書店
土佐 蛇川龜吉

●西海道

筑前 石松國吉
同 山村正平
同 中尾寬
同 飯野敎吉
同 相川書店
同 伊藤書店
同 大野伊三郎
筑後 財部萬藏
同 廣瀨常太郎
同 豐田純平
同 吉祥館
同 宮本宗四郎
同 相浦書店
同 田邊書店
同 永東末次郎
豐前 佐野長七
同 加生勝二郎
同 博文堂
同 古垣内書店
同 中島卯助
同 中園角兵衛
同 飯田虎一
同 中村巴館
同 林有斐
同 鳥深正則
同 喜多川敎節
豐後 甲斐文七
同 安東平太郎
同 矢熊文林堂
同 明文堂
同 伏見屋書肆
同 高野勤三郎
同 今泉熊太郎
肥前 戊興號支店
同 小倉松次郎
同 宮本茂三郎
同 鍋野書店
同 平井平治
同 中村千代松
同 四村勝平
肥前 坂井與一郎
同 山本廣太
同 久米嘉七
同 寺山書店
同 重松繁榮堂
同 嬉野鹿吉
同 十八商店
肥後 時昌堂
同 園田政太郎
同 乾萬吉
同 梶原好文堂
同 浦田開明堂
同 金子民衛
同 岡部萬四郎
同 岩本書店
同 中村治三郎
日向 小玉傳右衛門
同 谷仲吉
同 高野書肆
同 圖師萬四郎
同 三村起一
大隅 松田市藏
同 山之内龍之助
同 緒永書店
同 原口新文堂
薩摩 石原直次郎
同 折田金次郎
同 福留書店
同 原田橘遺
壹岐 北原藏六
同 四村書店
對馬 倉成惣次郎
同 齋藤文港堂
同 吉田元次郎

●北海道

渡島 西堀商店
同 西堀支店
同 福光松太郎
同 井上川進堂
同 小島書店
同 荻水堂
後志 大盛堂支店
後志 池田耕五郎
同 松田[illegible]吉
石狩 三澤書店
同 齋藤弘文堂
同 村上書店
同 芳盛堂
同 江藤裕太郎
同 中川捨次郎
同 進藤書店
同 青江書店
同 並川榮三郎
同 中垣商店
同 井本書店
同 大原久次郎
同 林卯吉郎
天鹽 小野寺喜兵衛
同 阿部商店
北見 酒井榮吉
同 野杏林堂
膽振 掛川勉強堂
同 森勝藏
同 最上谷次吉
日高 奥田惣兵衛
十勝 久富書店
釧路 池田運治
同 小原常吉
同 川上隆司
根室 伊藤喜武
同 淸水常吉

●琉球

那覇 有馬三榮堂
同 鹽盛書林

●臺灣

臺北 傳文堂
同 白翊堂
同 村崎新高堂
同 佐藤芳太郎
基隆 高杉市之丞
臺中 岡邊久吉
臺南 小出支店
新竹 有安久米太郎
宜蘭 齊原堂支店
淡水 橋本商店
澎湖島 石丸有明館
同 大武澎湖堂
同 井山元吉

●海外

北京 高德
同 有橋志房
京城 平田蕃太郎
上海 秦東局
同 旭龍閣
釜山 尾縣哲太郎
同 梅田清之進
京城 公報社
仁川 山岡書店
同 町田商店
桑港 高梨商會
同 奕樓堂
同 駒田商店
同 井出商會
同 龜屋商會
同 日米物產會社
同 平田商店
同 堂本商店
同 齋藤商店
ロブソンビル 保田常吉
シヤアトル 平出商會
オークランド 増川虎三郎
ロスアンヂエル 金井商會
同 佐藤商店
タコマ 古屋支店
ポートランド 古屋支店
フレスノ 中澤商會
同 東洋商會
紐育 富士商會
西濠州 吉山市五郎
木曜島 田中音松
ホノルヽ 本[illegible]眞齋堂
同 田中商店
ヒーロー 町田商會
コサツク 村松支店

(六)

女學世界

毎月壹回一日發行

(明治参拾七年一月一日發行) 第四卷第壹號 (明治卅参年拾貳月廿五日第参種郵便物認可)



(定價金貳拾錢)

Vol.IV (東京市小石川區久堅町百八番地 博進社工場印行) No. 1.